上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書　5

―― 長野市内　その3 ――

松 原 遺 跡

弥生・総論 6
弥生後期・古墳前期

1998

日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 5

―― 長野市内 その3 ――

松 原 遺 跡

弥生・総論 6
弥生後期・古墳前期

1998

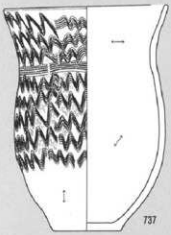
日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長野県埋蔵文化財センター

弥生時代後期

古墳時代前期

第 VI 部

弥生時代後期・古墳時代前期の調査



例　言

1、本書は長野県長野市松代町東寺尾地籍に所在する松原遺跡の報告書である。

2、本書は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5　長野市内その3　松原―弥生・総論―』全8分冊中の第6分冊である。

3、調査は上信越自動車道建設に伴う事前調査として実施し、日本道路公団より長野県教育委員会を通じた委託事業として、財団法人長野県埋蔵文化財センターおよび財団法人文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。

4、調査にあたっては以下の関係機関のご協力を得た。
長野県教育委員会文化財保護課、日本道路公団名古屋建設局、日本道路公団東京第二建設局、長野市教育委員会、ＪＡグリーン長野農協

5、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご指導、ご協力を得た。本文中にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。

6、本書に使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道平面図（1：1,000）、長野市発行の長野市都市計画図（1：2,500）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000）を使用した。

7、調査記録、出土遺物は報告書刊行後長野県立歴史館に移管し保管する。

8、発掘調査、整理、刊行にかかる体制、分担は本文中に示した。

9、編集は青木一男が行い、百瀬長秀が全体を校閲した。

凡　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記の通りで、該当箇所のスケールの上に記してある。
ただし地形図・調査区全体図・遺構配置図などは任意である。

1）主な遺構実測図
竪穴住居址・井戸　1：80　　住居内施設　1：60

2）主な遺物実測図
土器　1：4（大型土器については一部1：6）　　鉄器・青銅器　1：1
木製品　1：6（一部2：3）　　石器　1：4　　土製品　1：3

2　本書に掲載した遺物写真の縮尺は、任意の大きさである。

3　土器図版ナンバーは、写真図版ナンバーと一致し、遺構出土地点の遺物ナンバーも一致させている。ただし、旧河道の遺物出土状況図のナンバーは遺物取り上げナンバーであり、土器ナンバーとの照合は第3～11表 旧河道土器出土状況一覧で照合できる。

4　実測図中のスクリントーン等は下記のように用いた。これら以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。

本 文 目 次

第Ⅵ部　弥生時代後期・古墳時代前期の調査

巻首図版
例言・凡例

第1章　調査概要

第1節　経緯と経過……1
1経緯……1
2経過……3
3体制……4
(1)調査体制　(2)整理体制
4調査・整理方法……5
(1)調査区の呼称方法　(2)遺物の整理と管理
第2節　遺跡の概観……8
1地形・層序……8
(1)長野盆地の地形　(2)遺跡周辺の地形　(3)調査地の層序
(4)ボーリングコアの層序
2歴史的接近……16
(1)長野盆地南部―松代地区―　(2)長野盆地の歴史的位置
(3)中部高地型土器様式圏

第2章　遺跡

第1節　遺構の概要……23
第2節　弥生時代後期集落址の調査……30
1概要……30
2遺構……31
(1)竪穴住居址（ＳＢ）　(2)井戸（ＳＫ）　(3)若干のまとめ
第3節　古墳時代前期集落址の調査……49
1概要……49
2遺構……49
(1)竪穴住居址（ＳＢ）　(2)井戸（ＳＫ）　(3)青銅鏡片出土ポイント
第4節　旧河道の調査……55
1調査概要……55
2旧河道の調査……55
(1)ＳＤ100Ａ・Ｂ地点　(2)ＳＤ101　(3)ＳＤ102
3遺物出土状況……62
(1)ＳＤ100Ａ・Ｂ地点　(2)ＳＤ101Ｃ・Ｄ・Ｅ地点　(3)ＳＤ102
(4)旧河道土器出土状況一覧

第3章　遺物各説

第1節　弥生時代後期……77

1観察の視点……77

2集落址出土の土器……79

(1)竪穴住居址出土土器　(2)土壙・遺構外出土の土器

3旧河道出土の土器……84

(1)旧河道ＳＤ100出土土器　(2)旧河道ＳＤ101出土土器

(3)ＳＤ100・101追加資料　(4)変形土器成形・調整観察表

4土製品，石製品，ガラス製品，鉄製品……157

(1)紡錘車・加工円盤類　(2)小型品　(3)石製品

(4)ガラス小玉　(5)鉄製品

第2節　古墳時代前期……163

1集落址出土の土器……163

(1)竪穴住居址出土土器　(2)井戸・遺構外出土土器

2旧河道出土の土器……166

(1)旧河道ＳＤ100出土土器　(2)旧河道ＳＤ101出土土器

3石製品，青銅製品，木製品……192

(1)石製品　(2)鏡片　(3)木製品

第4章　成果と課題

第1節　中部高地型櫛描文系土器群の理解……197

1はじめに……197

2中部高地型櫛描文を施文する後期甕……197

(1)後期甕の分類　(2)後期甕におけるＢ類　(3)文様施文手法

3中部高地型赤彩壺……208

(1)分類　(2)装飾・文様

4中部高地型赤彩高杯……214

(1)脚部の形態　(2)杯部の形態

(3)鉢と高杯の法量の転換　(4)三角透し孔

5長野盆地南部における後期編年……218

(1)弥生時代後期編年の動向　(2)編年

第2節　古墳時代前期の土器の理解……230

1はじめに……230

2松原遺跡における古墳時代前期土器群の構成……230

(1)高杯・器台　(2)鉢　(3)壺　(4)甕

3松原遺跡の編年的位置づけ……240

(1)長野盆地南部の基準資料　(2)様相の把握　(3)松原遺跡の編年的位置

第3節　長野県出土鉄鏃の基礎的整理……250

1はじめに……250

2分布と時期 ……250
3出土状況の検討 ……250
4まとめ ……253
第4節 松原遺跡出土鏡の伝世と廃棄 ……258
第5節 長野盆地南部の集落動向 ……263
1弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年 ……263
2集落動向 ……263
第6節 箱清水式土器の施文技法 ……267
1はじめに ……267
2擬縄文の施文具 ……267
3施文の時期 ……268
4甕の施文手順 ……268
(1)棒内型の波状文の場合 (2)中部高地型の波状文の場合
(3)羽状文の場合
5土器回転のための用具と施文 ……273
6まとめ ……273
(1)施文者と施文面 (2)施文意識 (3)施文具と調整具
引用・参考文献一覧 ……276
第5章 結語 ……280
写真図版（PL）
報告書抄録

挿図目次

第1図 松原遺跡の位置
第2図 調査区の位置
第3図 調査進行図
第4図 工事エリアと調査地点の呼称
第5図 グリッド設定・呼称法
第6図 長野盆地の地形
第7図 遺跡周辺の地形区分図
第8図 基本層序
第9図 柱状断面図（1）・（2）
第10図 長野盆地南部の遺跡分布図
第11図 長野盆地の遺跡分布図
第12図 中部高地型土器様式圏
第13図 遺構の分布
第14図 弥生後期・古墳前期集落全体図
第15図 弥生後期，遺構割付図（1）
第16図 弥生後期，遺構割付図（2）
第17図 弥生後期，遺構割付図（3）
第18図 古墳前期，遺構割付図（1）
第19図 古墳前期，遺構割付図（2）
第20図 弥生後期集落概念図
第21図 SB71遺構図，埋土内土器出土状況図
第22図 SB131・132遺構図
第23図 SB133遺構図・埋土内土器出土状況図，
埋置土器出土状況図
第24図 SB134遺構図，遺棄土器出土状況図
第25図 SB135遺構図，埋土内土器出土状況図
第26図 SB140遺構図
第27図 SB141・152遺構図
第28図 SB153・157遺構図
第29図 SB153遺棄土器出土状況図
第30図 SB154遺構図
第31図 SB158・171遺構図

第32図　ＳＢ172遺構図・遺棄土器出土状況図
第33図　ＳＢ202・203・205遺構図
第34図　ＳＢ204遺構図
第35図　ＳＢ206遺構図・堆土上層土器集中区出土状況図
第36図　ＳＢ380遺構図・ＳＢ379遺構図・埋土内土器出土状況図
第37図　SK70遺構図.土器出土状況図
第38図　弥生時代後期 竪穴住居址の規模
第39図　弥生時代後期 竪穴住居址主軸方位
第40図　弥生時代後期 竪穴住居址検出面・床面レベル
第41図　弥生時代後期 地床炉集成図
第42図　古墳前期集落概念図
第43図　ＳＢ８遺構図
第44図　ＳＢ30・182遺構図
第45図　ＳＢ322・396遺構図
第46図　ＳＢ393遺構図
第47図　ＳＫ56遺構図
第48図　ＳＫ166遺構図
第49図　青銅鏡片出土古代住居址
第50図　旧河道（ＳＤ100・101）配置図
第51図　旧河道（ＳＤ100・101）流路変遷
第52図　ＳＤ100Ｂ地点
第53図　ＳＤ101
第54図　ＳＤ100，Ｂ地点土器出土状況図
第55図　ＳＤ101，Ｄ地点土器出土状況図
第56図　ＳＤ101，Ｅ地点土器出土状況図
第57図　ＳＤ101，Ｅ地点大型壺集中区出土状況図
第58図　弥生時代後期土器の部位呼称法
第59図　文様帯および施文手法の呼称法
第60図　竪穴住居址出土土器・後期（１）
第61図　竪穴住居址出土土器・後期（２）
第62図　竪穴住居址出土土器・後期（３）
第63図　竪穴住居址出土土器・後期（４）
第64図　竪穴住居址出土土器・後期（５）
第65図　竪穴住居址出土土器・後期（６）
第66図　竪穴住居址出土土器・後期（７）
第67図　竪穴住居址出土土器・後期（８）
第68図　竪穴住居址出土土器・後期（９）
第69図　竪穴住居址出土土器・後期（10）
第70図　竪穴住居址出土土器・後期（11）
第71図　竪穴住居址出土土器・後期（12）
第72図　竪穴住居址出土土器・後期（13）
第73図　竪穴住居址出土土器・後期（14）
第74図　竪穴住居址出土土器・後期（15）
第75図　竪穴住居址出土土器・後期（16）
第76図　竪穴住居址出土土器・後期（17）
第77図　竪穴住居址出土土器・後期（18）
集落址出土土器・後期　（１）
第78図　集落址出土土器・後期　（２）
第79図　集落址出土土器・後期　（３）
第80図　ＳＤ100出土土器・後期（１）壺
第81図　ＳＤ100出土土器・後期（２）壺
第82図　ＳＤ100出土土器・後期（３）壺
第83図　ＳＤ100出土土器・後期（４）壺
第84図　ＳＤ100出土土器・後期（５）壺
第85図　ＳＤ100出土土器・後期（６）壺
第86図　ＳＤ100出土土器・後期（７）壺
第87図　ＳＤ100出土土器・後期（８）壺・赤彩深鉢
第88図　ＳＤ100出土土器・後期（９）赤彩深鉢
第89図　ＳＤ100出土土器・後期（10）無頸壺・高杯
第90図　ＳＤ100出土土器・後期（11）高杯
第91図　ＳＤ100出土土器・後期（12）高杯
第92図　ＳＤ100出土土器・後期（13）高杯
第93図　ＳＤ100出土土器・後期（14）鉢
第94図　ＳＤ100出土土器・後期（15）蓋・有孔鉢
第95図　ＳＤ100出土土器・後期（16）甕
第96図　ＳＤ100出土土器・後期（17）甕
第97図　ＳＤ100出土土器・後期（18）甕
第98図　ＳＤ100出土土器・後期（19）甕
第99図　ＳＤ100出土土器・後期（20）甕
第100図　ＳＤ100出土土器・後期（21）甕
第101図　ＳＤ100出土土器・後期（22）甕
第102図　ＳＤ100出土土器・後期（23）甕
第103図　ＳＤ100出土土器・後期（24）甕

第104図　ＳＤ100出土土器・後期（25）甕
第105図　ＳＤ100出土土器・後期（26）甕
第106図　ＳＤ100出土土器・後期（27）甕
第107図　ＳＤ101出土土器・後期（１）壺
第108図　ＳＤ101出土土器・後期（２）壺
第109図　ＳＤ101出土土器・後期（３）壺
第110図　ＳＤ101出土土器・後期（４）壺・赤彩深鉢
第111図　ＳＤ101出土土器・後期（５）赤彩深鉢・高杯・甕
第112図　ＳＤ101出土土器・後期（６）甕
第113図　ＳＤ101出土土器・後期（７）甕
第114図　ＳＤ101出土土器・後期（８）甕・追加資料
第115図　ＳＤ100・101出土土器・後期追加資料
第116図　ＳＤ100・101出土土器・後期追加資料
第117図　箱清水式土器群
第118図　紡錘車・加工円盤実測図
第119図　弥生時代後期 小型品実測図
第120図　弥生時代後期 石製品実測図
第121図　ガラス小玉実測図
第122図　鉄製品実測図
第123図　竪穴住居址出土土器・前期（１）
第124図　竪穴住居址出土土器・前期（２）
第125図　竪穴住居址出土土器・前期（３）
第126図　集落址出土土器・前期　（１）
第127図　集落址出土土器・前期　（２）
第128図　ＳＤ101出土土器・前期（１）壺
第129図　ＳＤ101出土土器・前期（２）壺
第130図　ＳＤ101出土土器・前期（３）壺
第131図　ＳＤ101出土土器・前期（４）壺
第132図　ＳＤ101出土土器・前期（５）壺・鉢
第133図　ＳＤ101出土土器・前期（６）鉢・高杯
第134図　ＳＤ101出土土器・前期（７）高杯
第135図　ＳＤ101出土土器・前期（８）器台
第136図　ＳＤ101出土土器・前期（９）甕
第137図　ＳＤ101出土土器・前期（10）甕
第138図　ＳＤ101出土土器・前期（11）甕
第139図　ＳＤ101出土土器・前期（12）甕
第140図　ＳＤ101出土土器・前期（13）甕
第141図　古墳時代前期 石製品実測図（１）
第142図　古墳時代前期 石製品実測図（２）
第143図　青銅鏡片と想定復元図
第145図　ＳＤ102出土木製品
第146図　ＳＫ166出土編み篭
第147図　後期甕の分類
第148図　甕Ｂ類・プロポーションによる分類
第149図　松原遺跡出土甕Ｂ類の諸型式
第150図　甕Ｂ類の型式と法量
第151図　頸部形態
第152図　頸部形態の変化
第153図　甕内外面の調整比率
第154図　簾状文の静止回数の割合
第155図　簾状文静止回数の遺跡別風向図
第156図　甕Ｂ類波状文の段数とその数
第157図　甕文様帯の施文順位類型
第158図　松原遺跡の甕Ｂ類施文順位
第159図　壺の型式分類（その１）
第160図　壺の型式分類（その２）
第161図　松原遺跡出土壺Ｂ類
第162図　壺の赤彩率・部位別ミガキ方向の割合
第163図　壺頸部文様帯の構成率
第164図　壺頸部文様帯の諸型式とその変遷
第165図　高杯脚部型式と杯部・脚部の法量
第166図　高杯の型式分類
第167図　高杯法量 松原と篠ノ井の相関図
第168図　中期から後期の鉢・高杯の口径
第169図　長野盆地南部の土器変遷図
第170図　弥生時代後期器種変遷図
第171図　千曲川下流域１～２段階土器群
第172図　弥生時代後期高杯変遷図
第173図　弥生時代後期壺変遷図
第174図　弥生時代後期甕変遷図
第175図　松原遺跡出土高杯とその型式
第176図　松原遺跡出土の器台・鉢とその型式
第177図　松原遺跡出土壺とその型式
第178図　甕の型式
第179図　松原遺跡出土甕とその型式
第180図　古墳時代前期遺跡・遺構別器種組成
第181図　様相１・２・３土器群

第182図　様相2・4・5土器群
第183図　古墳時代前期器種変遷図
第184図　松原遺跡の編年上の位置
第185図　森将軍塚古墳出土土器群
第186図　長野県鉄鋼出土遺跡分布図
第187図　長野県出土鉄鋼集成（1）
第188図　長野県出土鉄鋼集成（2）
第189図　長野県出土鉄鋼集成（3）
第190図　銅鏡参考図
第191図　編年対照図および長野盆地南部の集落動向
第192図　篦状工具による施文例
第193図　櫛描文拇示写真 実測図
第194図　589の施文順位を示す展開模式図
第195図　739の施文順位を示す展開模式図

挿表目次

第1表　弥生時代後期竪穴住居址一覧
第2表　古墳時代前期竪穴住居址一覧
第3表　旧河道土器出土状況一覧（1）
第4表　旧河道土器出土状況一覧（2）
第5表　旧河道土器出土状況一覧（3）
第6表　旧河道土器出土状況一覧（4）
第7表　旧河道土器出土状況一覧（5）
第8表　旧河道土器出土状況一覧（6）
第9表　旧河道土器出土状況一覧（7）
第10表　旧河道土器出土状況一覧（8）
第11表　旧河道土器出土状況一覧（9）
第12表　甕形土器成形・調整観察表（1）
第13表　甕形土器成形・調整観察表（2）
第14表　甕形土器成形・調整観察表（3）
第15表　甕形土器成形・調整観察表（4）
第16表　甕形土器成形・調整観察表（5）
第17表　甕形土器成形・調整観察表（6）
第18表　紡錘車・加工円盤観察表
第19表　ガラス小玉観察表
第20表　住居址出土自然礫観察表
第21表　長野県出土鉄鋼一覧

写真図版目次

PL1　遺跡周辺
PL2　遺跡遠景・田中琢先生指導
PL3　弥生後期前全景・東条小6年生遺跡見学
PL4　SK70・SB10, 71, 131, 132
PL5　SB133, 134, 135, 140, 141
PL6　SB152, 153, 157
PL7　SB157, 172, 182, 204, 205
PL8　SB206, 214・SD100A地点
PL9　SD100A地点・SD100B地点
PL10　SD100B地点
PL11　SD100B地点
PL12　SD100B地点
PL13　SD101E地点・SD101D地点
PL14　SD101E地点土器棺・SD101E地点壁断面・IIMグリッド壁断面
PL15　竪穴住居址出土土器・後期（1）
PL16　竪穴住居址出土土器・後期（2）
PL17　竪穴住居址出土土器・後期（3）
PL18　竪穴住居址出土土器・後期（4）
PL19　竪穴住居址出土土器・後期（5）
土坑出土土器・後期
PL20　井戸址・グリッド出土土器・後期
SD100出土土器・後期（1）
PL21　SD100出土土器・後期（2）
PL22　SD100出土土器・後期（3）
PL23　SD100出土土器・後期（4）
PL24　SD100出土土器・後期（5）
PL25　SD100出土土器・後期（6）
PL26　SD100出土土器・後期（7）
PL27　SD100出土土器・後期（8）

PL28　SD100出土土器・後期（9）
PL29　SD100出土土器・後期（10）
PL30　SD100出土土器・後期（11）
PL31　SD100出土土器・後期（12）
PL32　SD100出土土器・後期（13）
PL33　SD100出土土器・後期（14）
PL34　SD100出土土器・後期（15）
PL35　SD101出土土器・後期（1）
PL36　SD101出土土器・後期（2）
PL37　SD101出土土器・後期（3）
PL38　SD101出土土器・後期（4）
PL39　SD100出土土器・後期（16）
　　SD101出土土器・後期（5）
PL40　SD100出土土器・後期（17）
　　SD101出土土器・後期（6）
PL41　竪穴住居址出土土器・前期（1）
　　SD100出土土器・前期（1）
PL42　グリッド出土土器・前期
　　竪穴住居址出土土器　前期（2）
　　SD100出土土器・前期（2）
　　SD101出土土器・前期（1）
PL43　SD101出土土器・前期（2）
PL44　SD101出土土器・前期（3）
PL45　SD101出土土器・前期（4）
PL46　SD101出土土器・前期（5）
PL47　SD101出土土器・前期（6）
PL48　SD101出土土器・前期（7）
PL49　SD100出土土器・後期（3）
　　SD101出土土器・前期（8）
PL50　鏡・編み篭・土器棺

土器接合作業風景

第１章　調査概要

第１節　経緯と経過

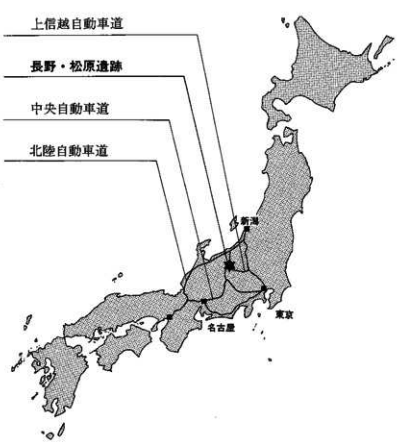
１　経緯

本書は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５　長野市内その３　松原－弥生・総論－』のうち、第６分冊「第VI部　弥生時代後期・古墳時代前期の調査」である。

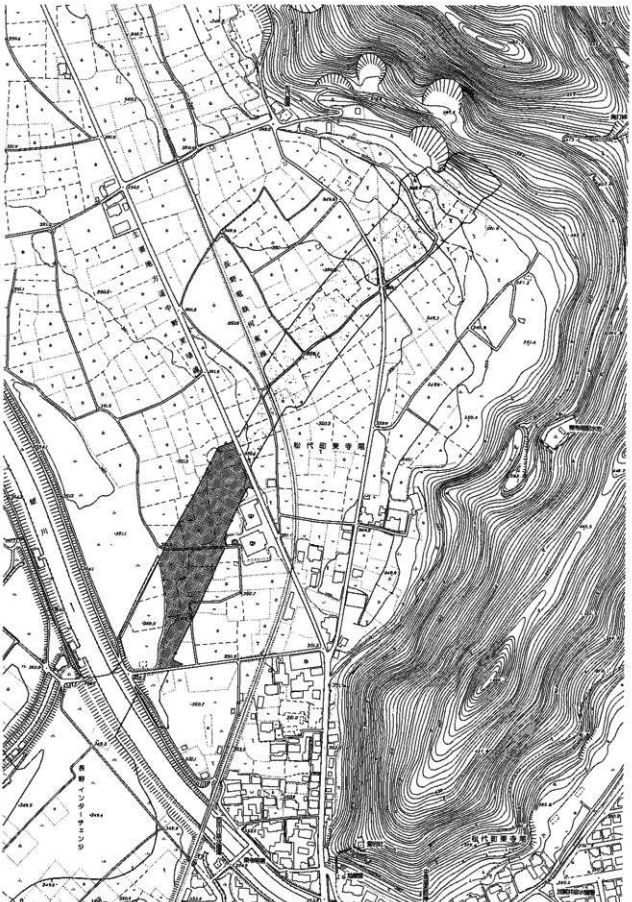
長野県長野市松代町東寺尾地籍（北緯36°34′40″　東経138°12′25″）に所在する松原遺跡は、弥生時代中期および古代の遺物を出土する遺跡として周知されており、上信越自動車道建設に伴う記録保存対象遺跡として日本道路公団東京第二建設局、長野県教育委員会文化課等 関連諸機関の調整により(財)長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。発掘調査は平成元年から３年に及び、縄文前期から弥生・古墳・古代・中世に至る複合集落遺跡の姿が明らかとなった。『上信越自動車道埋蔵文化財報告書５　松原－弥生・総論－』の大半は、弥生時代中期後半、栗林式様式のムラを報告することになるが、第６分冊の第VI部

『上信越自動車道埋蔵文化財報告書５　長野市内その３　松原－弥生・総論－』

第１分冊	第Ⅰ部	調査の概要
	第Ⅱ部	遺構（本文）
第２分冊	第Ⅱ部	遺構（図版）
第３分冊	第Ⅲ部	土器（本文）
第４分冊	第Ⅳ部	土器（図版）
第５分冊	第Ⅴ部	石器・その他
本書		
第６分冊	**第Ⅵ部**	**弥生後期 古墳前期**
第７分冊	第Ⅶ部	考察・検索
第８分冊	第Ⅷ部	総論・化学分析



第１図　松原遺跡の位置



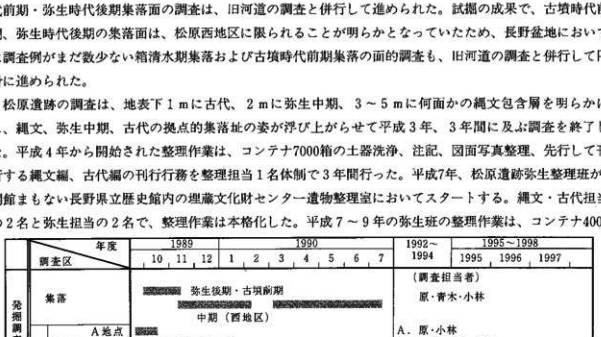
第2図　調査区の位置

では、その数パーセントにも満たない弥生時代後期・古墳時代前期の資料を公にする。「松原－弥生・総論－」全8分冊の構成は前述（P1）の予定であり、平成11年度をもって全分冊を刊行する。

2　経過

松原遺跡の調査は、平成元年4月に開始された。開始当初は調査区約46000㎡の全域（第2図）に何層もの遺物包含層が堆積していることは周知されていなかったが、平成元年夏には地表下約0.5～1mに古代集落址が、地表下2～4mに弥生中期集落址及び遺物包含層の存在が明らかとなった。折りしも、松原遺跡調査地点は長野インターチェンジ工事と盛土用土取り予定地の中間点に位置しており、工事上、早期着工の重要エリアでもあった。県教委文化課および埋蔵文化財センターは、調査研究員の増強を決断すると伴に、日本道路公団、施行合同企業体との協議を進め、橋脚およびカルバートボックス部分の調査を優先し、工事エリア（第4図）に従って調査区を設定することを図った。平成元年秋、長野電鉄河東線より西側の古代面の調査がほぼ終了したところ、調査区西端の地表下4～5mに埋没した旧河道の所在が判明する。当時、埋蔵文化財センターは、沖積地深く埋没する弥生～古代水田調査を石川条里遺跡で継続しており、低湿地遺跡への対応の困難さを熟知すると伴に、調査研究員はその調査方法について模索していた。旧河道は松原西地区を蛇行することが明らかとなり、ボックス工事が急務となっていた旧河道地点を最優先に調査を進めることにした。特に旧河道SD101　⑥区東地区（第3図C地点）では、工事との関係上10日間の調査となり、調査員と作業員は重機のバケットがかきあげた廃土から遺物をひろい集めた。SD100，101の調査では、集落側斜面に多量の箱清水式土器の廃棄を確認して多大な成果を納めた。古墳時代前期・弥生時代後期集落面の調査は、旧河道の調査と併行して進められた。試掘の成果で、古墳時代前期、弥生時代後期の集落面は、松原西地区に限られることが明らかとなっていたため、長野盆地においては調査例がまだ数少ない箱清水期集落および古墳時代前期集落の面的調査も、旧河道の調査と併行して円滑に進められた。

松原遺跡の調査は、地表下1mに古代、2mに弥生中期、3～5mに何面かの縄文包含層を明らかにし、縄文、弥生中期、古代の拠点的集落址の姿が浮び上がらせて平成3年、3年間に及ぶ調査を終了した。平成4年から開始された整理作業は、コンテナ7000箱の土器洗浄、注記、図面写真整理、先行して刊行する縄文編、古代編の刊行行務を整理担当1名体制で3年間行った。平成7年、松原遺跡弥生整理班が、開館まもない長野県立歴史館内の埋蔵文化財センター遺物整理室においてスタートする。縄文・古代担当の2名と弥生担当の2名で、整理作業は本格化した。平成7～9年の弥生班の整理作業は、コンテナ4000



第3図　調査進行図

箱の弥生中期土器の接合、実測、トレースを中核に作業が進められた。弥生時代遺物量のうち、弥生時代後期、古墳時代の遺物量は弥生全体の10%に満たない。本報告書は弥生時代中期の整理作業の狭間で刊行された。

3　体制

(1) **調査体制**　調査体制は次の通りである。

①（財）長野県埋蔵文化財センター事務局

役職／年度	副理事長	常務理事	事務局長	総務部長	調査部長	総務部長補佐
平成元年度	伊藤万寿雄	塚原隆明	半田順計		笹沢　浩	
平成２年度	伊藤万寿雄	塚原隆明	塚原隆明	塚田次夫	小林秀夫	松本忠已
平成７年度	田村　治夫		峯村忠司	西尾紀雄	小林秀夫	外谷　功
平成８年度	佐久間鉄四郎		青木　久	西尾紀雄	小林秀夫	外谷　功
平成９年度	佐久間鉄四郎		青木　久	山崎悦雄	小林秀夫	外谷　功

②長野調査事務所

役職／年度	所　長	庶務部長	庶務部長補佐 庶務課長補佐	調査部長	担当調査課長
平成元年度	塚原隆明	半田順計	永田伸男	笹沢　浩	臼田武正
平成２年度	峯村忠司	塚田次夫	松本忠已	小林秀夫	宮下健司
平成７年度	小林秀夫		外谷　功		百瀬長秀
平成８年度	小林秀夫		外谷　功		百瀬長秀
平成９年度	小林秀夫		外谷　功		百瀬長秀

③（財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター

役職／年度	所　長	副所長	管理部長補佐	調査部長	担当調査課長
平成10年度	佐久間鉄四郎	山崎悦男	宮島孝明	小林秀夫	百瀬長秀

④松原遺跡発掘調査体制（弥生後期～古墳前期面のみ）

調査班長　　原　明芳

地区担当　　上田典男〈東地区〉　　青木一男〈西地区〉

担当調査研究員（弥生後期～古墳前期面のみ）

集落担当　　原　明芳　青木一男　小林清人　岡沢康夫

河川担当

ＳＤ100　　原　明芳　青木一男　小林清人　下島章裕

ＳＤ101　　町田勝則　小林清人　寺内隆夫　下島浩伸　中平智昭

(2) **整理体制**　整理体制は次の通りである

①松原遺跡整理作業体制（弥生後期～古墳前期分担のみ）

担当調査研究員　上田典男（平成4～6年）　青木一男（平成7～10年）
市川桂子（平成7～10年）　町田勝則（平成9～10年）　贄田　明（平成10年）

整理補助員

(写　真　室)北島康子　小出紀彦
(復　元　室)安東武子　小林タイ　松林節子　宮入さち　山岸隆男　内山美砂
北沢節子　中沢さか江　西川恵美子　西沢米子　長谷川征子　米田ちえ子
(遺物整理室)浅井とし子　石田多美子　今井せつ子　丑山和江　岡田皖子　笠井すみ子
風間春芳　加藤周子　北沢三枝子　小林奈美江　近藤久子　滝沢久子
武田多加子　竹鼻多佳子　鳥羽徳子　中川麻由美　中村るり子　野沢久子
細田あき子　堀内雅子　堀本香代子　三上義子　柳沢るり子　米山敏子

②執筆・作業分担

第Ⅵ部「弥生時代後期・古墳時代前期の調査」の編集は小林秀夫、百瀬長秀の指導の下、青木が行った。
執筆・作業分担は下記の通りである。

土屋　積　第3章2節3(2)、第4章4節
青木一男　第1章1節、2節2、第2章1～3節1～2(1)、4節1、3
第3章1節1～4(4)、2節1～3(1)　第4章1～3節、5節
市川桂子　第1章2節1、第2章4節2、写真図版作成
贄田　明　第3章2節3(3)
徳永哲秀　第4章6節、土器復元
西嶋　力　写真撮影、焼付
風間春芳　第2章3節2(2)(3)、第3章1節4(5)

③指導者・協力者

発掘調査・整理作業にあたり、下記の方々の御指導・御協力を得た。お名前を記して感謝したい。

青木和明　赤塚次郎　赤澤徳明　飯島哲也　石川日出志　石黒立人
伊丹　徹　井上洋一　岩崎卓也　大島慎一　及川良彦　岡本孝之
尾見智志　風間栄一　加納俊介　川崎みどり　川村浩司　菊池芳朗
久々忠義　倉沢正幸　小林三郎　小林正春　小林正史　小山岳夫
坂井秀弥　笹森紀巳子　品田高志　助川明広　鈴木敏則　田口一郎
田島明人　立花　実　千野　浩　寺島孝典　栃木英道　直井雅尚
中司照世　中山誠二　西川修一　前島　卓　松本　完　翠川泰弘
矢口忠良　矢島宏雄　山口　明　山下誠一　若狭　徹
長野市立博物館　長野市埋蔵文化財センター　更埴市立森将軍塚古墳館　（敬称略）

4　調査・整理方法

(1) **調査区の呼称方法**

松原遺跡の調査は、調査区域が延長800m、総面積約46000㎡あり、調査区を以下のように呼称した。

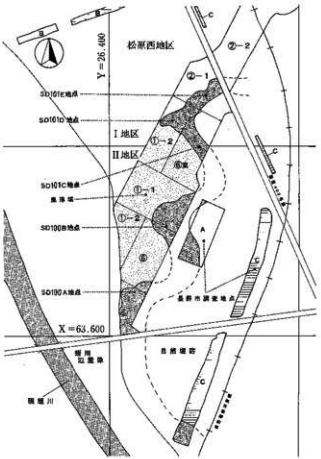
ア．東西地区区分呼称方法

調査区中央を分断する長野電鉄河東線を境界に、その東側を「松原東」、西側を「松原西」と呼称した。

イ．工事エリア呼称方法（第4図）

「松原西」に展開する旧河道ＳＤ100、ＳＤ101では工事エリア毎に調査が進められたため、旧河道内の調査地点を工事エリアに従ってＡ～Ｅのアルファベットで呼称した（第4図）。

工事エリア	調査地点
「①－１」地区	Ａ地点
「①－１・⑥」地区	Ｂ地点
「⑥　東」地区	Ｃ地点
「①－２」地区	Ｄ地点
「②－１」地区	Ｅ地点



第4図　工事エリアと調査地点の呼称

ウ．グリッド呼称方法（第5図）

グリッドの設定は、国土座標を利用し、「大々地区」→「大地区」→「中地区」の3段階に区分した。松原遺跡調査区全域にかかる200ｍ×200ｍの方眼区画を設定し、これを大々地区とし、ローマ数字でⅠ～Ⅷ地区に区分した。この大々地区を40ｍ×40ｍの25区画に分割し大地区とした。

大地区は、大々地区内をＡ～Ｙまでの大文字アルファベットで呼称し、大々地区の呼称との組み合せで「ⅡＡ」というようにした。中地区は、大地区を8ｍ×8ｍの25区画に分割し、1から20の算用数字で呼称し、大々、大地区の呼称との組み合わせで「ⅡＡ1」「ⅡＡ2」というように設定した。

（例）グリッドⅡＡ1（第5図）

大々地区	200ｍ単位方眼	ローマ数字……Ⅱ
大地区	40ｍ単位方眼	大文字アルファベット……Ａ
中地区	8ｍ単位方眼	算用数字……1

グリッドを用いた地区、地点の呼称方法としては、ⅡＡ地区と呼称した場合、大々地区Ⅱ地区内の特定40ｍ方眼マス内をさすことになる。ⅡＡ1グリットと呼称した場合、Ⅱ地区の大グリッドⅡＡ地区（グリッド）内の特定8ｍ方眼マス内をさすことになる。

(2)　遺物の整理と管理

①遺物台帳

出土遺物は洗浄後、注記が行われ『遺物台帳』に登録される。注記表記内容は下記の通りである。

松原遺跡遺跡記号「ＢＭＡ」

「ＢＭＡ　ＹＫ」……弥生時代後期・遺構、包含層出土の遺物を示す。
「ＢＭＡ　ＹＣ」……弥生時代中期・遺構、包含層出土の遺物を示す。
「ＢＭＡ　ＫＺ」……古墳時代前期・遺構、包含層出土の遺物を示す。

②遺物選別台帳

『遺物台帳』に登録された遺物は、木製品については保存処理工程作業から記録化作業へ、石製品・土製品については接合、修復工程作業から記録化作業が行われた。弥生時代後期、古墳時代前期の遺物量の98%を占める土器は、接合作業終了後データ化を行う個体を選別して『遺物選別台帳』に登録した。当台帳に登録された土器のナンバーを「土器登録ナンバー」と呼び、土器にラベルで表示をした。

土器登録ナンバーは、本来なら通し番号が個体識別に便利なわけであるが、膨大な量を整理しなくてはならない作業工程上の都合で、遺構毎に№1からふることにした。旧河道ＳＤ100、101出土遺物の登録については、弥生時代後期と古墳時代前期を分けた。古墳時代前期の遺物については頭文字にＺをつけてＺ1、Ｚ2というように通しナンバーとした。弥生後期の甕、壺、高杯、鉢、有孔鉢については、K、B、T、H、Uというように器種別頭文字をナンバーの前に付けて器種毎に通しナンバーとした。

③土器実測

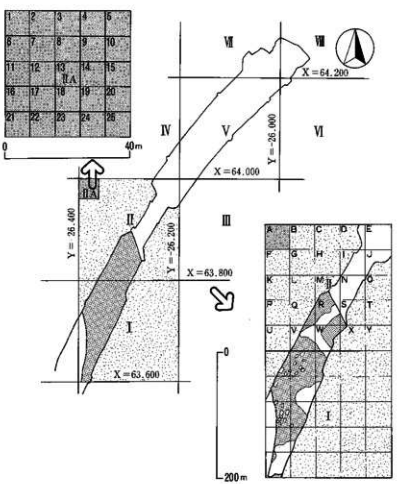
『遺物選別台帳』に登録された土器は、報告書図版に提示するものと、データ処理用に分けられる。土器実測はその8割を整理補助員5名で行い、その一部については（株）シン技術コンサル、（株）写真測図研究所に写真実測を委託した。整理補助員の実測作業習得にあたっては千野浩氏の協力があった。

④土器の補強・復元

土器の実測作業は形状および内外面の観察が必要なため、土器接合・補強終了後実施した。補強は、セメダイン社の「セメダインハイスーパー5」、クレラ社の形状記憶樹脂「クラプレーン」、竹ひご等を用い、さらに、樹脂「ワーカブルレジュン」を充填して強度を高めることにした。実測終了後は、写真図版掲載個体について器形復元および古色仕上げを実施した。（徳永哲秀1995年「土器復元改良の試み－形状記憶樹脂とエポキシ樹脂を芯材、補強材として－」『長野県埋蔵文化財センター紀要4』参照）

⑤土器の管理

報告書作成に関わる土器の管理は、資料数が膨大なためコンテナに収納し「コンテナナンバー」と「土器登録ナンバー」で管理した。よって、コンテナに表示した土器のナンバーは報告書に記載された土器図版ナンバーではなく、土器登録ナンバーである。土器の検索用に『土器収納台帳』を作成している。『土器収納台帳』では、「土器登録ナンバー」と「報告書図版ナンバー」の照合ができるようにした。報告書から土器を検索する場合、報告書図版ナンバー→土器登録ナンバー→コンテナナンバーの順で検索が可能となる。



第5図　グリッド設定・呼称法

第2節　遺跡の概観

1　地形・層序

(1)　長野盆地の地形

長野盆地は南北長さ40km、東西幅8～10km、標高330～400mの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地に明瞭に区分される。盆地の周辺は流入する中小河川の扇状地で埋められている。長野市街地の中心部は裾花扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなる。盆地の中央部を南西－北東に流れる千曲川は、それらの扇状地の発達に影響され自由蛇行している（第6図）。

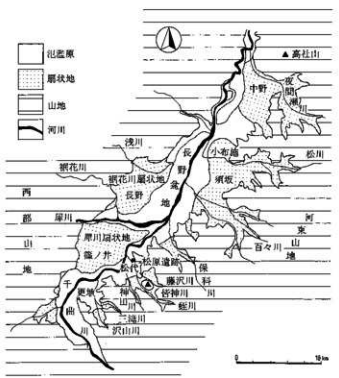
千曲川氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中州などの微高地と旧河道・後背湿地などの微低地があり、微地形を形成している。千曲川は更埴市稲荷山・八幡付近で河床勾配を1／1000mと緩め、北西から北東方向へ流れの向きを変え、蛇行を始める。千曲川の左岸側には八幡、稲荷山、塩崎、平久保、旧篠ノ井（東篠ノ井、横田）、東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達し、その西側には後背湿地が発達する。右岸側も雨宮・清野・松代・牧島の自然堤防とその東側に後背湿地となる湾入低地が形成されている。

(2)　遺跡周辺の地形

長野盆地東側の河東山地は壮年期の侵食地形を示す。河東山地から延びる主な尾根は北西－南東方向に延び、さらに枝状に小さな尾根が広がる。山麓線は入り組んでおり、千曲川氾濫原と山地との境界線はリアス式海岸線のようである。松代付近の河東山地山麓部にはかなり急傾斜の扇状地が発達する。これらには崖錐性の堆積物の供給が多く扇状地堆積物とともに崖錐扇状地を形成する。松代城下町は、地蔵峠より流れ出る蛭川（関屋川）・神田川によって形成された扇状地の末端部に発達した。

清野や東条、西条付近の山地において崖錐性の堆積物が押し出し地形を作る。松代町南東に位置する皆神山は標高659m、比高250mの更新世中期の溶岩円頂丘である。千曲川右岸は氾濫原であり清野、松代、牧島には道島・猫島・柳島・牧島など島のつく地名が多い。この氾濫原はやや高い自然堤防Ⅰ群とやや低い自然堤防Ⅱ群、後背湿地、旧河道に区分される（第7図）。

清野付近は妻女山と離山の間に位置し、山脚は半円状の円弧を描く。ここには山沿いに後背湿地、その北側に大規模な自然堤防が見られる。後背湿地はかつて排水不良の湿田で蓮田であった。自然堤防は明瞭な旧河道を境にⅠ群とⅡ群に区分できる。Ⅱ群は千曲川に近い地域に発達する。Ⅰ群とⅡ群の比高差は最大約1.5mである。自然堤防の中の旧河道部分も砂質の土壌からなり、畑として利用されている。松代町岩野は薬師山の北側の山かげに洪水を避けて立



第6図　長野盆地の地形（「中部地方Ⅰ」赤羽・花岡1988に加筆）

地する中州集落である。

松代付近の低地は、ほぼ長野電鉄河東線より千曲川寄りに位置する。松代と東寺尾を結ぶ線より東に旧河道はなく、千曲川の東側への湾入はこの辺りまでであった。海津城はかつて千曲川に臨んでおり、江戸時代に大がかりな人力による流路変更が行われた。旧河道は百間堀と呼ばれ、現在まで残る。また、神田川沿いの水田地も旧河道である。神田川は平成6年に蛭川を経ずに直接千曲川へ流れ込むような直線的河川に改修された。

松原遺跡は北側を金井山、南側を愛宕山で囲まれた千曲川右岸の自然堤防上に立地し、西側は蛭川によって削られている。この松原自然堤防（寺尾自然堤防とも呼ばれていた）は、蛭川の東側の自然堤防Ⅰ群と西側の自然堤防Ⅱ群に区分される。Ⅰ群とⅡ群の比高差は最大約1.5mである。現地表面での帯状の凹凸や等高線の様子は縄文時代以来の地形形成を反映していることが分かってきた。例えば現在山沿いに用水が流れて帯状に低くなっている部分は古代までここに流路があった場所である。蛭川と直交する帯状の凹地の一部は地表面下1mに礫が分布し少なくとも古代に河道であったことが確認された（長野市教育委員会1993）。また弥生中期の蛇行河川の跡は等高線と一致しているように見える。現地形が出来上がったのは中世頃である。自然堤防上は桑畑、長芋栽培が行われており、近年果樹園も増加している。西寺尾集落は自然堤防Ⅱ群の中州上標高351m前後の場所に立地する。蛭川は東寺尾で藤沢川を合流し、その下流で自然堤防を大きく侵食しながら千曲川に流れ込む。合流地点より上流では天井川が発達し、周囲に低湿地を形成する。

更埴橋と関崎橋南方の牧島付近の低地は、小島田・牧島・大室の集落を取り巻くように湾曲している。この低地は少なくとも2本の旧河道が明瞭に認められる。旧河道は水田として利用されていたが、近年になって畑へ転換されることが多くなってきている。金井池も旧河道の跡で千曲川の水位が上がれば水が噴き出すといわれている。旧関東枝街道（旧前橋街道）は湾曲した自然堤防上を通らず、松代－島打峠－大室の直線的なルートであったが、大正5年に山麓を通じる道につけかえられた。明治以前には千曲川の流路を反映するように東寺尾・柴は埴科郡、牧島・小島田は更級郡、大室は高井郡に属していた。

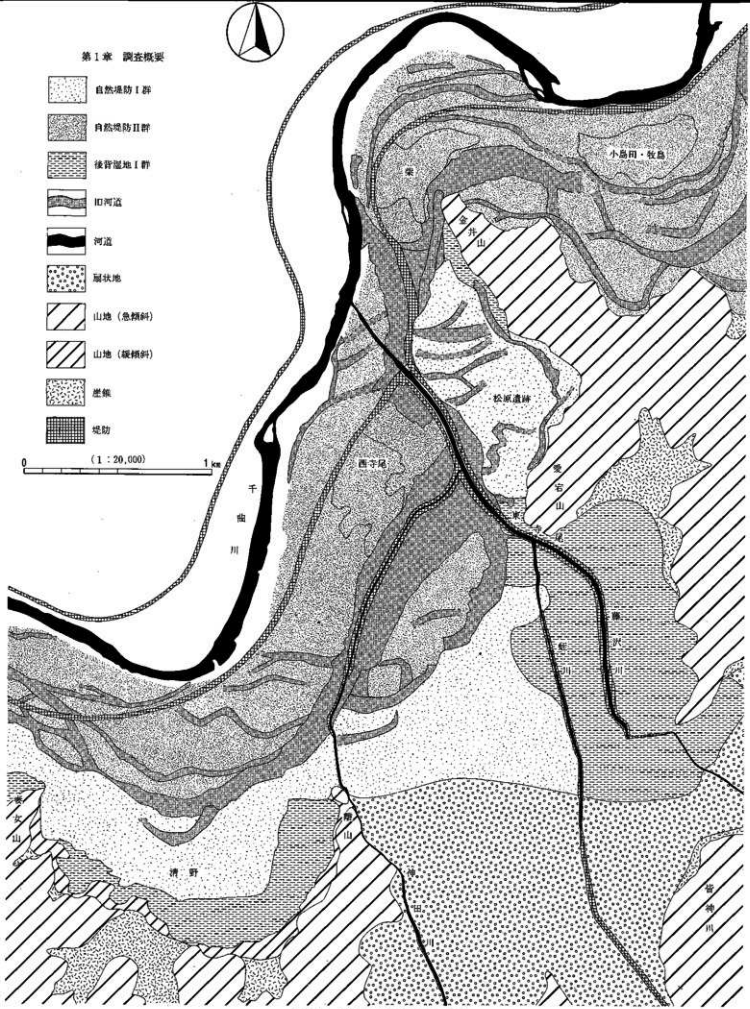
松代町柴は千曲川に向かって突き出した金井山の突端にある標高349m前後の場所に立地する紡錘形をした中洲集落である。水出が無く、大部分が疏菜地で、金井池の水を灌漑に利用していた。微高地ではあるが、対岸の小島田花立集落よりは2m程度低いので、堤防が出来る以前は洪水の際には集落背後の旧河道の微凹地に湛水した。集落の立地としては、川が直接ぶつかりそうな場所は避ける場合が多いが、柴集落を取り囲むように千曲川は曲がりながら流れている。松代藩祖真田信之の隠居所が柴にあった。

松代町小島田・牧島は、更埴橋下流の千曲川の水衝部に面した中洲上標高348mの場所に立地する集落で、集落域の長軸が千曲川の流れと一致する楕円形である。南には半円を描いて旧河道の低地があり、水田が開かれている。集落中央部の神社の辺りが、最も標高が高い。集落の耕地の大半は畑である。旧河道の低地では陸稲を作っていたが、昭和30年代になって井戸をいくつも掘って水田化するようになった。

松代町大室は小規模な自然堤防Ⅰ群上に立地する。標高は346.5mで自然堤防Ⅱ群との比高差は最大約1.5mである。洪水に備え家屋は80cm程度の石積みをしたり、味噌蔵は1.8m程の間知を築いてあり、水辺の集落景観を残している。

(3)　調査地の層序

発掘調査地の堆積物は粒度の違いにより上部層と下部層の2つに分けられる。これらはさらに色調、粒度、遺物包含の有無によってⅠ層からⅩⅢ層に細分した。上部層はⅠ層からⅥ層、下部層はⅦ層からⅩⅢ層である。上部層は全体的に砂質であり下部層は粘土質である。なおⅠ層からⅦ層までは調査中に基本層序として確定されたものであり、Ⅷ層より下位は整理作業中に区分したものである（第8図）。

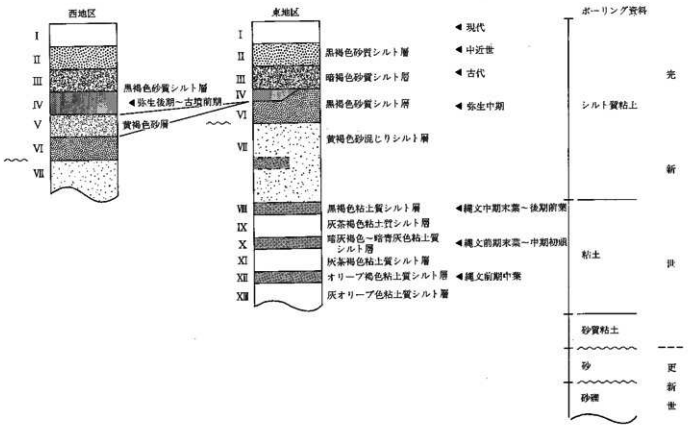


第７図　遺跡周辺の地形区分図

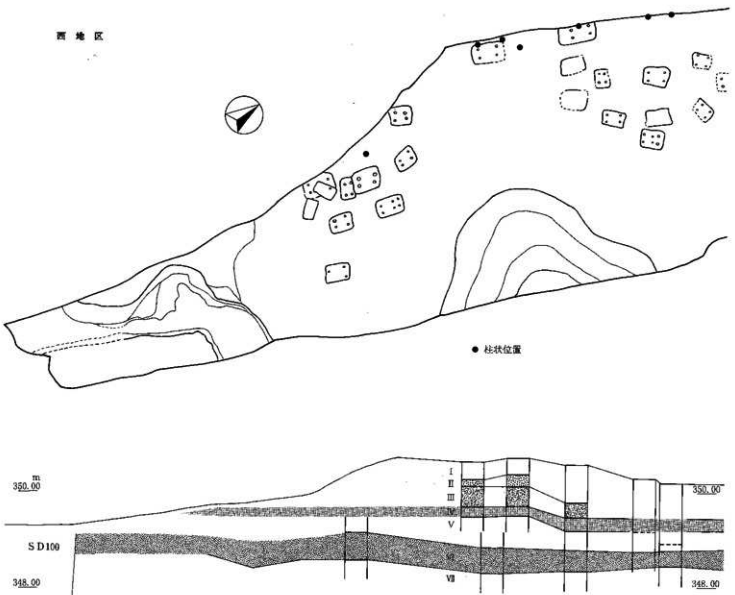
Ⅰ層は層厚20～30cmの茶褐色砂質シルト層で現耕作土である。Ⅱ層は層厚20cmの黒褐色砂質シルト層で中・近世の遺物を包含する。Ⅲ層は層厚20～40cmの暗褐色砂質シルト層で古代の遺物包含層である。Ⅳ層は層厚20cmの黒褐色砂質シルト層で古墳・弥生後期の遺物包含層である。Ⅴ層は層厚20～60cmの黄褐色砂層で無遺物層である。松原東地区にはⅣ層の一部とⅤ層は欠如している。Ⅵ層は層厚20～60cmの黒褐色砂質シルト層で弥生中期の遺物包含層である。Ⅶ層は層厚80～140cmの黄褐色砂混じりシルト層で無遺物層である。淡褐色のバンドを一部で挟むこともあるが層準として認められないのでⅦ層で一括した。松原西地区では記録がないためⅧ層以下に相当する地層については不明である。Ⅷ層は層厚10～40cmの黒褐色粘土質シルト層で縄文中期末葉から後期前葉の遺物包含層である。Ⅸ層は層厚20～50cmの灰茶褐色粘土質シルト層である。Ⅹ層は層厚40～50cmの暗灰褐色から暗青灰色の粘土質シルト層で縄文前期末葉から中期初頭の遺物包含層である。ⅩⅠ層は層厚40cmの灰茶褐色粘土質シルト層である。ⅩⅡ層は層厚20～30cmのオリーブ褐色粘土質シルト層で縄文前期中葉の遺物包含層である。ⅩⅢ層は層厚20cm＋の灰オリーブ色粘土質シルト層である。青色やオリーブ色味を帯びるのは地下水の影響と考えられる。

(4)　ボーリングコアの層序

昭和59年の道路公団によるボーリング調査の第一次土質調査報告書によると、松原遺跡内ではＢ１－41、Ｂ１－42、Ｓｓ１－３の３本の機械ボーリングがおこなわれている。ボーリング位置は、Ｂ１－41はおよそⅡＩ－25グリッド付近、Ｂ１－42はＶＨ－16グリッド付近、Ｓｓ１－３はⅦＹ－25グリッド付近である（第９図）。Ｂ１－41は深度37.25ｍのコアで深度5.4ｍまでは上位より砂質粘土、シルト質粘土、砂混じり粘土からなる。深度5.4ｍ～6.5ｍはシルト質の砂層からなり、深度6.5ｍ以下は礫層からなる。深

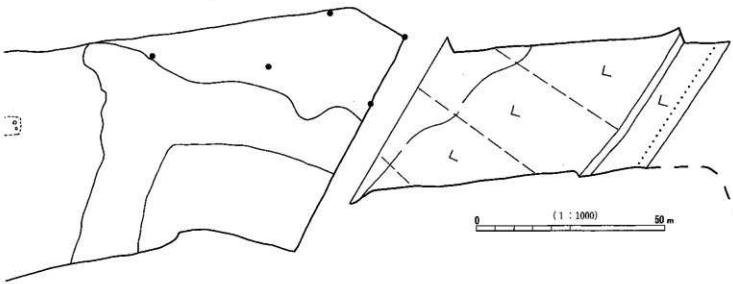


第８図　基本層序

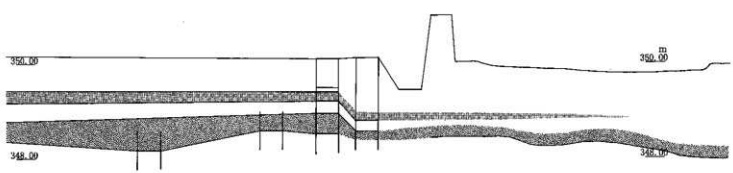


度16.35m以下では再びシルト質粘土からなり、腐植物を混入する層準もある。深度26.5m以下では砂層、深度28.7m以下で砂礫層となる。B1－42は深度10.45mのコアで、深度7.4mまでは上位よりシルト質粘土、粘土、砂質シルト、シルト混じり細粒砂からなる。深度7.4m以下では砂礫層からなる。Ss1－3は詳しい記載はない。

2本のボーリングとも上部はシルト・粘土などの細粒物質からなり、深度6～7m以下は砂礫などの粗粒物質からなる。またB1－41では再び細粒物質と粗粒物質の堆積が繰り返されることが分かった。急激な岩相の変化は堆積環境の変化を表している。細粒物質は小規模な洪水の堆積物、粗粒物質は大規模な洪

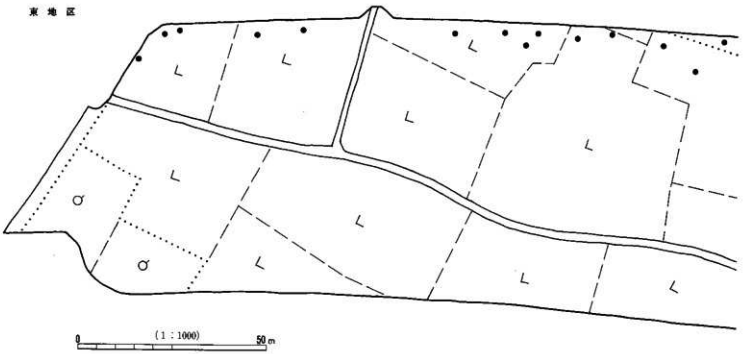


Ⅰ　現耕作土
Ⅱ　中近世遺物包含層
Ⅲ　古代遺物包含層
Ⅳ　弥生時代後期～古墳時代前期遺物包含層
Ⅴ　砂層
Ⅵ　弥生時代中期遺物包含層
Ⅶ　シルト層



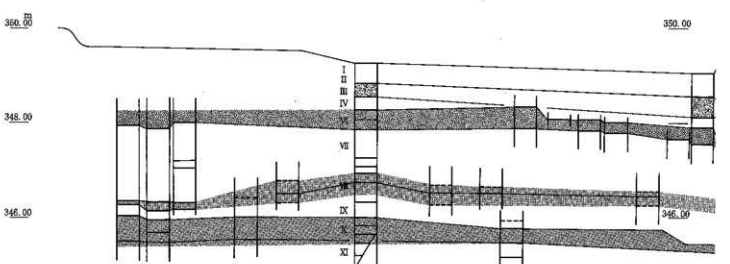
第９図　柱状断面図（１）

水の堆積物としてとらえることができる。このボーリング調査では^{14}C年代測定や年代の指標となる火山灰層の検出などが行われていないので明確なことは言えないが、更新世と完新世の境界付近で海岸に接する沖積低地では同じ時期に粗粒物質から細粒物質への岩相変化がみられること（井関1962，1983）、内陸盆地では諏訪湖の湖底堆積物に認められる岩相変化（安間ほか1990）や長野盆地北部の延徳低地のボーリングコアに認められる岩相変化（赤羽1995）が報告されている。このことから深度６～７ｍの急激な岩相変化が見られる層準がほぼ更新世と完新世の境ではないかと考えられる。

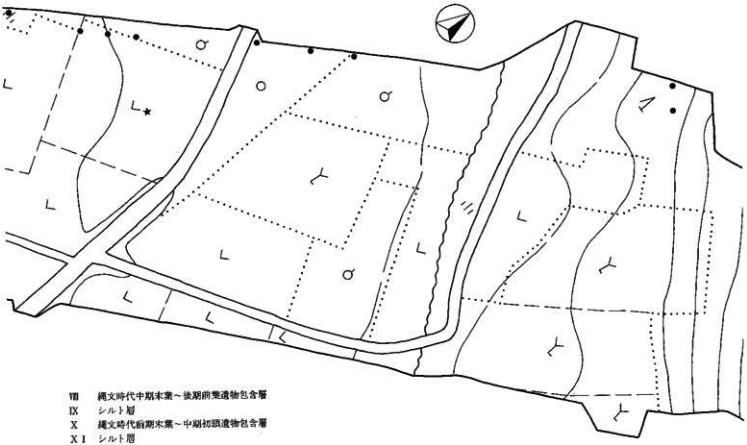


● 柱状位置

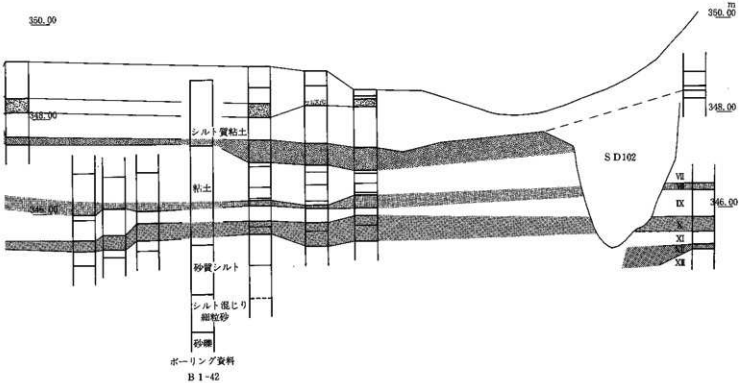
I　現耕作土
II　中近世遺物包含層
III　古代遺物包含層
IV　弥生時代後期～古墳時代前期遺物包含層
V　砂層
VI　弥生時代中期遺物包含層
VII　シルト層



第9図　柱状断面図（2）



Ⅷ　縄文時代中期末葉～後期前葉遺物包含層
Ⅸ　シルト層
Ⅹ　縄文時代前期末葉～中期初頭遺物包含層
ⅩⅠ　シルト層
ⅩⅡ　縄文時代前期中葉遺物包含層
ⅩⅢ　シルト層



2　歴史的接近

(1)　長野盆地南部－松代地区－

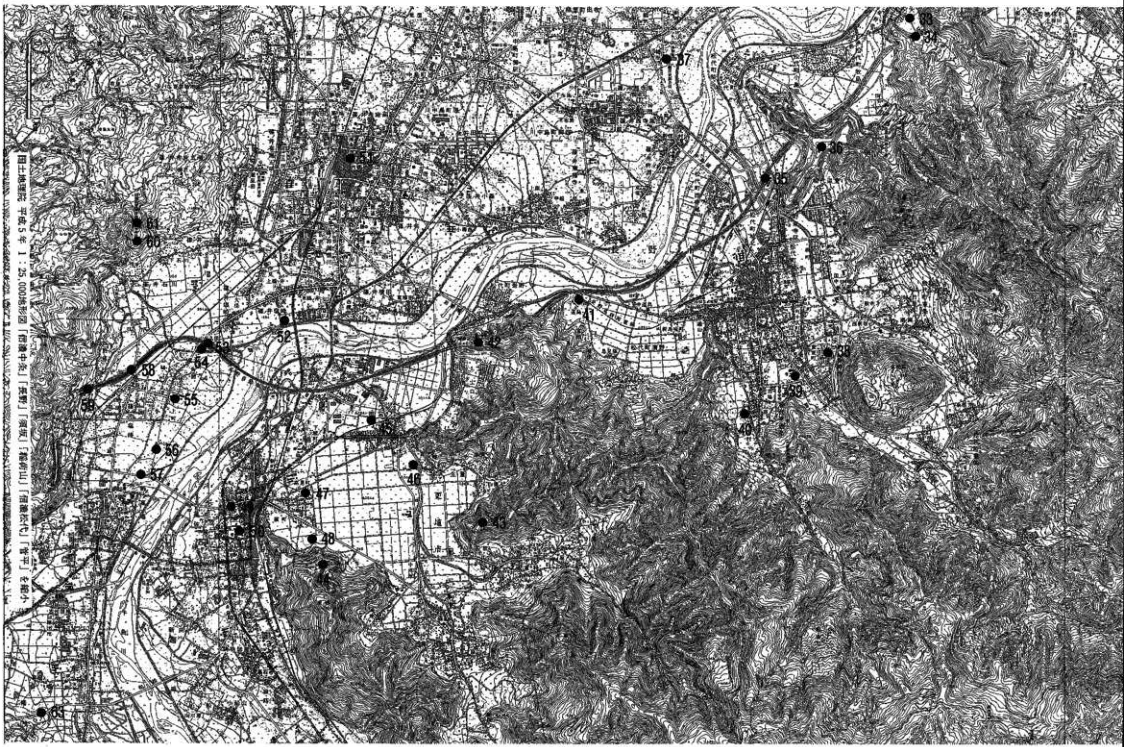
松原遺跡が所在する長野市松代町は、長野盆地の南部に位置し、歴史的には古代埴科郡英多郷に比定される小空間である（第10図）。当地域における弥生時代、古墳時代の歴史的景観は、長野市埋蔵文化財センター等の調査により明らかになりつつある。当該期の中核遺跡は河東山地との間に後背湿地をもつ自然堤防上や、前面に湿地をもつ崖錐端部に展開するが（第7図）、自然堤防上では、大室（第10図－33）・松原（35）・四ツ屋（41）、崖錐端部では屋地（38）・中条（39）遺跡等があり、調査が行われている。

長野盆地南部の松代地域における農耕社会定着期の痕跡については、縄文晩期～弥生中期前半の遺物が、四ッ屋、中村（40）、松原等に散見されるが、集落は確認できない。弥生中期後半栗林期には、松原遺跡に大規模な集落景観が確認できるが、他遺跡では当該期のムラは未発見である。弥生時代後期前半の吉田期には、松原集落は縮小傾向を示し、小河川蛭川沿いの松原・中条・屋地遺跡に集落が拡散する。後期中葉以降の箱清水期には、四ッ屋・大室にも集落が出現する。墳墓では、3世紀後半代の北平1号墳（36）が松原集落から比高差150mの山頂に構築される。古墳時代前期の遺物は中条、四ッ屋に確認されるが詳細は明らかでない。前期古墳は確認されていないが、自然堤防上の四ッ屋遺跡では、円筒埴輪と初期須恵器を併った低墳丘の円墳が確認されている（小林1976年）。

松原遺跡が弥生中期栗林期の拠点集落であることは高速道建設に伴う県埋文センターの調査が明らかにした。（長野県埋文センター1989～1991）。以後、周辺開発に伴って、長野市埋文センターが多くの地点で調査を行っており（長野市埋文センター1991，1993，1994）、栗林期の集落範囲を明らかにしてきた（第4図）。ただし、弥生時代後期～古墳時代前期に関する調査例はなく、当該期の松原遺跡はごく限られた空間に集落が展開していることを推測させる。

〈文献・報告書〉

遺跡No.	遺跡	著者、発行者	年度	文献・報告書
35a	松原	長野県埋文センター	1989～1991	『長野県埋蔵文化財センター-- 年報』6～8
35b		長野市埋文センター	1991	『松原遺跡－長野南農業協同組合集荷場施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
35c		長野市埋文センター	1993	『松原遺跡II－市道松代東111号線地点－』
35d		長野市埋文センター	1993	『松原遺跡III－主要地方道中野更埴線道路改良業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
35e		長野市埋文センター	1994	『松原遺跡IV－市道松代東63号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
33	大室	森　嶋　稔	1978	『更科埴科地方誌』第二巻　原始・古代・中世編
36	北平	長野県埋文センター	1996	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7　大足山古墳群・北平1号墳』
38a	屋地	日本窯業史研究所	1977	『長野市松代　屋地遺跡』
38b		長野市教育委員会	1990	『屋地遺跡II－国補中小河川蛭川改修事業地点－』
39	中条	長野市教育委員会	1989	『中条遺跡－長野県松代高等学校体育館建設事業地点－』
40	中村	長野市教育委員会	1978	『中村遺跡－松代西条小学校地点遺跡の調査報告－』
41a	四ッ屋	竹内　三千夫	1974	『長野市松代町清野四ッ屋遺跡の古代土師器』『信濃』26－2
41b		小林　秀夫	1976	『長野市四ッ屋特殊遺構の遺物』『信濃考古』36
41c		長野市教育委員会	1994	『四ッ屋遺跡（第1～3次）・徳間遺跡・塩尻遺跡群（3）』



第10図　長野盆地南部の遺跡分布図

(2)　長野盆地の歴史的位置

中部高地でも長野県の北東部に位置する長野盆地は、現在の更埴市、長野市付近から中野市、飯山市付近までの直線距離48kmに及ぶ盆地で、盆地中央を流れる千曲川は新潟県で信濃川となり日本海に流れ込む。古代社会においては、更級、埴科、上水内、下水内、上高井、下高井の6郡に分割されている。

弥生時代中期から古墳時代前期の長野盆地については、ここ10年の間、埋蔵文化財の記録保存の進展にともない集落、墳墓の様相、時間的位置づけをするために充分な資料が蓄積されてきた。当該期の長野盆地は土器の地域色から①長野盆地南部、②長野盆地北西部、③長野盆地北部の3ブロックに分けて考えることが可能である。①は現在の更埴市、長野市南部を中核とし、千曲川が形成した自然堤防上に集落が展開する。代表的な集落域としては長野市・榎田（第11図−27）、春山（28）、川田条里（29）、松原（35）、更埴市・生仁（46）、五輪堂（50）、長野市・塩崎、篠ノ井遺跡群（52−56）、石川条里（58）、上山田町・御屋敷（65）、坂城町・塚田（67）遺跡等がある。②は現在の長野市北西部を中核とし、広大な扇状地面ならびに千曲川が形成した自然堤防上に集落が展開する。代表的な集落域としては浅川扇状地上に位置する浅川扇状地遺跡群と、自然堤防上に位置する小島・柳原遺跡群とがあり、扇状地上の遺跡に長野市・牟礼バイパス（20）、神楽橋（21）、稲田・徳間（22）、吉田高校グランド（23）、木村東沖（24）遺跡等が、自然堤防上の遺跡に中俣（18）、水内坐一元神社（18）、小島境（19）遺跡等が位置づけられる。③は現在の中野市、飯山市を中核とし、広大な扇状地面ならびに低丘陵上に集落が展開する。代表的な集落域としては飯山市・上野（1）、尾崎・柳町（2）、小泉（3）、東長峰（4）、須多ヶ峯（6）、中野市・栗林（11）、安源寺（12）、七瀬（13）、西条・岩船（14）、間山（16）遺跡等が位置づけられる。当地域は、中野市・飯山市域の低丘陵（長峰丘陵）に集落域が密集する傾向にあり、集落立地の景観が長野盆地南部とは異なる。

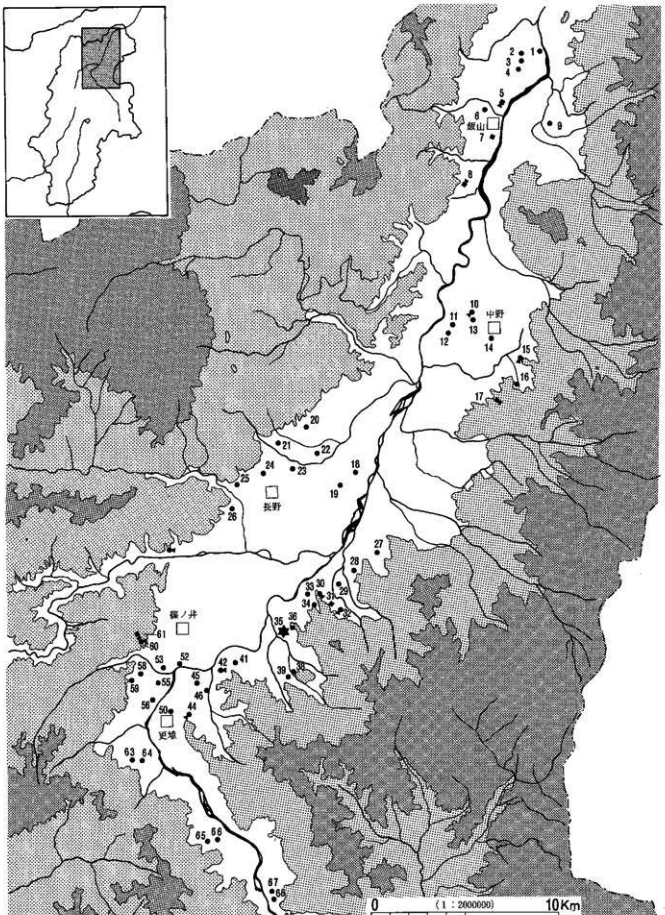
長野盆地の3ブロックの地域には、いずれも弥生時代中期後半段階になると拠点となる集落が出現する。長野盆地北部の小泉、上野、栗林遺跡、長野盆地北西部の稲田・徳間、中俣遺跡、長野盆地南部の松原、榎田、塩崎遺跡群等が該当する。当集落域が各地域において低湿地の水田開発を進める拠点となったことは言うまでもないが、大陸系磨製石器の生産と流通というシステムの中で分業化を計り、栗林式土器様式圏として、北陸諸地域、東北南部地域、関東地域との交流関係の拠点となっていたことは充分想像できる。

弥生時代後期の箱清水様式に至ると、各々の地域で集落は拡大の方向にあり、小集落が散在化する。長野盆地北部と北西部には後期中葉から北陸北東部系土器が箱清水系土器に共伴するが、長野盆地南部には少ない。一方、箱清水式土器の型式変化は、長野盆地北部は長野盆地南部に比べて保守的であり、伝統的な型式要素、文様構成が残存していく傾向にある。

3つのブロックが共通した動きをみせるのは、畿内庄内式期に併行する御屋敷期で、東海系土器群の登場、北平1号墳（36）等の方形志向の墳丘墓や、前方後方墳の出現によって箱清水式土器様式をもつ社会は解体する。古墳時代前期には当地域最古相とされる前方後方墳が出現する。北部に法伝寺2号古墳（5）、勘介山古墳（8）、蟹沢古墳（17）、南部に姫塚古墳（61）があげられる。一方、前方後方墳の出現と前後して、北部に高遠山古墳（15）、南部に和田東山3号墳（32）、森将軍塚古墳（44）といった前方後円墳が出現する。今日の研究成果では、当地域での古墳の出現が前方後方墳から前方後円墳へという単純なモデル化では理解し難い状況にある。

(3)　中部高地型土器様式圏

栗林・箱清水式土器様式は、千曲川・犀川水系に位置する長野、上田、佐久、松本、諏訪盆地に展開す



第11図　長野盆地の遺跡分布図

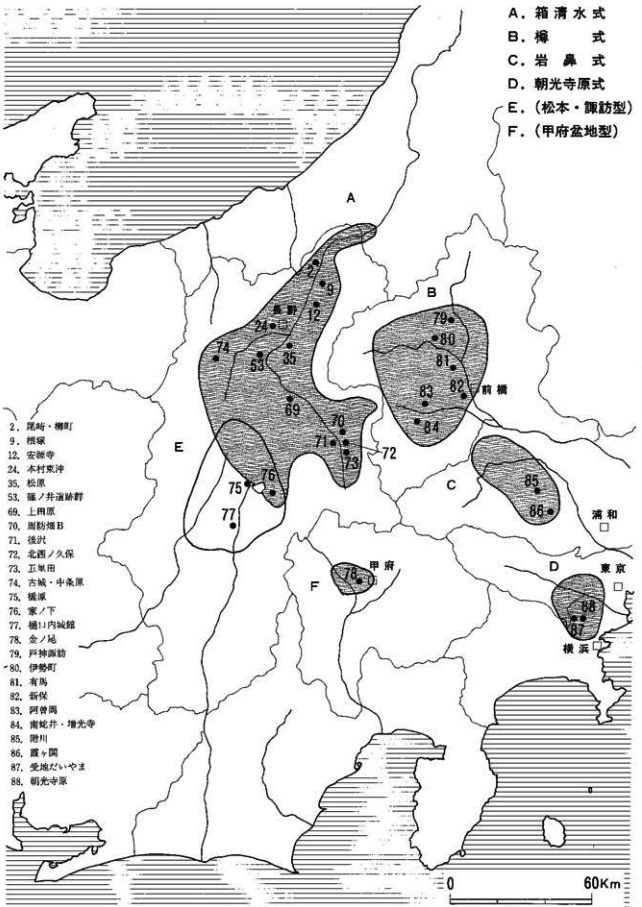
る土器様式で、器を飾る文様に櫛描文を用い、その施文方法が中部高地型をとることに大きな特色がある。長野盆地は千曲川の下流域にあたり、上流域に佐久盆地、中流域に上田盆地の諸遺跡が展開する。各集落は、水系を通じてネットワーク化が計られていたものと思われる。

一方、現在の行政区画を超えて考えると、中部高地型の櫛描文を用いる土器様式として、中期には北関東の竜見町式、後期には北関東の樽式、岩鼻式、南関東の朝光寺原式、甲府盆地の信州系と呼ばれる様式等が千曲川流域と接して展開している。中部高地型櫛描文を用いるこれらの様式圏を、土器に込められた歴史的背景を評価し「中部高地型土器様式圏」としてとらえる。岡本孝之は当様式圏を次のように説明する。「箱清水式土器は、長野・山梨両県だけに分布するのではなく、同系のものは群馬県の樽式土器、埼玉県の岩鼻式土器や神奈川県の朝光寺原式土器などがある。これらは単に文化が長野県から影響されたとみるべきものではなく、箱清水式土器は東方の樽・岩鼻・朝光寺原式土器と一体となって成立しているのである。」とし、「その姿勢の背景に縄文文化の伝統をみてとることができる」とする（岡本1993年）。岡本の中部高地型土器様式圏のとらえ方を評価しつつ、交易ネットワークでは、西日本日本海側ルートとも結びついていたであろう当様式圏の姿を想定しておきたい。

中部高地型土器様式圏の弥生時代後期末～庄内式土器併行期には、長野県木島平村根塚遺跡（9）の鉄剣、同上田市上田原遺跡（69）の鉄矛、群馬県有馬遺跡（81）の鉄剣等、墳墓に鉄剣の副葬がめだち、墓の形態も方形周溝墓ではなく、円形周溝墓を特徴とする。また、剣を鉄製におきかえた鍛造曲げ輪造りの帯状円環型鉄鋤が同様式圏内に認められ、墓に副葬されることが多い。長野県中野市西条・岩船遺跡（14）の後期前半の墳墓から出土した400点のガラス小玉を評価するならば、鉄器および装身具等を日本海ルートで入手できる窓口が同土器様式圏には存在し、独自な祭祀スタイルをもった地域集団が存在していたものと見たい。その地域色は、中期栗林式様式の延長にあったが、古墳時代前期に崩壊過程へ向かう。

〈文献・報告書〉

遺跡No.	遺跡	著者、発行者	年度	文献・報告書
1	上野	飯山市教育委員会	1990	『小沼湖沖バイパス関係遺跡発掘調査報告II　上野遺跡・大倉崎遺跡』
2a	柳町	飯山市教育委員会	1995	『柳町遺跡』
2b		飯山市教育委員会	1996	『上野㈡・柳町遺跡』
3	小泉	飯山市教育委員会	1995	『小泉弥生時代遺跡』
4	東長峰	長野県史刊行会	1982	『長野県史　考古資料編』全1巻（2）主要遺跡（北・東信編）
6	須多ヶ峯	飯山市教育委員会	1995	『須多ヶ峯遺跡一県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査一』
7	法伝寺2号	飯山市教育委員会	1997	『法伝寺2号墳』
8	勘介山	長野県史刊行会	1982	『長野県史　考古資料編』全1巻（2）主要遺跡（北・東信編）
11	栗林	長野県埋文センター	1994	『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 七瀬遺跡・栗林遺跡』
12a	安源寺	中野市教育委員会	1987	『安源寺III』
12b		中野市教育委員会	1995	『安源寺遺跡　中野市西部デイサービスセンター建設用地内』
13	七瀬	長野県埋文センター	1994	『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 七瀬遺跡・栗林遺跡』
14	西条・岩船	中野市教育委員会	1997	『西条・岩船遺跡発掘調査報告書』
15	高遠山	長野県史刊行会	1982	『長野県史　考古資料編』全1巻（2）主要遺跡（北・東信編）
16	聞山	中野市教育委員会	1993	『聞山III』
17	誓沢	長野県史刊行会	1982	『長野県史　考古資料編』全1巻（2）主要遺跡（北・東信編）



第12図　中部高地型土器様式圏

18a	中俣	長野市埋文センター	1991	『小島柳原遺跡群　仲俣遺跡・浅川扇状遺跡群　禅鎌遺跡・旗田遺跡』
18	水内坐一元神社	長野市埋文センター	1980	『三輪遺跡―付水内坐一元神社遺跡―』
19	小島境	千曲川水系古代文化研究所	1984	『第5回　三重県シンポジュウム　古墳出現期の地域性』
20a	牟礼バイパス	長野市埋文センター	1982	『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスA・E地点遺跡―』
20b		長野市埋文センター	1986	『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスB・C・D地点遺跡―』
21	神楽橋	長野県史刊行会	1988	『長野県史　考古資料編』全1巻（4）遺跡・遺物
22a	稲田・徳間	長野市埋文センター	1980	『四ッ屋遺跡（第1～3次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（3）』
22b		長野市埋文センター	1992	『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡・木舞遺跡・柳田遺跡・相添遺跡』
23	吉田高校	長野市埋文センター	1987	『長野吉田高校グランド遺跡』
24a	本村東沖	長野市教育委員会	1993	『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡―長野高等学校校舎改築に伴う発掘調査報告書―』
27a b	榎田	長野県埋文センター	1991・1992	『長野県埋蔵文化財センター　年報7』『年報8』
28	春山	長野県埋文センター	1991	『長野県埋蔵文化財センター　年報7』
29a b	川田条里	長野県埋文センター	1990・1991	『長野県埋蔵文化財センター　年報6』『年報7』
32	和田東山古墳群	長野市教育委員会	1995	『和田東山古墳群―和田東山3号墳発掘調査概報―』
36	北平1号墳	長野県埋文センター	1996	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7　大星山古墳群・北平1号墳』
44a	森将軍塚古墳	更埴市教育委員会	1973	『長野県森将軍塚古墳』
44b		更埴市教育委員会	1992	『史跡　森将軍塚古墳―保存整備事業発掘調査報告書―』
46a	生仁	更埴市教育委員会	1969	『生仁』
46b		更埴市教育委員会	1989	『長野県更埴市　生仁遺跡III―県営雨宮地区遠水防除事業に伴う発掘調査報告書―』
50a	五輪堂	更埴市教育委員会	1987	『更埴市粟佐遺跡群五輪堂遺跡IV―長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に伴発掘調査報告書―』
50b		更埴市教育委員会	1990	『更埴市粟佐遺跡群五輪堂遺跡III―屋代南高校改築に伴う発掘調査報告書』
53a	篠ノ井	長野市教育委員会	1980	『篠ノ井遺跡群―大規模自転車道整備遺跡の調査報告―』
53b		長野市教育委員会	1989	『篠ノ井遺跡群II―市道山崎牌猫線地点―』
53c		長野市教育委員会	1990	『篠ノ井遺跡群III―中篠北信坂城線鉄塔地点・長野市営塩崎体育館地点―』
53d		長野市教育委員会	1992	『篠ノ井遺跡群（4）　聖川堤防地点―』
55	塩崎小学校	長野市教育委員会	1979	『塩崎遺跡群―塩崎小学校地点遺跡　第2次調査報告書―』
56a	塩崎	長野市埋文センター	1991	『塩崎遺跡群（6）・石川条里遺跡（5）』
56b		長野市教育委員会	1987	『塩崎遺跡　V　殿屋敷遺跡―角間地区市道改良事業地点―』
56c		長野市教育委員会	1991	『塩崎遺跡群（6）・塩崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地点・石川条里遺跡（5）―石川条里遺跡消防塩崎分署地点―』
58a	石川条里	長野市教育委員会	1991	『石川条里遺跡（6）―篠ノ井西部地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
58b		長野県埋文センター	1997	『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15―石川条里遺跡―』
65	御屋敷	長野県史刊行会	1982	『長野県史　考古資料編』全1巻（2）主要遺跡（北・東信編）
67	塚田	坂城町教育委員会	1995	『南条遺跡群　塚田遺跡II』
69	上田原	上田市教育委員会	1996	『上田原遺跡』

第2章　遺跡

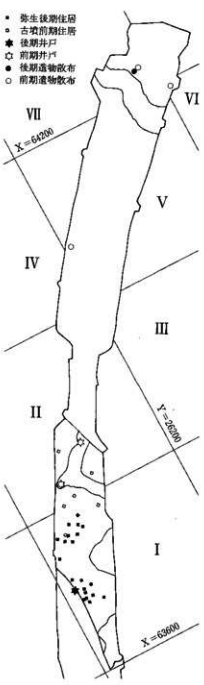
第1節　遺構の概要

松原遺跡における弥生時代後期および古墳時代前期の集落は、高速道路建設に伴う調査以前において周知されることはなかった。高速道建設に伴う長野県埋蔵文化財センターの調査区内では、字高畑地籍の西地区（大々グリッドⅠ・Ⅱ地区）のみに弥生時代後期・古墳時代前期集落が存在した（第13図）。高速道地点に接した長野市埋蔵文化財センターの調査地点（第4図）では当該期の集落は知られないところから、弥生時代後期・古墳時代前期の松原集落は弥生時代中期集落の形態と異なり、限られた空間に展開していたようである。

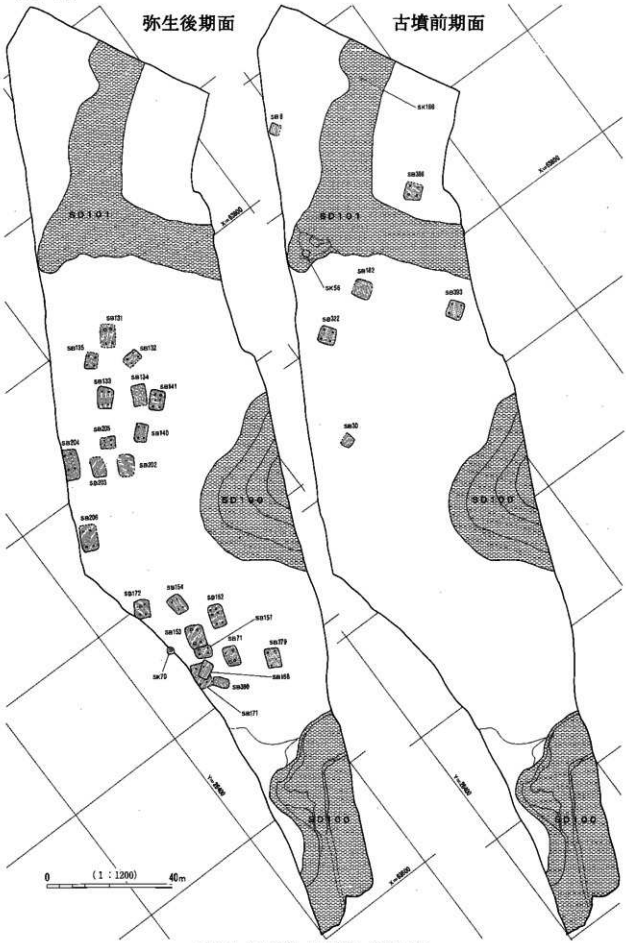
今回の調査では、弥生時代後期面を2面検出することができた。後期前半期の竪穴住居址は中期新相の竪穴住居址と同一検出面で検出できた。後期前半の竪穴住居址は数軒の検出例があるが、土器の評価に検討の余地があるため、弥生時代中期編で報告する。後期中葉の箱清水式期集落の検出面は、前半期検出面より30cmほど上層にあり、その間には洪水砂層が認められることから、後期集落は一時跡絶えることになる。

弥生時代後期中葉の箱清水式期の集落は、竪穴住居址22軒、井戸1基が、古墳時代前期の集落は竪穴住居址7基、井戸2基が確認された（第14図）。両時期の集落は、蛭川が自然堤防面を開析した低地部と、埋没した旧河道の窪地に狭まれた自然堤防内の高まりに展開する。旧河道の窪地は、幅15～20m、高差1.5～2mの窪地になっており、自然の囲郷溝として機能したとも想定される。弥生時代後期面では旧河道集落側傾斜面に多量の土器が廃棄されていた。長野市埋蔵文化財センターが調査を行った反対側の傾斜面には土器の廃棄が認められないことから、旧河道を狭んで対面側に集落址はなかったものとみたい。また旧河道縁辺部からは土器棺と想定される大型壺の出土もあり、墓域が集落の脇に展開する可能性がある。古墳時代後期においては、旧河道対岸にまで集落が拡散しており、旧河道の埋没が進んだ様子が何える。弥生時代後期の住居群が集魂型をなすのに対し、古墳時代前期の住居群が散在型であることを指摘することができる。

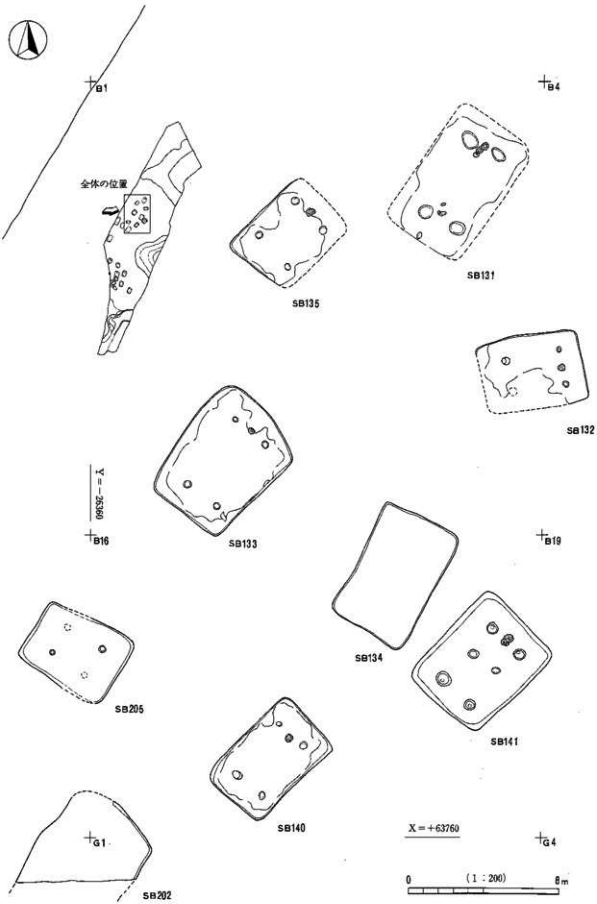
弥生時代後期および古墳時代前期の全体図、遺構割付図を第15図～第19図に示した。



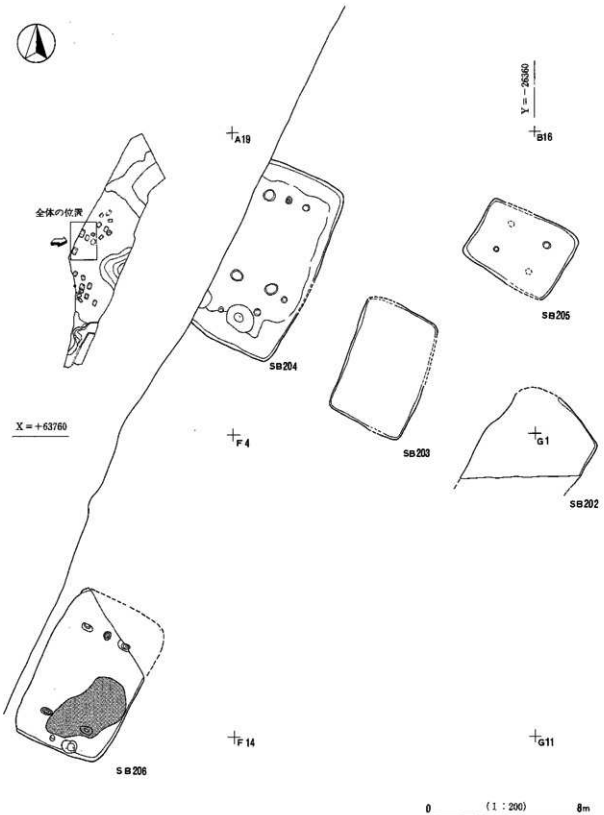
第13図　遺構の分布



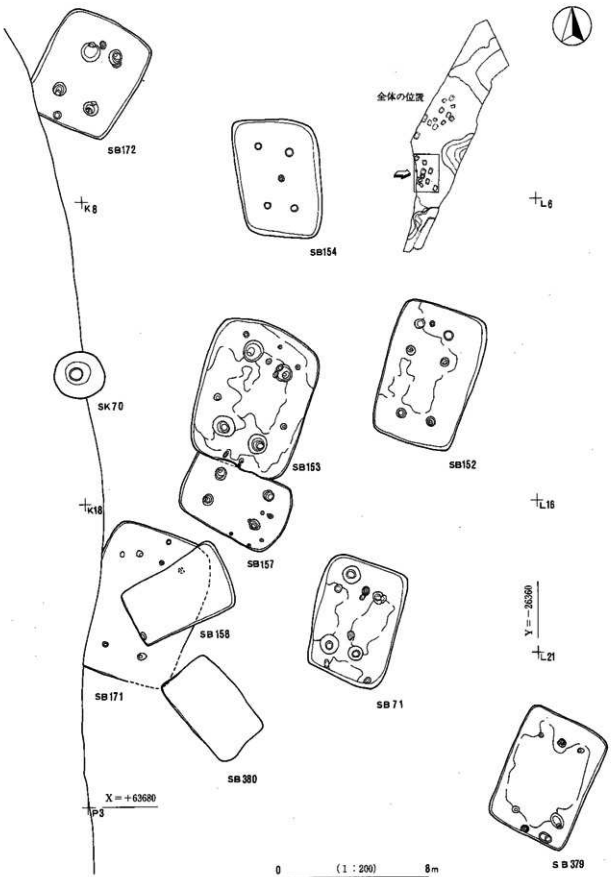
第14図　弥生後期・古墳前期　集落全体図



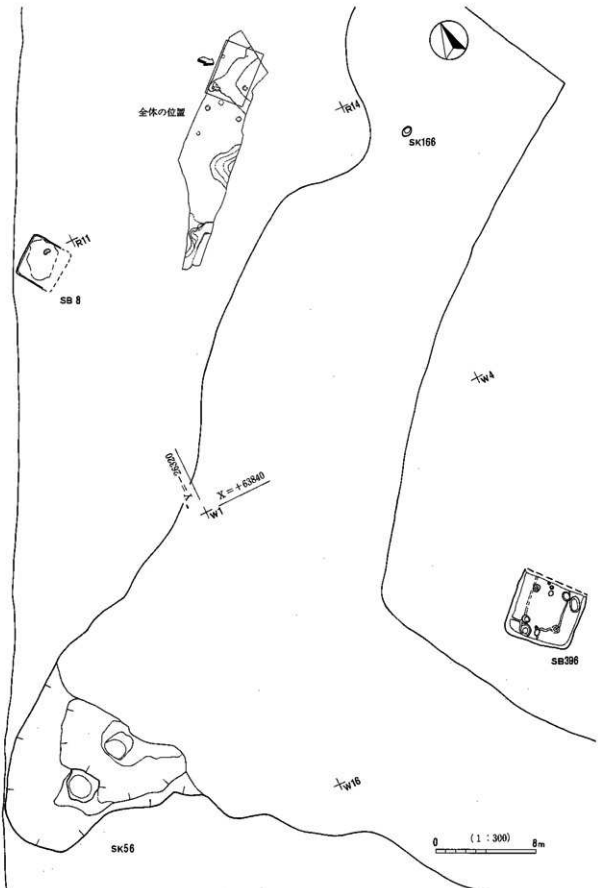
第15図　弥生後期．遺構割付図（1）



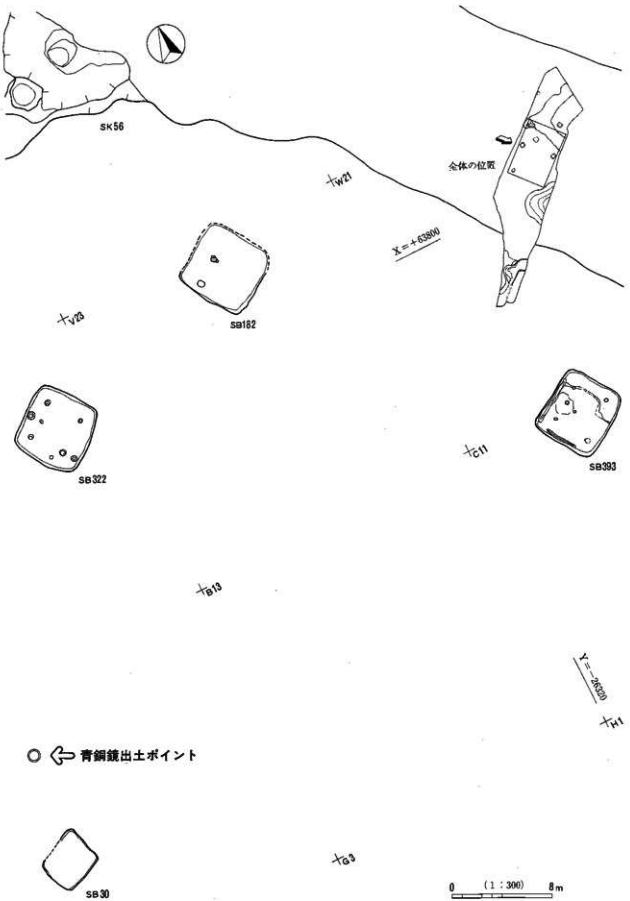
第16図　弥生後期．遺構割付図（２）



第17図　弥生後期，遺構割付図（3）



第18図　古墳前期．遺構割付図（1）



○ ⇦ 青銅鏡出土ポイント

第19図　古墳前期，遺構割付図（2）

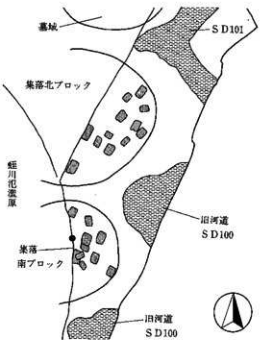
第2節　弥生時代後期集落址の調査

1　概要

弥生時代後期集落は、西地区（大々グリッドⅠ・Ⅱ地区）において竪穴住居址22軒、井戸1基が明らかとなった（第13・14・20図）。

調査区南西端は、現蛭川が開析した氾濫原となり、自然堤防面と約1.5mの段差となっており、弥生時代後期面はすでに削り取られていた。弥生時代後期集落面が西側に広がっていた可能性は充分にある。

調査区内においては、集落と伴に埋没した旧河道が明らかとなり、集落は旧河道と蛭川に挟まれた自然堤防の微高地上に展開していることが予想される。集落のまとまりを2つに区分し、北側を集落北ブロック、南側を集落南ブロックとして報告する（第20図）。集落北ブロックの更に北側には調査区からははずれるものの墓域の存在を想定している。



第20図　弥生後期集落概念図

遺構名	規模 長軸	規模 短軸	長短比 B/A %	面積 m²	主軸方位	ピット 主柱穴	ピット 他	ピット 入口施設	主柱穴間距離 梁行	主柱穴間距離 桁行	長短比 B/A %	床 硬化面	床 標高	床 壁高	炉 数	炉 形態	床直焼化面	ブロック	備考
71	6.3	4.6	73.0	32	N-17-W	4	3	○	3.2	1.5	46.9	○	349.00	56	2	地床炉	○	南	
131	(7.5)	(4.8)	64.0	36	N-34-W	4	1	○	4.4	1.9	43.2	○	348.96	4	3	地床炉	○	北	
132	(5.6)	4.0	71.4	(21)	N-80-W	4	1	○	2.8	1.8	64.3	○	348.91	12	1	土器敷炉		北	
133	6.9	5.3	76.8	44	N-39-W	4			3.9	2.0	51.3	○	348.97	42	1	地床炉		北	
134	6.6	4.4	66.7	29	N-27-W								349.05	17				北	
135	5.2	(4.0)	76.9	(21)	N-46-W	4			2.6	2.2	84.6	○	349.00	11	1	地床炉		北	
140	6.0	3.8	63.3	20	N-44-W	4			3.4	1.8	52.9	○	348.99	53	1	地床炉	○	北	
141	6.3	5.0	79.4	29	N-44-W	6			3.8	2.0	52.6		348.91	40	3	地床炉		北	
152	7.4	4.9	66.2	38	N-16-W	6			4.6	1.8	39.1	○	348.95	44	1	地床炉		南	
153	7.8	5.8	74.4	44	N-19-W	4	8	○	4.0	2.2	55.0	○	348.99	32	3	地床炉		南	
154	6.2	4.4	71.0	23	N-4-W	4			3.0	1.6	53.3	○	348.78	40	1	地床炉		南	
157	5.8	3.8	65.5	20	N-119-W	4	2		2.8	1.8	64.3	○	349.07	22	1	地床炉		南	
158	5.8	3.4	58.6	20	N-65-W		1	○					348.94	39				南	
171	8.2	5.8	70.7	44	N-21-W	4	1		5.0	2.2	44.0		349.00	31	1	地床炉	○	南	
172	6.2	5.2	83.9	35	N-28-W	4	1	○	3.2	1.8	56.3		348.82	57	1	地床炉		南	床面炭化層
202	(6.4以上)	(5.3以上)	82.8	×	N-37-W								349.16	27				北	
203	6.6	4.4	66.7	27	N-24-W								348.90	42				北	
204	10.1	(5.1)	50.5	(50)	N-23-W	4	5	○	4.6	2.0	43.5	○	348.90	57	1	地床炉		北	拡張
205	5.1	4.0	78.4	18	N-59-W	(4)			(2.2)	(1.6)	72.7		348.93	44	1	地床炉		北	
206	(8.6)	5.4	62.8	(46)	N-27-W	4	3	○	5.0	2.4	48.0	○	348.96	45	1	地床炉		北	
379	6.5	4.6	70.8	29	N-25-W	4	2	○	4.0	2.2	55.0	○	348.80	42	1	地床炉		南	
380	5.1	3.2	62.7	15	N-40-W								349.02	11				南	
						17	11	9						17			4		

第1表　弥生時代後期竪穴住居址一覧

2　遺構

(1)　竪穴住居址（SB）

SB71（第21図：PL．4）

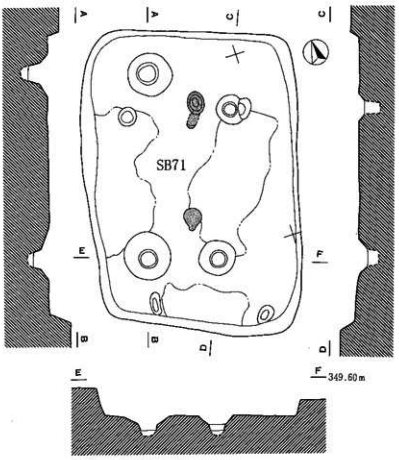
南ブロックに位置する（IK19・20・24・25グリッド）。長方形プランを基本とするが、長軸辺が若干異なり、やや歪んだ形態をなす。短辺および長辺は直線的で、コーナー部分で隅丸状をなす。住居面積は6.3×4.6mで29m²を測る。

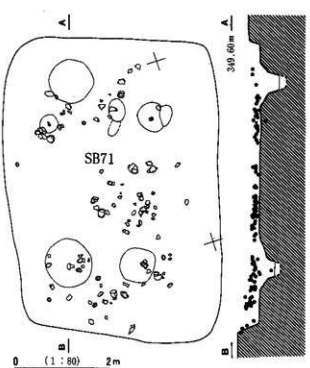
床面は明確に検出された。堅緻の部分と、硬化しない部分に分かれ、炉に向かって右側長辺の壁際および奥壁周辺は硬化していない。貼り床は認められない。ピットは主柱穴および、入口施設の柱穴が確認できた。主柱穴の掘り方は2段となり（PL．4）、下段でも径30～40cmを測る。主柱穴下面まで調査が行われていないため、下方部分は推定線で示している。炉は地床炉で、主柱穴間に位置する。炉床は橙褐色に酸化被熱し、2基確認できる。切り合い関係から新旧関係として捉えることができ、住居内部側から奥壁側へ移動している。地床炉と反対側の床面中央部には、酸化被熱痕跡を認めることができるが掘り込みはない。

遺物は埋土中および床面直上から出土した（PL．4）。出土状況は、土器片が散在状況をなし、床面上から出土した土器も破片の状態で、埋置されたと考えられる個体はない。出土土器のドットがレンズ状を示すことからも住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

SB131（第22図：PL．4）

北ブロックに位置する（IB3・8グリッド）。検出時にはすでに床面に達しており、硬化面、炉址等の床面状況、遺物出土状況から住居址のプランを想定した。長軸7.5m、短軸4.8mほどの長方形プラン





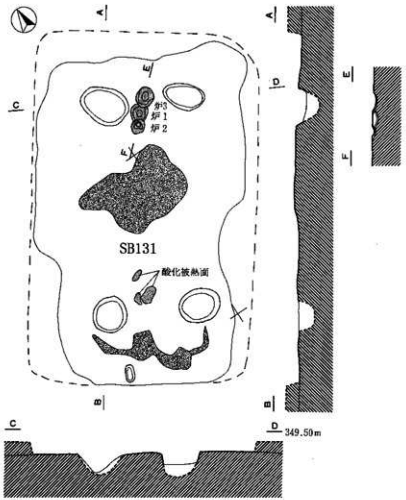
第21図　SB71遺構図.埋土内土器出土状況図

を呈し、住居面積は36㎡ほどと推定する。

床面は全体に堅緻で、壁周辺以外は全面硬化する。ピットは主柱穴の掘り方4箇所、および入口部の柱穴が1箇所検出できた。柱穴下部の調査がされていないため、推定ラインで示した。

炉は地床炉で、3基が切り合い関係をなし、炉1→炉2→炉3の順で使用された。炉床はいずれも橙褐色に酸化被熱する。炉と反対側の主柱穴間床面にも橙褐色の酸化被熱面があるが、掘り方は認められない。炉周辺の床面直上に炭化粒の分布が認められた。

遺物は床面上から破片が若干検出されたに留まる。



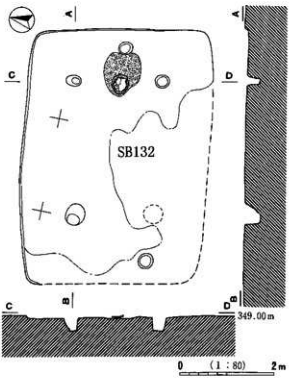
SB132（第22図：PL. 4）

北ブロックに位置する（IB8・9・13・14グリッド）。遺構プランは北辺および西辺が不明瞭であるが、長方形を基本とする。短辺および長辺は直線的で、コーナー部分で隅丸状をなす。住居面積は5.6×4.0mで22㎡を測る。住居址の主軸は多くが南北方向を示すのに対し、同住居址は東西方向を示す。

床面は堅緻な部分とそうでない部分があり、炉に対して、左側が堅緻となる。ピットは主柱穴3ヶ所が確認できた。

炉は土器敷炉（PL. 4）である。大型甕の胴部大破片を掘り方に敷いており、土器および炉床下は強く被熱して酸化状態を示す。松原遺跡の弥生時代後期集落では、土器敷炉は当遺構のみである。

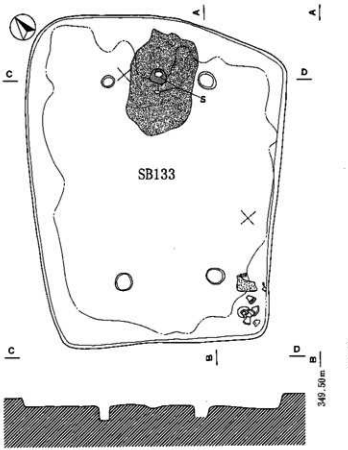
遺物は床面上から破片が若干出土した程度である。



第22図　SB131・132遺構図

SB133（第23図：PL. 5）

北ブロックに位置する（IB11・12グリッド）。遺構プランは長方形プランを基本とするが、長辺の長さが異なり、奥壁側短辺が楕円状にカーブする。奥が広が

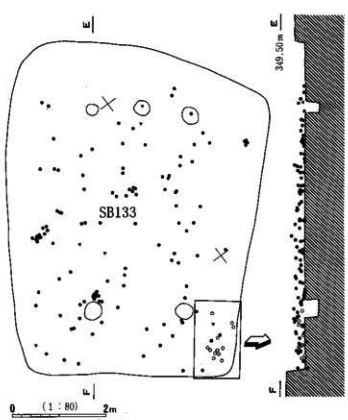


る形状を呈する。住居面積は6.9×5.3mで37㎡を測る。

床面は全面に堅緻であるが、炉から奥壁側にかけて、入口左右コーナー部では硬化しない。ピットは主柱穴が4本検出できたが、他に検出されていない。

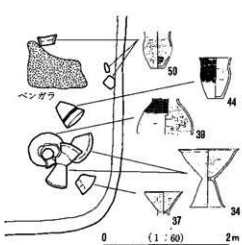
炉は地床炉で、炉床は酸化被熱する。炉址付近の床面上には炭化粒層が広がり、河原石2点が原位置を示さず浮いた状況で検出された。縁石にしていた可能性がある。

遺物は埋土中および、床面直上から出土した。埋土中からは土器片が散在状態で検出され、入口部右側コーナー付近床面直上には、遺棄された土器がまとまって出土した。高杯（34，37）・小型甕（44）は完形に復元でき、壺（39）は胴上半が完形に復元された。器台的機能を有していたものであろうか。土器が遺棄された床面周辺には、ベンガラが散布された痕跡が認められた。



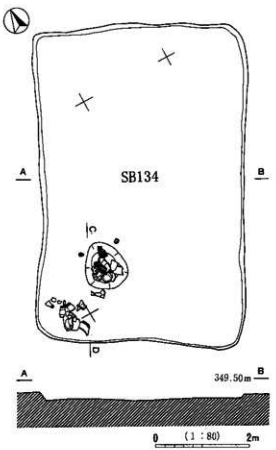
SB134（第24図：PL．5）

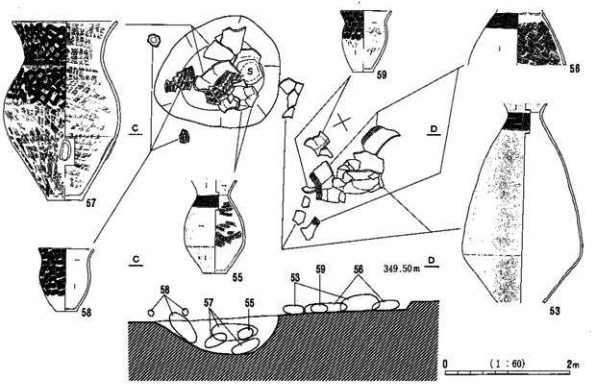
北ブロックに位置する（IB12·13·17·18グリッド）。長方形のプランをなし、短辺



第23図　SB133遺構図，埋土内土器出土状況図，埋置土器出土状況図（土器1/16）

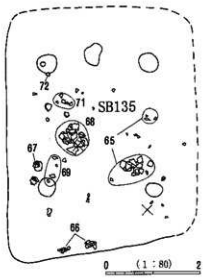
および長辺は直線的で、コーナー部分で隅丸状をなす。住居面積は6.6×4.4mで29㎡を測る。床面は基本土層第Ⅴ層黄褐色砂質土中にあり、軟弱で硬化面を確認することはできなっかった。主柱穴および炉址も確認できないことから、居住遺構以外の建物構造を想定することも可能かと思われる。ピットは南西コーナー付近に1箇所みられ、断面が擂り鉢状をなす。遺物は、南西コーナー付近床面直上およびピット内より出土した。大型壺・甕など6個体が廃棄された状況でまとまって出土した（PL．5）が、欠損部があり完形に復元されるものはない。ピット内からは、甕58・大型甕57・壺55が出土した。大型甕57は口縁部破片、胴部上半・下半破片の位置関係に整合性がないことから、打ち欠き後、ピット内に廃棄した様子が窺える。56は打ち欠き面を調整し、器台として転用したものと考えられるが、破損した状態で散在していた。壺53は欠落する破片が多い。胴部と口縁部のまとまりが離れた状態で出土している。57・53はいずれも大型品であるが、57には壺にみられる胴部隆帯があり、且つ被熱痕跡がないことから、壺的機能をもち得ていたのであろう。

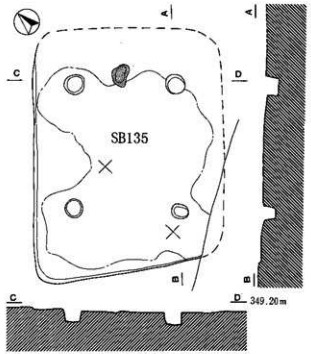




第24図　ＳＢ134遺構図.遺棄土器出土状況図（土器1/12）

ＳＢ１３５（第25図：ＰＬ．５）





第25図　ＳＢ135遺構図，堆土内土器出土状況図

北ブロックに位置する（ＩＢ２・６・７グリッド）。調査は、検出時すでに床面近くまで達しており、床面の状態、遺物の状況から住居址のプランを想定した。床面の状況により形状を判断すると長軸5.2ｍ、短軸4.0ｍ程の不整形をなす長方形プランを呈し、住居面積は21㎡程と推定する。

床面は、堅緻な部分と硬化しない部分に分かれ、炉に向かって左側が軟化傾向にあるが、全体的に堅緻な部分が多い。ピットは主柱穴が４ヶ所確認できた。炉は地床炉で、炉床は橙褐色に酸化被熱した状況を示す。

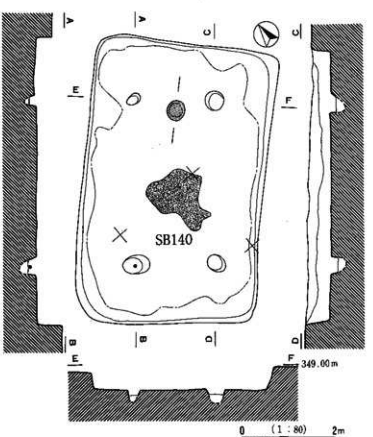
遺物は床面上から遺棄された状況で検出されたが、完形になる個体はない。

ＳＢ１４０（第26図：ＰＬ．５）

北ブロックに位置する（ＩＢ21・22グリッド）。長方形プランをなし、短辺および長辺は直線的で、コーナー部分で急にカーブする。住居面積は6.0×3.8ｍで、20㎡を測る。壁は直に立ち上がり、検出面までの高さは53㎝。

床面は非常に堅緻である。壁周辺以外は全面硬化する。ピットは主柱穴４本以外検出されなかった。炉は地床炉で、炉床は橙白色に酸化被熱する。住居中央の床面直上に炭化物集中が確認できる。

遺物はほとんど出土していないが主柱穴より土器片が出土している。



第26図　ＳＢ140遺構図

SB141（第27図：PL．5）

北ブロックに位置する（IB18･23グリッド）。長方形プランをなし、短辺および長辺は直線的で、コーナー部分で隅丸状をなす。住居面積は6.3×5.0mで32m²を測る。

ピットは主柱穴がいずれも床面から50cm程掘り込まれる。炉は地床炉で、円形をなし、若干窪む程度である。橙褐色に被熱硬化した酸化面の状況から3回の切り合い関係が認められた。

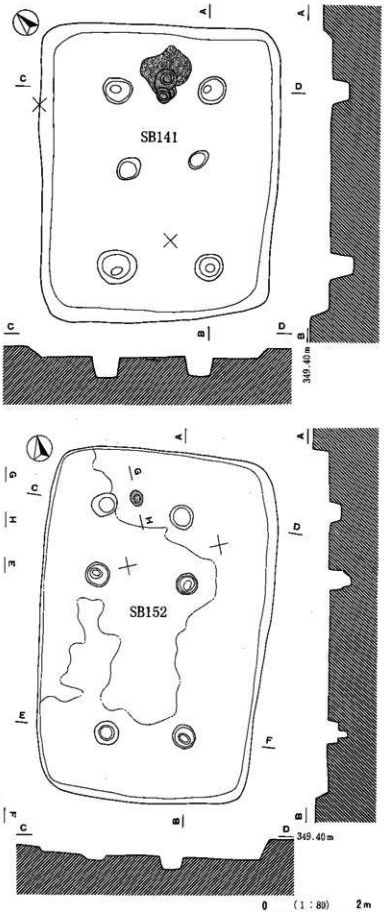
遺物は床面上から破片が若干出土した程度である。

SB152（第27図：PL．6）

南ブロックに位置する（IK10･14･15グリッド）。長方形プランをなし、短辺および長辺は直線的で、コーナー部分で隅丸状をなす。住居面積は、7.4×4.9mで36m²を測る。

床面は堅緻の部分と、硬化しない部分に別れ、炉に向かって右長辺側は軟化、左長辺側は硬化する。ピットは主柱穴が6本確認できた。炉は地床炉で、楕円形をなす。床面から4cmほど掘り込み、1cmほど粘土をはっている。炉床は橙白色に酸化被熱して硬化する。炉床下は3cmほど茶褐色に酸化状態を示すことからかなり強く熱を受けている様子が窺える。炉床内には1cmほど炭化粒が詰まっていた（PL．6）。

遺物は、床面上から破片が若干出土した程度である。

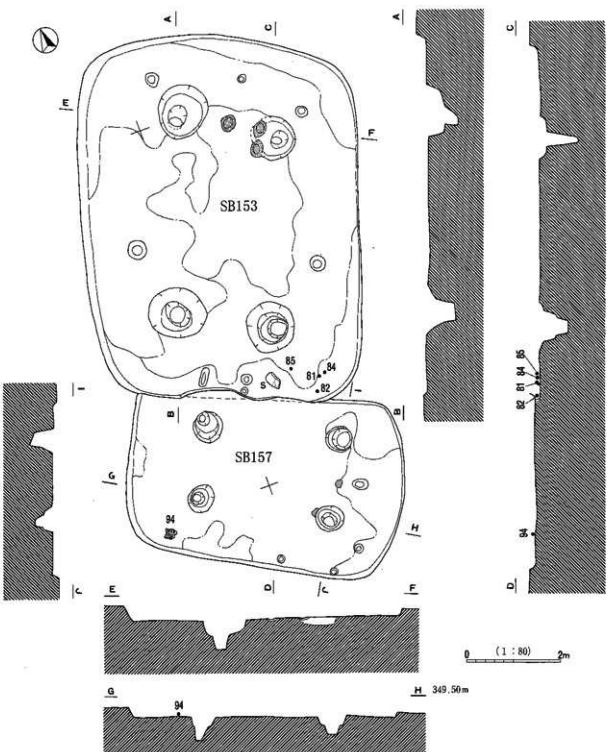


第27図　SB141・152遺構図

ＳＢ１５３（第28図：ＰＬ．６）

南ブロックに位置する（ＩＫ８・９・13・14グリッド）。ＳＢ157と重複関係（ＳＢ153→ＳＢ157）にあり、床面はＳＢ157に比べ若干深い。両者の主軸は直交関係にある。隅丸の長方形プランをなし、入口側短辺は直線的、奥壁側短辺は弧状を呈する。住居面積は7.8×5.8ｍで、44㎡を測る。

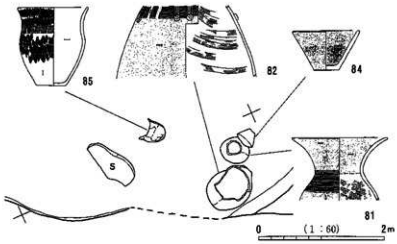
床面は全面に堅緻であるが、主柱穴４本内の空間が最も硬化する。炉は地床炉で、３ヶ所確認できたが、切り合い関係はない。炉床は１～２㎝若干窪む程度である。橙白色に硬化し、その背面２～４㎝は茶



第28図　ＳＢ153・157遺構図

褐色に強く酸化被熱している。ピットは主柱穴および、入口施設等が検出された。主柱穴の掘り方は二段掘りとなっている。

遺物は、床面上から破片が若干出土した程度であるが、住居入口右側コーナー床面直上には遺棄された土器が数点まとまっていた。壺・甕・鉢はいずれも欠損した状況であった。壺82は頸部以上と胴下半を欠くほかは完存し、器台的機能を想定させる。入口右側コーナー床面への土器の遺棄は133号住居址でも確認された。入口右側コーナー部分への土器の遺棄は、住居址廃絶時の儀礼と密接にかかわるであろう。



第29図　ＳＢ153遺棄土器出土状況図（土器1/9）

ＳＢ１５７（第28図：ＰＬ．6・7）

南ブロックに位置する（ＩＫ13･14･18･19グリッド）。ＳＢ153と重複関係（ＳＢ153→ＳＢ157）にあり、ＳＢ153埋土を切り込む形で床面が広がる。床面はＳＢ157が若干浅い。隅丸長方形プランをなし、住居面積は5.8×3.8ｍで、20㎡を測る。

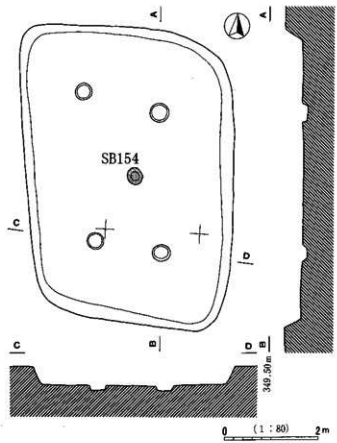
床面は壁周辺以外全体的に堅緻で、硬化面が認められる。ピットは主柱穴が４ヶ所確認できた。炉は地床炉で、酸化被熱する。

遺物は埋土中より破片が散在状態で出土した。甕94は床面から10cm浮いた埋土中より出土した。

ＳＢ１５４（第30図）

南ブロックに位置する（ＩＫ3・4・9グリッド）。長方形プランを基本とするが、長辺と短辺が直交せず若干歪みがみられる。コーナー部分は隅丸状をなす。住居面積は6.2×4.4ｍで、27㎡を測る。

床面は部分的に硬化するが、全体的に締りに欠ける。主柱穴は４ヶ所確認できたが、住居プランと同様に歪みが確認される。炉址は浅い地床炉で、住居中央部に検出された。同住居址のみ炉が中央に位置する。被熱痕跡が弱く、使用が長期に及んでいないことが推測される。遺物は床面上から破片が若干出土した程度である。



第30図　ＳＢ154遺構図

ＳＢ１５８（第31図）

南ブロックに位置する（ＩＫ18グリッド）。ＳＢ171と重複関係（ＳＢ171→ＳＢ158）にあり、ＳＢ171床面を若干掘り込む。隅丸長方形プランをなし、住居面積は5.8×3.4ｍで、20㎡を測る。

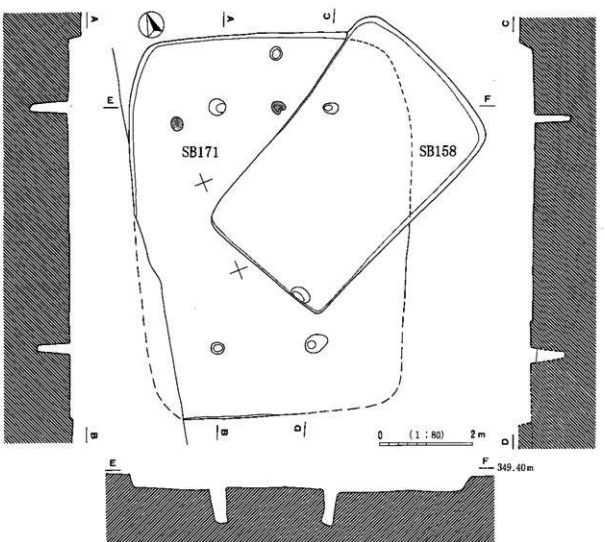
床面は軟弱で、硬化面を確認することができなかった。主柱穴および、炉址も確認できないことから、居住遺構以外の建物構造を想定することも可能である。同様な建物としてＳＢ134・203が認められる。

遺物は埋土中より破片が若干出土した程度である。図化できるものはない。

ＳＢ１７１（第31図）

南ブロックに位置する（ＩＫ17･18･22･23グリッド）。ＳＢ158と重複関係（ＳＢ171→ＳＢ158）にあり、床面をＳＢ158によって切られる。隅丸の長方形プランをなすものと想定され、住居面積は8.2×5.8ｍで、44㎡を測る。

床面は、壁周辺以外は全体的に堅緻で、硬化面が認められる。ピットは主柱穴４ヶ所および、他に３ヶ所検出できた。主柱穴は掘り方を調査したのではなく、柱痕を掘り抜いたものと思われる。深さは80cmほどあり、住居群中最も深い。柱痕の径は10～20cm大であり、主柱の構造が推定される。炉は地床炉で炉床は橙白色に酸化状況を示す。床面に酸化面が認められる。遺物はほとんどなく図化できるものはない。



第31図　ＳＢ158・171遺構図

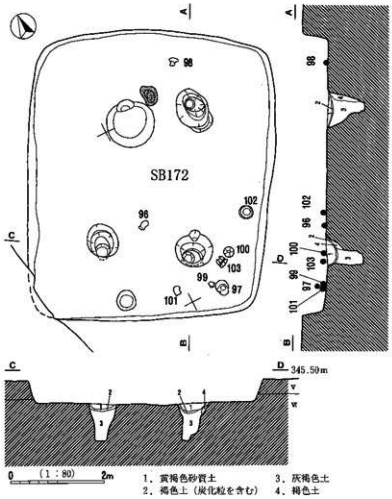
SB172（第32図：PL. 7）

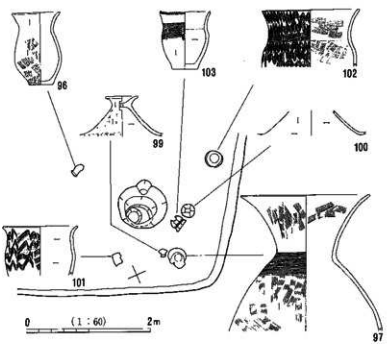
南ブロックに位置する（IF22・23・IK2・3グリッド）。長方形プランをなし、短辺および長辺は直線的で、コーナー部分で隅丸状をなす。奥壁がやや弧状を呈する。住居面積は6.2×5.2mで32㎡を測る。

床面は基本土層第VI層褐色土を掘り込み、硬化しない。壁面から50cmほど内側の床面直上には炭化粒・焼土粒が2cmほど堆積し、炭化材はみられない。壁面も被熱をしていないところから、1次埋没後堆積したものと考えられる。

ピットは主柱穴と入口部に1箇所検出できた。主柱穴は床面の炭化層（2層）がピット内に落ち込み（PL. 7）、床面で明瞭に検出することができた。主柱穴の土層3層は主柱抜き取り層と考えることができ、1・2層はその後の流入層である。同住居址は廃棄にあたって、主柱穴の抜き取りが行われたものとみたい。炉は地床炉で、楕円形をなして若干窪む。酸化被熱し、橙褐色に硬化する。

遺物は、床面直上に遺棄され、南東コーナー付近にまとまる（PL. 7）。97と102は胴下半を打ち欠いた壺と甕で、打ち欠き面を調整し、正位の状態で置かれていた。転用品で、器台的機能をもち得ていたのだろう。高杯98と壺96は、完形品で置かれていたものが横転した状況で床面直上より出土した。入口右側コーナー部分の床面直上に土器が遺棄される現象はSB133・153にも認められる。





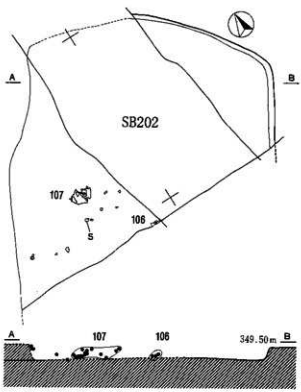
第32図　SB172遺構図，遺棄土器出土状況図（土器1/9）

ＳＢ２０２（第33図）

北ブロックに位置する（ＩＡ25・Ｂ21・Ｆ５・Ｇ１グリッド）。古代の溝ＳＤ７等に切られ全容は明らかでない。残存部から長軸6.4ｍ以上、短軸5.3ｍ以上の大型住居が想定される。床面は堅緻な部分がみられる。柱穴、炉址はＳＤ７に切られ確認できない。遺物は、床面直上から遺棄された大型甕（107）と台付甕（106）が出土した。大型甕は破砕された状態で、台付甕は遺棄された状態で出土した。

ＳＢ２０３（第33図）

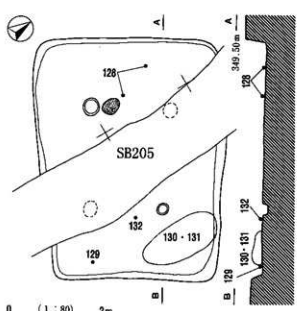
北ブロックに位置する（ＩＡ24-25・ＩＦ４・５グリッド）。長方形プランを基本とする。住居面積は6.6×4.4ｍで、29㎡を測る。床面は中世の井戸によって一部切られるが、硬化面が認められず、柱穴・炉址も確認できない。遺物は、埋土中から破片が若干出土した。

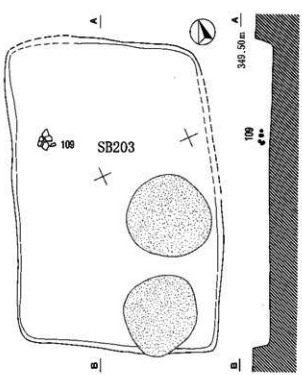


ＳＢ２０５（第33図：ＰＬ．７）

北ブロックに位置する（ＩＡ20-25・ＩＢ16-21グリッド）。長方形プランをなし、コーナー部分で隔丸状をなす。住居面積は5.1×4.0ｍで20㎡を測る。住居址の主軸は東西方向を示す。

床面は軟弱で、硬化面を確認することはできない。古代の溝ＳＤ７に切られるため、全様は明らかではないが、主柱穴が２箇所確認できた。南西主柱穴間の床面には炭化粒の集中範囲があり、炉として機能していたものと考えられる。遺物は床面直上から破片が若干出土した。





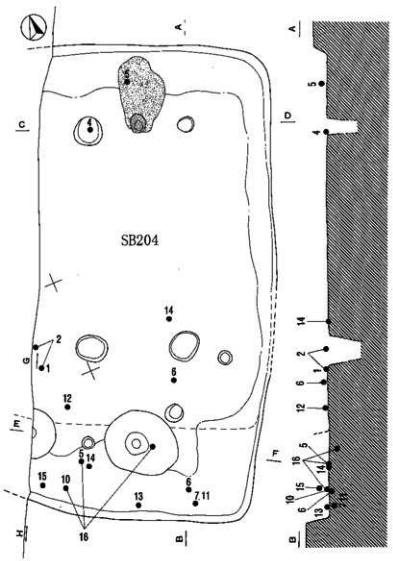
第33図　ＳＢ202・203・205遺構図

ＳＢ２０４（第34図：ＰＬ．７）

北ブロックに位置する（ＩＡ18･19･23･24グリッド）。住居址の西辺側が調査区域外にかかるため、全容を知り得ないが、隅丸長方形プランを呈し、拡張が認められる。拡張後のプランは長辺10.1ｍ×短辺5.1ｍ以上となり、面積は50㎡以上を測る。拡張前の長辺は８ｍ程であったものと想定される。

床面は、壁周辺以外全面的に堅緻で、硬化面がみられ、拡張部分にも及んでいる。ピットは拡張前の主柱穴４ヶ所が検出できた。拡張時における主柱穴は調査区の断面にかかり、掘り方の形状を明らかにし得た。掘り方は床面上では径１ｍ程のプランを持ち、円錐状に深さ１ｍ程掘り下げている。炉は地床炉で、１ヶ所のみ検出された。拡張にあたって、炉址が動くことはなかったようである。炉から奥壁側に向かって、床面上に炭化粒が分布していた。

遺物は、拡張部を中心に床面上から破片となって出土した。



Ⅰ～Ⅱ．基本土層・黒褐色砂質シルト
Ⅲ．基本土層・暗褐色砂質シルト
Ⅳ．基本土層・黒褐色砂質シルト
Ⅴ．基本土層・黄褐色砂層
Ⅵａ．基本土層・黒褐色砂質シルト（黄褐色砂粒含む）
Ⅵｂ．基本土層・黒褐色砂質シルト（炭化粒含む）

1．SB204埋土・暗褐色炭化粒層
2．SB204埋土・褐色土層（炭化粒含む）
3．SB204埋土・褐色粘質土（貼り床部分）
4．SB204柱穴・暗褐色土
5．SB204柱穴・黄橙色砂質土
6．SB204柱穴・黄橙色砂質土（暗褐色土を含む）
7．SB204柱穴・黄橙色砂質土
8．SB204柱穴・暗褐色粘質土
9．SB204柱穴・暗褐色粘質土（炭化物を含む）
10．SB204柱穴・黄橙色粘質土（鉄分集積あり）
11．SB286　巻生中期竪穴住居埋土

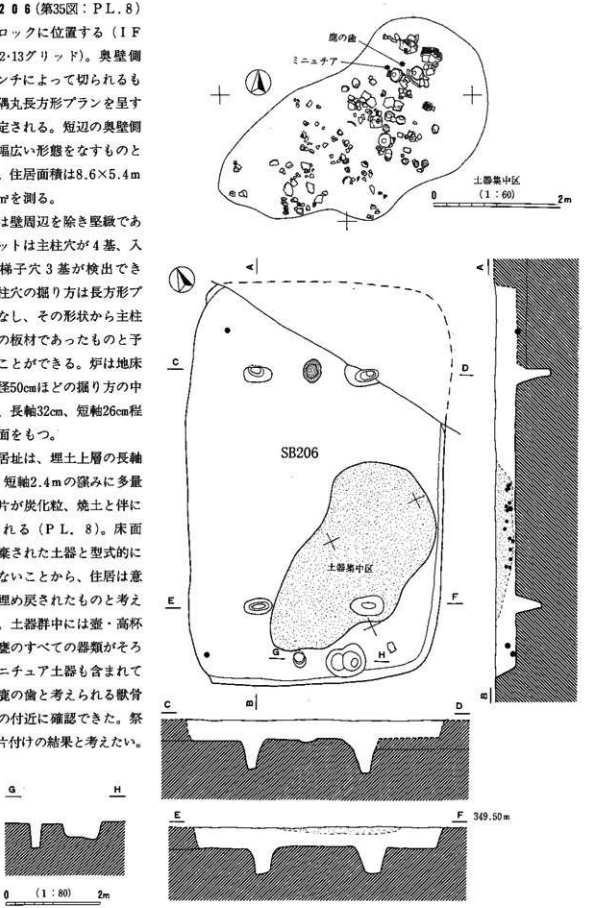
第34図　ＳＢ204遺構図

ＳＢ２０６（第35図：ＰＬ．８）

北ブロックに位置する（ＩＦ7・8・12・13グリッド）。奥壁側がトレンチによって切られるものの、隅丸長方形プランを呈すると想定される。短辺の奥壁側がやや幅広い形態をなすものと考える。住居面積は8.6×5.4ｍで、46㎡を測る。

床面は壁周辺を除き堅緻である。ピットは主柱穴が４基、入口付近梯子穴３基が検出できた。主柱穴の掘り方は長方形プランをなし、その形状から主柱は割材の板材であったものと予想することができる。炉は地床炉で、径50㎝ほどの掘り方の中央部に、長軸32㎝、短軸26㎝程の酸化面をもつ。

同住居址は、埋土上層の長軸4.6ｍ、短軸2.4ｍの窪みに多量の土器片が炭化粒、焼土と伴に廃棄される（ＰＬ．８）。床面上に遺棄された土器と型式的に変化がないことから、住居は意図的に埋め戻されたものと考えられる。土器群中には壺・高杯・鉢・甕のすべての器類がそろい、ミニチュア土器も含まれている。鹿の歯と考えられる獣骨も高杯の付近に確認できた。祭祀の後片付けの結果と考えたい。



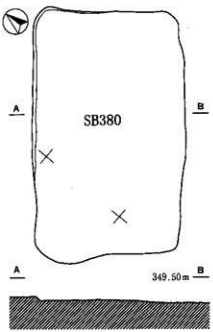
第35図　ＳＢ206遺構図，埋土上層土器集中区出土状況図

SB379（第36図）

南ブロックに位置する（IK25・L21・P5・Q1グリッド）。長方形プランをなし、コーナー部分で隅丸状を呈す。住居面積は6.5×4.6mで30m²を測る。

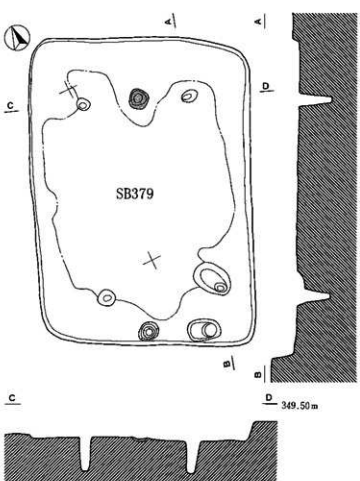
床面は堅緻で、主柱穴間が特に硬化する。ピットは主柱穴と入口部に梯子穴2基検出できた。主柱穴は床面から70cmほど掘り込まれているのに対し、入口部の梯子穴は20～30cmと浅い。炉は地床炉で、円形をなし若干窪む。炉底に貼られた粘土は酸化被熱して橙褐色に硬化する。

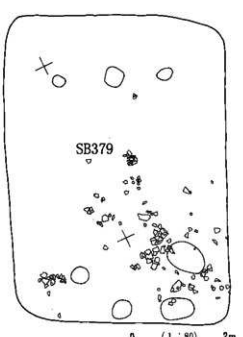
遺物の土器は、床面直上および埋土内から破片となって出土した。土器片は南東コーナー部に集中し、南東コーナー付近では浮いた状況で、北西に向かって床面直上から出土した。住居址を埋め戻す際、南東コーナー側から廃棄されたものと考える。



SB380（第36図）

南ブロックに位置する（IK23·24グリッド）。長方形プランをなし、コーナー部分は隅丸状を呈す。住居面積は5.1×3.2mで、16m²を測る。床面には硬化面・柱穴・炉址が確認できない。遺物は埋土中から破片が若干出土した程度である。



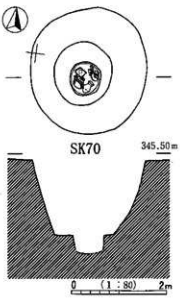


第36図　SB380遺構図・
SB379遺構図,埋土内土器出土状況図

(2)　井戸

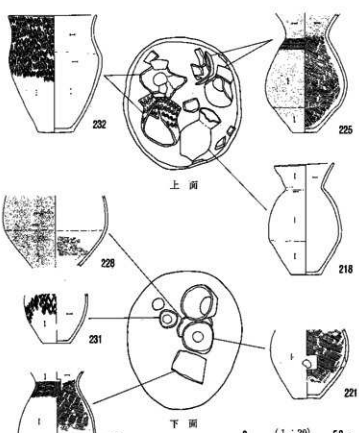
ＳＫ７０（第37図：ＰＬ．４）

南ブロックに位置する（ＩＫ12･13）。井戸ＳＫ70は、調査区境界部で検出された。ＳＫ70がかかる調査区境界線は、自然堤防面と現蛭川の氾濫原との境界段差面にあたり、その比高差は1.5ｍあまり認められた。同境界ラインは、古代以降に現蛭川が自然堤防面をカットしたもので、弥生時代においては、自然堤防からさらに東までのびていたものと想定される。よって、南ブロック集落も井戸ＳＫ70より東側にまで展開していた可能性がある。ＳＫ70は、境界段差面を精査していたところ、カット面に半裁された状況で検出された。



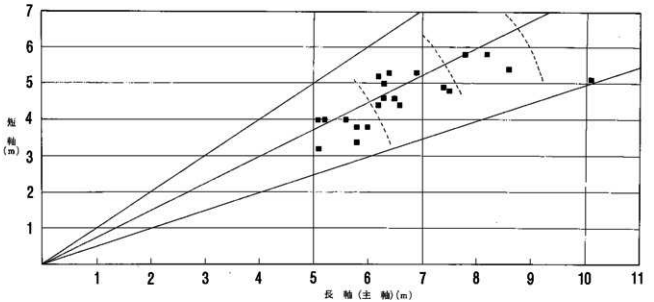
ＳＫ70の掘り方は、２段の掘り込みとなり、検出面で径2.4ｍ、底面で1.2ｍを測り、さらに径0.6ｍの掘り込みがみられる。上段掘り込みが擂鉢状を呈するのに対して、下段の壁は直に掘り込まれている。上段掘り込みの深さは1.4ｍを測り、下段掘り込みの下層については調査されていない。下段掘り込みは、基本土層第Ⅶ層黄褐色シルト層に達しており、下面ではじめじめしていた。

埋土は、上段掘り込み部においてはレンズ堆積を示し、自然埋没した状況が窺えた。遺物の出土はない。下段掘り込み面からは、壺を中心に土器がまとまって出土した。第70図で土器集中出土層の上面と下面を示した。出土土器は割られた状況で出土し、218・232を除き、完形に復元できるものはない。218は完形のまま埋置された状況であったが、225・232は胴部最大径付近で２分割され、横に埋置されたかのような状況で出土した。壺は胴部最大径より上位のみのものと、下位のみのものの２者が出土した。このような壺の残存状況はＳＢ206土器集中においても同様な傾向であった。

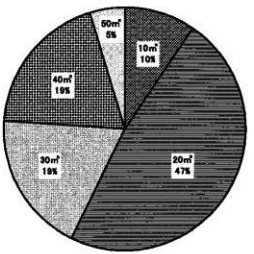


第37図　ＳＫ70遺構図．土器出土状況図（土器1/9）

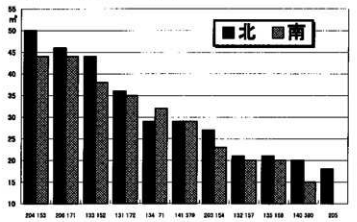
下段掘り込み面から井戸枠は検出されなかったが、掘り込みの形状から、木製の井戸枠の存在が想定できる。出土土器群は、井戸の機能停止段階に埋置されたものと想定されるが、赤彩されない壺の存在がやや目立つように考える。井戸におけるマツリ後の処理の一事例となろう。



(弥後)　竪穴住居址 面積比率



(弥後) 竪穴住居址　面積別分布表



第38図　弥生時代後期　竪穴住居址の規模

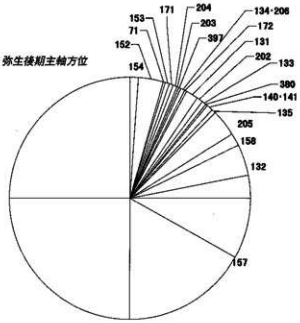
(3) 若干のまとめ

ア．建物の背景

弥生時代後期集落で確認できた建物はすべて竪穴式で、平地式の建物は存在しない。対称構造の主柱穴、炉をもつ建物は竪穴式住居として位置づけられるが、主柱穴、炉をもたない竪穴式の建物の一群が存在し、注意しなくてはならない。主柱穴、炉をもたない竪穴式の建物は、床面に硬化面が確認されず、土器の廃棄も少ない。しかも、遺棄される土器は、ＳＢ134・203にみられるように大型壺の破砕がある。そこに非日常的空間が読みとれるようにも思える。詳細な分析は今後の課題とし、ここではいわゆる竪穴式建物の一類型として捉えておくことにする。

竪穴式住居は居住空間であり、その面積は食事を共にする家族の構成および、その関係を追及する手段として有効となり得る。松原遺跡の竪穴式住居は、最小床面積のＳＢ380の15㎡から最大床面積のＳＢ204の50㎡に至るまで、その大きさは漸移的に変化し、特にまとまることはない。その面積から、大型・中型・小型に分類する。10㎡ごとに分類すると20㎡代が過半数近くを占めるが（第38図）、面積の分布（第38図）から、25㎡以下を小型、26～40㎡を中型、41㎡以上を大型とする。集落内の竪穴式住居のまとまりを便宜的に分けた北ブロックと南ブロックでは、大・中・小

の竪穴式住居が集魂状の構成をとってまとまっていることから、竪穴式住居の面積は単位集団内の竪穴住居の住み別けを想定する際の基礎データとなり得るだろう。松原集落における住居址の面積差は、大・中・小だけで理解すべきものではなく、その組み合わせで理解されるものと考えたい。ここで問題となるのは、竪穴式住居個々に住み分ける構成員の集団内での位置づけであるが、充分な予察は用意できない。しかしながら、住居址の主軸をグラフ化するといくつかのまとまりを示し（第39図）、このまとまりは、体験的に同時期の墓域における主軸のまとまりに近いように思える。竪穴式住居址内の構成員の集団内の位置は一定のルールがあったようである。竪穴住居の面積のみから集団内の構成までを語るには無理があるが、今後単位集団、集落内の構成にせまる分析が必要である。



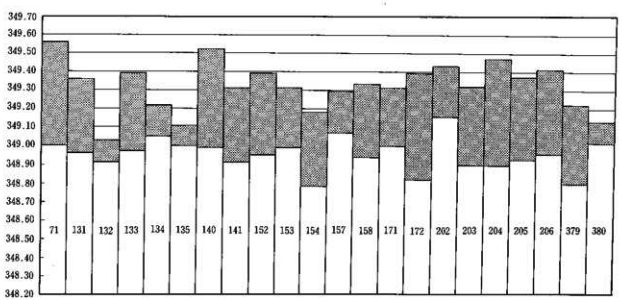
第39図　弥生時代後期　竪穴住居址主軸方位

イ．建物の構造

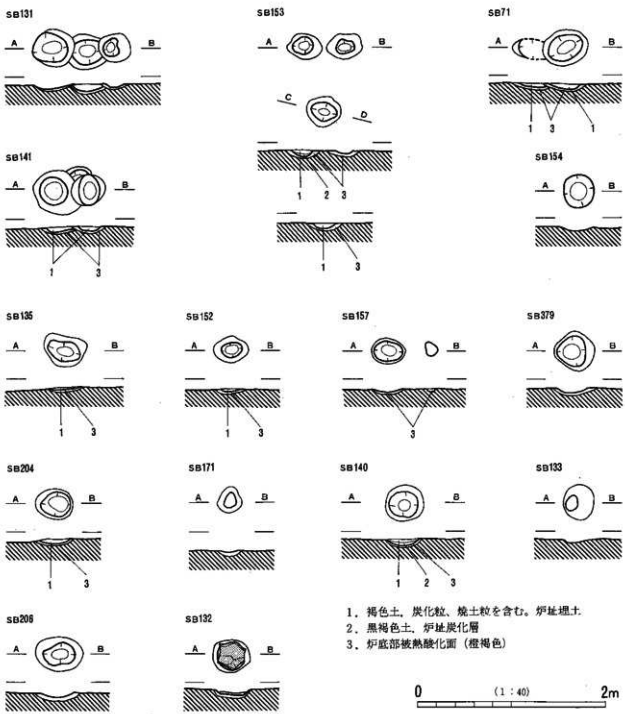
対称構造を持つ箱清水様式期の竪穴式住居の主柱は、掘り方の中に設置され、住居廃絶時に抜き取られるものと、そうでないものがあったようである。主柱のあり方は建物の構造を考える場合、重要な要素であり、主柱穴の内容の調査が充分でなければ、上屋構造を想定する必要なデータを得たとは言えないだろう。今回の調査では、土の見分けが困難な調査にあって、主柱穴の調査は充分であるとは言い難い。主柱穴については資料批判をしてデータを活用していただきたい。竪穴住居の竪穴の深さについては、第40図で床面と検出面の高さを示した。

ウ．炉

松原遺跡の弥生時代後期の炉を集成したのが第41図である。土器敷炉の一例を除き他は地床炉である。



第40図　弥生時代後期　竪穴住居址　検出面・床面レベル



第41図　弥生時代後期　地床炉集成図

地床炉は床面に10cmほど掘り込まれ橙褐色に酸化被熱している。その酸化面（3層）は3～4cmに及ぶことから、長期的に強い熱を受けた様子が窺える。被熱面の上部に薄く炭化層（2層）が乗っている。形状は楕円形を呈し被熱部の長径は20～30cm程と小さいことが特徴となる。置き炭の状態で炉が使用されていたことが想定される。

第3節　古墳時代前期集落址の調査

1　概要

古墳時代前期集落は、西地区（大々グリッドⅠ・Ⅱ地区）において竪穴住居址7軒、井戸2基（第42図）が明らかとなった。

集落域は弥生時代後期集落域と一部重なるものの、弥生集落域と比較した場合、蛭川から離れて自然堤防内部北側に移動した形となっている。弥生後期集落が集魂状を呈すのに対して古墳時代前期集落は散在状況をなし、旧河道ＳＤ101対岸にも集落が展開している。

旧河道は埋没が進み、窪地となっていたものと想定され、旧河道内に2基の井戸が掘削されている。

なお、整理作業の過程で、東地区の旧河道ＳＤ102から前期の建物群が明らかとなった。中期編で提示したい。

第42図　古墳前期集落概念図

遺構名	規模 長軸	短軸	長短比 B/A %	面積 ㎡	主軸方位	ピット 主柱穴	竈	入口施設	主柱穴間距離 梁行	桁行	長短比 B/A %	床 硬化面	標高	壁高	炉 数	形態	床直酸化面	備考
8	(3.6)	3.3	91.7	(11)	N-34-E							○	348.95	7	1	地床炉		
10																		
30	3.3	3.8	115.1	12	N-22-E								349.86	7				
182	5.8	5.7	98.3	37	N-32-E							○	348.57	54	1	地床炉	○	
322	5.5	5.8	105.5	31	N-36-E				2.8	2.8	100.0	○	348.76	—	1	地床炉	○	
393	5.1	5.6	109.8	25	N-35-E				2.6	2.8	107.7		348.42	64	1	地床炉	○	
396	(5.0)	5.5	110.0	24	N-133-E				2.6	2.4	92.3		348.31	58	1	地床炉	○	
												3			5		4	

第2表　古墳時代前期竪穴住居址一覧

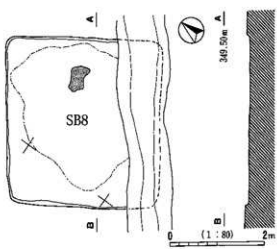
2　遺構

(1)　竪穴住居址（ＳＢ）

ＳＢ８（第43図）

ⅡＱ10･15グリッドに位置する。古代の溝に切られるために全容は明らかでないが、方形に近いプランを呈するものと考えられる。長軸3.6ｍ×短軸、推定3.3ｍで、面積は推定で11㎡を測る。

床面は中央付近が堅緻で、硬化面を有していた。ピットは確認されていない。炉は地床炉で、炉床は橙褐色に酸化する。炉の位置は奥壁側主柱間であったものと推定される。遺物は破片が若干出土した。



第43図　ＳＢ８遺構図

SB10

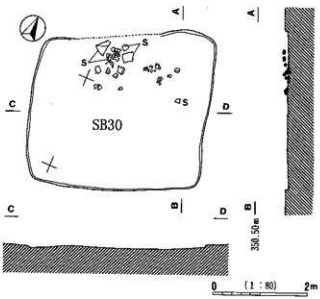
ⅡR6付近に位置した。調査時の不備で記録類が残っていない。記述者の記憶によれば、小型の方形プランであり、柱穴は検出されなかった。

SB30（第44図）

ⅠA20･25グリッドに位置する。隅丸方形プランをなし、若干ながら横長の形態を示す。3.3×3.8mで面積は12m²を測る。

床面の状況についての記録はないが、柱穴、炉址の記録がないことから、住居以外の建物を想定しても良いであろう。

遺物は床面上より破片で出土した。

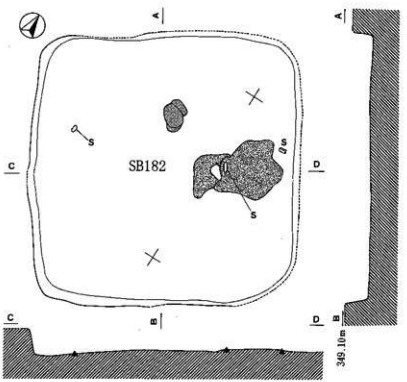


SB182（第44図：PL. 7）

ⅡV18･23･25グリッドに位置する。隅丸方形プランをなし、横長の形態となる。5.7×5.8mで、37m²を測る。竪穴は深い掘り込みをもち、検出面から床面までの掘り込みは50cmを測る。

床面は全体に堅緻で、硬化面を有していた。ピットは調査されていない。本来は所在したものだろう。炉は地床炉で、長軸50cm、幅40cmの楕円形をなす。炉床は橙褐色に酸化する。炉に向かって右側の床面上に、1.8×0.8mの範囲に炭化粒の分布が確認された。

遺物は埋土中より破片で出土した。

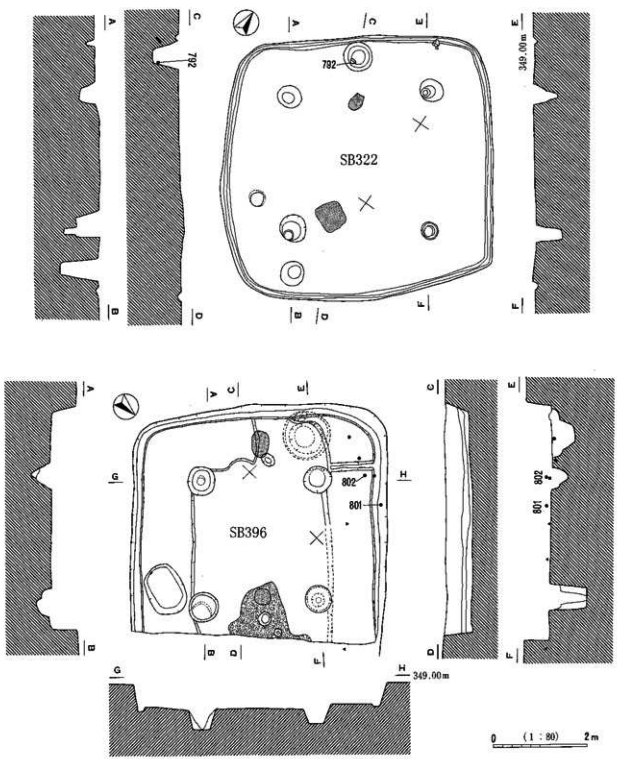


第44図　SB30・182遺構図

SB322（第45図）

ⅠB2・ⅡV22グリッドに位置する。隅丸方形プランをなし、横長の形態を示す。5.5×5.8mで、31m²を測る。掘り込みは浅い。

ピットは主柱穴4ヶ所のほか、3ヶ所検出された。北壁中央部のピットは径60cmの円形を呈し、深さは80cmを測り、主柱穴の深いものと同様であった。壁際には全面に周溝が検出された。炉址は地床炉で、北壁側主柱穴間に1ヶ所検出された。反対側主柱穴間床面にも酸化状態を示す場所がある。



第45図　ＳＢ322・396遺構図

ＳＢ３９６（第45図）

ⅡＷ８・13グリッドに位置する。１辺を切られ、全容は明らかでないが、縦長の隅丸方形プランをなすものと想定される。残存部で、(5.0) ×5.5ｍをなし、面積は24㎡を測る。

床面は主柱穴間内と外では段差があり、壁周辺幅１ｍ程にわたって10cm程度高くなっている。主柱穴は４本検出され、短辺側主柱穴間中央にもピットがみられる。貯蔵穴と考えられる穴も２ヶ所にみられる。炉は地床炉で、短辺側の両サイド主柱穴間に１ヶ所づつ、計２ヶ所検出された。建て替えによって入口が反対側に代えられたものであろうか。

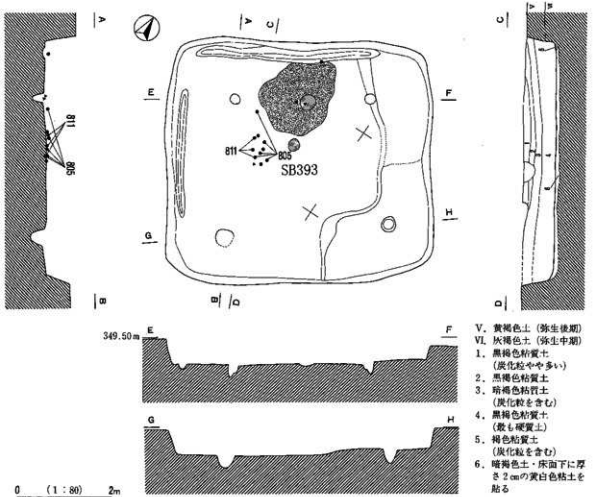
ＳＢ３９３（第46図）

ＩＣ６・７・11・12グリッドに位置する。隅丸方形プランをなし、横長の形態を呈す。5.1×5.6ｍで、25㎡を測る。検出面から床面までの掘り込みは60～70㎝を測る。

床面は凹凸部があり、炉に向かって右側長軸辺側が幅１ｍ程、高さ15㎝程、床面が高くなっており、所謂「ベッド状遺構」となる。同部分は硬化しない。炉前面および、中央部床面が堅緻であり、硬化面となる。

主柱穴は４ヶ所確認された。炉址は地床炉で、主柱穴間に１ヶ所検出した。径35㎝程の円形を呈し、強く被熱して橙褐色に酸化する。地床炉から入口部手前１ｍ程の床面も酸化被熱している。地床炉上からは河原石２個体が出土しており、縁石炉であった可能性がある。

遺物は床面左側の直上で破片がまとまって出土した。



第46図　ＳＢ393遺構図

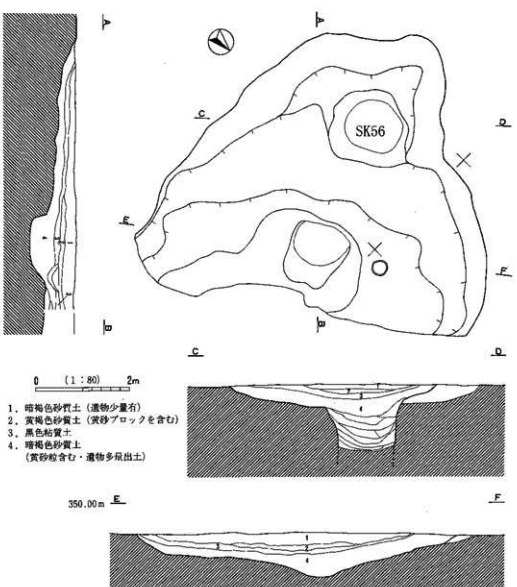
(2)　井戸

ＳＫ５６（第47図）

ⅡＶ８・９・13・14グリッドに位置する。旧河道ＳＤ101の後期遺物包含層調査時に確認された。調査当初は弥生時代後期の遺物群に古墳時代前期の遺物が混合する状況であった。土層ベルトの断面観察から、中央に窪みがあり、古墳時代前期の遺物が出土すること、周囲は旧河道ＳＤ101傾斜面に廃棄された弥生時代後期遺物包含層まで掘り下げられていることが明らかとなった。

ＳＫ56はＳＤ101が蛇行する流路攻撃面部分に位置する。ＳＤ101は、古墳時代前期にはすでに埋没し窪地となっていたが、ＳＫ56はその幅7.6ｍ程の窪地入口部に掘削されている。形状は径1.6ｍの円形をなし、直に落ち込む形状を呈する。底面まで調査が行われていないが、調査が行われた最下部までは1.4ｍ程を測る。

遺物は埋土中より、土器が破片となって出土したが、完形に復元できるものはない。小型の精製土器群の破片が目立つことから、周辺で何らかの祭祀行為が執り行われたものと想定される。



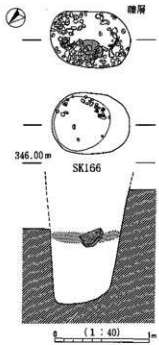
第47図　ＳＫ56遺構図

ＳＫ１６６（第48図）

ⅡＲ14グリッドに位置する。旧河道ＳＤ101弥生時代中期面の調査時に確認されたもので、遺構の最下部を調査する結果となった。遺構の形状、最下層における砂質土のラミナ状堆積から井戸址と判断した。

ＳＫ166は、旧河道ＳＤ101の窪地に掘削されている。検出面の標高は345.7ｍであったが、同遺構付近の古墳時代前期遺物包含層は標高347.5ｍ付近にあり、約３ｍほど掘り込まれた井戸の可能性がある。底部の形状は、長径0.7ｍ、短径0.5ｍの楕円形をなし、直に落ち込む形状を呈す。上部の形状は明らかではない。

底面より70㎝上部には径５～８㎝大の河原石の集石が散漫ながら確認され、同集石層中より、胴部焼成後穿孔が施された壺1/2大下半部と植物繊維で編みこまれた籠（第146図）が１つ正位の状態で検出された。同集石下層は砂質土のラミナ堆積をなす。



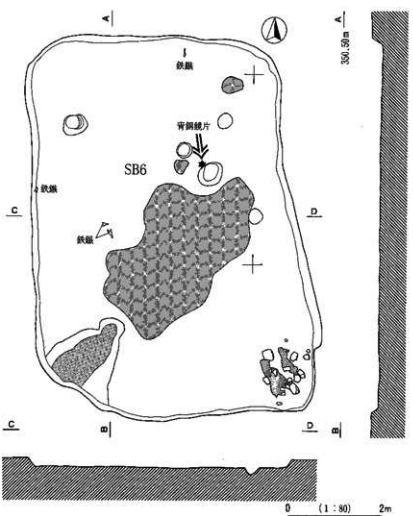
第48図　ＳＫ166遺構図

(3)　青銅鏡片出土ポイント（第19・49図）

古墳時代前期の遺物と想定される青銅鏡片が、11世紀代の大型竪穴式住居（建物）ＳＢ６の北側床面上から出土している。（第49図）。

ＳＢ６はＩＡ15･20・ＩＢ11･16グリッド（第19図）に位置する。長軸８ｍ×短軸5.5ｍの長方形大型住居で、南東コーナーに石組みのカマドをもち、床面中央部が長さ４ｍ、巾２ｍに渡って被熱酸化する。南西コーナー部にも同様な被熱酸化面が存在する。床面上からは、鉄鏃・刀子が数点出土した。

青銅鏡片は、住居址中央部のピット脇から出土した。同住居址内から平安時代以外の遺物の混入はなく、遺物もごくわずかであった。平安時代の建物の埋土中に位置していたことはほぼ間違いなく、銅鏡が遺棄された空間が当グリッド周辺であった可能性を示している。



第49図　青銅鏡片出土古代住居址

第4節　旧河道の調査

1　調査概要

①　概要

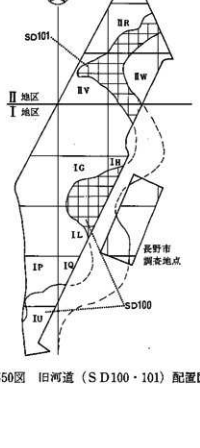
ＳＤ100，101，102は、沖積地自然堤防面に埋没した旧河道である。ＳＤ100，101は現在の蛭川に接近した大々グリッドⅠ～Ⅱ地区に、ＳＤ102は自然堤防背面と金井山山麓との境界の大々グリッドⅤ・Ⅶ地区に位置する。旧河道内からは縄文時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。考古学的所見では、その開析時期は弥生時代中期以前にあたり、河道が埋没した結果旧河道上にもムラが展開するのは古代以降であることが明らかとなった。

縄文時代後期から弥生時代中期以前の遺物は下層より出土したが、その主体は弥生時代中期末の栗林様式の土器と石器で、他時期の遺物は数パーセントにも満たない量である。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物は、ＳＤ100，101においては栗林包含層と間層をはさんで中層より出土した。当分冊では、ＳＤ100，101の弥生時代後期～古墳時代前期層について扱い、ＳＤ102およびＳＤ100，101の下層については弥生時代中期編でデータを提示して考察を行う。

②　経過

旧河道の存在が明らかとなったのは、調査区全域に広がる古代集落面の調査以降である。古代面で試掘トレンチを入れたところ、古代面より0.5～１ｍ地下に弥生集落面が確認された。同層は、集落外に１～２ｍ深く落ち込みをみせたため、調査員は当初、環濠の溝を想定したが、その規模、土層堆積状況から旧河道であると判断した。（第１章第１節　経緯と経過参照）

旧河道の調査は、工事行程との擦り合わせで設定された調査区毎に行われた。報告書では調査区の呼称をＡからＦ地区に置き換えて報告を行う（第４図）。当初、Ａ・Ｂ地区（ＩＰ・Ｑ・Ｌ・Ｇ・Ｈグリッド）で行われた調査では、集落側河道縁辺部で多量の弥生時代後期の土器群を検出したが、河道対岸は調査区域外にかかり明らかではなかった。この段階で、Ａ・Ｂ地区は同一河道と想定し、ＳＤ100と命名する。Ｃ～Ｅ地区（ⅡＲ、Ⅴ、Ｗグリッド）で検出された河道部では、Ａ・Ｂ地区と同様な遺物出土状況を示し、Ａ・Ｂ地区と同一河道と判断したが、多量の遺物処理を考慮し、ＳＤ101と命名した。同一河道名が地区によって呼称が変わってしまうと言う結果となったが、本来は同一名称にすべきであろう。ＳＤ100，101は同一河道として評価するものの、報告書では調査時点のままで報告を行う。同河道は、近接地点を調査した長野市埋蔵文化財センターの発掘調査によって、河道対岸部が検出され、その様相が明らかとなった。第４節では、河道の流跡変遷ならびに遺物出土状況を呈示する。



第50図　旧河道（ＳＤ100・101）配置図

2　旧河道の調査

ＳＤ100・101ともに弥生時代中期以前に自然堤防上を削り込ん

で形成された河川であることが分かった。削り込み開始の時期がいつ頃まで遡るかは現在まだ明確でない。断面図からは弥生時代中期末の栗林式土器を含む砂層・砂質シルト層・粘性のあるシルト層の流路に削られる形で、材・木片を多量に含む有機質の粘土層・シルト層の存在が認められた。弥生時代中期以前の河川の状態を発掘調査時に認識していなかったため資料は少ないが、推定を含み河川の変遷を簡単に述べる。

弥生時代中期以前のある時期に自然堤防が蛇行河川によって大きく解析された。解析後、流路には有機質の粘土層・シルト層が堆積するとともに、直径約30～40cm（最大約60cm）、長さ約２～５m（最大約８～９m）もの材やそれより小さな直径約５～15cm、長さ約50cm～２mの木片が含まれていた。ＳＤ100の珪藻化石分析からは流水不定性種を伴う流水性種（中～下流性河川指標珪藻群集であり好清水性種）の多産が明らかになっている。清浄な水質で流れていたという結果である。弥生時代中期末の時期には流入物質の量や流速も増したようで、粗粒の堆積物に変化する。砂層・砂質シルト層の互層と遺物・木片（下位のものよりどちらかと言うと小さいもののほうが多い。）が混ざって堆積する。弥生時代中期以前の時より流路の屈曲がやや強くなる。その後自然堤防上まで覆うような黄褐色～灰黄褐色のシルト質砂層によって河川は埋まる。弥生時代後期も一時的に流れがあり削ったりするが基本的には既に帯状の窪地であり斜面に土器が廃棄された。その後古代、10Ｃ頃までに窪地は完全に埋まり平坦化する。そして住居なども建てられるようになる。

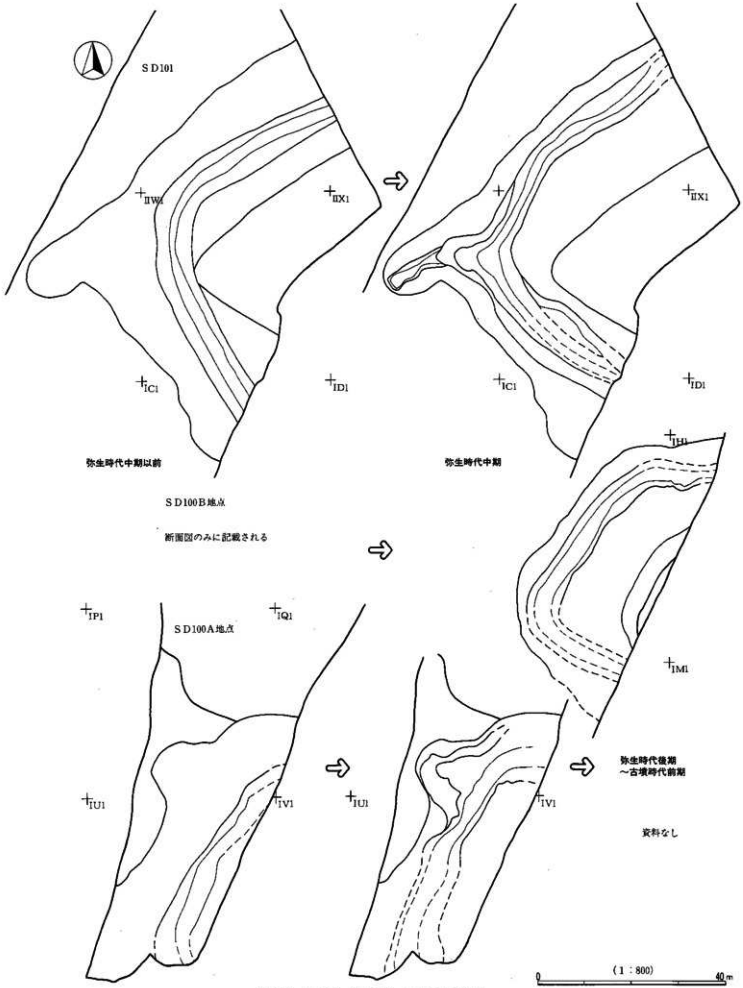
次にそれぞれの河川について記載をする。堆積物の記載などは人により見方が異なるため加筆・修正をおこない表記の仕方を統一するよう努めた。

(1)　ＳＤ１００Ａ・Ｂ地点

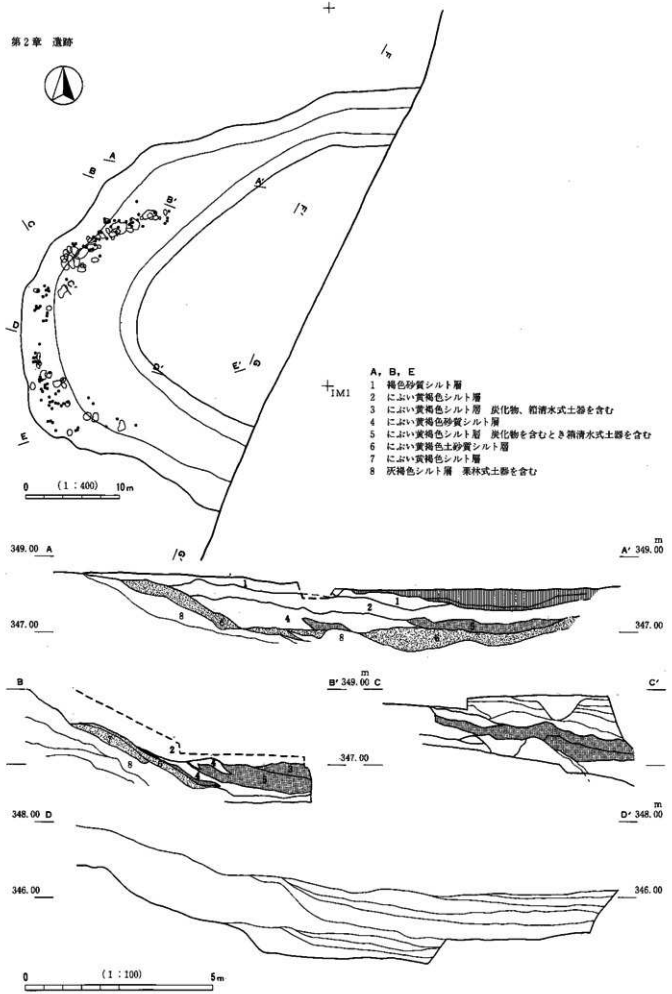
平面形について見ると、主に西側の調査地区内側では窪地の縁がはっきりしているが東側は不明瞭である。隣接する長野市松原遺跡農協地点での成果を合わせて考えると弥生時代後期の検出面において窪地の幅は約35～40m、深さは約1.5～２mと推定される。当時の生活面は検出面よりも上位であることを考慮すると実際はそれ以上であったと思われる（第51図）。

Ｂ地点調査区東側の断面Ｆ（第52図）では弥生時代後期の遺物包含層は５暗褐色シルト層で粘性や締まりもやや強くなっている。層厚は約10～60cmで、炭化物・焼土を含んでいる。直上の古墳時代前期の遺物包含層も層厚約10～30cmで同質の堆積物であるが、比較すると下位よりもやや暗色である。断面Ｇ（第52図）では弥生時代後期の遺物包含層は10 褐色～暗黄褐色シルト層である。下部では細粒砂混じりになる。層厚約50cmである。直上の古墳時代前期の遺物包含層は５・６ 褐色～黒褐色シルト層で色調の差が断面Ｆよりも明瞭である。層厚は約10～40cmである。それぞれ下位の堆積物を覆う形で堆積し、その上面は弥生時代後期、古墳時代前期ともまだ凹形で窪地の状態であった。

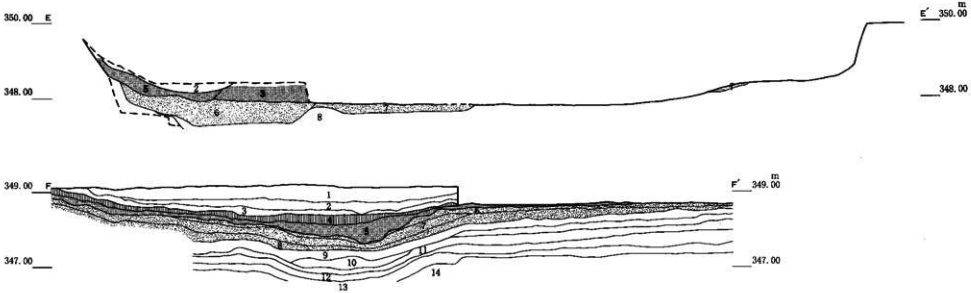
土器集中が見られた河川西側の断面Ａ，Ｂ（第52図）では３・５ にぶい黄褐色シルト層で粘性がやや強く炭化物を伴う部分に箱清水式土器を含むことが特徴である。土器を伴わない部分は２・４ にぶい黄褐色砂質シルト層となる。層厚は全体で約120cmであり、その中に土器集中部分がレンズ状に厚さ約30cmで含まれる。断面Ａ，Ｂは包含層の一部分の記録であるが断面Ｆ，Ｇとやや堆積の状況の違いが見られる。断面Ｆ，Ｇでは弥生時代後期の遺物包含層は下位の黄褐色シルト質砂層を多少削っているもののほぼトレースする形で堆積している。ところが断面Ａ，Ｂではこの黄褐色シルト質砂層が欠如してさらに下位である弥生時代中期の遺物包含層の上位に直接弥生時代後期の遺物包含層が堆積している部分が見られる。松原西地区全体には黄褐色シルト質砂層が分布し、対岸の東側には連続して堆積していることから、河川西側だけ堆積しなかったとは考えられない。人為か自然かは不明であるが削られていると思われる。黄褐色シ



第51図　旧河道（SD100・101）流路変遷

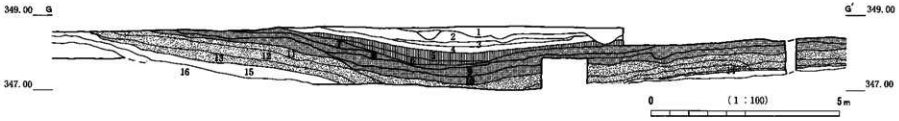


第52図 SD100B地点（1）



F

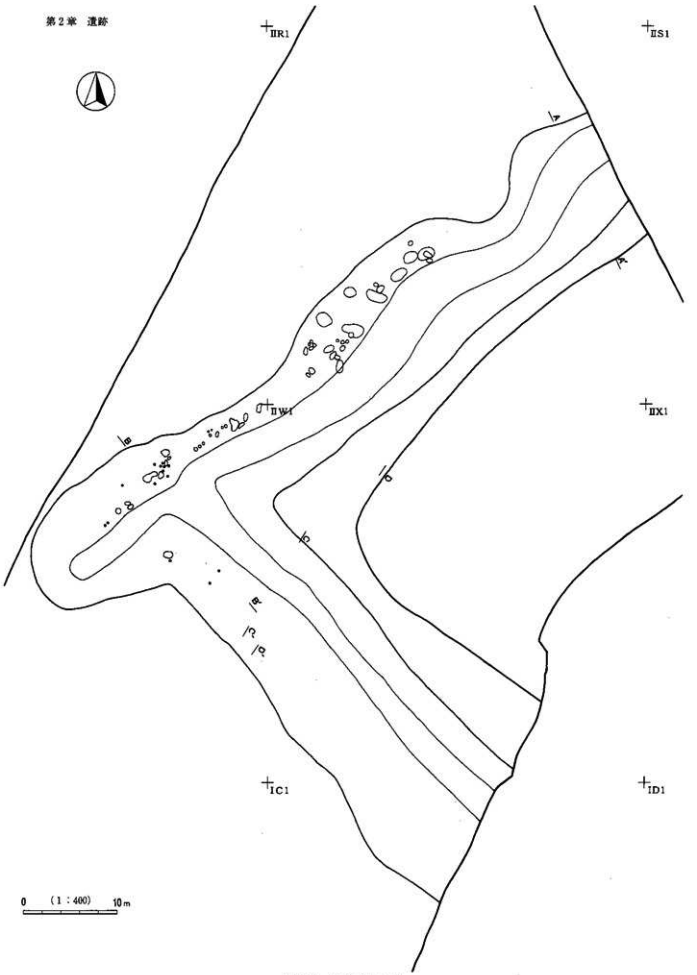
1 褐色土砂質シルト層　炭化物をわずかに含む
2 暗褐色シルト層　炭化物をわずかに含む
3 褐色シルト層　炭化物をわずかに含む
4 暗褐色シルト層　炭化物をわずかに含む
5 暗褐色シルト層　炭化物、焼土を含む
6 黄褐色砂質シルト層　炭化物、焼土、酸化鉄をわずかに含む
7 黄褐色砂質シルト層　炭化物、焼土をわずかに、酸化鉄を多量に含む
8 黄褐色砂質シルト層
9 黄褐色シルト層　酸化鉄を多量に含む
10 赤褐色シルト層　9の酸化が著しい赤褐色を呈する
11 灰褐色年度質シルト層　酸化鉄を多量に含む
12 黄褐色シルト層　酸化鉄、焼土、炭化物を含む
13 灰褐色シルト層
14 灰褐色粘土質シルト層



G

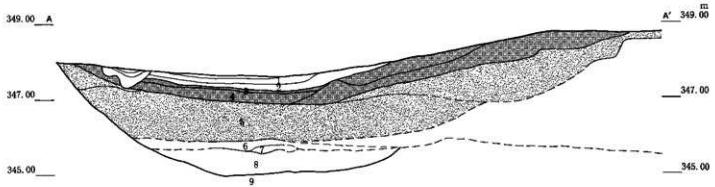
1 暗黄褐色砂質シルト層
2 暗褐色シルト層
3 褐色シルト層（黄色味がかる）
4 黒褐色シルト層
5 褐色シルト層
6 黒褐色シルト層
7 暗黄褐色シルト層
8 暗黄褐色シルト層
9 褐色シルト層
10 暗黄褐色シルト層　細粒砂多い　酸化鉄、遺物を含む
11 黄褐色砂質シルト層　酸化鉄含む
12 黄褐色砂質シルト層　11よりしまりやや弱い
13 暗黄褐色砂質シルト層　細粒砂多い　酸化鉄を含む
14 明黄褐色シルト層　酸化鉄を含む　白色味がかり明るい
15 暗黄褐色シルト層　酸化鉄を含む　13より色調暗い
16 暗黄褐色シルト層　15より色調暗い

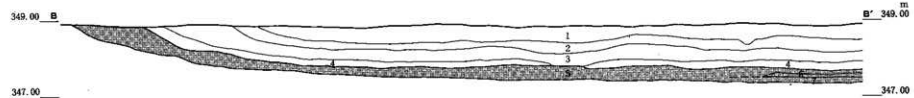
第52図　ＳＤ100Ｂ地点（２）



第53図 SD101 (1)

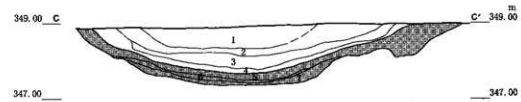
A
1 黒褐色砂質シルト層
2 褐色砂質シルト層
3 黒褐色砂質シルト層
4 にぶい黄褐色砂質シルト層　鉄斑紋・褐鉄鉱汚染あり
5 褐灰色～灰黄褐色細粒砂まじりシルト層　鉄斑紋・褐鉄鉱汚染あり
6 褐灰色砂層と砂細粒砂まじりシルトの互層　材含む
7 褐灰シルト層　材含む
8 褐灰色砂層と細粒砂まじりシルトの互層　材含む
9 褐灰色細粒砂まじりシルト層　材含む

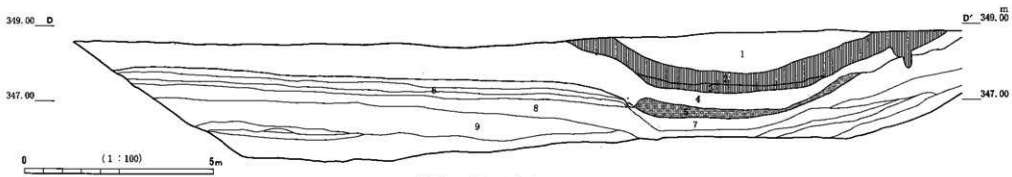




D
1 砂質シルト層
2 黒褐色砂質シルト層
3 黒褐色砂質シルト層　赤褐色ざみ　小礫多くなる
4 灰褐色砂質シルト層
5 灰黄色砂質シルト層　炭散る
6 灰黄褐色シルト層
7 灰黄褐色シルト層
8 灰黒色シルト層　黒っぽい
9 灰黒色シルト層

B，C
1 暗褐色砂質シルト層　やや黒っぽい
2 暗褐色砂質シルト層
3 黒褐色砂質シルト層　上部は黒色化
4 暗褐色砂質シルト層
5 暗褐色砂質シルト層
6 暗褐色砂質シルト層
7 暗褐色砂質シルト層　やや茶色味がかる





第53図　ＳＤ101（２）

ルト質砂層が人為的に欠如し土器集中（廃棄）との関連があるとすればおもしろい。

断面Dでは弥生時代後期の遺物包含層を掘り終えた後の凹地の形が図の上面で表現される。断面Eもほぼ同様である。

A地点については弥生時代後期・古墳時代前期に関する記録が無いため記載できない。しかし写真と担当者の記憶によればSD100B地点・SD101と同じような状態であったと予想される。なお東壁で珪藻化石分析が行われているが必ずしも河道内の堆積物を分析していないので、河川の環境変化を連続して捉える資料とならなかった。

(2) SD101

平面形は「く」の字状に屈曲していて、検出面において幅20～30m、深さ1.5mの大きさである。窪地の縁は両側とも明瞭である（第53図1）。

調査区北東の県道直下断面A（第53図2）は弥生時代後期、古墳時代前期の遺物包含層の堆積状況を良く表している。弥生後期の遺物包含層は4 にぶい黄褐色砂質シルト層で鉄・褐鉄鉱の斑紋が見られる。層厚約30～50cmである。その上位には3 黒褐色砂質シルト層が層厚約20cm以上堆積している。古墳時代前期の遺物包含層に相当すると思われるが、記載には箱清水式土器と4世紀の土器が一緒に出土しているとかかれている。断面B，Cも同様で5・6・7 暗褐色砂質シルト層中から弥生時代後期、古墳時代前期の土器が多数出土している。層厚は約20～50cmである。時期と層位とが一致して分層出来ないが、包含層の上部がやや黒く、下部はやや茶色味がかる違いが認められる。断面Dでは弥生時代後期の遺物包含層は5 灰黄褐色砂質シルト層で炭化物を含む。層厚約50～90cmである。上位に部分的に厚さ約20cmの4 灰褐色砂質シルト層を挟んで2・3 黒褐色砂質シルト層の古墳時代前期の遺物包含層が堆積する。層厚約30～60cmである。この灰褐色砂質シルト層はこの断面でしか確認されないため弥生時代後期の堆積物か古墳時代前期の堆積物かどちらにも属さないのかは不明である。どのセクションでも下位の堆積物を覆う形で堆積した上面は凹形に窪んでいる。

(3) SD102

SD102は調査地区北東の山沿いに位置し、現在でも帯状にやや低くなっていて用水が流れている。調査段階では弥生時代後期から古墳時代前期の流路、窪地に相当する遺構は確認されていない。所見では古代、12世紀頃まで流路が存在し、埋没・平坦化したのは中世、13世紀頃とされている。また第1章第2節調査地の層序で述べたように、東地区では弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層が欠如しているため面的な調査はされていなく、当時の河川の状態は不明である。しかしSD100・SD101より少量ではあるが若干箱清水式土器が出土していること、断面図では弥生時代中期の流路と古代の流路との間に時期を特定していない流路が認められることから、弥生時代後期から古墳時代前期に相当する流路・堆積物が存在していると考えられる。

本分冊ではSD102について詳しく触れることができないが、弥生時代中期遺構編において遺物の出土状況をふまえて、流路の変遷・堆積・埋没の状況を検討したい。

3　遺物出土状況

旧河道SD100，101，102の、弥生時代後期・古墳時代前期層から出土した遺物には、土器・木製品・紡錘車・ガラス小玉・鉄器がある。その主体を占める弥生時代後期の土器群は、自然堤防面を開析した河道の傾斜面から出土しており、河道底面からの出土は少ない。いずれの地点においても、弥生時代後期の

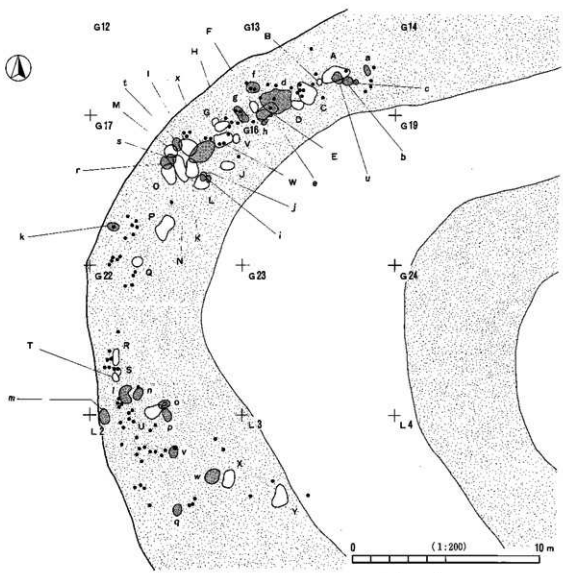
土器群は、集落が展開する傾斜面側に存在することが、旧河道ＳＤ100対岸を調査した長野市埋蔵文化財センターの調査で想定することが可能となった。一方、古墳時代前期の土器群は、河道傾斜面部と底面に広く分布するが、底面を中心に出土する傾向にある。

遺物の出土状況、取り上げ方は各地点毎に異なっており、地点毎に遺物出土状況を提示する。ＳＤ102の遺物出土状況については、中期遺物編で詳しく触れることにし、本節ではその概要に留める。

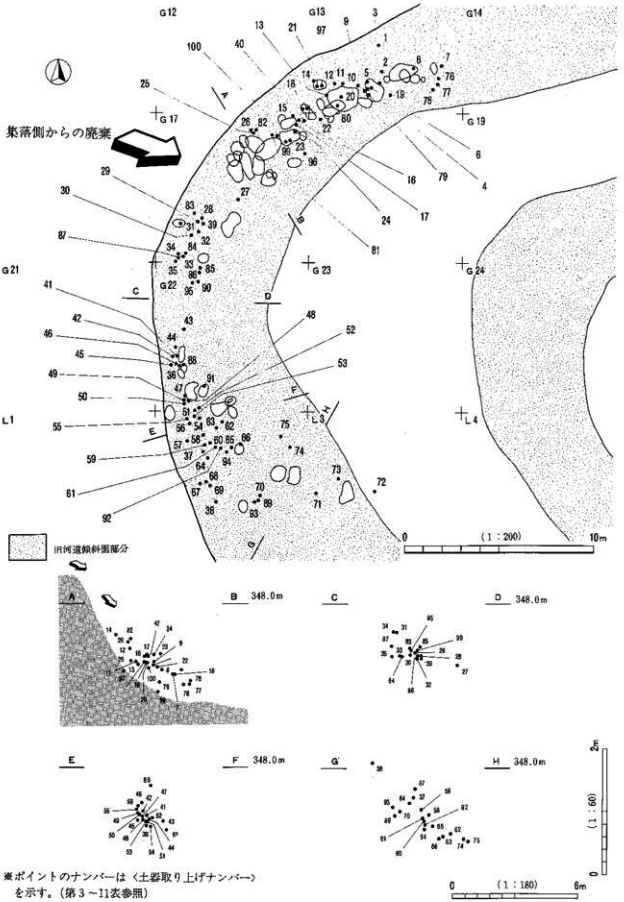
(1)　ＳＤ100　Ａ・Ｂ地点（第54図：ＰＬ10･11）

Ａ地点は集落南側のＩＰ，Ｑ，Ｕ，Ｖグリッドに位置し、現蛭川およびその氾濫原に接している（第4図）。古墳時代前期に該当する遺物の出土はなく、弥生時代後期の遺物が集落側傾斜面より多量に出土した。土器は各器種に及び、完形に近い状態で出土したものもあるが、多くは破片の状態で集落側から廃棄されたかのような状況で出土した。Ａ地点の土器出土状況の記録はない。

Ｂ地点は集落東側のＩＧ，Ｈ，Ｌグリッドに位置する。古墳時代前期の土器は、集落南東部側にあたるＩＨ11グリッド付近で、旧河道底面から若干出土したが、他の地点と比較するとその量は少ない。弥生時代後期の遺物はＡ地点と同様に集落側斜面部より大量に出土した（第54図その１・その２　ＰＬ11）。



第54図　ＳＤ100．Ｂ地点土器出土状況図〈土器群〉（その１）



※ポイントのナンバーは〈土器取り上げナンバー〉を示す。（第3～11表参照）

第54図　ＳＤ100.Ｂ地点土器出土状況図〈ナンバー土器〉（その2）

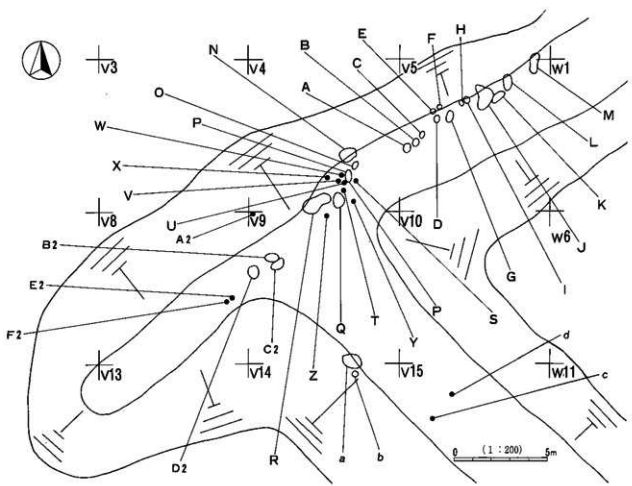
弥生時代後期の遺物は、いくつかのまとまりに分れるが、集落における北側ブロックから南東傾斜面にあたるG13・17グリッド付近では遺物が集中する傾向にある。土器は集落側から廃棄された状況で出土したが、完形の壺や高杯が遺棄された状況で出土した例も少ないながらある（ＰＬ11）。遺物の取り上げは個体毎に取り上げられたものと、出土状況のまとまりで取り上げられたものとがあり、前者を算用数字、後者を大文字と小文字のアルファベットで取り上げ、土器取り上げナンバーを付けた。土器の取り上げナンバーと土器図版ナンバーの対照は、第３～10表「旧河道土器出土状況一覧」で照合が可能である。

(2)　ＳＤ101　Ｃ・Ｄ・Ｅ地点（第55～57図：ＰＬ13）

①古墳時代前期

ＳＤ101はⅡＲ，Ⅴ，Ｗグリッドに位置し、Ｃ～Ｅ地点に分れる（第４図）。古墳時代前期の集落は、３地点を取り囲むように展開しており、弥生時代後期集落では認められなかった旧河道対岸にも住居が展開している。旧河道の埋没が進んだ状況が窺えよう。写真図版13の河道は埋没が進んだ古墳時代前期面の完掘状況である。

古墳時代前期の遺物は、住居群に取り囲まれるＣ地点（⑥区東地区）・Ｄ地点（①－２地区）に集中する（ⅡⅤ・ⅡＷグリッド付近　第４図）。遺物の取り上げは、Ｃ地点では地区内一括、Ｄ地点では８ｍを単位とする中グリッド毎に行われた。古墳時代前期の土器は旧河道底面付近からの出土が多く、弥生時代後期の土器との混在は少なかったが、層位的には接近しており両者の混在化も認められた。



第55図　ＳＤ101.Ｄ地点土器出土状況図

②弥生時代後期

旧河道調査地点と集落の位置関係は、C・D地点（第55図）が集落北東部側に、E地点（第56、57図）が調査区内に確認できる集落域とは接していない空間となる。弥生時代後期の遺物は、A・B地点での集中の仕方とは異なり、集落と接するC・D地点の集落側傾斜面には少なく、集落と接していないD・E地点の傾斜面（ⅡVグリッド付近　第55図，PL13）に集中した。弥生時代後期と古墳時代前期の遺物集中は河道の傾斜部と底部という位置関係にあり、異なった地点に存在する。

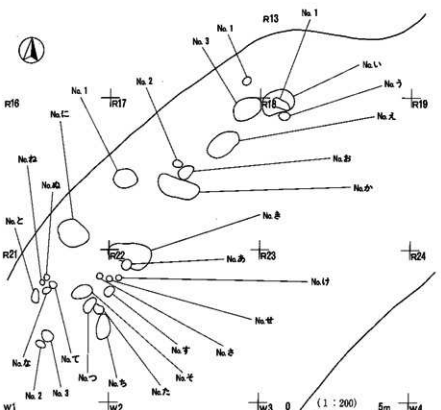
D地点のV4～5・8～9グリッド河道斜面部（第55図）からは弥生時代後期の土器がまとまって出土した。遺物の取り上げは遺物群のまとまりにアルファベット名を与えて処理されている。土器は北西側から廃棄された状況で、いくつかのまとまりで出土した（PL13）。B地点の器種に比べ、甕の比率が低く、壺の割合が高い。赤彩土器の高杯、鉢，赤彩深鉢の占める割合も高く、単に生活具を廃棄した地点でないことを示唆する。完形に復元できるものが少ないことも特徴となる。

E地点のR16～18・21～22グリッド（第56図）では、D地点からのつながりで河道縁辺部に箱清水式土器がまとまって出土した。担当調査研究員は遺物の取り上げを「仮名」で処理したが、原図等の照合に混乱を招かないよう、担当調査研究員がふったままの状況で提示する。当地点において特記すべきことはⅡR17・21・22グリッド付近に、器高50cm以上の大型壺を中心に、壺類の集中傾向が認められることである（第57図）。この大型壺が集中する地点は、旧河道の傾斜部でも上部の傾斜変換点付近に位置する。

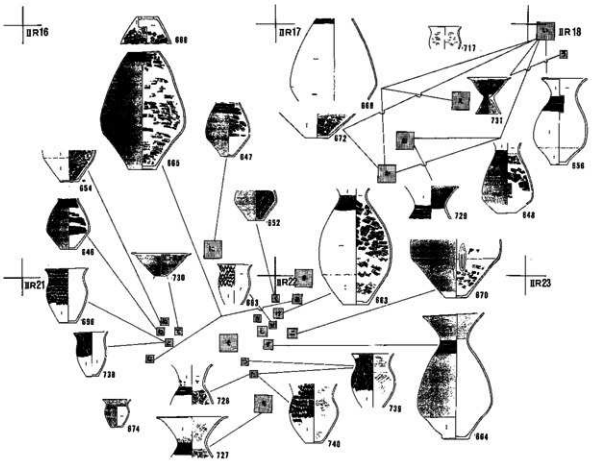
大型壺663・665は埋置された状況でⅡR22グリッドから、大型壺664はまとまった状況でⅡR21グリッドから出土した（第57図）。いずれも接近した位置にあり、大型壺集中地点としてとらえる。

大型壺663は正位の状態で「け」の位置より、大型壺665は「あ」の位置より出土した。特に665は調整された口縁部を下方にして斜位に埋置されていた（PL14）。いずれも欠損部を除き完形の状態に復元された。土器内部から出土したものはなく、掘り込みのプランも明らかとならなかった。

E地点大型壺集中地点のように、集落縁辺部から大型壺がまとまって出土する調査例は、注意が必要である。長野市石川条里遺跡では、水田域と接する微高地境界に弥生後期大型壺の埋置が集中する地点があり、土器の内部からガラス小玉が出土したものもあるが、骨片などは確認されていない。松原，石川条里に認められる大型壺の埋置を、大型壺埋納行為と評価する。また、群馬県有馬遺跡の土器棺に頸部打ち欠き後に調整をする土器棺が認められるが、松原遺跡出土大型壺665にも認



第56図　SD101.E地点土器出土状況図



第57図　ＳＤ101.Ｅ地点大型壺集中区出土状況図

められることと、蓋と想定される底部穿孔の甕666が存在することから、大型壺集中地点を土器棺埋納と位置づけ、墓域エリアとして評価したい。ＳＤ101Ｄ・Ｅ地点傾斜面に赤彩器種が多いのは、墓域で使用された共飲共食具が廃棄されたことが想定できる。ＳＤ101出土の土器群のあり方からその北西側（ⅡＫ・Ｌ・Ｐ・Ｑグリッド付近）の調査地区外域に墓域の所在が充分想定できる。

土器棺に転用されたと想定した土器について理解するために、子どもと大型壺665・302・303をいっしょに撮影した写真を写真図版ＰＬ50に提示した。写真の子供たちの年齢は0歳・５歳・９歳である。

(3)　ＳＤ１０２

ＳＤ102からは弥生時代後期・古墳時代前期の土器および、弥生時代ないしは古墳時代前期に位置づけることができる木製品が出土した。木製品の取り上げについては検討の余地があり、その出土状況については弥生中期編で取り上げ、当分冊では当該期に想定される木製品のみを呈示する。出土土器についても弥生中期編で補遺として提示する予定である。

(4)　旧河道土器出土状況一覧

ＳＤ100、101出土土器の出土状況を第３～11表に「旧河道土器出土状況一覧」としてまとめて提示する。第54～57図の数字、アルファベット等のナンバーは表の「取り上げNo. 群」である。「土器図版番号」と照合すると土器の出土位置が確定する。

遺構名	図版			土器登録No.	器種	法量(cm)			出土地区			取り上げ	層位
	番号	図	PL			口径	器高	区域	グリッド	地域	No・器	
SD100	248	80	20	B27	壺			B	I G13・I G17		D,No23	
SD100	249	80	20	B31	壺			B	I G17		No26	
SD100	250	80	21	B23	壺			B	I G13		d	
SD100	251	80	21	B29	壺			B	I G17		O,N	
SD100	252	80	21	B32	壺			B	I G13		No19	
SD100	253	80		B88	鉢			A				
SD100	254	80	21	B28	壺	18.5	30.3	B	I G17			
SD100	255	80	21	B67	壺	15.1	22.1	B	I G			
SD100	256	80		B80	鉢			B	I G17・I G22			
SD100	257	81		B46	壺			B	I G17		No23	
SD100	258	81		B43	壺			B	I G17		No29	
SD100	259	81		B45	壺			A				B
SD100	260	81	21	B26	壺			A				
SD100	261	81		B79	壺			B	I G10b・I H8a			IV-V
SD100	262	81	21	B30	壺			B	I G17・I G18			
SD100	263	81	22	B22	壺			B	I G13		b,u,No4,No76	
SD100	264	81	22	B87	壺	22.5	42.4	B	I G			2
SD100	265	82	22	B25	鉢	21.9	31.8	B	I G17		G	
SD100	266	82	22	B24	壺	20.8	35.2	B	I G17		k,No83	
SD100	267	82		B63	壺			B	I G17			
SD100	268	82		B64	壺			B	I G17			
SD100	269	82		B61	壺			B	I G17		I	
SD100	270	82		B62	壺			B				
SD100	271	82		B66	壺			B	I G13・I G17			
SD100	272	82		B58	壺			B	I G17			
SD100	273	82		B55	壺			B	I G13		u	
SD100	274	82		B77	壺	24.1		B	I J2			
SD100	275	82		B50	壺			B	I G17		No16	
SD100	276	83		B75	壺			A				B
SD100	277	83		B56	壺			A				B
SD100	278	83		B53	壺			B	I G13		No6,No7	
SD100	279	83		B52	壺			B	I G17		No99	
SD100	280	83		B59	壺			B	I G9			
SD100	281	83		B51	壺			B	I G13			
SD100	282	83		B49	壺			A				B
SD100	283	83		B54	壺			B	I G13		No13	
SD100	284	83		B78	壺	23.2		A				
SD100	285	83		B81	壺	21.5		B	I G13		No5	
SD100	286	83		B60	壺	17.0		A				B
SD100	287	84		B48	壺			A				
SD100	288	84		B85	鉢			B	I G14・I G22・I G9			
SD100	289	84		B65	壺			B	I G14・I G22・I G9			
SD100	290	84		B65	壺			B	I G14・I G22・I G9			
SD100	291	84		B65	壺			B	I G14・I G22・I G9			
SD100	292	84		B65	壺			B	I G14・I G22・I G9			
SD100	293	84		B65	壺			B	I G14・I G22・I G9			
SD100	294	84		B44	壺			B	I G22			
SD100	295	84		B74	壺			B	I G			5
SD100	296	84		B42	壺			A				B
SD100	297	84		B47	壺			B	I G13			
SD100	298	84	22	B89	鉢	12.4	18.0	A				
SD100	299	84	22	B91	壺	14.4	25.7	B	I G9			
SD100	300	85	23	B86	鉢			A				
SD100	301	85	23	B70	壺			A				B
SD100	302	85	23	B69	壺			A				B
SD100	303	85	23	B68	壺			A				
SD100	304	86		B57	壺			A				B
SD100	305	86	24	B21	壺			B	I G9			
SD100	306	86	24	B72	壺			A				B
SD100	307	86	24	B70	壺			B	I J2		X	
SD100	308	86	24	B71	壺			B	I G13		No1,No2	
SD100	309	86		B37	壺			B	I G17・I G			5
SD100	310	86		B34	壺			B	I G13		A,No8	9
SD100	311	87		B33	壺			B	I G17		L	
SD100	312	87		B38	鉢			A				B
SD100	313	87		B35	壺			B	I G			3
SD100	314	87		B40	壺			B	I G13		No9	
SD100	315	87		B36	壺			B	I G22			
SD100	316	87		B39	壺			B	I G22・I J2			
SD100	317	87		B5	壺	15.1	16.2	B	I G17・I G18			
SD100	318	87	24	B90	鉢	14.4	13.4	A				
SD100	319	87		B2	壺	17.0	16.4	A				B
SD100	320	87		B9	壺	16.0		B	I G13・I G18		d,E	
SD100	321	87		B1	鉢	16.5						
SD100	322	87		B7	壺	15.2		B	I G17		M,N	
SD100	323	87		B10	壺	16.8		B	I G17			
SD100	324	87		B13	鉢	15.0		A				B
SD100	325	87		B12	壺	13.4		A				B
SD100	326	88		B11	壺	16.6		A				B
SD100	327	88		B100	鉢	17.4		A				B
SD100	328	88		B6	壺			B	I G17			7
SD100	329	88		B99	壺	19.0		A				B
SD100	330	88		B111	鉢	15.6		B				
SD100	331	88		B103	壺	15.2		B	I G19			

第３表　旧河道土器出土状況一覧　（１）

遺構名	図版			土器登録No.	器種	法量(cm)			出土地区			取り上げ	層位
	番号	図	PL			口径	器高	区域	グリッド	地域		No・群	
SD100	332	88		B101	壺	12.0		B	I G22				
SD100	333	88		B104	壺	11.6		B	I G13			C	
SD100	334	88		B102	壺	12.0		B	I G17				
SD100	335	88		B105	壺	13.0		A					
SD100	336	88		B76	壺	30.2		B	I L2			No.37,No.64	
SD100	337	88		B 3	壺			B					
SD100	338	88		B 4	壺			B	I L2			X	
SD100	339	88		B 8	壺			B	I G17			N	
SD100	340	88		B98	壺			B					
SD100	341	88		B108	壺			A					B
SD100	342	88		B14	壺			B	I G13			No3	
SD100	343	88		B110	壺			B	I G17			H	
SD100	344	88		B109	壺			B	I G22				
SD100	345	88		B106	壺			B	I G17			W	
SD100	346	88		B107	壺			B	I G13・I G18			E	
SD100	347	88		B92	壺			B	I G22			No88	
SD100	348	88		B93	壺			B	I G21・I G				5
SD100	349	88		B94	壺			B	I G22				
SD100	350	89		B95	壺			B	I L2			No.54	
SD100	351	89		B97	壺			B	I G17				
SD100	352	89		I 1	鉢			B	I G22			No52	
SD100	353	89		B83	壺	15.8		B	I G22			No52	
SD100	354	89		B84	壺	12.8		B	I G・I L5b				9
SD100	355	89		B86	壺	10.8		B	I G22				
SD100	356	89		B85	壺	13.6		B	I G22				
SD100	357	89		H21	鉢	10.2							
SD100	358	89		I114	鉢	7.8							
SD100	359	89		H15	鉢	9.0	9.2	B	I L2				
SD100	360	89		H25	鉢	7.8	6.6	A					B
SD100	361	89	24	H24	鉢	8.0	7.2	A					
SD100	362	89	24	H23	鉢	9.6	9.0	A					
SD100	363	89	24	H42	鉢	9.0	6.4	A					
SD100	364	89	24	I141	鉢	10.0	7.8	B	I G17			i	
SD100	365	89	24	H43	鉢	7.2	5.8	B	I G13			No11	
SD100	366	89		T 3	高杯	32.0		B	I G13			No.6	
SD100	367	89		T13	高杯	30.6		A					B
SD100	368	89		T10	高杯	26.0		A					B
SD100	369	89		T 4	高杯	29.2		B	I G				5
SD100	370	89		T 6	高杯	29.0		B	I G14				
SD100	371	89		T 5	高杯	25.2		B	I G17			O,N,K	
SD100	372	90	24	T71	高杯	24.2		B	I G17			No.17	
SD100	373	90		T15	高杯	22.4		B	I G17			W	
SD100	374	90		T 7	高杯	28.0		B	I G13			No.2	
SD100	375	90		T16	高杯	26.0		B	I G17				
SD100	376	90		T14	高杯	28.8		B	I G13			A,C	
SD100	377	90	25	T70	高杯	27.0	24.4	A					
SD100	378	90	24	T 8	高杯	18.4	14.5	B	I G13			No14	
SD100	379	90	25	T72	高杯	12.6	12.4	B					
SD100	380	90	25	T 9	高杯	13.4	11.5	A					B
SD100	381	90		T13	高杯	30.0		B	I G13			d	
SD100	382	90		T 2	高杯	28.0		A					B
SD100	383	90		T 1	高杯	27.4		A					B
SD100	384	91		T11	高杯	32.6		B	I G17				
SD100	385	91		T12	高杯	26.4		B	I G17・I G22			W,No52	
SD100	386	91		T17	高杯	26.0		B	I G13			d	
SD100	387	91		T49	高杯			A					B
SD100	388	91		T41	高杯			B	I L2			w	
SD100	389	91		T50	高杯			B	I G13				
SD100	390	91		T49	高杯			A					B
SD100	391	91		T40	高杯			B	I G17			No96	
SD100	392	91		T36	高杯			B	I G17			No29,No34	
SD100	393	91		T65	高杯			B	I L2			No53	
SD100	394	91		T25	高杯			B					
SD100	395	91		T34	高杯			A					B
SD100	396	91		T26	高杯			B					
SD100	397	91		T33	高杯			B	I G13, I G17			No.12,No.15	
SD100	398	91		T23	高杯			B	I G				
SD100	399	91		T27	高杯			B	I L3			No71	
SD100	400	91		T30	高杯			B	I G17			t	
SD100	401	91		T21	高杯			B	I G8				
SD100	402	91		T20	高杯			B	I G22			No36	
SD100	403	91		T22	高杯			B	I G17			s	
SD100	404	92		T19	高杯			B	I G17			O	
SD100	405	92		T24	高杯			A					B
SD100	406	92		T28	高杯			B	I G17			N	
SD100	407	92		T37	高杯			A					B
SD100	408	92		T38	高杯			A					B
SD100	409	92		T29	高杯			A					B
SD100	410	92		T51	高杯			B	I G9				
SD100	411	92		T52	高杯			A					B
SD100	412	92		T58	高杯			B					
SD100	413	92		T68	高杯			A					B
SD100	414	92		T66	高杯			B	I G17				
SD100	415	92		T63	高杯			A					B

第4表　旧河道土器出土状況一覧　(2)

遺構名	図版		土師	器種	法量(cm)		出土地区			取り上げ	層位
	番号	図	PL	登録No.		口径	器高	区域	グリッド	地域	No.・群	
SD100	416	92		T92	高杯			A				
SD100	417	92		T64	高杯			B	I G12・I G13・I G17・I G18		g	
SD100	418	92		T90	高杯			B	I L2		No94	
SD100	419	92		T59	高杯			B	I G17			
SD100	420	92		T67	高杯			B	I G17			
SD100	421	92		T81	高杯			B	I H6b			IV
SD100	422	92		T44	高杯			B	I G22		No45	
SD100	423	92		T43	高杯			B	I G13		D	
SD100	424	92		T96	高杯			B	I G17			
SD100	425	92		T52	高杯			B	I G12			
SD100	426	92		T45	高杯			B	I G13			
SD100	427	92		T55	高杯			B	I G10			VII
SD100	428	92		T69	高杯			B	I G22			
SD100	429	92		T47	高杯			B	I G9			
SD100	430	92		T35	高杯			B	I G17			
SD100	431	92		T32	高杯			B	I G17		W	
SD100	432	92		T31	高杯			B	I G17			
SD100	433	92		T42	高杯			B	I G17			
SD100	434	92		T97	高杯			B	I L2		No92	
SD100	435	92		T39	高杯			B	I G17			
SD100	436	93		H 4	鉢	12.6	7.0	B	I G17		H	
SD100	437	93		H 5	鉢	14.0	7.6	B	I G18			
SD100	438	93		H 3	鉢	14.0	7.4	B	I L2		No93	
SD100	439	93		H 7	鉢	11.0	5.6	B	I L2		No62	
SD100	440	93		H 6	鉢	14.8	7.2	B	I G17			
SD100	441	93		H26	鉢	12.6						
SD100	442	93		H27	鉢	16.2		B	I G22			
SD100	443	93		H28	鉢	15.2		B	I G13			
SD100	444	93		H30	鉢	15.2		A				B
SD100	445	93		H12	鉢	14.4		B	I G17		s	
SD100	446	93		H13	鉢	14.2	6.4	A				B
SD100	447	93		H10	鉢	14.2	6.6	B	I G17		t	
SD100	448	93		H 2	鉢	18.2	9.0	B	I G17			
SD100	449	93		H25	鉢	16.6		B	I G22			
SD100	450	93		H29	鉢	16.2						
SD100	451	93		H 1	鉢	15.8		A				B
SD100	452	93		H36	鉢			A				B
SD100	453	93		H 9	鉢			B	I G9			
SD100	454	93		H40	鉢			A				B
SD100	455	93		H31	鉢			B	I G17			
SD100	456	93		H33	鉢			B	I G22			
SD100	457	93		H39	鉢			B	I L2		X	
SD100	458	93		H35	鉢			B	I H6a			VIIb
SD100	459	93		H32	鉢			B	I L2		X	
SD100	460	93		H34	鉢			B	I G17		i	
SD100	461	93		H37	鉢			B	I G22			
SD100	462	93		H38	鉢			B	I L2			
SD100	463	93		H17	鉢	14.4	6.8	B	I G13		No5,No11	
SD100	464	93		H16	鉢	12.6	8.0	B	I G22		n	
SD100	465	93		H20	鉢	15.0		A				
SD100	466	93		H18	鉢	23.2		B	I G17			
SD100	467	93		H22	鉢	21.8		B	I G17			
SD100	468	94		F 6	壺			A				B
SD100	469	94		F13	壺			A				B
SD100	470	94		F15	壺			B	I G9			
SD100	471	94		F16	壺			B	I G13			
SD100	472	94		F 2	壺							
SD100	473	94		F14	壺			B	I G17			
SD100	474	94		F10	壺			A				B
SD100	475	94		F20	壺			B	I G17			
SD100	476	94		F18	壺			B				
SD100	477	94		F23	壺							
SD100	478	94		F25	壺			B	I G22		No95	
SD100	479	94		F22	壺			A				B
SD100	480	94		F29	壺			B	I H6c			VII
SD100	481	94		F26	壺			B	I L2		No55	
SD100	482	94		F21	壺			B	I G22		No47	
SD100	483	94		F 3	壺	20.2	9.2	B	I G17		t	
SD100	484	94		F12	壺			B				
SD100	485	94		F 1	壺			A				B
SD100	486	94		F 8	壺	24.0		B				
SD100	487	94		F 4	壺			E	I G13・I G18		E	
SD100	488	94		F 7	壺			B	I G13			
SD100	489	94		F 9	壺	18.0		B	I G22			
SD100	490	94		F11	壺	15.4		B	I G17			
SD100	491	94		F19	壺			B	I L2e			5
SD100	492	94		F17	壺			B	I L2		No56	
SD100	493	94		F 5	壺			A				B
SD100	494	94		U 3	有孔鉢	21.6	10.7	B	I G17			
SD100	495	94		U 2	有孔鉢	20.3	13.4	B	I G22		No50	
SD100	496	94	25	U 5	有孔鉢	19.4	13.5	B	I L3		Y	
SD101	497	94		U 1	有孔鉢	19.0	12.6	B	I G13		u	
SD100	498	94		U 4	有孔鉢	21.5	13.6	B				
SD100	499	95	25	K70	甕	17.2		A				B

第5表　旧河道土器出土状況一覧　(3)

遺構名	図版			土器	器種	法量(cm)		出土地区			取り上げ	層位
	番号	図	PL	登録No		口径	器高	区域	グリッド	地域	No・群	
SD100	500	95	25	K106	深	16.6		A				B
SD100	501	95	25	K57	鉢	16.9		A				B
SD100	502	95	25	K24	深	22.7	23.7	A				B
SD100	503	95	25	K60	深	24.7		A				
SD100	504	95	25	K58	鉢	19.7		A				B
SD100	505	95		K80	深	20.6		A				B
SD100	506	95		K95	深	25.8		A				B
SD100	507	95	26	K 8	鉢	23.7	29.2	A				B
SD100	508	95	26	K63	深	25.5		A				B
SD100	509	96	26	K117	深	19.2						
SD100	510	96		K107	鉢	20.7		A				B
SD100	511	96	26	K69	深	26.0		B	I G17		W	
SD100	512	96	26	K72	深	20.3		B	I G13		No1, No4	VIIa
SD100	513	96		K97	鉢	17.5		B	I G13		C, d, No11	
SD100	514	96		K109	深	15.6		B	I G17		f	
SD100	515	96	26	K105	鉢	16.3		B	I G12・I G13・I G17・I G18		g	
SD100	516	96	26	K22	深	22.2	28.4	B	I G13		D	
SD100	517	96	27	K10	深	16.2	19.1	A				B
SD100	518	96	27	K112	鉢	20.1	27.6	B	I G13・I G17		D, O	
SD100	519	97	27	K13	深	17.9	26.3	B	I G17・I G22		No35, No86, No87	
SD100	520	97	27	K116	深	23.0	31.1	B	I L2		v	
SD100	521	97	27	K20	鉢	14.0	17.9	A				B
SD100	522	97		K104	深	17.5		A				B
SD100	523	97	27	K139	深	17.1		B	I L2			
SD100	524	97	27	K101	鉢	20.0		B	I G17		x	
SD100	525	97	27	K92	深	19.8		B	I G8			
SD100	526	97		K102	深	15.9		B	I G13		No 2	
SD100	527	97	27	K52	深	21.0	22.0	B	I G17		W	
SD100	528	97	27	K51	深	14.1	12.3	B	I G17		W	
SD100	529	97	27	K45	深	10.3	10.6	B	I G17		No27	
SD100	530	97	27	K42	鉢	13.7	14.1	B	I G17・I L2		W, X	
SD100	531	97	27	K26	深	12.4	14.1	B	I G13・I G17		t, No79	
SD100	532	97	28	K67	深			B	I G13		D	
SD100	533	98	28	K 6	深	20.5	27.4	A				B
SD100	534	98	28	K38	深	20.7	25.5	B	I G13		E, f	
SD100	535	98	28	K114	深	18.4	24.6					
SD100	536	98	28	K 9	深	18.3	23.6	B	I G17		K, M	
SD100	537	98	28	K119	深	22.2	29.5	A				B
SD100	538	98	28	K50	深	21.0	27.2	B	I G17・I L2		W, No70	
SD100	539	98	28	K76	深	23.8		B	I G17		O	7
SD100	540	98		K135	深	17.5		B	I G22			
SD100	541	98		K112	深	18.0		B	I G17		K, O	7
SD100	542	98		K124	鉢	18.8		B	I G17		j	
SD100	543	99	29	K59	深	22.3		B	I G17		J	
SD100	544	99	29	K61	深	22.6		B	I G			5
SD100	545	99	29	K77	深	23.7		B	I G22		No44, No52	5
SD100	546	99	29	K78	深	22.3		A				B
SD100	547	99		K86	深	17.1		A				B
SD100	548	99		K81	鉢	17.5		A				B
SD100	549	99		K89	深	17.8		B	I G17			
SD100	550	99		K73	深	18.3		B	I H14・I L2			VII
SD100	551	99		K136	鉢	18.8		B	I G22・I L2		U	
SD100	552	99		K140	深	17.2		B	I G13		D	
SD100	553	99		K150	深	19.6		B	I G17		G	
SD100	554	100		K98	鉢	24.6		B	I G22・I L2		U	
SD100	555	100	29	K71	深	25.1		A				B
SD100	556	100	29	K64	深	23.6		B	I G9			
SD100	557	100		K83	鉢	17.2		B	I G13・I G18		E	
SD100	558	100		K74	深	20.8		A				B
SD101	559	100		K16	深	15.0		C		⑥区東		
SD100	560	100	29	K94	深	17.0		B	I G22		R	
SD100	561	100		K56	深			B	I G17		H	
SD100	562	100	29	K 7	深	20.7	28.6	B	I G17		No32	
SD100	563	100	30	K12	深	21.4	28.8	B	I G17		H	
SD100	564	101	30	K 3	深	17.9	24.4	B	I G17		L	
SD100	565	101	30	K18	深	17.8	22.8	B	I L2		No66	
SD100	566	101	30	K49	深	14.5	20.4	B	I G13		D	
SD100	567	101		K99	深	16.2		A				B
SD100	568	101		K133	鉢	15.5		B	I G17		No35	
SD100	569	101	30	K36	深	13.5	17.2	B				
SD100	570	101	30	K 4	深	12.4	10.9	B	I G17・I L2		V, W, No66	
SD100	571	101	30	K44	深	12.4	13.0	B				
SD100	572	101		K137	鉢	14.2		B	I G17			
SD100	573	101		K130	深	15.6		B	I G17		K, M, N	
SD100	574	101		K138	深	14.2		B	I G13・I G18		E	
SD100	575	101		K108	鉢	17.4		B	I L2			
SD100	576	101		K111	深			B	I G17			
SD100	577	101		K79	深	22.3		B	I G17		No40	
SD100	578	101		K103	深	21.0		B	I G12・I G13・I G17・I G18		g	
SD100	579	102	30	K34	深	20.0	27.5	B	I L2		U	
SD100	580	102	30	K14	鉢	18.2	27.6	A				B
SD100	581	102	31	K33	深	19.9	24.8	B	I G22・I L2			
SD100	582	102	31	K43	深	18.0	25.2	A				B
SD100	583	102	31	K75	深	18.9		B	I G13・I G18		E, F, f	

第８表　旧河道土器出土状況一覧　（４）

遺構名	図版			土師	器種	法量(cm)		出土地区			取り上げ	層位
	番号	図	PL	整理No		口径	器高	区域	グリッド	地域	No・群	
SD100	584	102	31	K39	甕	13.5	17.7	B	I G17			
SD100	585	102	31	K35	甕	21.8	31.6	B	I L2		No75	
SD100	586	102	31	K47	甕	20.0	22.0	B	I G13			
SD100	587	102	31	K 1	甕	19.2	23.0	B	I G17		No33,No84	
SD100	588	103	32	K53	甕	20.9	25.8	B	I G17		No24	
SD100	589	103	31	K 2	甕	21.5	29.4	B	I G5			
SD100	590	103	31	K62	甕	24.0		B	I G17		No39	
SD100	591	103	32	K55	甕	22.8	31.7	B	I G17			
SD100	592	103	32	K65	甕	22.6	31.3	B	I G17		No16	
SD100	593	103	32	K66	甕	22.9	29.5	A				B
SD100	594	104	32	K16	甕	22.5	27.6	B	I G17・I G			
SD100	595	104	32	K21	甕	23.3	29.2	B	I G17		I K	
SD100	596	104	32	K41	甕	16.8	18.1	B	I G17			
SD100	597	104	33	K11	甕	17.8	20.0	B	I G13・I G17		c,d,x	
SD100	598	104	32	K15	甕	14.4	17.4	B				
SD100	599	104	32	K68	甕	15.8	18.7	B	I G13・I G18		e,h	
SD100	600	104	33	K37	甕	16.1	17.8	B	I G13		d	
SD100	601	104	33	K46	甕	15.3	16.7	B	I L2・I G22		p,o	
SD100	602	104	33	K32	甕	17.4	21.7	B	I G17		r	
SD100	603	104	33	K19	甕	17.4	20.9	B	I G13・I G18		e	
SD100	604	104		K90	甕	19.0		B	I G17・I G			
SD100	605	105	33	K17	甕	19.0	24.4	B	I G13		d,No10	
SD100	606	105	33	K31	甕	18.1	21.5	A				B
SD100	607	105	33	K28	甕	14.4	19.0	B	I G13			
SD100	608	105	33	K40	甕	15.8	14.4	A				
SD100	609	105	34	K100	甕	14.0		B	I G17		No23	
SD100	610	105		K87	甕	15.4		B	I L2		X	
SD100	611	105		K84	甕	16.4		B	I G22		No86	
SD100	612	105		K91	甕	13.6		B	I G17			
SD100	613	105		K141	甕			A				B
SD100	614	105		K118	甕			B	I G13			
SD100	615	105		K110	甕			A				B
SD100	616	106	34	K120	甕	14.1	20.1	B	I G17			
SD100	617	106	34	K 5	甕	15.0	18.2	B	I G13		B,C	
SD100	618	106	34	K115	甕	16.4	20.9					
SD100	619	106	34	K54	甕	13.3	17.6	B	I G17			
SD100	620	106	34	K88	甕	13.7		B	I G13		No97	
SD100	621	106	34	K48	甕	12.8	13.1	B	I G17			
SD100	622	106	34	K53	甕	16.2		B	I G17・I G13・I G18		k,e	
SD100	623	106	34	K85	甕	17.3		B	I G22		No86	
SD100	624	106	34	K96	甕	17.8		A				B
SD100	625	106		K93	甕	14.2		B	I G17		x	
SD100	626	106		K131	甕	13.1		B	I G17			
SD100	627	106		K82	甕	13.7		B	I G17		Q	
SD100	628	106		K143	甕			A				
SD100	629	106		K122	甕			B	I G17			
SD100	630	106		K145	甕			A				
SD100	631	106		K125	甕			B	I G22			
SD100	632	106		K146	甕			B	I G22			
SD100	633	106		K123	甕			A				B
SD100	634	106		K149	甕			B	I G17・I G22		Q	
SD100	635	106		K121	甕			A				B
SD100	636	106		K144	甕			A				
SD100	637	106		K124	甕			B	I G22			
SD100	638	106		K126	甕			B	I G13		No 1	
SD100	639	106		K142	甕			B	I H16			
SD100	640	106		K148	甕			B	I G13		No78	
SD100	641	106		K147	甕			B	I G17		M	
SD100	642	106		K127	甕			B	I G17		n	
SD100	643	106		K129	甕			A				B
SD100	644	106		K128	甕			A				
SD101	645	107	35	B 9	壺			D	IIV5・IIV4	①－2	M,Q,R	
SD101	646	107	35	B 8	壺			E	IIR21	②－1	No,z	
SD101	647	107	35	B 7	壺			E	IIR16	②－1	No,c	
SD101	648	107	35	B 6	壺			E	IIR13・IIR17・IIR18	②－1	No,い,No,E,No,か	
SD101	649	107	35	B37	壺			D	IIV5	①－2 東半分	G	
SD101	650	107		Z 248	壺			D	IIV10C	①－2		
SD101	651	107		B41	壺			D	IIV5	①－2	K	
SD101	652	107		B35	壺			E	IIR21・IIR22	②－1		
SD101	653	107		B30	壺			C		④区東		
SD101	654	107		B13	壺			E	IIR21	②－1	No,z	
SD101	655	108	35	B 5	壺			E	IIV5	①－2	L	
SD101	656	108	36	B28	壺	20.0	41.2	E	IIR13・IIR18	②－1	No,い	
SD101	657	108	36	B42	壺	21.2		D	IIV5	①－2 東	F	
SD101	658	108	36	B32	壺	24.2		C		④区東		
SD101	659	108		B31	壺	32.4		C		④区東		
SD101	660	108	36	B36	壺	17.4		E	IIR17・IIR21・IIR22	②－1	Na2,No,3	
SD101	661	108		B47	壺			E	IIR22	②－1		V
SD101	662	108		B33	壺	15.8		C		④区東		
SD101	663	109	36	B 4	壺			E	IIR22	②－1	No,け	
SD101	664	109	36	B27	壺	29.2	60.0	E	IIR21・IIR22	②－1	No,す	
SD101	665	109	36	B 1	壺			E	IIR21・IIR22	②－1	No,あ, No,な	
SD101	666	109	36	B 1	壺			E	IIR21・IIR22	②－1	No,あ, No,な	
SD101	667	110	37	B39	壺	28.1		D	IIV5	①－2	I	

第7表　旧河道土器出土状況一覧　(5)

遺構名	図版			土器登録No	器種	法量(cm)			出土地区			取り上げ	層位
	番号	図	PL			LJ径	器高	底径	区域	グリッド	地点	No・群	
SD101	668	110		B14	壺				E	IIR13・IIR17・IIR18	②－1	No1ヽ,Na乏, Na か	
SD101	669	110	37	B29	壺	30.0	44.8		G		⑥区東		
SD101	670	110		B10	壺				E	IIR22	②－1		
SD101	671	110		B11	壺				E	IIR21c	②－1		
SD101	672	110		B12	壺				E	IIR13・IIR17・IIR18	②－1	No1ヽ, Na か	
SD101	673	110	37	B34	壺	14.4	15.1		C		⑥区東		
SD101	674	110	37	B23	壺	12.5	13.2		E	IIR21c	②－1		
SD101	675	110	37	B38	壺	12.3	11.3		D	IIV5	①－2	J	
SD101	676	111	37	B22	壺	17.4	19.8		E	IIR21	②－1	Na な	
SD101	677	111	37	B21	壺	18.2	20.2		E	IIV4	①－2	N,P	
SD101	678	111		Z247	鉢				D		①－2		
SD101	679	111		Z246	無開頭	9.6	6.8		D	IIV5B	①－2		
SD101	680	111		Z241	鉢	26.3			D	IIW5B	①－2		
SD101	681	111		T 4	高杯	19.4			E	IIR17	②－1	Na か	
SD101	682	111		T 1	高杯	25.1			C		⑥区東		
SD101	683	111		T 3	高杯				C		⑥区東		
SD101	684	111		T 7	高杯				D		①－2		
SD101	685	111		T 6	高杯				D		①－2		
SD101	686	111		T 2	高杯				C		⑥区東		
SD101	687	111		T 8	高杯				D		①－2		
SD101	688	111		U 2	有孔鉢				C		⑥区東		
SD101	689	111		M 1	ミニチュア				C		⑥区東		
SD101	690	111		K15	甕	21.1			D		①－2		
SD101	691	111		K22	壺	18.7			D	IIV5	①－2	A	
SD101	692	112	37	K21	壺	16.2	21.4		D	IIV5	①－2東半分	G	
SD101	693	112	38	K14	壺	16.7			E	IIR21・IIR22	②－1	Na せ	
SD101	694	112	38	K10	壺	13.5	16.1		C		⑥区東		
SD101	695	112	38	K 4	壺	12.5	15.2		D		①－2		
SD101	696	112	38	K 3	壺	20.5	25.5		E	IIR21	②－1	Na と	
SD101	697	112		Z242	壺	17.9			D	IIV5B	①－2		
SD101	698	112	38	K 1	壺	22.2	29.9		E	IIR13・IIR17・IIR18	②－1	Na1ヽ, Na と, Na か	
SD101	699	112	38	K 2	壺	23.7	29.8		D	IIV5・IIQ25	①－2	M	
SD101	700	112	38	K30	壺	22.8	32.6		D		①－2		
SD101	701	112		K29	壺	16.4			C		⑥区東		
SD101	702	112		Z261	壺	13.3			C		⑥区東		
SD101	703	112		K31	壺				E		②－1		
SD101	704	113	38	K12	壺	20.0	29.7		D	IIV9・IIV4	①－2	C2,Q	
SD101	705	113	38	K11	壺	23.8			D	IIV4	①－2	N	
SD101	706	113	39	K12	壺	24.4			D	IIV9	①－2	B2	
SD101	707	113		Z243	壺	24.5			D	IIV5C	①－2		
SD101	708	113		Z244	壺	22.5			D	IIV6C	①－2		
SD101	709	113	39	K 9	壺	15.7	21.1		C		⑥区東		
SD101	710	113		K18	壺	15.9			D		①－2		
SD101	711	113		K19	壺	18.1			C		⑥区東		
SD101	712	114	39	K 8	壺	18.3	25.2		D		①－2		
SD101	713	114	39	K26	壺	17.7	23.7						
SD101	714	114	39	K 7	壺	29.0	21.6		C		⑥区東		
SD101	715	114		K17	壺	19.8			C		⑥区東		
SD101	716	114	39	K 6	壺	22.1	26.3		C		⑥区東		
SD101	717	114		K20	壺	15.8			E	IIR13・IIR18	②－1	Na1ヽ	
SD101	718	114	39	K23	台付壺	13.1			D		①－2東半分	J	
SD101	719	114	39	K 5	壺	10.0	9.8		D	IIV4	①－2	T	
SD101	720	114		Z245	壺				C		⑥区東		
SD101	721	114		P 2	壺				D	IIV9	①－2	Z	
SD101	722	114		P 1	壺				E	IIR21c	②－1		
SD101	723	114		P 3	鉢				D	IIV4	①－2	W	
SD101	724	114		P 4	壺				D		①－2		
SD101	725	114		B15	壺				D	IIV4	①－2	Q,R	
SD101	726	115	39	B44	壺	21.2	34.6		E		②－1		
SD101	727	115		B45	壺	33.8			E	IIR21	②－1	Na ち	
SD101	728	115		B46	壺				E	IIR21	②－1	Na た	
SD101	729	115	39	B20	壺				E	IIR17	②－1	Na お	
SD101	730	115		T10	高杯	28.6			E	IIR21	②－1	Na て	
SD101	731	115	40	T 9	高杯	21.0	17.0		E	IIR13・IIR18	②－1	Na1ヽ, Na う	
SD100	732	115	39	B112	壺								
SD100	733	115	40	B113	壺	14.4	13.0	A					
SD100	734	115	40	K152	台付壺	12.2	15.9	A					
SD100	735	115	40	H44	鉢	9.2	11.3	B	I L2			U	
SD100	736	116	40	K151	壺	18.8	25.6	B	I G12・I G13・I G17・I G18			Na18,g	
SD101	737	116	40	K32	壺	17.4	23.7	A					
SD101	738	116	40	K33	壺	16.0	21.0	E	IIR21		②－1	Na と	
SD101	739	116	40	K35	壺	20.1		E	IIR21		②－1	Na た, Na つ	
SD101	740	116	40	K34	壺			E	IIR21		②－1	Na た,	
SD101	741	116	40	K36	壺	11.9	16.1	E			②－1		
SD101	742	116	40	Z81	壺	12.2	18.7	D			①－2		
SD101	743	116	40	Z120	壺	15.8	17.7	D	IIV5C		①－2		
SD100	744	116		F27	盒			B					
SD100	745	116		F24	盒			B	I G17			I	
SD100	746	116		F28	蓋			B	I G17			H	
SD100	851	127		Z 7	二重口縁壺			B	I H6b				IV
SD100	852	127		Z 9	壺	17.4	30.0	B	I G				
SD100	853	127	42	Z10	高杯	11.0		B	I G				
SD100	854	127		Z 4	台付			B	I G10b				IV
SD100	855	127		Z 3	高杯			B	I G10b				IV

第８表　旧河道土器出土状況一覧　（６）

遺構名	図版			土師	器種	法量(cm)			出土地区			取り上げ		層位
	番号	図	PL	登録No.		口径	器高	区域	グリッド	地域		No.・群		
SD100	856	127	42	Z 1	小型器台(底)	10.4		B	ⅠG10・ⅠH6a					Ⅳ
SD100	857	127	42	Z 8	小型器台	9.8		B	ⅠG					
SD100	858	127	42	Z 2	小型器台	8.8		B	ⅠH6a・ⅠL4b					Ⅳ, Ⅴ, 4
SD100	859	127		Z 6	有孔鉢			B	ⅠH6a・ⅠL4b					Ⅳ
SD100	860	127		Z 5	器台			B	ⅠH6b					Ⅴ
SD101	861	128	42	Z 67	壺	18.9		C		⑥区東				
SD101	862	128		Z199	二重口縁壺			C		⑥区東				
SD101	863	128		Z 68	壺	22.9		D	ⅡV5D・ⅡV9・ⅡV9B・ⅡV10B	①－2				
SD101	864	128		Z165	壺			D	ⅡW1B	①－2				
SD101	865	128		Z208	二重口縁壺			E	ⅡR12・ⅡR17・ⅡR18	②－1		No.1		
SD101	866	128		Z259	壺			D		①－2				
SD101	867	128		Z157	壺	16.4		D	ⅡW9B・ⅡV9C	①－2				
SD101	868	128	42	Z194	有段口縁壺			D	ⅡV10・ⅡV15A	①－2				
SD101	869	128		Z152	壺	19.5		D	ⅡV4C	①－2				
SD101	870	128		Z267	壺	15.5		E	ⅡR18・ⅡV16A	②－1		E		Ⅴ
SD101	871	128		Z153	壺	16.4		D	ⅡW1B	①－2				
SD101	872	128	42	Z 65	壺	14.4	25.0	C		⑥区東				
SD101	873	128	42	Z 66	壺	14.0		C		⑥区東				
SD101	874	128	42	Z173	壺	14.3	28.6	C		⑥区東				
SD101	875	129	42	Z 84	壺	12.9		D	ⅡV5B	①－2				
SD101	876	129	42	Z 83	壺			D		①－2				
SD101	877	129		Z148	壺	12.7		C		⑥区東				
SD101	878	129		Z145	壺	12.1		D	ⅡV9・ⅡV9B	①－2				
SD101	879	129		Z149	壺	13.3		D	ⅡW1B	①－2				
SD101	880	129		Z146	壺	12.9		D	ⅡW1A	①－2				
SD101	881	129		Z147	壺	12.9		C		⑥区東				
SD101	882	129		Z150	壺	11.1		C		⑥区東				
SD101	883	128	43	Z108	壺	12.8		D	ⅡV9B・ⅡV9C	①－2				
SD101	884	129	42	Z165	壺	14.3		D	ⅡV4C	①－2				
SD101	885	129	42	Z110	壺	16.2		D	ⅡV9	①－2				
SD101	886	129	43	Z106	壺	12.5		D	ⅡV10・ⅡV10D	①－2				
SD101	887	129		Z 52	蓋口壺			C		⑥区東				
SD101	888	129		Z109	壺			D	ⅡV9・ⅡV10C	①－2				
SD101	889	130	43	Z105	壺			D	ⅡV9B	①－2				
SD101	890	130	43	Z104	壺			C		⑥区東				
SD101	891	130	43	Z166	壺			C		⑥区東				
SD101	892	130		Z 57	小型壺			D	ⅡW1B	①－2				
SD101	893	130		Z240	壺			D	ⅡW1B	①－2				
SD101	894	130	43	Z190	壺	13.4		D	ⅡV9・ⅡV9C	①－2				
SD101	895	130		Z214	壺			D	ⅡV9B	①－2				
SD101	896	130		Z216	壺			C		⑥区東				
SD101	897	130		Z217	壺			C		⑥区東				
SD101	898	130		Z213	壺			D	ⅡV9B	①－2				
SD101	899	130		Z122	壺			D	ⅡV5D	①－2				
SD101	900	130		Z221	壺			C		⑥区東				
SD101	901	130		Z215	壺			D	ⅡV5D	①－2				
SD101	902	130		Z226	壺			C		⑥区東				
SD101	903	131		Z234	壺	18.0		D	ⅡV9B・ⅡV9C	①－2				
SD101	904	131		Z 44	蓋口壺	14.3		D	ⅡV1D・ⅡV9	①－2				
SD101	905	131	44	Z174	蓋口壺	14.7	20.9	C		⑥区東				
SD101	906	131		Z 54	蓋口壺	14.8		D	ⅡV9B・ⅡV9C	①－2				
SD101	907	131	44	Z 55	蓋口壺	15.5		D	ⅡV9B・ⅡV9C	①－2				
SD101	908	131		Z193	蓋口壺	11.3		D	ⅡV9・ⅡV9B・ⅡV9C	①－2				
SD101	909	131		Z 56	蓋口壺	15.2		D	ⅡV5C	①－2				
SD101	910	131	44	Z 42	蓋口壺	13.2		D	ⅡV9・ⅡV9B・ⅡV9C	①－2				
SD101	911	131		Z 47	小型壺	12.5		D	ⅡV9C	①－2				
SD101	912	131		Z 43	蓋口壺	11.7		C		⑥区東				
SD101	913	131	44	Z185	壺	11.4								
SD101	914	131	44	Z184	壺	9.8	11.6	D	ⅡW1A	①－2				
SD101	915	131		Z 46	小型壺	9.8		D	ⅡW1A・ⅡW1B	①－2				
SD101	916	131		Z 59	小型壺	11.0		D	ⅡW1B	①－2				
SD101	917	131	44	Z177	壺	10.9		C		⑥区東				
SD101	918	131	44	Z178	壺	9.4	9.2	C		⑥区東				
SD101	919	131	44	Z 58	小型壺	9.0		D	ⅡW1B	①－2				
SD101	920	131	44	Z175	蓋口壺	9.3	16.3	C		⑥区東				
SD101	921	131	44	Z176	壺	10.0		C		⑥区東				
SD101	922	132		Z209	蓋口壺			E	ⅡR19	②－1				Ⅳc
SD101	923	132		Z 51	小型壺			C		⑥区東				
SD101	924	132	44	Z197	蓋口壺			D		①－2				
SD101	925	132		Z 53	蓋口壺			C		⑥区東				
SD101	926	132	44	Z100	壺			C		⑥区東				
SD101	927	132	44	Z 99	壺			D		①－2				
SD101	928	132	44	Z 50	小型壺			D	ⅡV1A・ⅡV1B・ⅡV9	①－2				
SD101	929	132		Z102	壺			C		⑥区東				
SD101	930	132		Z268	壺			E	ⅡR18	②－1				
SD101	931	132		Z233	壺			D	ⅡV9	①－2				
SD101	932	132		Z250	壺			C		⑥区東				
SD101	933	132	44	Z191	小型壺			D	ⅡV9	①－2				
SD101	934	132		Z139	壺	11.0		D	ⅡV5B	①－2				
SD101	935	132		Z151	壺	11.7		D	ⅡV9	①－2				
SD101	936	132		Z232	有孔鉢	25.5		D	ⅡV5B	①－2				
SD101	937	132		Z124	壺	16.4		D	ⅡV5C	①－2				
SD101	938	132		Z270	鉢	24		D	ⅡW1	①－2				
SD101	939	132	45	Z273	丸底鉢	24.2	13.8	D	ⅡV10C・ⅡV9C	①－2				

第８表　旧河道土器出土状況一覧　（７）

遺構名	図版			土器番号	器種	法量(cm)			出土地区			取り上げ	層位
	番号	図	Pl.			口径	器高	区域	グリッド	地域	No・群		
SD101	940	133	45	Z69	鉢	22.0		C		⑥区東、①－2			
SD101	941	133	45	Z72	鉢	22.0		D		⑥－2			
SD101	942	133	45	Z 98	丸底鉢	19.4		D	IIV9B	①－2			
SD101	943	133		Z 71	鉢	18.6		D		①－2			
SD101	944	133	45	Z179	鉢	16.0	6.8	C		⑥区東			
SD101	945	133	45	Z 70	鉢	16.9		D		①－2			
SD101	946	133		Z263	二重口縁鉢	14.0	5.4	E	IIR18	②－1			
SD101	947	133	45	Z196	鉢	14.4	6.5	C		⑥区東、①－2			
SD101	948	133	45	Z181	鉢	10.5	5.0	C		⑥区東			
SD101	949	133	45	Z192	小型丸底鉢	10.8	6.4	D	IIW1A	①－2			
SD101	950	133		Z 41	小型丸底鉢			D	IIV1B	①－2			
SD101	951	133		Z235	小型丸底鉢	9.7	5.6	C		⑥区東			
SD101	952	133	45	Z187	鉢	11.8	5.3						
SD101	953	133	45	Z182	鉢	8.8	5.1	C		⑥区東			
SD101	954	133	45	Z180	鉢	9.2		C		⑥区東			
SD101	955	133		Z 39	丸底鉢	13.5		D	IIW1A	①－2			
SD101	956	133	45	Z 73	鉢	8.2	10.7	D		①－2			
SD101	957	133	45	Z195	有孔鉢	11.6	9.1	C		⑥区東			
SD101	958	133	45	Z 80	有孔鉢	15.8	10.1	C		⑥区東			
SD101	959	133		Z231	有孔鉢			C		⑥区東			
SD101	960	133		Z230	有孔鉢			D	IIW1B	①－2			
SD101	961	133	45	Z236	高杯	15.4	13.4	C		⑥区東			
SD101	962	133	45	Z 78	高杯	15.0	12.6	C		⑥区東			
SD101	963	133	45	Z 79	高杯	14.9		D		①－2			
SD101	964	133		Z272	高杯			D	IIW1	①－2			
SD101	965	133	45	Z 21	高杯			D	IIV10	①－2			
SD101	966	134	45	Z 82	高杯	24.0		C		⑥区東			
SD101	967	134	45	Z 2	高杯			D	IIV9C	①－2			
SD101	968	134		Z 3	高杯	26.2		D	IIV9	①－2			
SD101	969	134	46	Z 1	高杯	21.2		D	IIV9	①－2			
SD101	970	134		Z 4	高杯脚			D	IIV5C	①－2			
SD101	971	134		Z 6	高杯			D	IIV15B	①－2			
SD101	972	134		Z 5	高杯脚			D	IIV9	①－2			
SD101	973	134		Z 7	底杯			D	IIV10	①－2			
SD101	974	134	46	Z 8	高杯	21.0		D	IIV9	①－2			
SD101	975	134		Z 10				C		⑥区東			
SD101	976	134	46	Z 22	底杯	16.4		D	IIV5D・IIV10C	①－2			
SD101	977	134		Z274	底杯	15.8		D	IIW1	①－2			
SD101	978	134		Z 20	高杯			C		⑥区東			
SD101	979	134		Z 19	高杯			D	IIW1B	①－2			
SD101	980	134	46	Z203	高杯			E	IIR21C	②－1			
SD101	981	134	46	Z 13	高杯脚			C		⑥区東			
SD101	982	134		Z265	小型器台			E	IIR18	②－1			
SD101	983	134		Z200	高杯			D		①－2			
SD101	984	134		Z 16	高杯脚			D	IIV10	①－2			
SD101	985	134		Z 15	高杯脚			C		⑥区東			
SD101	986	134		Z 14	高杯脚			D	IIW1A	①－2			
SD101	987	134		Z 23	高杯			C		⑥区東			
SD101	988	135	46	Z 11	高杯脚			D	IIV9	①－2			
SD101	989	135	46	Z 75	小型器台			E	IIR12・IIR17・IIR18	②－1		No.1	
SD101	990	135	46	Z205	高杯			E	IIR17	②－1		No.2	
SD101	991	135	46	Z202	高杯			D		①－2			
SD101	992	135	46	Z 74	小型器台			D		①－2			
SD101	993	135		Z 28	小型器台脚			C		⑥区東			
SD101	994	135	46	Z 9	底杯	11.6		C		⑥区東			
SD101	995	135	46	Z186	小型器台	10.7							
SD101	996	135		Z264	小型器台	8.8		E	IIR18	②－1			
SD101	997	135		Z 29	小型器台	8.1		D	IIV5D	①－2			
SD101	998	135		Z 30	小型器台			D	IIV9	①－2			
SD101	999	135		Z 27	小型器台脚			C		⑥区東			
SD101	1000	135		Z275	小型器台	9.4		D	IIW1A	①－2			
SD101	1001	135		Z 31	小型器台	11.9		D	IIW1A・IIW1B	①－2			
SD101	1002	135		Z 17	高杯脚			D	IIW1D	①－2			
SD101	1003	135		Z 18	高杯脚			C		⑥区東			
SD101	1004	135		Z 25	小型器台脚			C		⑥区東			
SD101	1005	135		Z 26	小型器台脚			D	IIV10	①－2			
SD101	1006	135		Z 12	高杯脚			D	IIV10D	①－2			
SD101	1007	135	46	Z 24	小型器台脚	7.2	8.4	D	IIV5B	①－2			
SD101	1008	135	46	Z183	小型器台			C		⑥区東			
SD101	1009	135		Z 34	小型器台脚			D	IIV5D・IIV9	①－2			
SD101	1010	135	46	Z 32	小型器台脚			D	IIW1B	①－2			
SD101	1011	135		Z 33	小型器台脚			D	IIV10B	①－2			
SD101	1012	135	46	Z 76	器台	8.8	7.3	D		①－2			
SD101	1013	135	46	Z 77	器台	8.8		D		①－2			
SD101	1014	135		Z 37	器台			C		⑥区東			
SD101	1015	135		Z204	器台			D		①－2			
SD101	1016	135	46	Z 35	器台	8.6	5.8	D	IIV9	①－2			
SD101	1017	135		Z 36	器台			D	IIV10A	①－2			
SD101	1018	136	47	Z158	甕	17.9	23.3	D	IIW1A	①－2			
SD101	1019	136	47	Z 64	甕	17.3		C		⑥区東			
SD101	1020	136	47	Z152	甕	14.2		C		⑥区東			
SD101	1021	136	47	Z 94	甕	15.0		C		⑥区東			
SD101	1022	136		Z271	甕			D	IIW1	①－2			
SD101	1023	136	47	Z163	甕	14.9		D	IIW1B	①－2			

第10表　旧河道土器出土状況一覧　(8)

遺構名	図版		土器	器種	法量(cm)		出土地区			取り上げ	層位
	番号	図	PL	登録No		口径	器高	区域	グリッド	地域	No.・群	
SD101	1024	136		Z122	深	14.8		D	ⅡV15B	①－2		
SD101	1025	136		Z143	壺	14.6		D	ⅡV9	①－2		
SD101	1026	136		Z133	壺			D	ⅡV9・ⅡV10A・ⅡV15B	①－2		
SD101	1027	136		Z251	甕			C		⑥区東		
SD101	1028	136	47	Z62	深	17.9		D	ⅡV15A	①－2		
SD101	1029	136	47	Z61	鉢			C	ⅡW1A・ⅡW1B	⑥区東		
SD101	1030	137	47	Z160	甕	17.4		E	ⅡR12・ⅡR17・ⅡR18	②－1	No 1	
SD101	1031	137	48	Z161	甕	15.2		D	ⅡW1A・ⅡW1D	①－2		
SD101	1032	137	48	Z172	深	19.9		E	ⅡR19	②－1		ⅣC,ⅥC
SD101	1033	137		Z277	甕	13.3		D	ⅡW1	①－2		
SD101	1034	137		Z95	壺			D		①－2		
SD101	1035	137		Z262	鉢	15.5	24.0	E	ⅡR18	②－1		
SD101	1036	137		Z53	深	16.4	26.1	E	ⅡR17	②－1	No 2	ⅣC
SD101	1037	137	48	Z63	壺	18.0	27.3	D	ⅡV10C	①－2		
SD101	1038	137	48	Z164	鉢	13.2		D	ⅡW1B	①－2		
SD101	1039	137		Z258	甕			C		⑥区東		
SD101	1040	137	48	Z159	壺	18.9	27.7	C		⑥区東		
SD101	1041	138		Z89	鉢	22.4	30.9	C		⑥区東		
SD101	1042	138		Z126	甕	16.4		C		⑥区東		
SD101	1043	138	48	Z125	壺	15.1		D	ⅡW1A	①－2		
SD101	1044	138		Z257	鉢	16.8		D	ⅡW1B	①－2		
SD101	1045	138	48	Z98	甕	17.4		C		⑥区東		
SD101	1046	138	48	Z118	壺	15.2		D	ⅡV10A	①－2		
SD101	1047	138		Z119	鉢	18.1		C		⑥区東		
SD101	1048	138		Z132	甕	13.9		D	ⅡV15B	①－2		
SD101	1049	138	48	Z117	壺	15.5		D	ⅡV4C・ⅡV5C・ⅡV5D	①－2		
SD101	1050	138		Z90	鉢	15.9		D		①－2		
SD101	1051	138	49	Z189	深	18.8		D	ⅡV9・ⅡV9B・ⅡV9C・ⅡV10	①－2		
SD101	1052	138		Z88	甕			C		⑥区東		
SD101	1053	138		Z114	壺			D	ⅡW1B	①－2		
SD101	1054	139		Z97	鉢			D		①－2		
SD101	1055	139	49	Z127	鉢	12.5	20.4	D	ⅡW1A	①－2		
SD101	1056	139		Z276	甕	13.4	18.0	D	ⅡW1B	①－2		
SD101	1057	139		Z86	壺	14.4		D		①－2		
SD101	1058	139		Z138	甕	14.6		C		⑥区東		
SD101	1059	139		Z137	壺	12.0		C		⑥区東		
SD101	1060	139		Z131	鉢	14.5		D	ⅡW1A	①－2		
SD101	1061	139		Z92	甕	14.0		D		①－2		
SD101	1062	139		Z135	壺	17.0		C		⑥区東		
SD101	1063	139	49	Z60	弥生中期前葉	12.4	11.0	C		⑥区東		
SD101	1064	139		Z170	古代須	11.2		C		⑥区東		
SD101	1065	139	49	Z168	古代須	9.2	16.3	C		⑥区東		
SD101	1066	139		Z169	古代須	14.6		C		⑥区東		
SD101	1067	139		Z171	古代須			C		⑥区東		
SD101	1068	139		Z299	鉢			E	ⅡR18	②－1		
SD101	1069	139		Z239	鉢			D	ⅡV9	①－2		
SD101	1070	139		Z121	甕	13.4		D	ⅡV10	①－2		
SD101	1071	140		Z133	壺	14.4		D	ⅡV9B・ⅡV9C	①－2		
SD101	1072	140		Z129	壺	16.8		D	ⅡV9C・ⅡV9C・ⅡV10A	①－2		
SD101	1073	140		Z85	壺	15.5		D		①－2		
SD101	1074	140		Z136	甕	17.6		C		⑥区東		
SD101	1075	140		Z123	壺	15.0		C		⑥区東		
SD101	1076	140		Z256	鉢	9.6		D	ⅡW1A	①－2		
SD101	1077	140		Z253	壺	13.6		C		⑥区東		
SD101	1078	140		Z134	壺	14.8		D	ⅡW1A	①－2		
SD101	1079	140		Z130	鉢	15.0		D	ⅡW1A	①－2		
SD101	1080	140		Z255	壺	19.6		C		⑥区東		
SD101	1081	140		Z254	鉢	15.8		C		⑥区東		
SD101	1082	140		Z87	壺	14.0		D		①－2		
SD101	1083	140		Z128	深	16.8		C		⑥区東		
SD101	1084	140		Z142	壺	9.8		C		⑥区東		
SD101	1085	140		Z140	鉢	11.5		C		⑥区東		
SD101	1086	140	49	Z167	甕	9.6	9.7	C		⑥区東		
SD101	1087	140	49	Z260	深	12.1		D	ⅡW1A	①－2		
SD101	1088	140		Z141	鉢	11.2						古代須上層
SD101	1089	140		Z103	甕	13.1		C		⑥区東		
SD101	1090		37	B 2	盤			E	ⅡR16・ⅡR17・ⅡR22	②－1	No.あ,No.き,No.に	Ⅳ
SB206	26	119		88	小型土器							
SB206	27	119		82	小型土器							
SB206	28	119		83	小型土器							
SB206	29	119		81	小型土器							
SB206	30	119		85	小型土器							
SB153	31	119		86	小型土器							
SD100	32	119		M 6	小型土器			B	I G17		L	
SD100	33	119		M 4	小型土器							
SD100	34	119		M 3	小型土器			B	I G17			
SD100	35	119		M 2	小型土器			B	I G17		I	
SD100	36	119		M 1	小型土器			A				
SD100	37	119		M 5	小型土器			B	I H6a			Ⅳ
SD100	39	119		M 7	小型土器			A				B
SD100	40	119		M 8	小型土器			B	I G17			

第11表　旧河道土器出土状況一覧　（9）

第3章　遺物各説

第1節　弥生時代後期

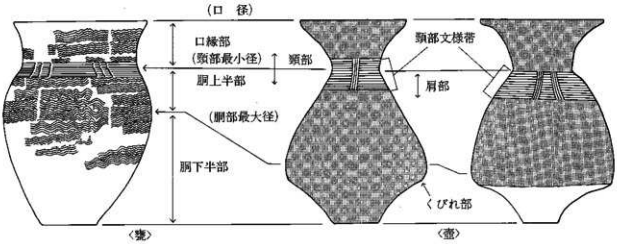
松原遺跡の弥生時代後期の遺物は、箱清水式土器を主体とする。土器の提示方法は、遺構単位のまとまりと旧河道出土土器群とに分け、第2項では集落内の遺構毎に、第3項では旧河道ＳＤ100とＳＤ101のそれぞれについて、各器種毎にまとめて扱う。甕については、成形・調整技法、施文手法の観察表を第12～17表にまとめた。遺物の出土状況については第2章で遺構毎に示した。

1　観察の視点

箱清水式土器の呼称法について簡単に触れておきたい。箱清水式土器には壺形土器、甕形土器、高杯形土器、鉢形土器があり、器台形土器はない（以下、壺、甕のように呼称する）。煮沸具以外は赤彩ヘラミガキを施すことが多く、煮沸具は櫛描文様によって飾られる。櫛描文の施文手法は、佐原真（佐原1959年）、笹沢浩（笹沢1978年）、橋本裕行（橋本1986年）らによって明らかにされてきた「中部高地型櫛描文」が用いられる。この特徴をもって、箱清水式土器群を中部高地型櫛描文系土器と呼ぶ。

壺、甕における各部位の位置と呼称については第58図の通りとする。壺は頸部文様帯をもち、他の部位には赤色塗彩を施すことが多い。甕は胴最大径下位から口縁部にかけて櫛描文が充填される。壺の頸部直線文と甕の頸部簾状文は、施文原体を器面から離さずに１周する施文となり、甕の口縁部および胴部の波状文は、一定幅の施文を行った後、原体を器面から離す施文となる。回転台と櫛描文の施文手法との関連を予察した佐原真は、前者の手法を「畿内型」、後者の手法を「中部高地型」と呼称した（佐原1959年）。櫛描文の施文手法の呼称については、佐原の「畿内型」「中部高地型」という用語を用いる。

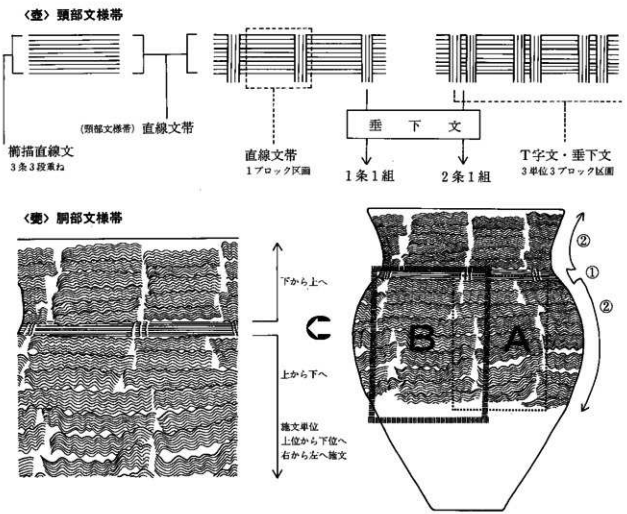
箱清水式土器の櫛描文様とその手法の呼称方法について示す（第59図）。壺の頸部には、櫛描直線文を



第58図　弥生時代後期土器の部位呼称法

多段に重ねる文様帯がみられる。この頸部文様帯を直線文帯と呼称する。直線文帯は同一原体で縦方向に施文する垂下文によって区画される場合があり、この文様帯の総称を「T字文」としてとらえる。T字文は直線文帯を縦に区画する文様であるが、1条で区画する場合と、2条1組で区画する場合とがある。垂下文の数は直線文帯を区画する単位となることから、垂下文の数を「○単位」と呼称したい。2条1組の垂下文が直線文帯を4箇所区画した場合、このT字文は「2条1組4単位のT字文」と呼ぶことにする(第59図)。

甕の文様帯は、頸部の簾状文を境に口縁部と胴部に波状文が充塡される。一見横帯文風に見える波状文の構成は、1条の波状文を一定幅で上下方向に重ねる「中部高地型櫛描文」で、縦構成のブロックが横に連続する。中部高地型櫛描文の施文手法をモデル化したのが第59図である。この場合の施文順位は、①簾状文→②波状文となる。胴部文様帯の施文単位は、施文原体をもった手の動きの範囲と関係する。波状文は手の動きの範囲で上下に重ねられることにより縦方向の重なりとなる。このモデルの場合、上位から下位に向かって波状文を重ねることにより、Aのブロックに文様を充塡する。ブロックAとBの先後関係はA→Bとなり、文様帯は右回りに施文され、土器は左回りに動かされていることが理解できる。中部高地型櫛描文の施文手法には、施文単位の組み合わせ、切り合いの先後関係によっていくつかのパターンがあり、それが施文流儀として系統づけられる。施文順位の類型は第4章第1節第157図に示している。



第59図　文様帯および施文手法の呼称法

2　集落址出土の土器

(1)　竪穴住居址出土土器

SB71（第60，61図1～22：PL．15）

図示した土器は、1～3が壺、4～7が蓋、8が有孔鉢、9が台付甕、10～21が甕である。

7は、灰色を呈し、ゆがみが激しく還元状態で被熱した状況を示す。その要因が焼成時のものか2次被熱かは明らかでないが同様なものは他に例をみない。甕は頸部に簾状文をもつもの（10～13，20，21）と簾状文をもたないもの（14～19，22）に大別される。後者の施文手法は、14が静止部1回の緻内型で、16～18は数回の静止部をもつ中部高地型で行い、いずれも正位の状態で右回りで施文する。第60図22の小型甕は、形態および文様構成から異系統の土器である。①胴中位の最大径部分で強く屈曲し、胴部がソロバン玉状をなす。②口縁部はハケ調整後、ヨコナデを施し、施文を行わない。③胴下半にLR単節縄文施文を行う。①～③の要素は箱清水式土器とは異なる。④波状文は中部高地型で、上位から下位方向に施文する。⑤胴外面にタテヘラミガキ、内面にヨコヘラミガキを施す点は共通要素となる。胎土は、肉眼観察によれば他の土器と変わりない。

SB131（第61図23～27：PL．15）

図示した土器は、23が甕、24が赤彩深鉢、25，26が鉢、27が壺である。25は片口を持つ鉢で、内面に丁寧なヘラミガキを、外面にナデ調整を施し、一次調整のハケを残す。赤彩はしない。24の赤彩深鉢は被熱し、歪みが激しい。胴最大径を上位にとり、口縁部が短く外反する形状は甕と連動している。

SB132（第61図28，29）

図示した土器は28，29双方とも甕である。28は大破片を反転復元した。炉床に敷かれていたもので、2次的に被熱している。

SB133（第61～63図30～51：PL．15）

図示した土器は、30が蓋、31が台付甕、32～35，37が高杯、38が鉢、36，39，40が壺、41～49が甕、50，51が赤彩深鉢である。

蓋30は、外面に対して内面のヘラミガキが荒く、ヘラミガキ調整から壺の蓋が想定できる。煤の付着はない。色調は灰色を呈し、若干の歪みも認められる。

高杯は、鍔状口縁を呈する鍔状口縁高杯（34～35）と、椀形口縁を呈する椀形口縁高杯（37）とがあり、いずれも口径に対して杯部が深い。杯部の立ち上がりが45°前後と急になるところは鉢38も同様である。鍔状口縁高杯は鍔状部分がゆるやかに外反し、明瞭に屈曲しない。

壺の丁字文区画は、1条の垂下文で直線文帯を4単位に区画する39と、2条1組の垂下文で4単位を区画する40がある。39は球胴形を呈すが、頸部はゆるやかに外反し、稜線は認められない。

甕は、①胴最大径を上位にもち、頸部内面に明瞭な稜をもつもの（41～44，48）と、②胴最大径を中位にもち、頸部内面に明瞭な稜をもたないもの（45～47，49）に分れる。41と45は両者の成形技法の差を示すと同時にその共存関係を明らかにする。赤彩深鉢の50はヘラミガキで、51はナデによって胴部外面を調整する。台付甕脚部31と、高杯脚部33の接合は充填技法をとり同様である。

ＳＢ１３４（第63，64図52～59：ＰＬ．15，16）

図示した土器は、52～56が壺、57～59が甕である。

壺の頸部文様帯には、直線文（52）とＴ字文（53～56）が認められる。Ｔ字文は、１条１組（53，54）と２条１組（55，56）とがあり、いずれも直線文帯を４単位に区画する。56は肩部が完形で残存し、下部および上部は水平に打ち欠かれ、上部打ち欠き面は擦って調整される。器台として再利用されたものとみたい。

57は大形の器で、胴最大径を中位にとり、締りの弱い頸部をなして口縁部が弓状に外反する。形態的には壺に近く、文様は甕の構成をとる。成形の特徴としては、胴最大径下位に成形時の静止面があり、内外面の稜となる。同様な成形技法は壺に認められるものである。調整の特徴として甕に見られる内面ヘラミガキを施すことはない。被熱痕跡がなく、煤・オコゲの付着が認められないところからも壺的な用途が想定される。また、胴部下位の内外面に粘土帯を縦に貼り付けた隆帯が１箇所みられる。中期栗林式期の壺に盛行するもので、後期の例は珍しい。

ＳＢ１３５（第65図65～72：ＰＬ．16）

図示した土器は65～68が壺、69が赤彩深鉢、70が甕、71が鉢、72が高杯である。

壺は頸部の括れが明瞭に屈曲するもの（65）と、弱いもの（66～68）とがある。文様帯の施文部位は、前者が肩部に、後者が口縁部から肩部にかけて施す傾向にある。文様帯は、１条１組のＴ字文（65）、２条１組のＴ字文（68）、直線文（66，67）がある。Ｔ字文は65が８単位、68が４単位区画を行う。68は波状沈線による垂下文をＴ字文間に１箇所のみ施文するが、その原体は櫛の１本より太い棒状工具を用いる。65は無彩の壺で、胴部外面にはタテヘラミガキを施し、口縁部内外面には丁寧なハケ後、ヘラミガキを加えない。その口縁部外面にハケを残す手法は、後期前半の壺に求めることができよう。71は無彩の片口鉢で、内外面にヘラミガキを施す。72は鍔状口縁高杯で、口唇部の突起は箱清水式土器の高杯にみられるものと異なり中期の系譜に近い。

ＳＢ１４０（第64図60～64）

図示した土器は60，61が壺、62が赤彩深鉢、63，64が高杯である。63は椀形口縁、64は鍔状口縁を呈する高杯で、いずれも杯部は深い。64は細片を図化した。

ＳＢ１４１（第65図73～75）

図示した土器は、73が壺、74，75が蓋である。蓋の器面調整は、ハケ後ヘラミガキを施すが、ハケ調整痕が残る程度のヘラミガキである。74は天井部に径４㎜の通気孔を１孔もつ。

ＳＢ１５２（第66図76～80）

図示した土器は、76，78が壺、77が赤彩深鉢、79，80が甕である。76は折り返し口縁の無彩壺で、内外面に丁寧なヨコヘラミガキを施す。79は口縁部の外反度が大きく、端部に強いヨコナデを施して段をもつ。甕よりも壺の口縁形態に近い。

ＳＢ１５３（第66図81～88：ＰＬ．17）

図示した土器は、81，82が壺、83が高杯、84が鉢、85が甕、86～88が蓋である。

壺82は図示した部分が完存する。頸部および胴部を水平に打ち欠いたもので、器台として転用されたも

のと思われるが、第64図56のように打ち欠き部分を調整することはない。文様帯は2条1組のT字文を4単位施文し、直線文帯を4ブロックに区画するが、楕描T字文の間に赤彩ヘラミガキ手法によるT字文を施文する。よって、直線文帯は2系統のT字文によって8ブロックに区画される。赤彩ヘラミガキ手法によるT字文は飯山市小泉遺跡等に認められるが、松原遺跡では破片資料を含めて同例のみである。

SB154（第66図89，90）

図示した土器は、89が甕、90が高杯である。89は簾状文をもたない甕で、明瞭な稜がなく緩やかに変化する。90は椀形口縁高杯で、口縁端部が内彎することから古相として位置づけられる。

SB157（第67図91～94：PL．17）

図示した土器は、91が高杯、92が鉢、93，94が甕である。92は折り返し口縁をもつ大型の鉢で、内外面に丁寧なヘラミガキを施す精製鉢である。箱清水式土器では類例が多くないが、長野市四ッ屋，牟礼バイパス遺跡等に散見される。甕93は胴最大径部に稜をもち、肩部から口縁部にかけて大きく弓状に外反する。肩部も口縁部の一部となるタイプで、箱清水式土器の古相に認められる。

SB158（第67図95）

図示した土器95は甕である。肩部から頸部、口縁部とゆるやかに外反するもので、頸部内外面に陵をもたない。文様帯は簾状文をもたず中部高地型施文をとる。

SB172（第67，68図96～105：PL．17）

図示した土器は、96，97が壺、98が高杯、99，100が甕、101～104が甕、105が無頸壺である。

小型壺96は、稜を持たない下膨れ状の胴部をもち、頸部は太頸で、短い口縁部が広口状に外反する。外面はハケ後、丁寧なタテヘラミガキを施す。類例は多くない。97は頸部の屈曲が明瞭で、胴最大径付近に比べて頸部が縮まる。口縁部はアサガオ状に大きく外反するが、胴最大径を凌ぐことはない。

甕は頸部文様帯に簾状文をもつもの（102～104）と、もたないもの（101）があり、前者は頸部括れが弱いプロポーションとなる。成形技法では、101が胴最大径で静止面をもつのに対し、102は頸部で静止面をもつ。技法、プロポーション、文様帯の関連をつかむことができる。101の施文は、原体を静止させながら右回転する中部高地型である。1単位の波状文は左から右方向へ施文し、土器を逆時計回りさせながら左側に文様を重ねることで、右回りとなっている。

103は口縁部外面に文様を施文しない甕で、口縁端部には横方向から刺突列点文を施す。両要素は千曲川流域の箱清水式土器には類例が少なく、後期前半の伝統が色濃く残っているものと言えよう。文様施文は中部高地型、口縁部内面はヨコナデのままでヘラミガキを加えない。

SB202（第68図106，107：PL．17）

図示した土器106，107は甕である。いずれも床面直上からつぶれた状況で出土した。106の台付甕と107の折り返し口縁平底甕には、成形技法上の差が認められる。成形時の静止面が106は頸部にあるのに対し、107は胴最大径に位置する。土器の容量と成形技法の差を考えねばなるまい。折り返し口縁は松原遺跡では珍しい。文様帯の簾状文は4連止めで、類例は松原遺跡では多くない。

ＳＢ２０３（第68図108，109）

図示した土器108，109は壺である。壺108のＴ字文は１条１組で４単位施文し、直線文帯を４ブロックに区画する。壺109は胴最大径下位に静止部をもつが、括れは不明瞭で下膨れ状の胴部になるものと考えられる。

ＳＢ２０４（第68～70図110～127：ＰＬ．18）

図示した土器は、110，111，113が高杯、112，114が鉢、115～117が壺、118～124，127が甕、125，126が蓋である。

高杯110，113は椀形口縁高杯、111は鍔状口縁高杯である。110～114の高杯・鉢はいずれも赤彩ヘラミガキを施すが、外面は110を除きタテヘラミガキ、内面はすべてヨコヘラミガキという技法上の共通志向が窺える。

壺115，116のＴ字文は、２条１組で４単位施文し、直線文帯を４ブロックに区画する。116は無彩の壺で、口縁部内外面はヘラミガキが弱いためハケ調整痕が浮き出ている。胴外面は丁寧なヘラミガキを施しハケが浮かび上がることはない。117は折り返し口縁壺で、胴外面は左上がりのハケ後、丁寧なタテヘラミガキを施すがハケ調整痕は残る。口縁部内外面はヨコナデを施す。

甕の形態は、胴最大径から頸部、口縁部へと稜をもたずにスムーズに移行するものがめだつ（118，119，123）。119，123は胴最大径付近で成形を一旦静止し、静止面から口縁部にかけて一挙に成形する結果、肩部から口縁部が弓状に外反する。121は頸部で一旦静止し、口縁部を外反させている。121の胴文様帯は肩部の２条のみで、胴部文様充填率が他と比べて少ないところから系統を異にする甕とも考えられる。127は胴下位に製作時の静止面を持つ。胴上位外面は波状文を施文し、胴下位外面はハケ後荒いヘラミガキを施す。内面はナデを施す。ＳＢ134-57と同様で火にかけられた痕跡がなく、壺的機能が想定されよう。松原遺跡の後期では一番大きな甕型土器で、器高は推定で約70cmを計る。

ＳＢ２０５（第70図128～132：ＰＬ．18）

図示した土器は128，129が壺、130，131が甕、132が鉢である。

壺128，129は、肩部が直線的な「なで肩状」をなし、無花果形を呈す。文様帯は横描直線文を多段に重ねて施文する。直線文はなで肩状を呈する形態の壺に施文される率が高い。

甕130，131は、口径＞頸最小径・胴最大径となり、深鉢状の形態を示す。頸部には等連止めの簾状文を施す。

ＳＢ２０６（第70～75図133～201：ＰＬ．18，19）

図示した土器は、133～146が高杯、147～165が壺、166～172が鉢、173～179が蓋、180～201が甕である。

高杯は鍔状口縁高杯（133～138）と、椀形口縁高杯（146）とがあり、鍔状口縁高杯が主体となる。鍔状口縁高杯の中には、135のように杯部にゆるやかな稜をもつものがあり、その背景に有段口縁高杯の存在が示唆される。脚部は、長脚（133，134）と、短脚（141，142）とがあり、長脚には二等辺三角形の透し孔が認められるものがある。133，134は鋭い刃物で切り込まれており、４孔あけられている。134の脚部内面の調整手法は、上から下に向かうヨコハケで、倒立技法で成形された事が分かる。脚部と杯部の接合は充塡技法で行われている。

壺は完形に復元されたものがなく、全様を知り得るものはない。Ｔ字文は２条１組（152，153）と、１

条1組（154～158）とがあり、いずれも直線文帯を4ブロックに区画すると考えられる。162の胴内外面には一箇所、隆帯が認められる。163は脚がつく赤彩深鉢で類例は少ない。165はナデ調整の細頸壺で、ハケを残し赤彩しない。163と同様に類例は少ない。

蓋は赤彩（173～175）と、無彩（176～179）とがある。大型品と小型品があり、大型品が赤彩される傾向にある。赤彩蓋が大型壺の蓋として機能したものと想定される。

甕は、①胴最大径から頸部、口縁部にかけて括れが弱く、ゆるやかに変化するもの（180～182）、②胴最大径で括れをもち、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反するもの（183，184）、③頸部内面に稜をもち口縁部が外反するもの（188）がある。①、②は成形時に、胴最大径部分で静止面をもち、同住居跡出土甕の主体となる。189，197～201は台付甕となると考えられ、胴最大径部分に静止面をもつ。190，191は折り返し口縁をなし、190の頸部には籠状文が見られない。いずれも外面に煤の付着はない。

ＳＢ３７９（第75～77図202～216：ＰＬ．19）

図示した土器は202，205～209が壺、203，204，211～216が甕、210が蓋である。壺は大型壺が主体となる。胴部を赤彩するもの（202，209）と、赤彩しないもの（205）がある。208は口縁部外面に赤彩を施さず内面に赤彩を施すもので、後期初頭の吉田式の系譜を引く。同例は頸部の屈曲が他と異なる。頸部文様帯は、1条1組のＴ字文をもつもの（202）と、直線文帯をもつもの（205，206，208）がある。207は胴部に括れ部を持たない小型壺で、胴部外面にはヘラミガキを施す。

甕は胴最大径から頸部、口縁部にかけて、稜をもたずにスムーズに変化する。文様帯は、籠状文をもたないもの（212～214）と、もつもの（215，216）とがある。

(2)　土壙・遺構外出土の土器

ＳＫ７０（第77，78図218～232：ＰＬ．20）

井戸の底から出土した土器群で、破片が主体であるが218，225のように完形、あるいは完形に近いものもある。231，232を除き他はすべて壺である。

壺は赤彩するもの（224～230）と、赤彩せずに丁寧なヘラミガキを施すもの（218～222）とがある。223は淡い赤彩を施す。口縁部が短く直立外反するもの（218，220，224）は、端部が外反することがなく直立ぎみに立ち上がる。223の折り返し口縁壺も同様な形態を示すと思われる。胴最大径下位は218，225，228のように括れ部を有して稜が明瞭なものと、219，221のように稜をもたないものとがある。221は胴下位に焼成後穿孔が認められる。

甕232は胴最大径が上位に位置し、同部分で成形の静止面をもち、明瞭な括れ部となる。口縁部は胴最大径から弓状に外反する。

ＳＫ３０７（第77図217：ＰＬ．19）

217は完形の小型甕である。胴最大径を上位にとり、頸部から口縁部にかけてスムーズに外反し、頸部の括れが弱いプロポーションとなる。文様帯は、口縁部に波状文を3段充填する。羽状文は静止部を持たずに、右回りに一周する最内型櫛描文となる。

遺構外（第78，79図233～247：ＰＬ．20）

図示した土器は233，234，241～245が壺、246が赤彩深鉢、235～237が甕、238～240が壺、247が高杯である。

233は外反した胴下半部が、胴最大径下位で明瞭な括れ部となる。文様は、頸部から肩部にかけて幅広く施文され、直線文を上から下へ5段重ねた後、1条1組のT字文で4ブロックに直線文帯を区画し最後に最下部を波状文で区切る。IF10グリッドから出土した。

241，242は大型壺の口縁部である。241の口縁端部は強いヨコナデによって内彎ぎみとなる。口縁部内外面は、ハケ後に赤彩ヘラミガキを施すことがなく古相の要素を残す。243のT字文は2条1組で、8単位施文する。いずれも集落内包含層出土土器である。

3　旧河道出土の土器

旧河道SD100・101の集落側斜面部からは廃棄された土器が多量に出土した。整理作業では、一括性が高いと想定されるこれらの土器群の接合に充分時間をかけることによって器形復元に重点を置いた。甕の完形復元率はかなり高くなったものの、壺・高杯においては完形に復元できるものが少なかった。両者の廃棄のされ方が異なるためであろうか。ここではSD100・101出土遺物を器種毎に提示する。

(1)　旧河道ＳＤ１００出土土器

①　壺（第80～87図248～316：ＰＬ．20～24）

第80～87図は、頸部から肩部に櫛描文様帯をもち、文様帯以外は赤色塗彩を施す箔清水式土器の広口壺である。形態、文様の特徴に分け提示する。

＜プロポーション＞

第80図248～256は、胴下半部の括れが緩やかで、明瞭な稜線を持たない。頸部の括れも緩やかで肩部は「なで肩」状をなす。胴最大径に対して頸部までの器高が長い縦長の形状は中期・栗林式土器の系譜上にある。253は胴下半の括れは緩やかであるが、頸部までの器高に対して胴最大径比が高い。

第81図260，262は、縦長無花果形の壺に対して球胴志向タイプの壺で、頸部までの器高に対して胴最大径比が高い。胴下半部の括れは明瞭な稜を形成し、球胴志向であるものの「なで肩」状をなす点が特徴となる。

第80～82図は、器形の全容を想定できるものを中心に集めた。その型式は、頸部と胴下半部の屈折が不明瞭で、肩部から胴上半にかけて「なで肩」状をなすものが主体を占める。一方、第82図272～274のように肩部が張り出し、球胴志向をとるものが共存する。器形の全容を確認できないものも多い。第80図254は底部を打ち欠きする。口縁部を欠損するものも一定量確認できる。壺の廃棄のされ方、転用方法の一端を示すものだろうか。第82図266は、胴最大径部分に一箇所隆帯を持つ。その手法は厚さ3～4㎜の隆帯を貼り付けた後、赤彩ヘラミガキを施し、内面にもタテユビナデを施す。また、第80図255、第81図264は胴部に焼成後穿孔が認められる。焼成後穿孔、隆帯は壺の機能を考える上で重要な要素となろう。

＜頸部文様帯＞

第80～83図の文様帯は、櫛描直線文を多段に重ねて構成される。第81図260、第82図265、第83図278～280は2条1組の垂下文で、第80図248，253、第82，83図266～277は1条1組の垂下文で櫛描直線文帯を区画するT字文である。266～272は4単位のT字文を施文し、直線文帯を4ブロックに区画する。274～277はT字文の施文単位が多く、274（5単位）、275（6単位）、276（10単位）、277（8単位）となる。276、277は垂下文によるブロックの区画が多く、文様構成のあり方が擬籠状文に通じる。

第83図278～280は、2条1組のT字文で、垂下文の単位は、278（5単位）、279（3単位）、280（4単位）となる。第80図250～252、第81図263，264、第83図281～285はT字文をもたず、櫛描直線文のみで構成される。松原遺跡の直線文、垂下文は同一原体の櫛（櫛歯状工具）で施文するのが基本であるが、他の

原体を用いた施文も見られる。第82図271は7本のヒゴを結束させた櫛描直線文帯に、彫りが深い4本のヘラ描沈線の垂下文を施文する。266は櫛描直線文帯の上下に、1条の沈線文を施すことによって文様帯を区画している。第84図287の頸部文様帯は、緩やかに結束された2つの櫛歯状工具によって櫛描簾状文が2条施文され、鋸歯文が付加される。鋸歯文はヘラ描沈線で施文し、櫛の刺突文で充填する。第84図288～293は、横位の綾杉状文の破片で、頸部文様帯以外は赤色塗彩を施す。288は横位沈線区画内に斜位のヘラ描沈線を、289は櫛描斜線文を充填する。

第82図266，271，第84図287，288～293に見られる沈線文、ヘラ描沈線文は前段階の施文手法の伝統を残すが、口縁部の調整技法にも少数ながら前段階の様相を示すものがある。第83図277は口縁部外面を赤彩ヘラミガキをせずに、内面は赤色塗彩を施す。278は口縁外面にハケを残し、内面をヘラミガキ調整する。

＜大型壺＞

第85～87図300～316は器高50cm以上の大型壺で、縮尺1/6で図示した。300，301，304，305は、胴下半部に明瞭な括れ部を持つ壺である。形態は、胴下半部が逆ハの字状を呈して括れ部で稜線となり、胴部上半が内彎ぎみに立ち上がる。肩部は頸最小径と括れ部の中間点で直線的に立ち上がっている。300，305の内面調整のハケメ方向は、括れ部までが横方向、胴上半部中間までは斜め左上がり方向、上位頸部までが横方向をなす。大型壺の頸部までの製作には、3段階の成作過程がありそうである。303、307、308は、胴下半部に括れ部を持つものの、その稜線が明瞭ではない。胴下半部はやや内彎ぎみに立ち上がる。302は胴最大径に対して、括れ部と頸部の間の胴上半部の器高が通常より長い長胴壺で、これまでの箱清水式土器に類例を知らない。推定される器高は約80cmとなる。306は、胴部径に対して頸部径が著しく細頸の壺であるが、類例は多くない。

頸部文様帯の櫛描直線文は、300，302～304，306が4段、301が5段、303が7段に、いずれも上位から下位方向に重ねて施文する。T字文は、300，307が1条1組、301，303，304，306が、2条1組で、306が4単位、301，307が5単位、300，303が7単位に施文し、直線文帯を各ブロックに区画する。306のT字文は4単位中の3単位が2条1組、1単位が1条1組の施文である。

② **赤彩深鉢**（第87～89図317～351：PL．24）

全形を知り得る個体は、第87図317～319の3点である。広口を呈する深鉢で、外面及び口縁部内面に赤彩ヘラミガキを施すことから、「赤彩深鉢」と呼称する。赤彩深鉢は胴内面に赤彩を施さずに、丁寧なヘラミガキを施す。このことにより、第88～89図337～351が赤彩深鉢の底部と判別することが可能となる。337～346の平底と、347～351の脚台付のものが認められるが平底が多い。

赤彩深鉢は、その外面に煤の付着が、内面にオコゲ状の黒色化が観察される。317～323，327，330～334，336～341，347，349，350，351に確認できる。胴外面の煤は、赤色塗彩の彩色を変化させるものではなく、頸部下半の胴部に若干付着し、胴下半が強く被熱した痕跡はない。胴内面のオコゲ状の黒色化は、器形の全体像が判明する318～322，327、底部337～345の観察によれば、胴中位より若干下部から頸部にかけて認められる。常時火にかけたものではないようである。

第85図336はその大きさにおいて例外的な存在である。胴内面は、ハケを残しヘラミガキを施すことはない。内外面に薄い煤，オコゲが確認できることから、機能は同様であったと考えられる。336は調整手法，色調，胎土から347と同一個体と想定され、脚台付で胴最大径を上位にとる型式となる。347はその脚台部が欠落した底部で、擬口縁の形態から、脚台部と胴下半部の接合技法が明瞭に観察できる。中空の脚台部外面に粘土ひもを巻き上げて胴下半部を成形した後、中空部内面に粘土ひもを1本巻き、脚台部と胴

部の接合面を内面上部からおさえる。さらに、その中空部にクサビ状のホゾを充填し、おさえを強化する。349の脚台は、外面に赤色塗彩を施すが、被熱によって剝離が著しい。外面上位には煤が付着する。第89図350の内面には全面的に炭化物がコールタール状に付着する。

③　無頸壺・鉢・小型土器（第89図352～365：ＰＬ．24）

第89図352～356はいわゆる無頸壺で、内外面に丁寧なヘラミガキを施す精製品である。蓋とセットになることが予想されるが、つまみを持たない扁平蓋の出土例は松原遺跡の当該期資料にはない。354は内外面に丁寧なヘラミガキを施すがハケ調整痕が残る。357～359は鉢の一類型であるが、357は無頸壺との判別がつきにくい。片口を持つ鉢で、外面はヘラミガキ、内面はハケ調整でヘラミガキを施さない。358、359は、丁寧な調整を行うコップ型の鉢である。358は内外面軽いタテケズリ後ヘラミガキを、359はナデを施す。

360～365は、小型土器である。360，361は形態的には358，359に類似するが、軽いケズリ、なでつけ状のハケを施す粗製品である。口縁部はヨコナデを施さないため凸凹が激しい。365は粘土ひもを巻き上げた後、縦方向に指ナデをして成形する。仮器としての機能が想定される。362～364は甕を範型とした小型土器である。363，364は一時的に火にかけられた痕跡がある。363は内面に、364は内外面に煤状の黒色化が観察される。なお底部にベンガラの痕跡が確認される。

④　高杯（第89～92図366～434：ＰＬ．24，25）

全形状を知り得る個体は少ない。366～386は杯部の形状が明らかなもの、387～434は脚部の形状が明らかなものをまとめた。

第89～90図366～378は鍔状口縁高杯である。鍔の形態に型式差が読み取れる。366，367は鍔状部分が杯部内面で明瞭な稜線をもって直線的に屈曲する。杯部と鍔状部接点は、変換点にヨコナデを施すことにより、杯部がやや内彎ぎみとなり鍔状部が明瞭に屈折して外方へ張り出す。368～371は杯部内面の稜が明確化傾向にある。372～377は杯部内面の稜が明瞭でなく、鍔状部分は外反状を呈す。型式的に367→369→377という変化が読み取れる。第90図379，380は楕形口縁高杯である。杯部端部が内彎するもの（379）と、直立するもの（380）とがある。いずれも小型の高杯である。第90～91図381～386は有段口縁高杯である。杯部に明瞭な段を持ち、口縁部上位が外反するタイプ（381～383）と、形態的には鍔状口縁に類似しながらも、杯部上位部分で不明瞭な立ち上がりがあり、口縁部上位が外反するタイプ（384～386）がある。後者の有段部は稜を形成せずに、緩やかな変換点となっており、意識して観察しないと鍔状口縁高杯に分類してしまう。鍔状口縁高杯と有段口縁高杯の折衷として捉えることも可能である。375，385は、内面に煤の付着が観察され、二次転用が考えられるが、赤彩深鉢と同様に高杯がまれに火にかけられることがあったかもしれない。特に385は、内面のみが強く被熱し、赤色塗彩がはげ落ちて青灰色に変化している。外面の赤色塗彩は残存する。二次転用の用いられ方として興味が持たれる。

第91～92図387～434は、高杯の脚部である。脚部と杯部の接合には充塡技法が用いられている。429，431，433はホゾ状の粘土塊を、403，404は円版状の粘土塊を充塡する。後者では杯部の底面を成形した後、底部を穿孔しそこに粘土塊を充塡することによって、脚部と杯部の接合を強化している。388，391，401は脚部内面がナデ調整され接合技法が観察できないが、充塡技法が用いられているものと想定される。

杯部内面の底部には、377，398，403，418，425，426，430，431，433に剝離が観察できる。剝離は、上位から敲打した状況を示し、底面が２～３㎜　抉れている。高杯の使用方法の一端を示していると言えまいか。435は高杯に分類したが、台付の赤彩深鉢である。

⑤ 鉢（第93図436～465）

箱清水式土器の鉢は逆ハの字状に立ち上がる小型の鉢で、口縁部が直線的に立ち上がり内外面に赤彩ヘラミガキを施すものが多い。463，465は例外的存在である。口縁部の立ち上がりは直線的なもの（436，437，447，448）と、内彎ぎみなもの（438，445）とがある。弥生中期末に見られる鍔状口縁鉢、内彎口縁鉢は認められない。鉢類が火にかけられた痕跡はない。

⑥ 有孔鉢（第93，94図466，467，494～498：PL．25）

逆ハの字状に立ち上がる鉢で、底部に1.5～2㎝大の焼成前穿孔が認められる。内外面には丁寧なヘラミガキを加えるが、赤色塗彩を施すことはない。法量は口径20㎝前後で一定しており、赤彩鉢よりもひとまわり大きい。内彎ぎみに立ち上がるもの（495～498）と、直線的に外反するもの（466，467，494）とがあり、前者が主体となる。粘土帯を口縁端部外面に貼りつけ折り返し口縁を呈するもの（498）は例外的存在である。調整は、赤彩鉢と同様に丁寧なヘラミガキを施す。内外面に被熱痕跡、削痕等は観察できない。495の内面上位にはオコゲ状の黒色化が淡く観察できるが、例外的な存在であり、内外面に煤、オコゲが観察できないものが多い。

⑦ 蓋（第94図468～493）

つまみをもつ蓋で、体部はハの字状に広がる。赤色塗彩を施す赤彩蓋（468～473，490）と、無彩蓋（475～489，491～493）とがあり、後者が主体となる。天井部に焼成前の孔をもつものともたないものがあり、穿孔については図示した。径4～8㎜の1孔が主体であり、多孔は例外的存在である。調整は、内外面にハケ後ヘラミガキを施す。特に内面は甕と同様に丁寧なヘラミガキを施す。

蓋の内面には使用の痕跡が観察できるものもある。淡く黒色化するもの（468，469，472，475，478～480，483，489，490，492）と、煤状の黒色物が全体にこびりつくもの（476，481，482）があり、他（470，471，473，477，482，485～488，491）については、痕跡は観察できない。蓋の用途も多岐に渡っていたようである。483，489は口縁端部付近で外反する型式であるが、内面の淡い黒色物質が付着する位置に差が見られる。483は口縁部の外反する変換点から内側のみに、489は外側のみに観察できる。483が落とし蓋として、489の外反蓋が甕に覆いかぶせられるようにかけられていたのであろうか。

赤彩蓋には474のような大型のものと、490のような小型なものが見られる。490は口縁端部に2孔の紐通し孔が見られ、赤彩深鉢とセット関係にあることが想定される。内面が淡く黒色化する。大型の蓋474は壺の蓋と考えられる。赤彩蓋は赤彩しないものに比べて大型化傾向にある。

⑧ 甕（第95～106図499～644：PL．25～34）

旧河道からは多量の甕が出土し、箱清水式土器の甕の様相を知る上で良好なデータとなったため、本報告では実測図版、写真プレートに多くの甕を提示するように心がけた。成形・調整技法、文様施文手法については、別表「甕型土器成形・調整観察表」（第12～17表）にデータの提示を行う。本章ではその概要を示すことにし、詳細については第4章1節「中部高地型櫛描文系土器群の理解」で触れることにする。

ア．畿内型櫛描文施文甕（第95，96図499～511：PL．25，26）

畿内型櫛描文を施文する甕を集めた。畿内型櫛描文は、原体を器面から離さずに右から左へ施文を行う。中部高地型に対する畿内型の割合は8％にすぎない。

畿内型櫛描文を施文する甕は、501，507のように胴最大径を中位付近にとり、頸部の括れが弱い深鉢タイプ型の器形が標準となる。畿内型櫛描文は、胴最大径よりも上位に波状文が3～5条施文され、中部高

地型櫛描文施文甕よりも条数が少なく施文範囲も狭い。また、波状文の重なりが少なく、波状文間の隙間が大きいことも特徴のひとつとなる。

イ．短節波状文施文甕（第96図512～518：ＰＬ．26，27）

波状文は、施文原体を器面に対して上下させながら横方向に施文する。その波状は、中部高地型においても畿内型においても数回繰り返されることによって波状文となる。ここでいう「短節波状文」とは、中部高地型櫛描文に属し、施文幅が短く、原体をすぐに器面から離してしまうために、波の山が１～２単位にしか至らない波状文をさすことにする。

短節波状文を施文する甕の形状は、512，515のように深鉢タイプのものと、516，518のように球胴志向のものとがある。512の形状は、畿内型櫛描文を施文する甕の形状に通じるものがある。同施文は、器を正位にすえた場合、手の運動法則にのっとって、左から右へ短く描かれることにポイントがある。さらに、施文方向は右から左へ時計回りに施文されている。同施文を行う甕の文様帯には、簾状文をもつものもあるが、その率は低い。また畿内型櫛描文同様に全体における率はかなり低い。

ウ．簾状文をもたない甕（第97図519～532：ＰＬ．27，28）

畿内型擬描文施文甕、短節櫛描文甕以外で、簾状文をもたない中部高地型櫛描文施文土器を集めた。容量的に532の大大サイズ、519の大サイズ、521の中サイズ、530の小サイズとがある。522，525，526は台付甕となる可能性もある。

大大サイズから中サイズでは、文様施文部位が胴最大径下位まで及んでおり、その条数も６～10段以上と、波状文施文部分の占める割合が高くしかも密に施文される。一方、小サイズでは527，531のように施文部位が胴最大径上位にあり、条数も少なく、畿内型櫛描文の施文法に近い。520はいわゆる折り返し口縁の、522は面取りされた口縁端部に横方向から刺突文を施した甕である。522のような刺突文は類例が少ない。

エ．簾状文施文甕（第98～105図533～612：ＰＬ．28～34）

松原遺跡では、頸部に簾状文を施文する甕が71％を占めその主体となる。ここでは器形に注目してまとめてみることにする。

＜胴最大径中位型＞（第98～101図533～578：ＰＬ．28～30）

胴最大径を器高の中位付近にとる甕を胴最大径中位型と仮称する。第98図536～538のように器高に対して口径・胴最大径が大きく、頸部が括れることによって球胴化傾向を示すものを球胴タイプとする。第100～101図562～566のように器高に対して口径・胴最大径が小さく、長胴化傾向を示すものを縦長タイプとする。第98図540～542，第99図547，548，551，第100図557，560，第101図572～574は球胴タイプであるが、法量、プロポーションを考慮するならば、台付甕となる可能性が大きい。台付甕における球胴タイプとして位置づけておきたい。胴最大径中位型の甕は、内外面に明瞭な稜が認められずに、形態がスムーズに変化するものが主体となる。第100図556は頸部が明瞭に屈折し内面に稜をもつ。製作段階において、頸部で静止面をもつことが理解できるが、当例のように製作段階を理解できる例は少ない。

文様の施文手法についてみると、第98図533～535，第100図544は中部高地型櫛描文施文ではあるが、畿内型櫛描文施文土器との関連が想定される。533～535，554の文様施文は、胴最大径上位部分に限られ、その波状文の横帯段数も少ない。544の波状文の重なりは隙間が大きく畿内型櫛描文施文甕と共通する。

＜胴最大径上位型＞（第102，103図579～593：ＰＬ．30～32）

胴最大径を器高の上位付近にとる甕を胴最大径上位型と仮称する。第102図579～587は胴最大径から頸部内外面付近にかけて明瞭な稜をもつもので、製作時の静止面が観察できる。胴最大径部分で静止することによって同部分に稜をもち、肩部から口縁部を弓状に外反させるタイプ（579，585）と、頸部最小径部

分まで製作し、頸部の稜から口縁部を外反させるタイプ（587）とがある。第103図588～593は内外面に稜が確認できず、製作時の静止面が明らかではない。

＜深鉢型＞（第104，105図594～605：ＰＬ．32，33）

頸部の締まりが弱く広口を呈する甕で、口径＞胴最大径、頸部最小径≦胴最大径をなし、頸部最小径と胴最大径の数値が近い形態を深鉢型と仮称する。胴最大径の位置はその中位にとるものが多い。先に提示した胴最大径中位型・縦長タイプと比べると、器高に対する頸部最小径、胴最大径の比率は大きい。口径は外側に張り出すことによって頸部は広口化し、胴部も頸部に対して張り出さない。深鉢型は596～601のように器高20cm前後の小型品にみられる傾向にある。

深鉢型の甕は、胴最大径中位型と同様に内外面に明瞭な稜が認められず、器形がスムーズに変化するものが主体となる。胴最大径と頸部最小径の数値がほとんど変化ないことから、胴最大径から立ち上がるように肩部がのびて口縁部が外方に開く。肩部から口縁部は、頸部の屈曲が甘いために、口縁部と胴上半部（肩部）の区別が明瞭でなく、胴最大径から緩やかな弓状となる。製作段階は、胴最大径で一担静止し、胴上半部から口縁部にかけて一挙に成形していることが603等で理解できる。深鉢型は、頸部内外面に大きな変換点がなく、弓状の口縁部を形成する。

オ．台付甕（第106図616～644：ＰＬ．34）

これまで示したアーエについては安定した平底を呈する甕である。中部高地型櫛描文を施文する台付甕は、616～618のように器高20cm前後を標準とし、さらに小型なものと（621）、大形なもの（622～624）とに別れる。中部高地型の台付甕は平底甕に対して法量的に小型品であることが特徴となる。616～627に胴部を、628～644に脚部を提示する。623～627は脚台の有無は不明であるが、胴部の形状から台付甕と判断した。胴部の形状は、頸部の締まりが弱く縦長で深鉢型を呈する616～622と、扁平な形状を呈する623，624とがある。成形技法は、616～620が胴最大径部分に静止面をもち、ゆるやかに口縁部が立ち上がるのに対して、622，624は頸部に静止面をもち、稜を形成して口縁部が大きく外反する。胴部と脚部の接合技法は、616に見られるように充填技法を用いているものとそうでないものとがある。使用法に関しては、いずれも火にかけられたことが想定され、胴最大径上位に煤の付着が観察できる。内面は616，617，623で胴上位に黒色化が観察できるが、618～620，622では黒色化、オコゲ等は観察できない。火にかけても内容物は異なっていたらしい。脚台は、脚部内面に飛び出た充填の粘土をそのまま残すタイプ（628，632）と、その回りにナデを施すタイプ（629，630）とがある。635～637，639～641は充填技法とは異なった接合技法が想定される。

(2)　旧河道ＳＤ１０１出土土器

①　**壺**（第107～110図645～672：ＰＬ．35～37）

第107～110図は、頸部から肩部に櫛描文様帯をもち、文様帯以外は赤色塗彩を施す箱清水式土器の広口壺である。プロポーション、頸部文様帯、大型壺の観点で提示を行う。

＜プロポーション＞

第107図646，647は、頸部までの器高に対して胴最大径が大きい球胴志向タイプの壺である。胴最大径と括れ部がほぼ一致し、稜をもって明瞭に括れる形状を示す。第81図260，262と同様で「なで肩」状をなすことが特徴である。内面の調整は、括れ以下がナデ、括れ以上が左上がりハケを施し、括れ部にヨコナデを施す。このことからも、括れ部に成形上の静止面があり２段階成形が行われていることが理解できる。649は胴最大径と括れ部の高さが異なり、やや縦長のプロポーションを示す。胴最大径と括れ部の数値がほぼ等しいため、肩が張った形状をなして無花果形というよりは球胴化志向となる。

645，648，655，656は、括れが不明瞭で胴部は無花果形に近い形態を呈する。645，656は、胴下半部に静止面の痕跡を残すことから、胴部成形に2段階成形が行われていることが理解できる。第108図655は静止面の痕跡が見られない。第107図645～649の頸部は647，649内面に若干の稜が観察される外は変化がゆるやかである。松原遺跡の壺の口縁部は、頸部付近が明瞭に屈折せずに弓状に大きく立ち上がるが、甕も同様な頸部形状をとるところから、壺と甕の形態、成形技法に共鳴現象を読みとることができる。

＜頸部文様帯＞

壺の文様帯は頸部に集約させる。文様帯の多くは櫛描直線文を多段に重ねた構成をとり、同文様帯を櫛描垂下文によって縦区画するT字文が多く認められる。645は3条の655，656は4条の櫛描直線文を重ねて構成される。645，655，656は赤色塗彩を施さず、文様、形態ともに古相を示す。646～648は1条1組の垂下文で、646，647は4単位の、648は5単位のT字文を施す。直線文と垂下文は同一原体である。

第108図657～659は、頸部文様帯に櫛描文ではなく、並行沈線文が用いられる。657は7本の並行沈線文を擬簾状文風に施文するが、擬簾状文は静止部がそろっているところから、原体は太い棒を櫛状に結束していることが想定される。同施文は、簾状文と同様に原体を数回静止させて施文するもので、原体を器面から離すことはない。擬簾状文下部には、ヘラ描沈線文が付加されており、全体像はつかめないが鋸歯文が付加されるものと考えられる。658，659は並行沈線文を施文するが、その全体像はつかめない。並行沈線文を施文する壺は、口縁部内外面の調整にも特徴がみられ、657は外面にヨコハケ、内面に赤彩ヘラミガキを、658は外面にタテヘラミガキ、内面に赤彩ヘラミガキを、659は内外面ヘラミガキを施す。文様構成、赤彩される部位に吉田式土器の要素を持つ。

第108図660は、長野盆地南部では特異な文様形態として位置づけられる。頸部文様帯は、櫛描波状文を4条上から下方向へ多段に重ねているが、波状文のみで多段構成する例は稀である。波状文帯は、2条1組の垂下文で区画されるが、垂下文の下端は1/4円弧文風に左側に回転している。その組み合わせの形状から、ここではJ字文と呼ぶことにしよう。J字文の中核分布エリアは中南信地方であり、南からの系譜を考えることが可能であり、また、磯内型櫛描文系甕の系譜を考える際に重要であろう。661は赤彩された壺の頸部文様帯の破片で、ヘラ描沈線文による綾杉文が想定される。

＜大型壺＞

第109，110図663～672は、器高50cm以上の大型壺を中心に提示する。縮尺は1/6で図示した。663～665は、663，664が60cm大の、665が70cm大の器高が想定される。器形は、663が胴最大径を中位とする卵形胴を、664，665が下位にとる無花果形をなし、括れ部はゆるやかに変化し稜線は明瞭でない。

663，664の残存状況は、図示した部分がほぼ完存する。663の口縁部は打ち欠かれている。665は胴が乾燥・焼成時にやや扁平化しているために90度回転した状況で2方向から図示した。頸文様帯以上の口縁部を打ち欠き、端部内側を擦り込んで調整を行うことによって水平面を形成している。胴部・底部などに焼成後穿孔は認められないが転用土器棺と想定している。666の甕底部は、胴最大径下位で水平に打ち欠き、底部に径6cmの焼成後穿孔を施す。665付近から出土したものでセットで本来はセットで使用されたものと想定している。写真図版PL50では同土器と0歳、5歳、8歳の子供を比較した。

第110図667～670は括れ部がやや明瞭化し、669，670は稜線が明確となっている。670の胴括れ部には1箇所隆帯が確認できる。弥生時代中期・栗林土器にみられる隆帯に比べ、張り付ける粘土が少ないためにめだたないが、2～3㎜の盛り上がりとなる。内外面双方から粘土を張り付けており、縦に亀裂が入っている。

頸部文様帯の櫛描直線文は、667が4段、663，664，669が5段に、いずれも上位から下位方向に重ねて施文する。T字文は、663，667，669いずれも1条1組で、663が6単位、667が5単位、669が4単位に直

線文帯を区画する。

② 赤彩深鉢・高杯・その他（第110，111図673～689：ＰＬ．37）

＜赤彩深鉢・無頸壺＞

赤彩深鉢の673～678は、その形状および成形技法は甕と同様であるが、赤彩される点で甕と区別される。箱清水式土器の赤彩器種は通常火にかけられることはないが、赤彩深鉢に限っては火にかけられることは前述した。673～677の外面にはすべて煤の付着が確認でき、内面にもオコゲ状の黒色化が観察される。内面にみられる黒色化は、674，676では胴下半部の1/2付近から頸部にかけて、677は底面から３～４cm上位付近から頸部にかけて観察できる。甕のオコゲが付着する位置に黒色化が観察されないところから、煮沸した内容物が甕とは異なっていたのかもしれない。679は無頸壺で口縁端部が内彎する。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施し、外面のみを赤彩する。その形状は第89図355と類示する小型品で、無頸壺の小型品とするか鉢の一類型とするか判断に迷うところであるが、形状と赤彩技法のあり方から無頸壺としておく。

＜高杯・有孔鉢・ミニチュア＞

高杯は鍔状口縁高杯（680，681）と有段口縁高杯（682）とがある。鍔状部分の内面屈曲部は、680が強いヨコナデが施して稜を持ち水平ぎみに屈曲するのに対して、681は稜を持たずゆるやかに外反する。680→681という型式変化が想定される。682は碗形の口縁部が有段部で外反する形態をとり、有段高杯381～386（第90，91図）と比較した場合386に近い。脚部は箱清水式に通常みられるサイズのもの（683，686，687）と低脚のもの（684，685）がある。685は脚部に対して杯部の比率が大きくなることが想定され、弥生中期から系譜が求められる低脚高杯になるものと考えられる。688は有孔鉢、689はミニチュア土器である。

③ 甕（第111～114図690～720：ＰＬ．37～39）

ア．簾状文をもたない甕（第111，112図690～695：ＰＬ．37，38）

頸部に簾状文をもたない甕を第111，112図に図示した。同類型の甕はその多くが頸部の締りが弱いという形態上の共通点があり、690を除いて、胴最大径を上位にとる。690，691は口縁部から胴最大径下位に至るまで、櫛描波状文を重ねて充填している。いずれも中部高地型の梅描文であるが、一回の施文の長さが長いために、撚り型の梅描文のようにも見える。各ブロックの施文は690では上から下方向へ、下から上方向へと交互に施文するが、691ではすべて上から下方向へ施文を行う。692～695はいずれも中部高地型の梅描文で、波状文間に隙間がみられる。692，695は一回の施文が長く、693，694は短い。いずれも器高20cm前後の小型品である。

イ．簾状文施文甕（第112～114図696～719：ＰＬ．38，39）

＜胴最大径中位型＞（第112，113図696～698，704，705：ＰＬ．38）

口径と胴最大径の差が小さく、胴最大径を胴中位付近にとる。内外面に明瞭な稜が見られずに、胴部から口縁部にかけてスムーズに変化する。697，704，705では胴最大径付近に変換点があり、同付近で製作段階の静止が考えられる。698は変換点が頸部付近にみられ、静止面が頸部に位置する。梅描波状文はいずれも中部高地型で、696はその一回あたりの施文単位が長く、698は短い。

＜胴最大径上位型＞（第112，113図699，700，706～711：ＰＬ．38，39）

胴部最大径を器高の上位付近にとる。胴部最大径から口縁部の内外面に明瞭な稜をもたずにスムーズに変化するもの（699，700，704，705，707，708，711）と、内面に明瞭な稜をもつもの（706，709，710）と

がある。製作段階の静止面は、699，704，705，709では胴最大径部に、700，706，710では頸部付近にあり、前者では胴最大径部からゆるやかに口縁部化するに対して、後者では頸部が明確になり、口縁部が胴部と分化して長くのびる傾向にある。櫛描波状文はいずれも中部高地型櫛描文であるが、一回の施文が長い例（699）と、短い例（709，710）とがある。710は一回の施文で波状文の波が1～2回繰り返すのみの「短節波状文」である。一回の施文は、土器を正位にすえた場合、左から右方向に描きその施文回転方向は時計回りとなっている。短節波状文施文壺で籠状文をもつものは少ない。

＜深鉢型＞（第114図712～716：PL．39）

712～716は、頸部の締りが弱く広口を呈するもので、胴部最大径をその上位にもつ。714，715のように頸部最小径と胴部最大径の数値が近いものと、713，716のように胴部最大径がやや大きく胴が張り出す形態のものとがある。成形段階の静止面は714，716では胴最大径部に、712では肩部に、713では頸部最小径に位置する。口縁部は静止面からゆるやかな弓状となるが、714，716では胴最大径より上位が口縁化していることになる。

中部高地型櫛描文の施文は、712～714が右から左方向に、715～716が左から右方向へ描き、時計回りに重ねて施文する。

(3) SD100・101　追加資料

第114～116図721～748に提示する資料は、SD100，SD101の整理作業において遺物図版作成後明らかになった資料で、本来ならば前項、(1)旧河道SD100出土土器、(2)旧河道SD101出土土器の中で提示しなくてはならないのだが追加資料とする。よって、特に意図があってまとめたものではない。

① SD100出土追加資料（第115，116図732～736，744～746：PL．40）

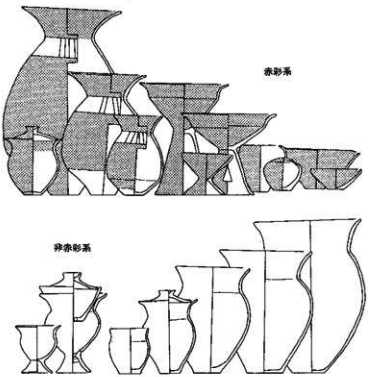
壺（732）、赤彩深鉢（733）、甕（736）、台付甕（734）、鉢（735）、蓋（744～746）を追加する。732は括れの不明瞭な壺であるが、器高20cm前後の小型壺は二段階成形をしなくても成形が可能なため括れが不明瞭なものが多い。胴部および口縁内外面は無彩で丁寧なヘラミガキを施す。頸部文様帯は直線文を3条、上から下方向に重ねて施文し、2条1組のT字文で、4ブロックに直線文帯を区画している。734は小型の台付甕である。胴最大径部に静止面をもち、肩部からゆるやかな弓状の口縁を形成する。櫛描文は上から下方向に中部高地型櫛描文を施文し、その後、頸部に直線文を施文する。735はコップ型の鉢で、内外面にナデツケ状のハケを施し、口縁端部をヨコナデする。ナデ等で調整されることはなく、粗製品である。被熱痕跡はない。コップ型の類例は少ないが、ミニチュアの項で提示した第119図39と関連があるのかもしれない。甕736は深鉢型を呈し、胴最大径を上位にとり、成形段階においても同部分が静止面となる。静止面より上位の肩部からゆるやかに弓状に外反し口縁部として立ち上がる。同例には煮沸痕跡が認められない。蓋746内面は付着物によって黒色化する。

② SD101出土追加資料（第114～116図721～731，737～743：PL．40）

壺（725～729，742）、高杯（730，731）、甕（737～740，743）、台付甕（741）を追加する。壺726は広口の無花果形をなし、括れ部には稜がなくゆるやかにカーブする。肩部は「なで肩」状となり、頸部、口縁端部にも大きな変換点がなく器形全体がスムーズに変化する。頸部文様帯は、7本のひごを連結した簾状工具によって上から下方向に直線文を重ねている。直線文帯には図示した1箇所のみにT字文を弱く施文する。T字文は直線文と原体が異なり、直線文を施文した簾状工具のひごを3本ゆるやかに連結し施文を行っているため、T字文は弱く、3本の直線がそろっていない。T字文部分が正面として位置づいていたで

あろうか。729は口縁部内面のみが赤彩される壺で、頸部文様帯は沈線によって区画される。742は括れ部をもたない球胴壺で、胴部外面にハケ、口縁部外面にヨコナデを施した後、丁寧なタテヘラミガキを施す。内面は口縁部にナデ、胴部にハケを施す。

730，731は鍔状口縁高杯である。731の杯部底面には敲打痕によって剝離が認められる。736～740は簾状文を施文する中部高地型櫛描文甕であり、743は無文ヘラミガキ甕である。737，738は頸部の括れがゆるやかで胴最大径を中位にもつ深鉢型であり、739，740は口径と胴最大径がほぼ等しく、胴最大径を中位にとる胴最大径中位型である。文様は、簾状文を先に施文し波状文を後で中部高地型に充塡する。波状文は密に重ねて充塡するタイプ（738，739）と、重ねながらも波状文間に隙間のできるタイプ（737，340）の二者が見られる。743は内外面にヘラミガキを施すが煮沸痕跡は観察できない。



第117図　箱清水式土器群

747，748はⅡV18・22グリッド出土の高杯である。748は内彎ぎみに立ち上がった杯部が有段部と外方に外反する。その形状は集落域内出土の高杯の中で最も新相を示す。

(4)　甕形土器成形・調整観察表（第12～17表）

箱清水式土器の甕については、その型式内容が不明な点が多い。松原遺跡の調査では完形率の高い甕の一群を提示できるため、その形成・調整について第12～17表に観察表としてまとめることにした。観察表でまとめたデータを用いて「第4章第1節2　中部高地型櫛描文を施文する後期甕」で考察をした。

観察表（第12～17表）「成形・調整」「ミガキ」項目のⅠ～Ⅲとは以下の通り、器形の部位を示している。（第153図）

Ⅰ．口縁部付近を示す。　（簾状文より上位部分）
Ⅱ．胴最大径付近から頸部付近を示す。（簾状文以下、胴最大径付近までの部分）
Ⅲ．底部から胴最大径付近まで。　（胴最大径より下位部分）

観察表「文様帯」の項目のうち、簾状文についてはその静止回数を示し、波状文については各部位の施文条数（段数）を示している。施文順位の数字は、施文順位類型の記号で、第4章第1節第157図にそのモデルを示している（第4章第1節3(3)　文様施文手法）。

遺構名	図版No.		成形・調整 外面 I	外面 II	外面 III	内面 I	内面 II	内面 III	ミガキ 外面	ミガキ 内面 I	ミガキ 内面 II	ミガキ 内面 III	文様帯 波状文	文様帯 口縁	文様帯 胴部	施文順位	土器No.
SB 71	60図	10				ヨコナデ	ヨコハケ		タテ	ヨコ	タテ	ミガキ	等	2	3	1	71−24
SB 71	60図	11	ヨコナデ		タテヘラケズリ	ヨコナデ			タテ	ヨコ	タテ	タテ	直線	2	2	2	71−4
SB 71	60図	12		ナデ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2		2		71−5
SB 71	60図	13	ヨコナデ			ヨコナデ				ヨコ			等				71−13
SB 71	60図	14	ヨコナデ	ナデ	タテハケ	ヨコナデ				ヨコ	ヨコ		無			4	22	71−9
SB 71	60図	15	ヨコナデ	ナデ	タテハケ	ヨコナデ	ヨコハケ		タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	無			4	24	71−3
SB 71	60図	16	ヨコナデ	ナデ	タテハケ	ヨコナデ			ヨコ	ヨコ	斜右	斜右	無			8	22	71−11
SB 71	60図	17	ヨコナデ	タテハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	斜右	斜右	無			7	22	71−2
SB 71	60図	18	ハケ	ハケ	タテハケ	ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	無			7	23	71−1
SB 71	60図	19	ヨコナデ	タテハケ		ヨコナデ	ヨコハケ		タテ	ヨコ	ヘラミガキ		無			4	22	71−8
SB 71	61図	20	タテハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ			ヨコ	タテ	タテ	2	2	5		2	71−10
SB 71	61図	21	斜左ハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜左ハケ			ヨコ	ヨコ		等	3	(4)		1	71−7
SB131	61図	23		斜左ハケ	タテヘラケズリ				タテ		タテ	タテ						131−1
SB132	61図	28	タテハケ	斜左ハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	ヨコハケ	なし		なし	ヨコ	2		5		1	132−2
SB132	61図	29	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	ヨコハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			8	21	132−1
SB133	62図	41	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	なし	なし	なし	なし	2	3	3		3	133−8
SB133	62図	42	ヨコナデ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜左ハケ			ヨコ	斜右		等				2	133−14
SB133	62図	43	ヨコナデ	ナデ		ヨコハケ	ヨコハケ			ヨコ	ヨコ		2	2	(2)		1	133−11
SB133	62図	44	ヨコナデ	ヨコハケ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	2	3		1	133−26
SB133	62図	45	ハケ	タテハケ	タテハケ			タテヘラケズリ	タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	直線	2	3		1	133−9
SB133	62図	46	タテハケ	タテハケ		ヨコハケ	ヨコハケ			ヨコ	斜右		直線	2				133−18
SB133	62図	47	タテハケ	斜左ハケ		斜左ハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	斜右	タテ	2	3	4		1	133−12
SB133	62図	48	タテハケ	タテハケ		斜左ハケ	ヨコハケ			ヨコ	タテ		2	2	(2)			133−16
SB133	63図	49	ヨコナデ							タテ	タテ		無			6	22	133−17
SB134	64図	57	タテハケ	タテハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	タテ	タテ	斜右	タテ	2	7	6		3	134−7
SB134	64図	58	タテハケ	タテハケ	タテハケ				タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	2	5		2	134−1
SB134	64図	59	ヨコハケ	斜左ハケ	タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	等	2	2		1	134−2
SB135	65図	70							ヨコ			斜左						135−5
SB152	66図	79	ハケ			斜左ハケ				ヨコ								152−2
SB152	66図	80	ハケ	斜左ハケ		ヨコナデ	ハケ			ヨコ	ヨコ		等	2	(3)		2	152−1
SB153	66図	85	ヨコナデ						タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	3	3		2	153−2
SB154	66図	89	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ		ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			(7)	22	154−1
SB157	67図	93	ヨコナデ						タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	直線	4	4		7	157−4
SB157	67図	94	ヨコハケ	斜左ハケ		斜左ハケ	ヨコハケ			ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	(2)	(3)		2	157−1
SB158	67図	95	ハケ	ハケ		ハケ	ハケ			ヨコ	ヨコ		無			(4)	24	158−1
SB172	67図	101	ヨコハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	ヨコハケ			ヨコ	ヨコ		無			4	22	172−3
SB172	67図	102	斜左ハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜左ハケ			ヘラミガキ	斜右		2	2	(3)		1	172−12
SB172	68図	103	ナデ	ナデ		ヨコナデ			タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	0	2			172−2
SB172	68図	104	ヨコナデ		タテヘラケズリ	ヨコナデ			タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	3	2	3		2	172−11
SB202	68図	106	ハケ	ハケ	タテハケ	ヨコハケ	ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	タテ	タテ	等	2	3		2	202−2
SB202	68図	107							タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	3	3	7		3	202−1
SB204	69図	118	ヨコナデ	タテハケ	タテハケ	ヨコナデ				ヨコ	ヨコ	ヨコ	3	3	7		1	204−6
SB204	69図	119	ヨコナデ			斜左ハケ	斜左ハケ			ヨコ	ヨコ		2	3	4		1	204−7
SB204	69図	120	ヨコナデ	タテハケ		斜左ハケ	斜左ハケ			ヘラミガキ	斜右		2	2	(1)			204−17
SB204	69図	121	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	ハケ	タテ	斜右	斜右		直線	2	2		1	204−10

遺構名	図版No.		成形・調整 外面 I	外面 II	外面 III	内面 I	内面 II	内面 III	ミガキ 外面 I	ミガキ 内面 I	ミガキ 内面 II	ミガキ 内面 III	文様帯 鹿状文	文様帯 波状文 口縁	文様帯 波状文 胴部	施文順位	土器No.
SB204	69図	122	ハケ	ハケ		ヨコハケ	ヨコハケ	ハケ	ヘラミガキ	ヨコ	ヨコ	斜右	直線	1	3	2	204－ 9
SB204	69図	123							タテ	ヨコ	ヨコ		無			5 23	204－ 8
SB204	69図	124	ハケ	ハケ		ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	無			5 22	204－ 5
SB204	70図	127		斜左ハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜左ハケ		タテ		なし	なし					204－16
SB205	70図	130	タテハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	2	2	1	205－ 1
SB205	70図	131	ハケ	ハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜右ハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	斜右	斜右	等	2	4	2	205－ 2
SB206	73図	180	ハケ	ハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	斜右	タテ	2	3	7	1	206－ 8
SB206	73図	181		斜左ハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	2	3	4	1	206－ 9
SB206	74図	182	ハケ	ハケ	斜左ハケ	ハケ	ハケ		ヨコ	ヨコ	ヨコ	斜右	2	3	6	1	206－50
SB206	74図	183	ハケ	斜左ハケ	タテヘラケズリ			ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	(3)	7	1	206－49
SB206	74図	184	ナデ	ハケ		ハケ	ハケ			ヨコ	ヨコ		2	2	(4)	1	206－62
SB206	74図	185	斜左ハケ	斜左ハケ		ハケ	ハケ			ヨコ	ヨコ	斜右		2	(4)	1	206－61
SB206	74図	186	ヨコナデ	ナデ		ヨコハケ	タテヘラケズリ	タテヘラケズリ	タテ	ヨコ	タテ	タテ	2	2	4	1	206－51
SB206	74図	187	ヨコナデ	ナデ		ヨコハケ	ヨコハケ		ヨコ	ヨコ	ヨコ	タテ	3	2	5	1	206－ 3
SB206	74図	188		斜左ハケ					タテ	ヨコ	タテ	タテ	等	2	4		206－ 1
SB206	74図	189	ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	ヘラミガキ	ヨコ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	直線	2	4	3	206－60
SB206	74図	190	ナデ			ヨコハケ	斜右ハケ			ヨコ	斜右		無			(5) 22	206－56
SB206	74図	191	ハケ	ハケ		ヨコハケ	斜右ハケ			ヨコ			等	3	(3)	3	206－74
SB206	75図	192	ヨコナデ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜左ハケ		タテ	なし	斜右	ヘラミガキ	2	2	3	1	206－ 2
SB206	75図	193	タテハケ	タテハケ	タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	タテ		タテ	タテ	2	2	4	1	206－ 4
SB206	75図	194	ヨコナデ						タテ	ヨコ	斜右	斜右	等	1	1	8	206－54
SB206	75図	195	ヨコナデ	タテハケ	タテハケ	ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコハケ	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし		206－59
SB206	75図	197		ハケ	タテハケ		ハケ	ハケ	ヨコ		ヨコ	ヨコ			(4)		206－70
SB206	75図	198	ヨコハケ	斜左ハケ	タテハケ	ハケ	ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	2	2	1	206－63
SB206	75図	199	ヨコナデ	タテハケ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	2	3	1	206－44
SB206	75図	200	ヨコナデ	ナデ						ヨコ	ヨコ	タテ	2	1	4	1	206－45
SB206	75図	201	ヨコナデ	ナデ						ヨコ	ヨコ	タテ	2		4	1	206－46
SB379	76図	211							タテ			タテ					379－ 8
SB379	77図	212	ハケ	ハケ	ハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	無			6 23	379－16
SB379	77図	213	斜左ハケ	斜左ハケ	タテハケ	ヨコナデ	ヨコハケ			ヨコ	ヨコ		無			4 22	379－10
SB379	77図	214	斜左ハケ	斜左ハケ	タテハケ	ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	斜右	斜右	無			7 22	379－ 9
SB379	77図	215	ヨコナデ	ハケ	ナデ					ヨコ	斜右	斜右	2	3	5	1	379－ 7
SB379	77図	216	ヨコナデ	斜左ハケ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	1	3		379－11
SK307	77図	217	ヨコナデ						タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	無			3 22	K307－1
SK 70	78図	231							タテ			ヨコ			(4)		K70－20
SK 70	78図	232							タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	無			11 21	K70－19
遺構外	79図	235	ハケ	ハケ		ハケ	ハケ			ヨコ	斜右		無			5 22	397－ 3
SD100	95図	499	ヨコナデ	タテハケ					タテ	ヨコ	斜左		無			3 22	K70
SD100	95図	500	ヨコハケ	斜左ハケ					ナデ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			3	K106
SD100	95図	501	ヨコナデ	タテハケ	タテハケ				タテ	ヨコ	斜左	タテ	無			4 22	K57
SD100	95図	502	ヨコナデ	タテハケ		ヨコハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	無			5 22	K24
SD100	95図	503	タテハケ	タテハケ					タテ	ヨコ	斜右		無			4 22	K60
SD100	95図	504	ヨコナデ	タテハケ	タテハケ	斜左ハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	斜右	タテ	無			4 22	K58
SD100	95図	505	ハケ	斜左ハケ		斜左ハケ	斜左ハケ		タテ	斜右	斜右	タテ	無			4 22	K80
SD100	95図	506	ヨコナデ	タテハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜左ハケ			ヨコ	斜右		無			6 22	K95
SD100	95図	507	タテハケ	タテハケ		ヨコハケ	斜右ハケ		タテ	斜右	斜右	ヨコ	無			5 22	K8

遺構名	図版No.		成形・調整 外面 I	外面 II	外面 III	内面 I	内面 II	内面 III	ミガキ 外面 I	内面 I	内面 II	内面 III	廉状文	文様帯 波状文 口縁	波状文 胴部	施文	土器No.
SD100	95図	508	タテハケ	斜左ハケ		ハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	斜右	斜右	無			5	22	K63
SD100	96図	509	ヨコナデ	タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	無			5	22	K117
SD100	96図	510	タテハケ	タテハケ		ヨコハケ	ヨコハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			6	22	K107
SD100	96図	511	タテハケ	タテハケ	タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			6	22	K69
SD100	96図	512	タテハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	斜右	タテ	無			10	22	K72
SD100	96図	513	ナデ	ナデ		ヨコハケ	ハケ			ヨコ	斜右		無			7	23	K97
SD100	96図	514	ヨコナデ	ヨコハケ		ヨコナデ	ヨコハケ			ヨコ	ヨコ		無			(2)	22	K109
SD100	96図	515	ヨコナデ			ヨコハケ	ヨコハケ		ナデ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			6	22	K105
SD100	96図	516	タテハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜右ヘラケズリ	タテハケ	タテ	ヨコ	斜右	タテ	等	5	7		3	K22
SD100	96図	517	ヨコナデ			ヨコハケ	ヨコハケ		タテ		タテ	タテ	無			10	22	K10
SD100	96図	518	斜左ハケ	斜左ハケ					タテ	斜右	斜右	斜右	等	4	5		1	K112
SD100	97図	519	ヨコナデ			ヨコナデ			タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			12	22	K13
SD100	97図	520	斜左ハケ	ナデ		ヨコナデ			タテ	ヨコ	タテ	タテ	無			12	25	K116
SD100	97図	521	斜左ハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	無			6	22	K20
SD100	97図	522				ヨコハケ	ヨコハケ			ヨコ	ヨコ		無			(7)	22	K104
SD100	97図	523	ヨコナデ	ナデ		ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコハケ		ヨコ	ヨコ		無			6	22	K139
SD100	97図	524	ナデ	ナデ					タテ	ヨコ	斜右	タテ	無			12	25	K101
SD100	97図	525	ヨコナデ			ヨコナデ	斜左ハケ						無			(6)	22	K92
SD100	97図	526							タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	無			6	22	K102
SD100	97図	527	ヨコナデ						タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			3	23	K52
SD100	97図	528	ヨコナデ	斜左ハケ		ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			4	22	K51
SD100	97図	529	ヨコナデ	タテハケ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			7	22	K45
SD100	97図	530							タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	無			6	22	K42
SD100	97図	531	ヨコナデ			ハケ	ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	タテ	タテ	無			4	25	K26
SD100	97図	532	ナデ	ナデ						ヨコ	ヨコ		無			8	22	K67
SD100	98図	533	タテハケ	タテハケ	タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	直線	3	1		1	K6
SD100	98図	534	タテハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	ハケ	タテハケ	タテ	ヨコ	斜右	タテ	2	3	2		3	K38
SD100	98図	535	ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	斜右	斜右	2	4	3		3	K114
SD100	98図	536	ヨコナデ	斜左ハケ		ヨコナデ			タテ	ヨコナデ	ヨコ	タテ	等	4	6		1	K9
SD100	98図	537	斜左ハケ	斜左ハケ	タテヘラケズリ	ヨコハケ			タテ		斜右	斜右	等	3	6		1	K119
SD100	98図	538	ヨコナデ				ヨコハケ		ヨコ	ヨコ	ヨコ	斜右	2	4	7		1	K50
SD100	98図	539	ハケ	ハケ		ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ		ヨコ	ヨコ	斜右	2	3	7		1	K76
SD100	98図	540	ハケ	斜左ハケ	ハケ	ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	等	3	3		1	K135
SD100	98図	541	ヨコナデ	ナデ					タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	等	3	2		2	K132
SD100	98図	542		ナデ		ヨコハケ	ヨコケズリ		ヘラミガキ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	直線	2	4		7	K134
SD100	99図	543	ハケ	ハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	斜右	タテ	3	3	7		2	K59
SD100	99図	544	斜左ハケ	斜左ハケ	タテハケ	ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	等	3	4		1	K61
SD100	99図	545	ハケ	ハケ	斜左ハケ	ハケ	ハケ		ヘラミガキ	ヨコ	斜右	斜右	2	2	5		2	K77
SD100	99図	546	斜左ハケ	斜左ハケ			斜左ハケ			ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	2	(5)		2	K78
SD100	99図	547	タテハケ	ハケ			斜左ハケ	斜左ハケ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ						K86
SD100	99図	548		タテハケ			ヨコハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	斜右	タテ	直線	2	3		1	K81
SD100	99図	549	ハケ	ハケ	ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ			ヨコ	斜右	斜右	3	2	3		3	K89
SD100	99図	550	ヨコナデ	ナデ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	2	4		1	K73
SD100	99図	551		ハケ		ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ		ヨコ	タテ	タテ	等	5	(5)		3	K136
SD100	99図	552	ハケ	ハケ		ハケ	ハケ			ヨコ	ヨコ		2	2	(2)		1	K140
SD100	99図	553	ヨコナデ	タテハケ						ヨコ	ヨコ		2	2	(2)		2	K150

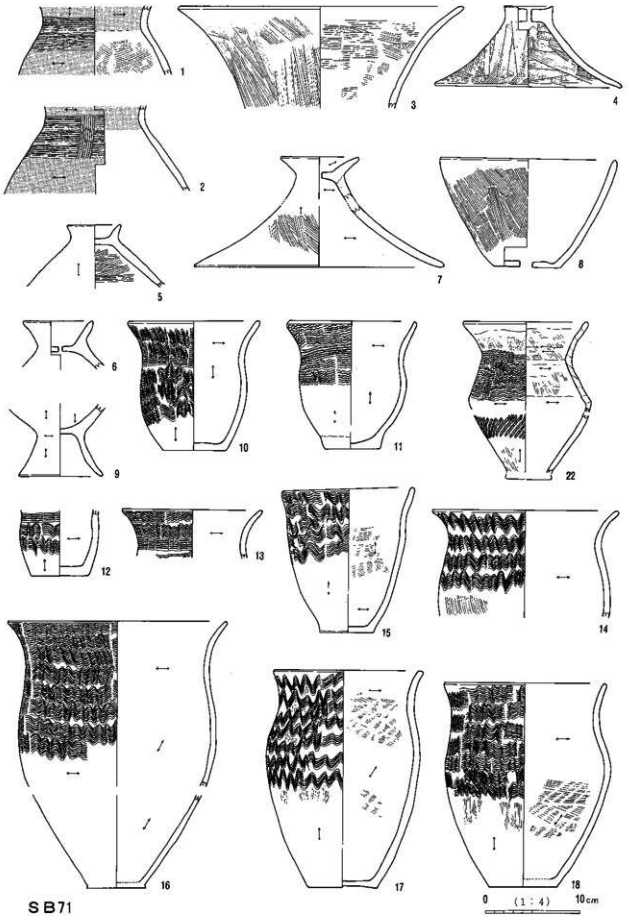
第14表　遺形土器成形・調整観察表（3）

遺構名	図版No.		成形・調整 外面 I	成形・調整 外面 II	成形・調整 外面 III	成形・調整 内面 I	成形・調整 内面 II	成形・調整 内面 III	ミガキ 外面 I	ミガキ 内面 I	ミガキ 内面 II	ミガキ 内面 III	文様帯 廉状文	文様帯 波状文 口縁	文様帯 波状文 胴部	文様帯 波状文	施文順位	土器No.
SD100	100図	554	斜左ハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	ヨコハケ			ヨコ	ヨコ		2	2	(3)		2	K98
SD100	100図	555	タテハケ	タテハケ		ヨコハケ	斜右ハケ			ヨコ	斜右		等	3		7	3	K71
SD100	100図	556		タテハケ	タテハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	3	7		3	K64
SD100	100図	557	ヨコナデ	斜左ハケ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	3	3		2	K83
SD100	100図	558	タテハケ	タテハケ		ヨコハケ				ヨコ	斜右	斜右	2	4	6		1	K74
SD101	100図	559	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ヘラミガキ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	3	6		3	K16
SD100	100図	560	ヨコナデ	ナデ					タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	3	3		2	K94
SD100	100図	561		ハケ	ハケ		ハケ	ハケ	タテ		タテ	タテ						K56
SD100	100図	562	斜左ハケ	斜左ハケ					タテ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	4	5	6		3	K7
SD100	100図	563	ヨコナデ	ナデ		ヨコナデ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	ミガキ	ミガキ	等	3	4		3	K12
SD100	101図	564	ヨコナデ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜右ハケ	斜右ハケ	タテ	ナデ	タテ	タテ	2	2	4		17	K3
SD100	101図	565	タテハケ	タテハケ					ヨコ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	3	4		1	K18
SD100	101図	566							タテ	ヨコ	斜右	斜右	4	2	4		3	K49
SD100	101図	567	タテハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	ヨコハケ		ヘラミガキ	ヨコ	斜右	斜右	2	2	4		1	K99
SD100	101図	568	ハケ	ハケ	ハケ	ヨコハケ	ハケ		斜左	ヨコ	ヨコ	斜右	2	2	4		1	K133
SD100	101図	569				ヨコナデ	ハケ	ハケ	タテ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	タテ	直線	2	4		1	K36
SD100	101図	570	ヨコナデ		タテヘラケズリ		ヨコハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	1	3		26	K4
SD100	101図	571	ヨコナデ	ナデ					タテ	ヨコ	タテ	タテ	3	1	3		2	K44
SD100	101図	572	ヨコナデ	ナデ						ヨコ	斜右	斜右	2	1	(2)		1	K137
SD100	101図	573	ハケ	ハケ		ハケ	ハケ		ヘラミガキ	ヨコ	ヨコ	ヘラミガキ	2	1	3		2	K130
SD100	101図	574	ヨコナデ	ナデ		ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコハケ		ヨコ	ヨコ	ヨコ	3	2	(3)		2	K138
SD100	101図	575	斜左ハケ			ヨコハケ	ヨコハケ	斜右ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無			無		K108
SD100	101図	576		斜左ハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	ヨコハケ	タテ		ヨコ	斜右			(6)			K111
SD100	101図	577	ヨコナデ	ナデ					タテ	ヨコ	斜右	ヨコ	2	3	4		2	K79
SD100	101図	578	ヨコナデ	タテハケ	ナデ	ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ		ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	3	(5)			K103
SD100	102図	579							タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	2	5		1	K34
SD100	102図	580	ヨコナデ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	4	5		3	K14
SD100	102図	581	ヨコナデ	斜左ハケ		斜左ハケ			タテ	ヨコ	斜右	斜右	2	1	3		2	K33
SD100	102図	582	ヨコハケ	ハケ					タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	3	4		3	K43
SD100	102図	583	ヨコハケ	斜左ハケ					ヨコ	ヨコ	斜右	斜右	2	2	5		2	K75
SD100	102図	584				ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	タテ	タテ	直線	2	3		6	K39
SD100	102図	585	タテハケ	タテハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	タテ	タテ	2	3	6		2	K35
SD100	102図	586	ヨコナデ	ナデ		ヨコハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	等	3	4		1	K47
SD100	102図	587	ヨコナデ						タテ	ヨコ	斜右	斜右	2	2	3		2	K1
SD100	103図	588	タテハケ	ヨコハケ	タテハケ			斜左ハケ	タテ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	2	3	5		6	K23
SD100	103図	589	斜左ハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	3	7		8	K2
SD100	103図	590	ヨコナデ	斜左ハケ					タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	4	6		1	K62
SD100	103図	591	ヨコナデ	ナデ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヘラミガキ	等	3	6		1	K55
SD100	103図	592	斜左ハケ	斜左ハケ		ハケ	ハケ		タテ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	斜右	2	3	6		2	K65
SD100	103図	593	ヨコナデ	ナデ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヘラミガキ	2	3	4		1	K66
SD100	104図	594	ヨコナデ	タテハケ	タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	2	4		2	K16
SD100	104図	595	斜左ハケ	斜左ハケ	タテハケ	ハケ	ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	2	2	6		1	K21
SD100	104図	596				ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	直線	3	3		2	K41
SD100	104図	597	ヨコナデ						タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	3	4		1	K11
SD100	104図	598	タテハケ	タテハケ	タテハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	タテ	タテ	2	2	5		2	K15
SD100	104図	599	ヨコハケ	斜左ハケ			斜左ハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	タテ	タテ	等	2	4		2	K68

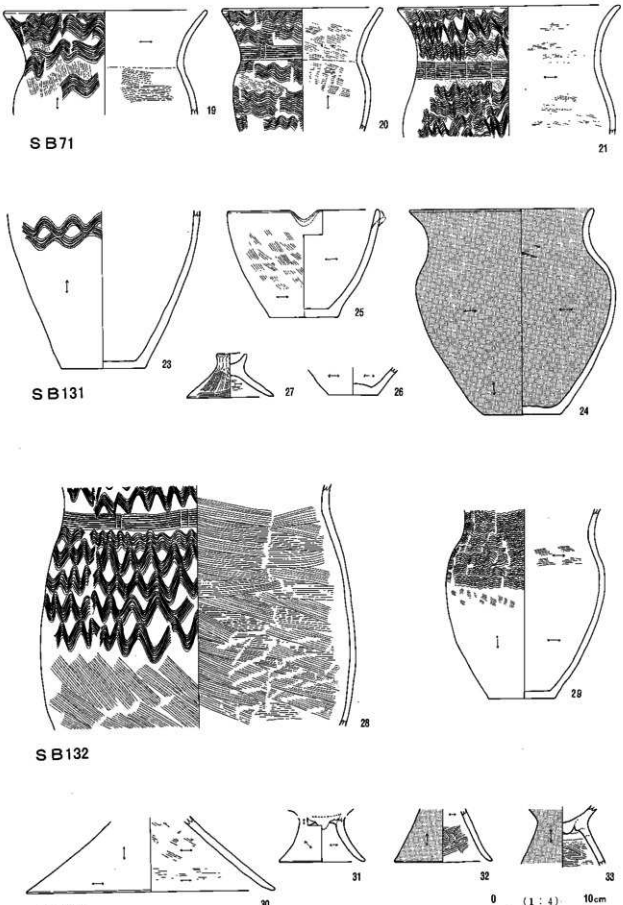
遺構名	図版No.		成形・調整						ミガキ				文様帯				施文	土器No.
			外面			内面			外面	内面			磨状文	波状文			施文	
			I	II	III	I	II	III	I	I	II	III		口縁	胴部		施文	
SD100	104	600	ヨコナデ	斜左ハケ		ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	斜右	タテ	2	2	3		2	K37
SD100	104	601		ハケ					タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	帯	2	3		4	K46
SD100	104	602		タテハケ	タテハケ				タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	4	5		2	K32
SD100	104	603	斜左ハケ	斜左ハケ					タテ	ヨコ	斜右	タテ	2	2	4		2	K19
SD100	104	604								ヨコ	ヨコ		2	2	2		1	K90
SD100	105	605	タテハケ	斜左ハケ		ヨコハケ	斜左ハケ		タテ	ナデ	ナデ	タテ	2	2	4		2	K17
SD100	105	606	ヨコナデ	ヨコハケ	斜左ハケ	ヨコナデ			タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	2	5		3	K31
SD100	105	607							タテ	ヨコ	ヨコ		直線	4	5		9	K28
SD100	105	608	ヨコナデ	タテハケ		ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	斜右	斜右	等	2	3		1	K40
SD100	105	609	ヨコナデ	ナデ			ヨコハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	等				15	K100
SD100	105	610	ヨコナデ	ナデ		ヨコハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	タテ	タテ	タテ	ヨコ	2	1	3		1	K87
SD100	105	611				ヨコナデ	斜左ハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2				2	K84
SD100	105	612	ヨコナデ							ヨコ	ヨコ	ヨコ	3	2	(2)		1	K91
SD100	105	613		斜左ハケ	タテナデ		斜左ハケ		タテ		ヨコ	ヘラミガキ	無			無		K141
SD100	105	614		斜左ハケ	ヨコハケ		斜左ハケ	ヨコハケ										K118
SD100	105	615		ハケ	ハケ		ハケ	ハケ							(9)			K110
SD100	106	616	ヨコハケ	タテハケ	タテハケ	ハケ	ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	タテ	タテ	2	2	4		1	K120
SD100	106	617	ヨコナデ	タテハケ	タテハケ	ヨコナデ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	タテ	タテ	2	1	3		2	K5
SD100	106	618	ヨコナデ	ナデ	タテヘラケズリ				タテ	ヨコ	ヨコ	タテ						K115
SD100	106	619	ヨコハケ	タテハケ					タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	1	3		2	K54
SD100	106	620	ヨコハケ	斜左ハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜右ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	斜右	タテ	2	1	3		1	K88
SD100	106	621	ヨコナデ	タテハケ		ヨコナデ			タテ		ヨコ	ヨコ	3	1	3		2	K48
SD100	106	622				ヨコハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	無			6	21	K53
SD100	106	623	ヨコハケ	ヨコハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	2	1		1	K85
SD100	106	624								ヨコ	ヨコ		等	2	4		20	K96
SD100	106	625	ハケ	ハケ		ハケ	ハケ			ヨコ	斜右		2	3	(2)		1	K93
SD100	106	626	ハケ	ハケ		ハケ	ハケ			ヘラミガキ	ヘラミガキ		3	2	(2)		1	K131
SD100	106	627	ヨコナデ	ナデ		斜左ハケ	斜左ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2				3	K82
SD100	106	628																K143
SD100	106	629																K122
SD100	106	630																K145
SD100	106	631																K125
SD100	106	632																K146
SD100	106	633																K123
SD100	106	634																K149
SD100	106	635																K121
SD100	106	636																K144
SD100	106	637																K124
SD100	106	638																K126
SD100	106	639																K142
SD100	106	640																K148
SD100	106	641																K147
SD100	106	642																K127
SD100	106	643																K129
SD100	106	644																K128
SD101	111	690	ハケ	ハケ		ハケ	ハケ			ヨコ	斜右		無			11	22	K15

遺構名	図版No.		成形・調整						ミガキ				文様帯					土器No.
			外面			内面			外面	内面			廉状文	波状文			施文	
			I	II	III	I	II	III	I	I	II	III		口縁	胴部		順位	
SD101	111	691	タテハケ	タテハケ		ヨコハケ	斜右ハケ			ヨコ	斜右	タテ	無			9	22	K22
SD101	112	692	ヨコナデ			ヨコナデ			タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	無			6	22	K21
SD101	112	693	ヨコナデ	斜左ハケ	タテハケ	ヨコナデ			タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	無			6	22	K14
SD101	112	694	ヨコナデ	斜左ハケ		ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	無			8	24	K10
SD101	112	695	ヨコナデ	タテハケ		ヨコナデ			タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	無			5	23	K4
SD101	112	696	ハケ	斜左ハケ	ハケ				タテ	ナデ	ナデ	ナデ	2	4	7		1	K3
SD101	112	697	ヨコナデ	タテハケ	タテハケ	ヨコナデ				ヨコ	ヨコ	タテ	等	3	3		2	Z242
SD101	112	698	タテハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ		タテ	斜右	斜右	斜右	3	4	5		2	K1
SD101	112	699	ヨコナデ	ナデ		ヨコハケ	ヨコハケ		タテ	ヨコ	タテ	タテ	2	3	7		1	K2
SD101	112	700	斜左ハケ	斜左ハケ	ハケ	ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	斜右	斜右	2	4	6		3	K30
SD101	112	701	ヨコナデ			斜右ハケ				ヨコ				2				K29
SD101	112	702	ヨコナデ			ヨコナデ				ヨコ	斜右		4	3			1	Z261
SD101	112	703	タテハケ	タテハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	ナデ	ナデ	なし	なし	なし	なし	無			無		K31
SD101	113	704		ナデ					タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	4	5		7	K13
SD101	113	705	ヨコナデ	ナデ		ヨコナデ			タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	2	2	7		1	K11
SD101	113	706	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ		ヨコ	タテ	タテ	等	3	9		2	K12
SD101	113	707	ヨコナデ	斜左ハケ		斜左ハケ	ヨコハケ		タテ	ヨコ	斜右		2	4	3		1	Z243
SD101	113	708	ヨコハケ	ヨコハケ		ヨコハケ	ヨコハケ			ヨコ	ヨコ		等	2			2	Z244
SD101	113	709	ヨコナデ	ナデ					タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	3	5		1	K9
SD101	113	710	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ		タテ	ヨコ	斜右		等	2	7		2	K18
SD101	113	711	タテハケ	タテハケ		ヨコハケ	ヨコハケ			ヨコ	ヨコ		2	3	4		2	K19
SD101	114	712	ハケ	ハケ	タテハケ	ヨコハケ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	斜右	タテ	2	3	5		2	K8
SD101	114	713	ナデ	ヨコハケ		ヨコナデ	斜左ハケ		タテ	ヨコ	斜右	斜右	2	4	4		1	K26
SD101	114	714	ヨコナデ	ナデ	タテハケ		ヨコハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	2	3	7		1	K7
SD101	114	715	ハケ	ハケ	タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	ハケ	タテ	ヨコ	斜右	タテ	等	3	8		2	K17
SD101	114	716	ヨコナデ	ナデ	斜左ハケ	ヨコハケ	ヨコハケ		タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	3	4		7	K6
SD101	114	717	ヨコハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	斜右	無			無		K20
SD101	114	718	タテハケ	タテハケ	タテハケ	ハケ	ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	タテ	2	1	2		1	K23
SD101	114	719	ヨコナデ	ヨコハケ					タテ	ヨコ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	等	1	1		1	K5
SD101	114	720							タテ		タテ	タテ	無				23	Z245
SD100	115	734				ハケ	ハケ	ハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	直線	2	2		7	K152
SD101	116	736	ハケ	斜左ハケ	ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	ハケ	ヨコ	ヨコ	斜右	斜右	3	2	4		1	K151
SD101	116	737	ヨコナデ	タテハケ					タテ	ヨコ	斜右	斜右	直線	3	5		1	K32
SD101	116	738	ヨコナデ			ヨコナデ	ヨコナデ		タテ			タテ	等	3	4		2	K33
SD101	116	739	ハケ	ハケ	ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	タテ	ヨコ	斜右	斜右	2	4	6		1	K35
SD101	116	740	斜左ハケ	斜左ハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	斜左ハケ	ヨコハケ	タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	3	(4)	4		2	K34
SD101	116	741							タテ	ヨコ	タテ	タテ	無			5	23	K36
SD101	116	743							タテ	ヨコ	ヨコ	ヨコ	無					Z120

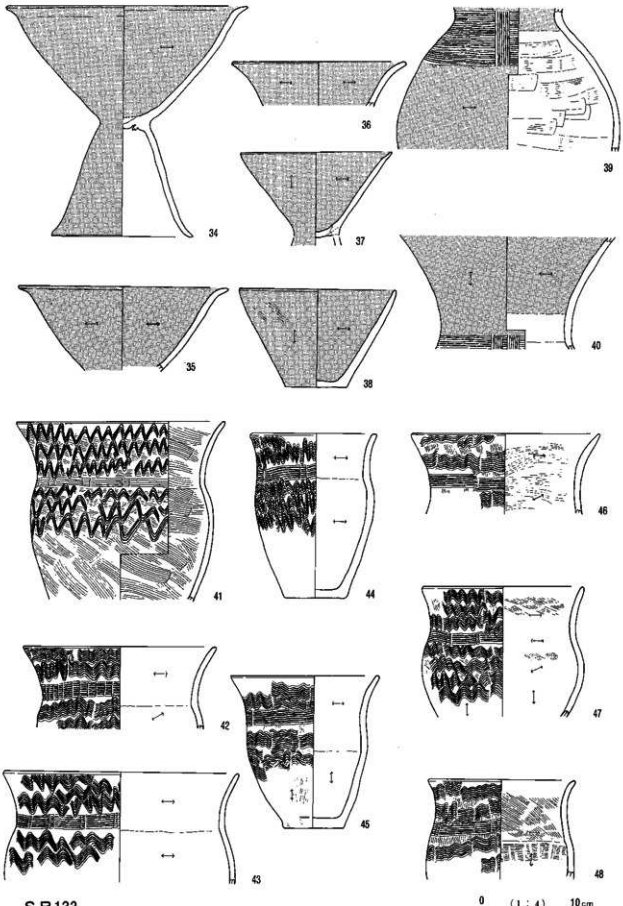
第17表　遺形土器成形・調整観察表（6）



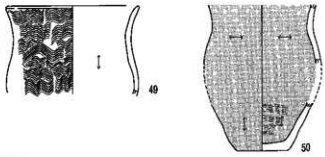
第60図　竪穴住居址出土土器.後期（1）



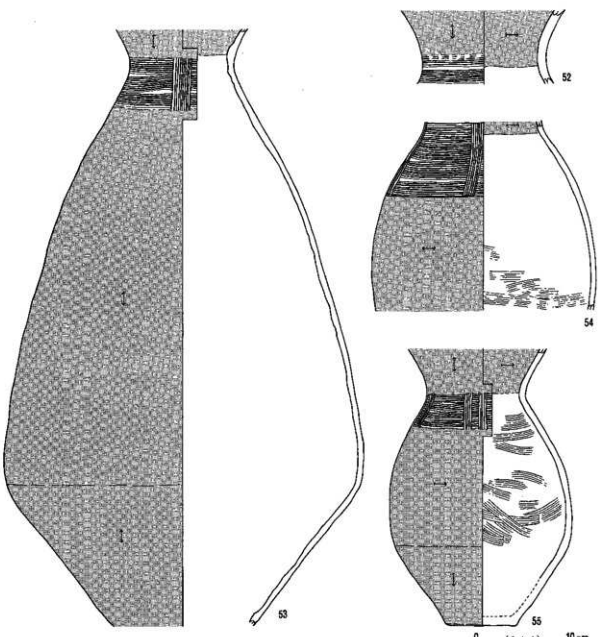
第61図　竪穴住居址出土土器，後期（2）



第62図　竪穴住居址出土土器，後期（3）

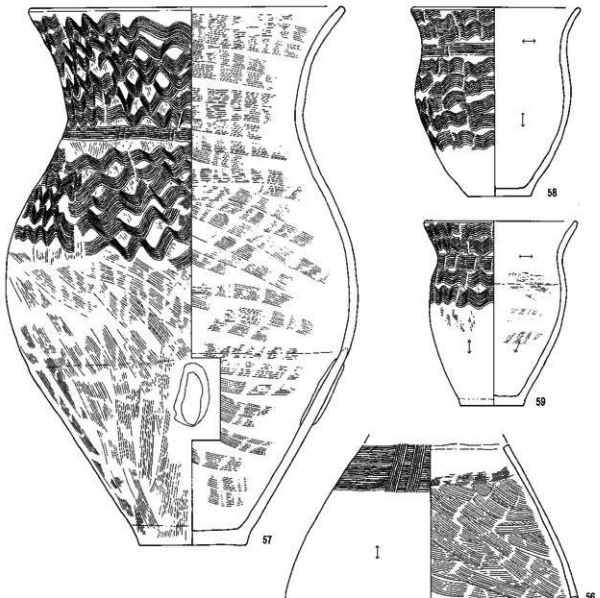


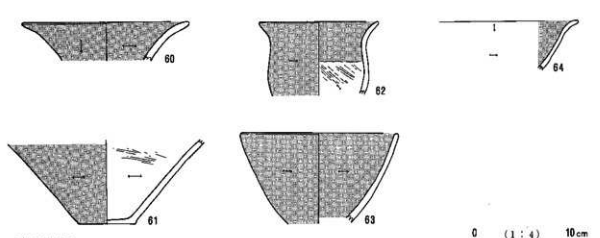
SB133



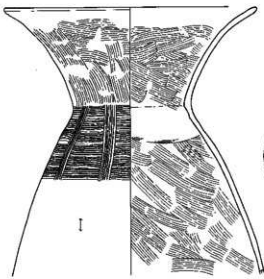
SB134

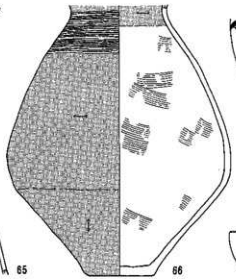
第63図　竪穴住居址出土土器，後期（4）

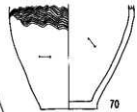


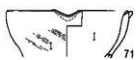


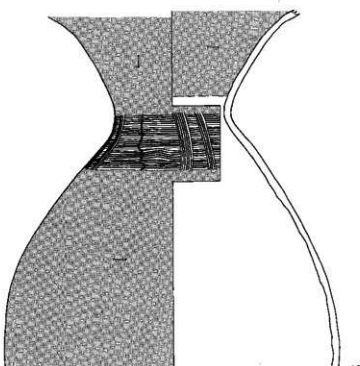
第64図　竪穴住居址出土土器.後期（5）

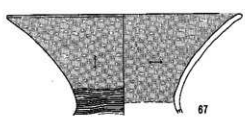




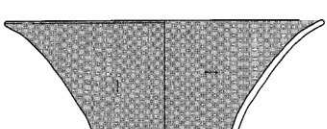


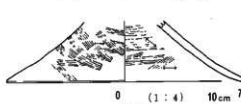






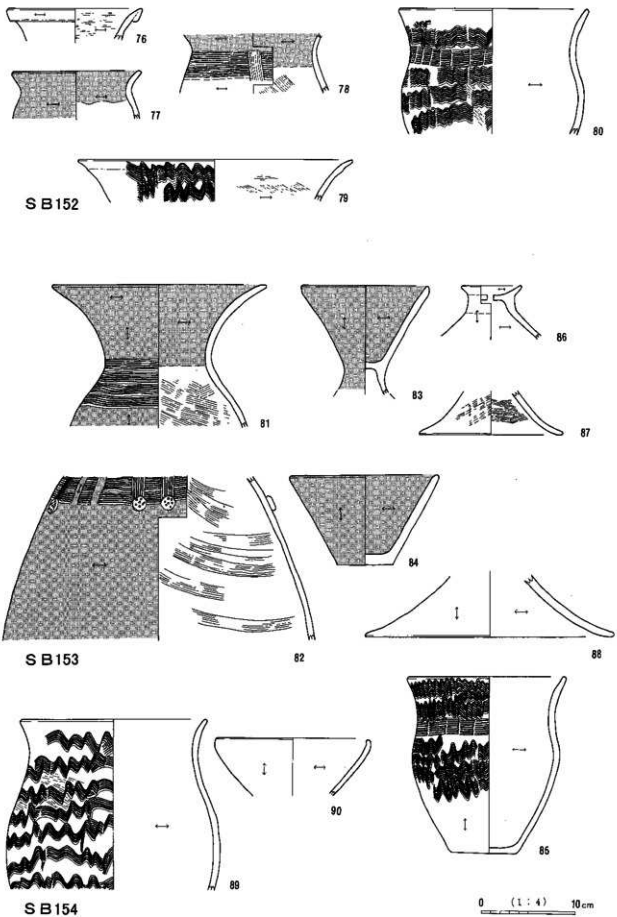
SB135



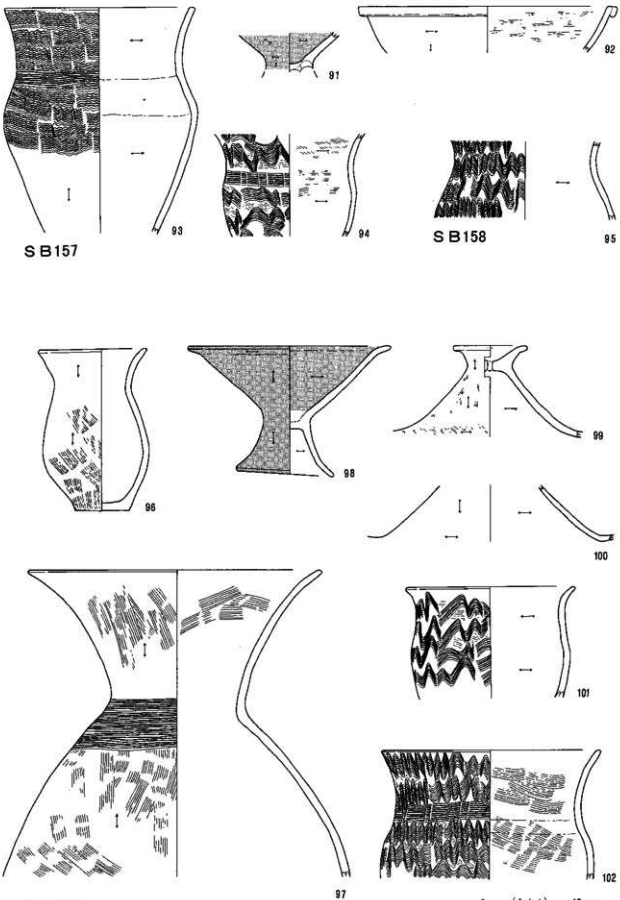


SB141

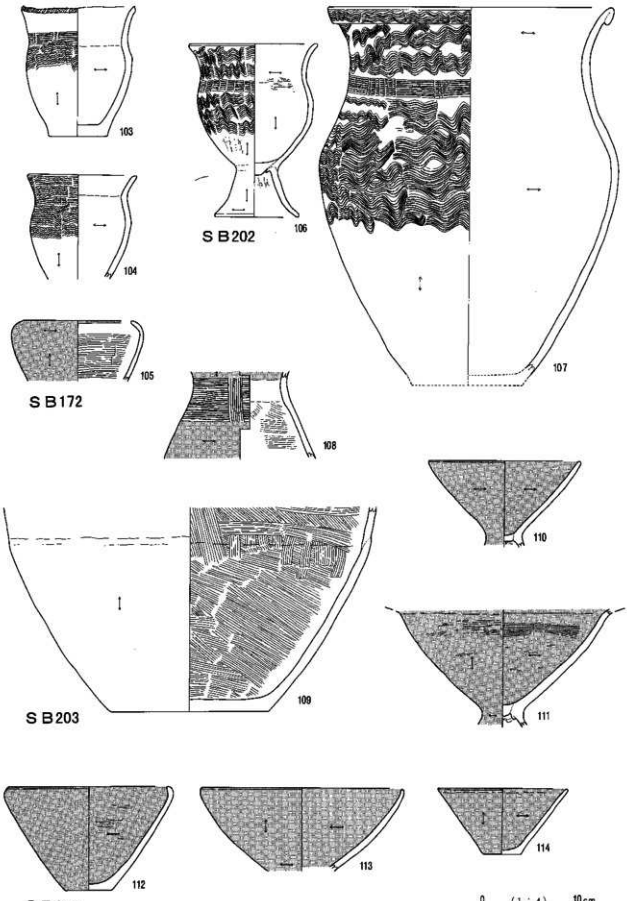
第65図　竪穴住居址出土土器，後期（6）



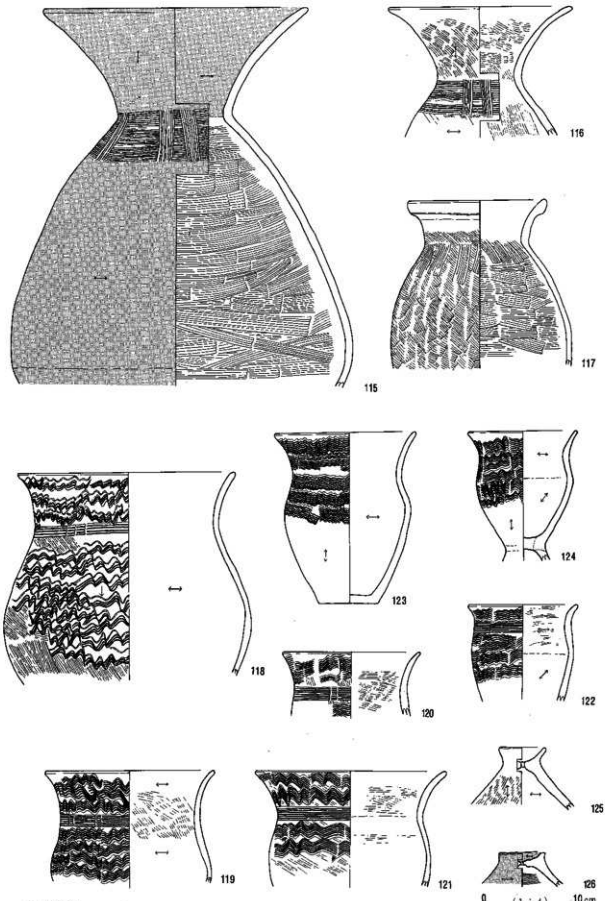
第66図　竪穴住居址出土土器．後期（7）



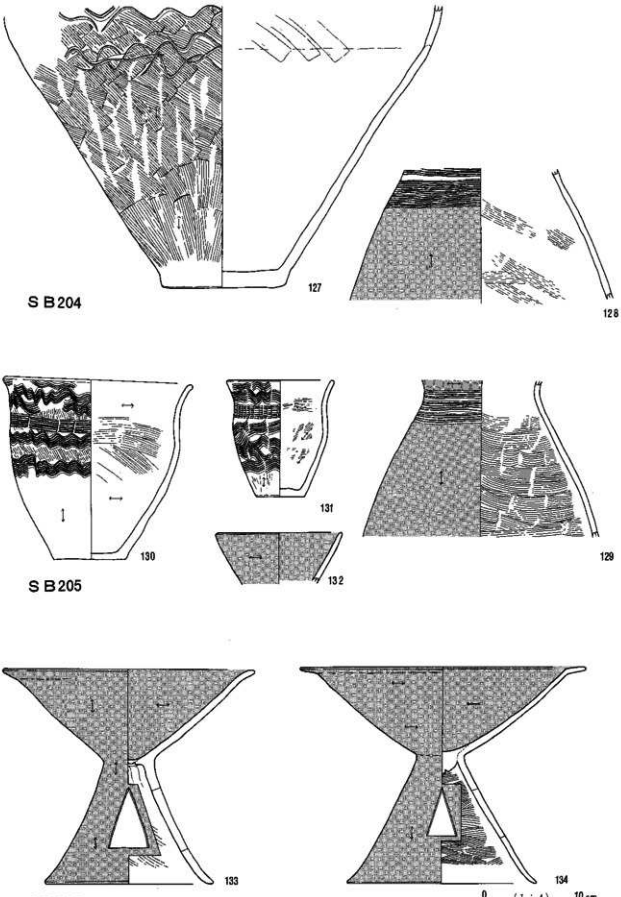
第67図　竪穴住居址出土土器，後期（8）



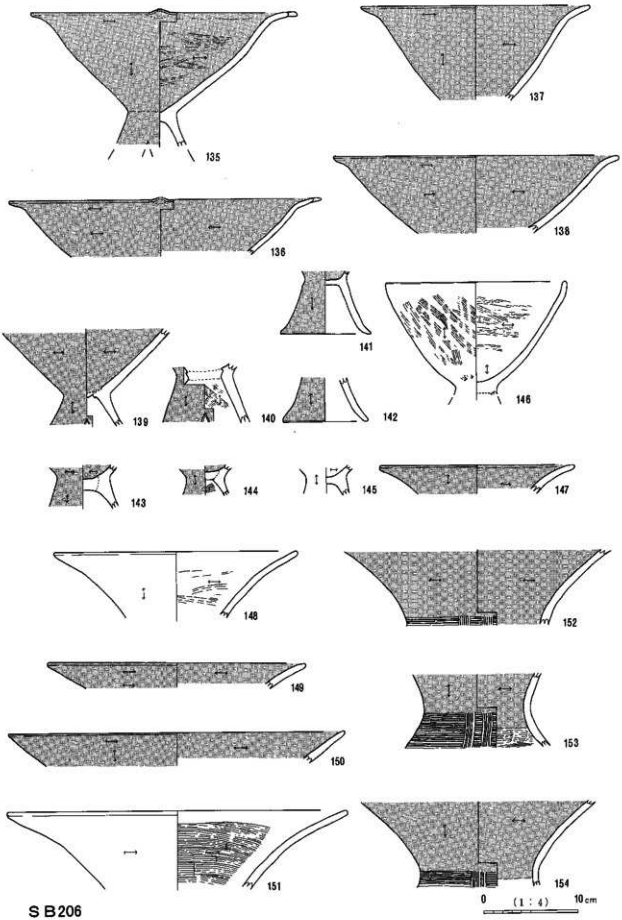
第68図　竪穴住居址出土土器．後期（9）



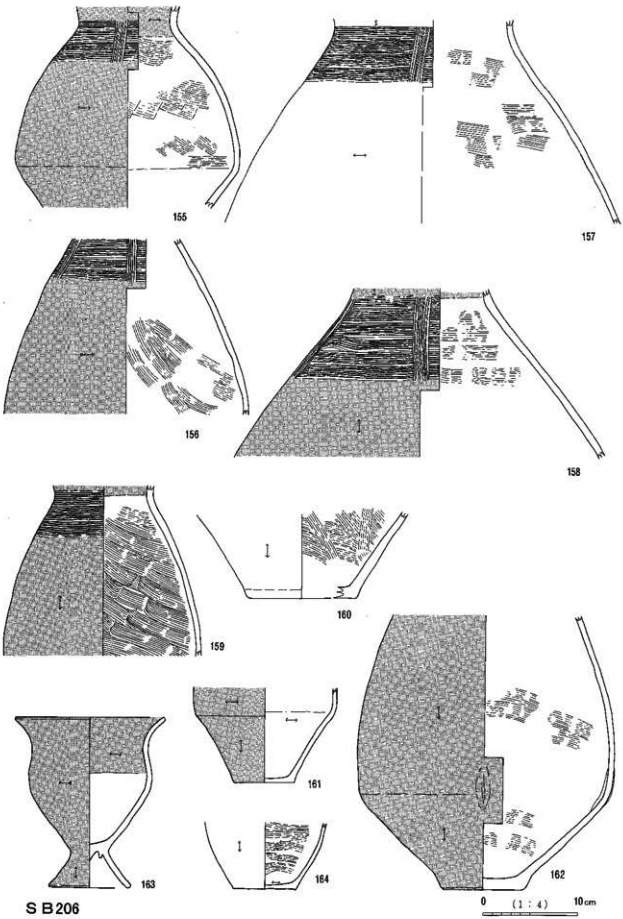
第69図　竪穴住居址出土土器，後期（10）



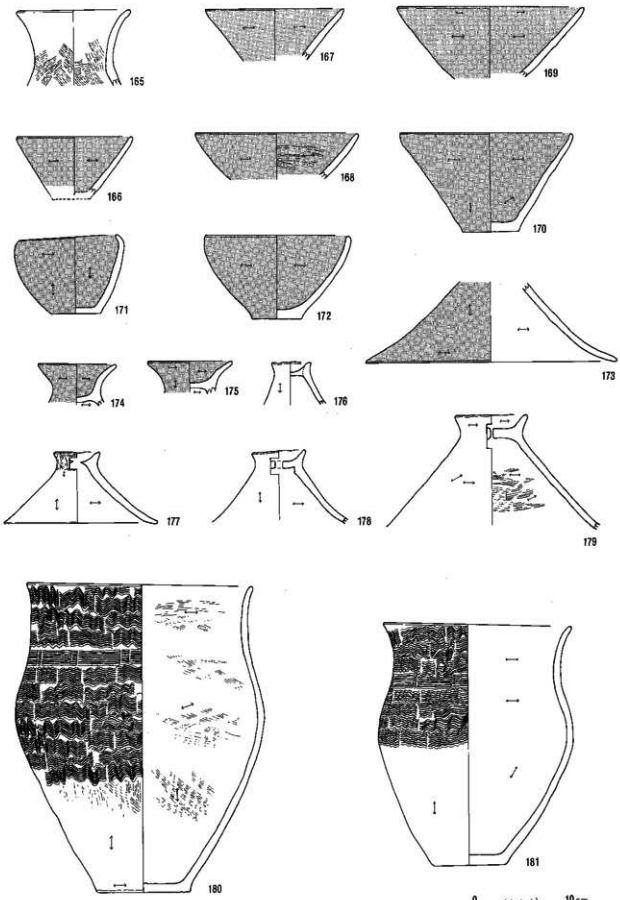
第70図　竪穴住居址出土土器、後期（11）



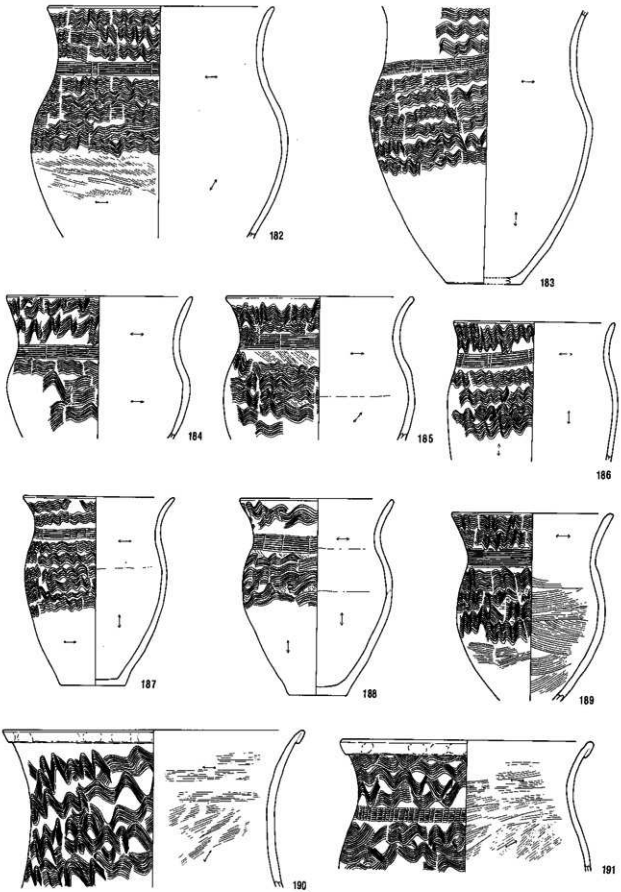
第71図　竪穴住居址出土土器，後期（12）



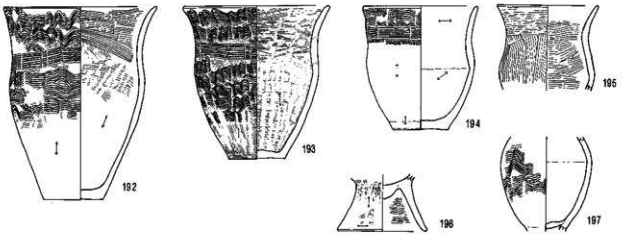
第72図　竪穴住居址出土土器，後期（13）

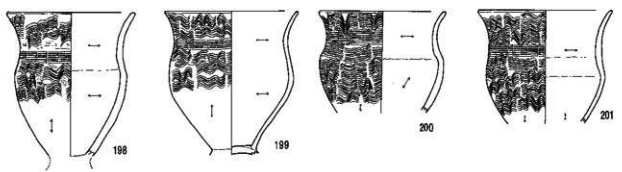


第73図　竪穴住居址出土土器，後期（14）

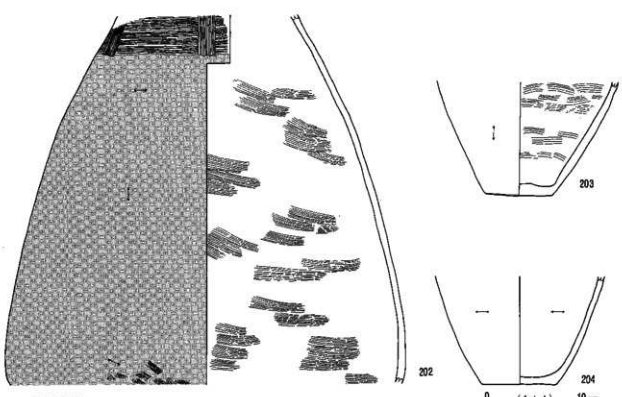


第74図　竪穴住居址出土土器.後期（15）



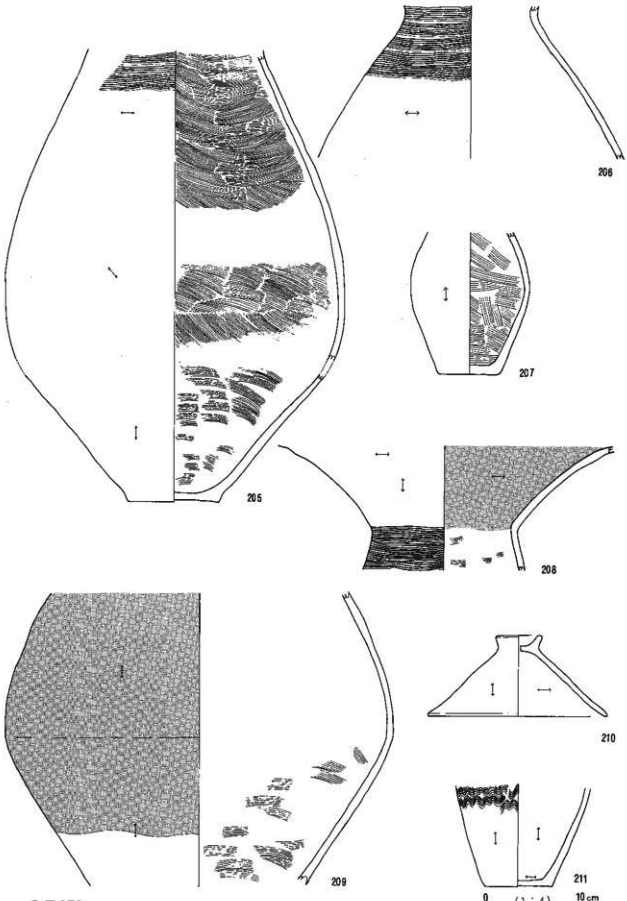


SB206

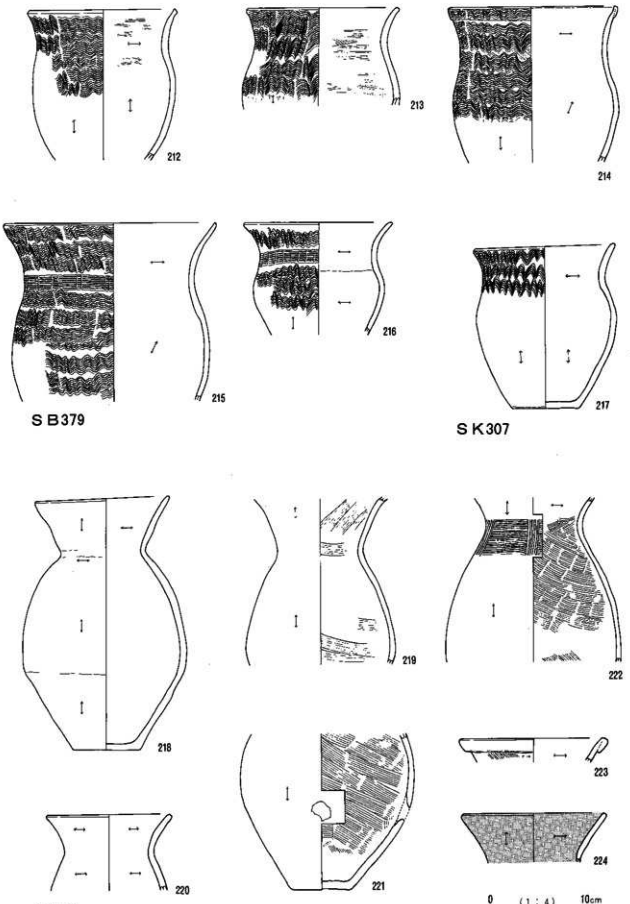


SB379

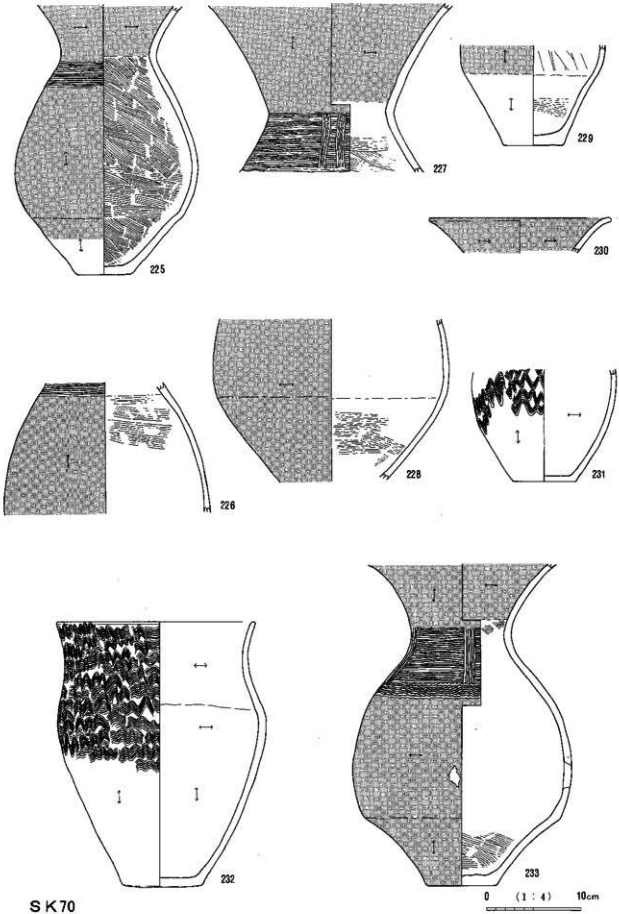
第75図　竪穴住居址出土土器，後期（16）



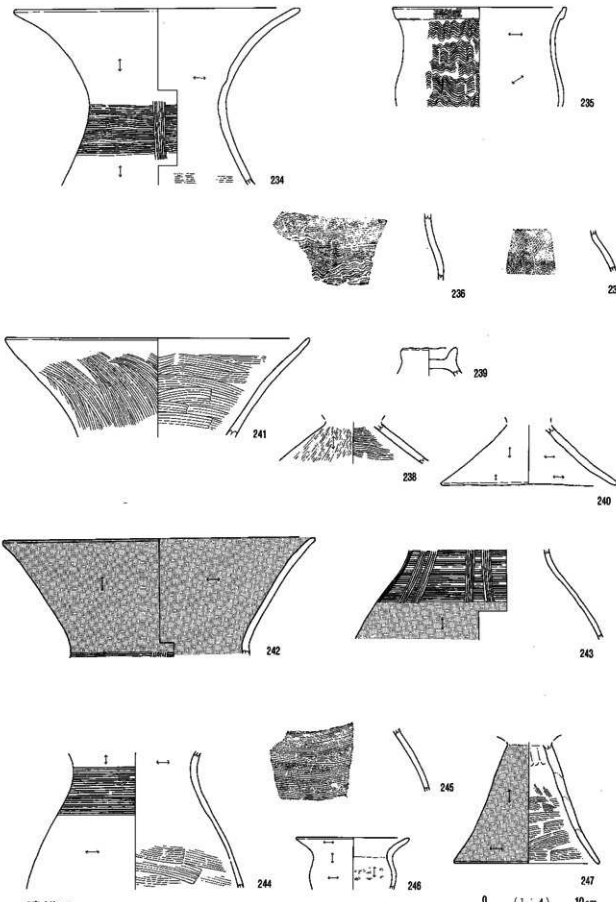
第76図　竪穴住居址出土土器．後期（17）



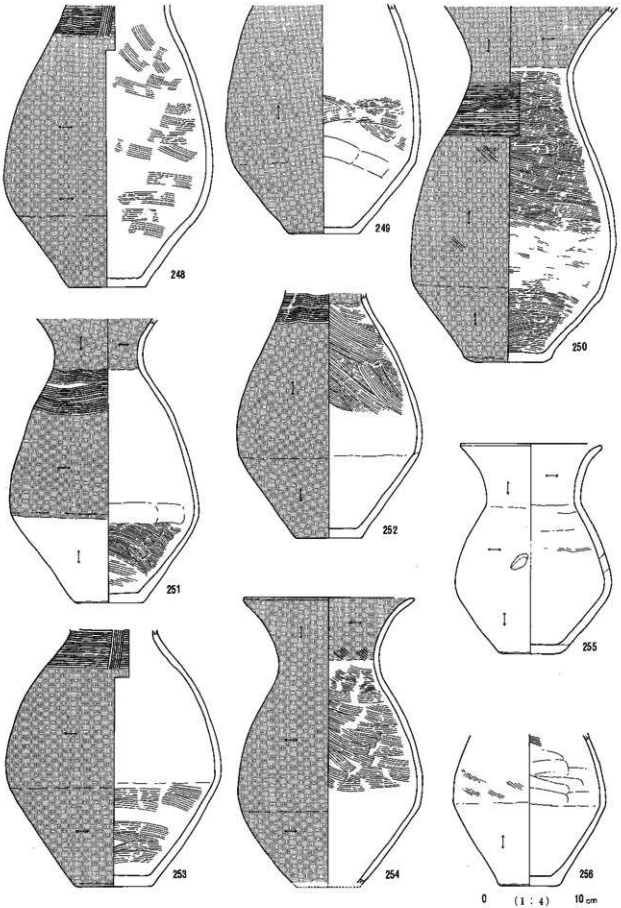
第77図　竪穴住居址出土土器．後期（18）・集落址出土土器．後期（1）



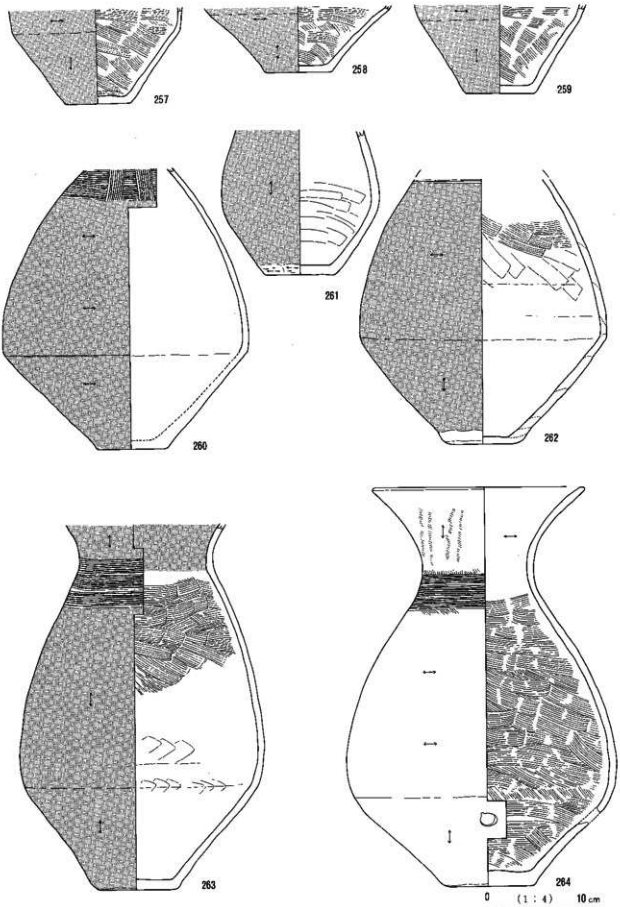
第78図　集落址出土土器.後期（2）



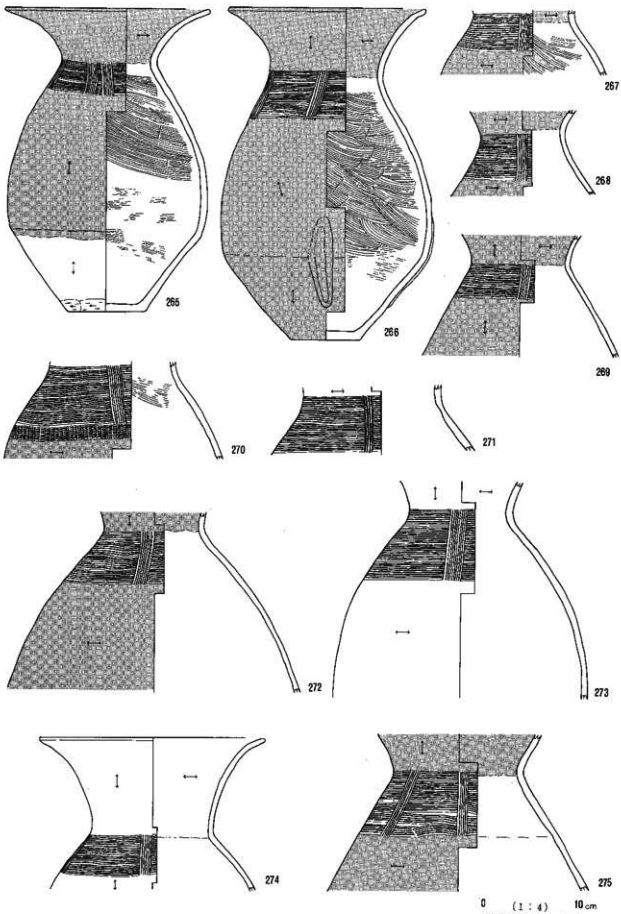
第79図　集落址出土土器．後期（3）



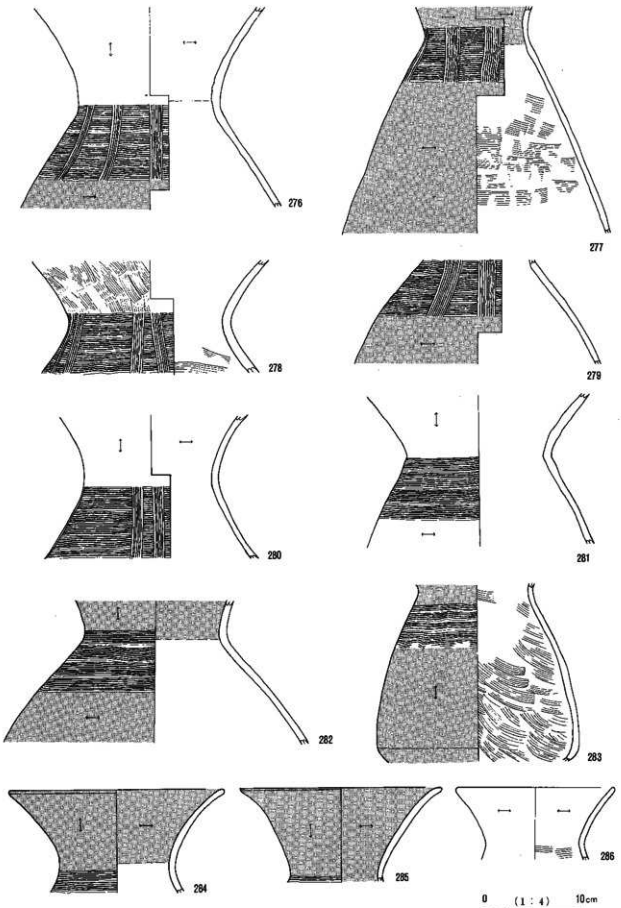
第80図　ＳＤ100出土土器.後期（1）壺



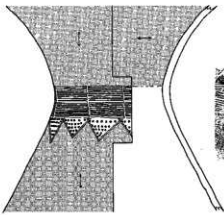
第81図　SD100出土土器.後期（2）壺

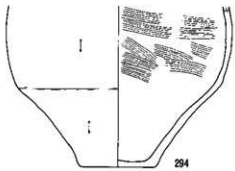


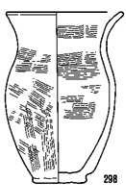
第82図　ＳＤ100出土土器,後期（３）壺

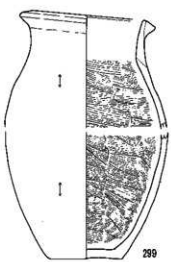


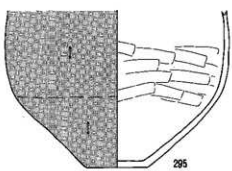
第83図　ＳＤ100出土土器.後期（４）壺

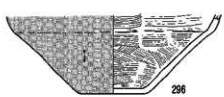


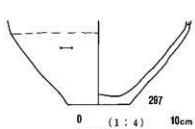




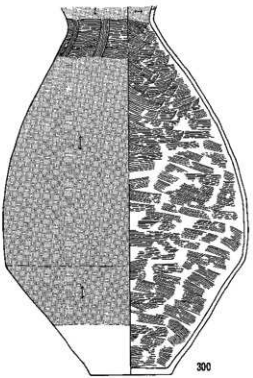


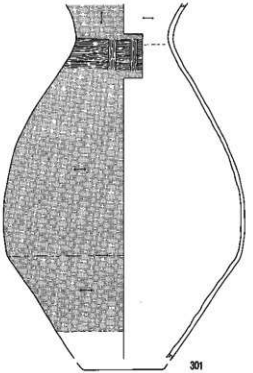


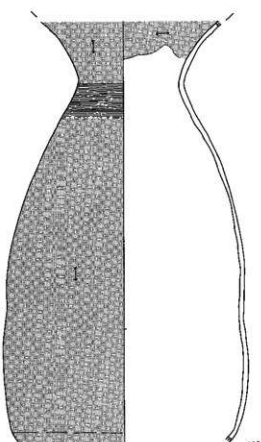


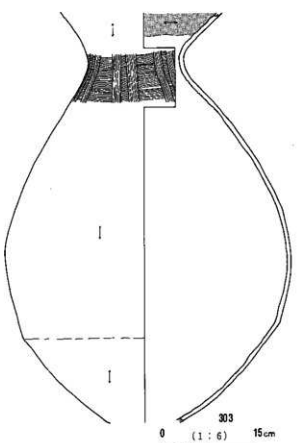


第84図　ＳＤ100出土土器.後期（５）壺

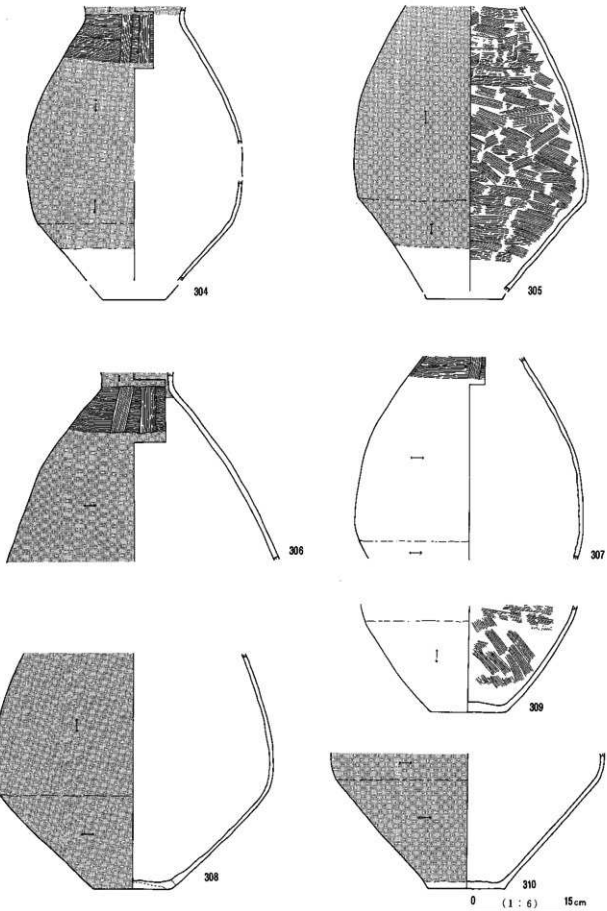




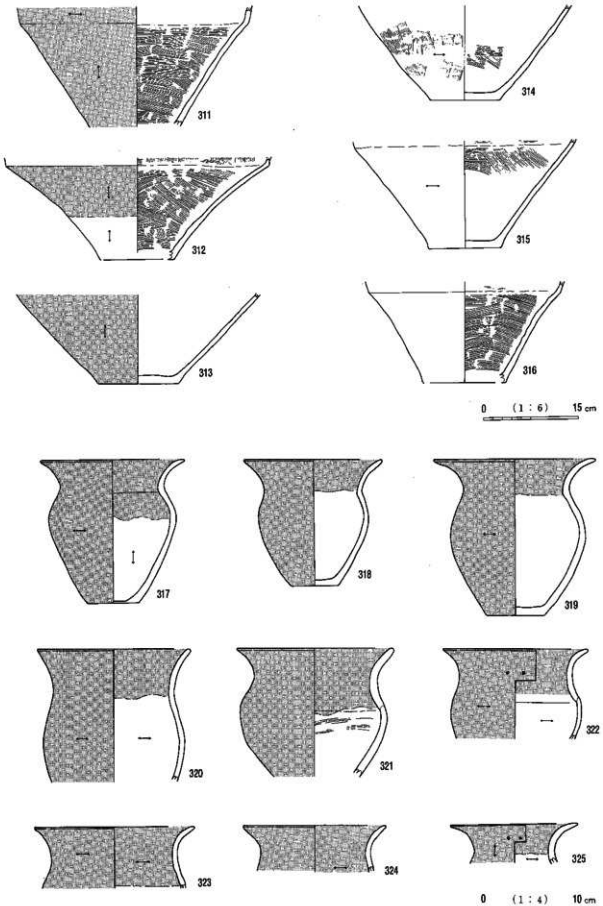




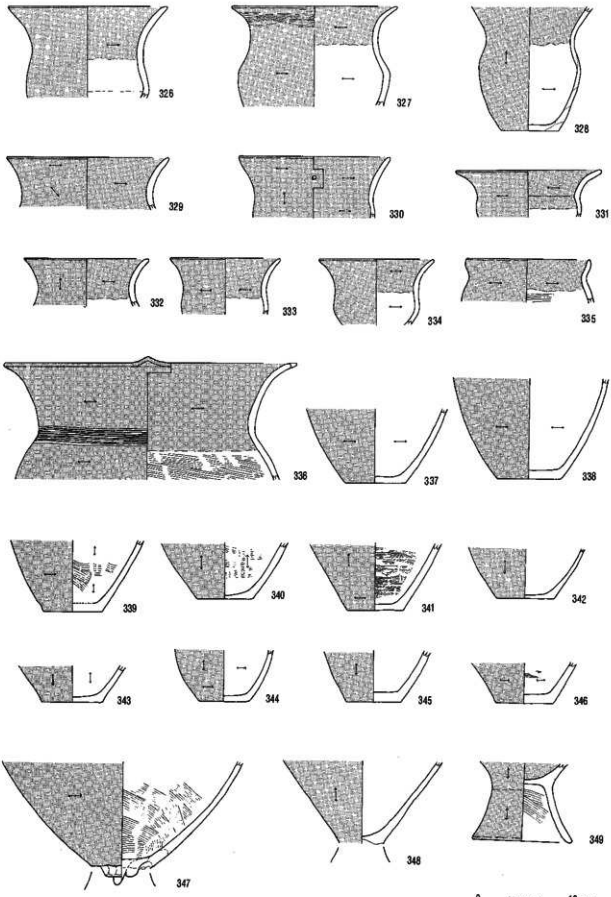
第85図　ＳＤ100出土土器.後期（６）壺



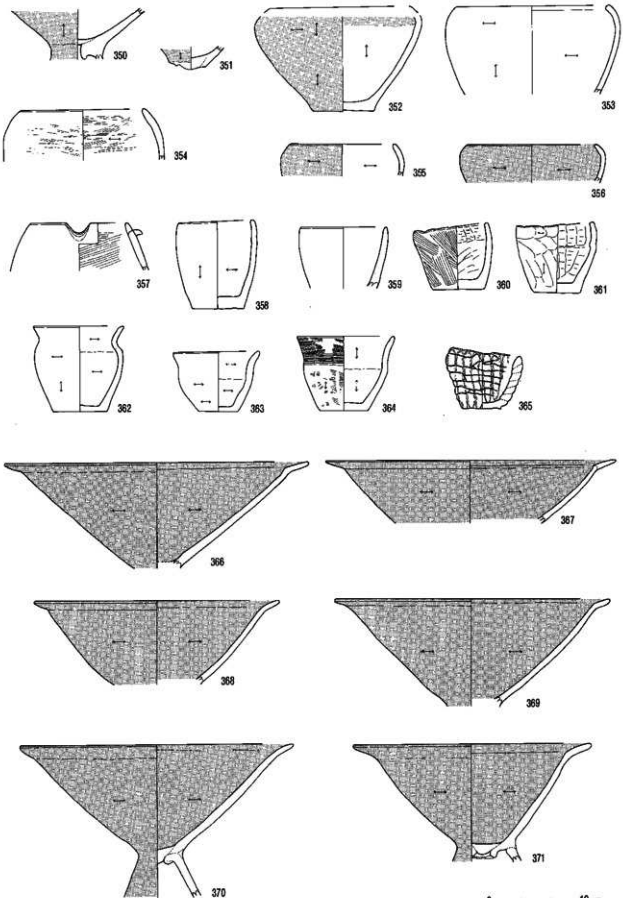
第86図　ＳＤ100出土土器.後期（７）壺



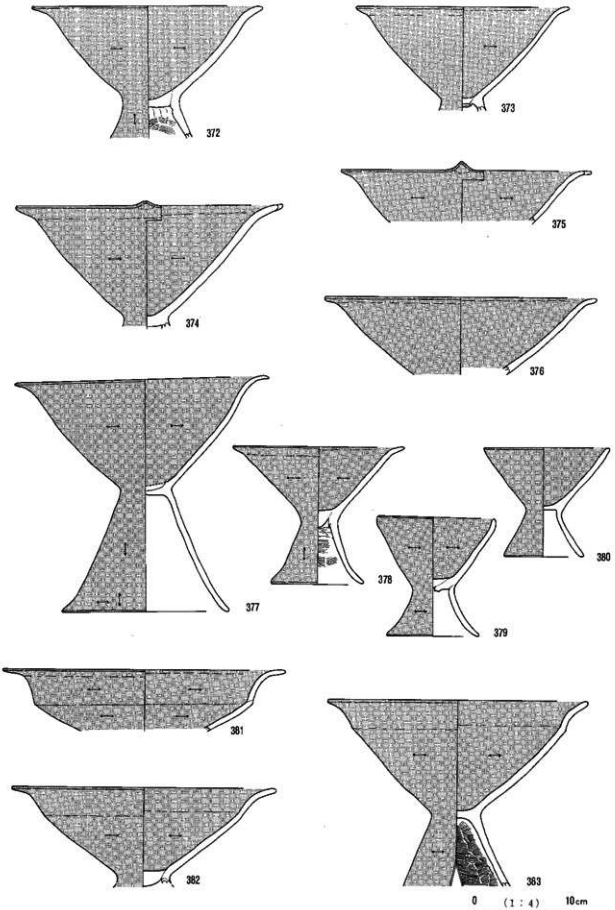
第87図　ＳＤ100出土土器.後期（８）壺・赤彩深鉢



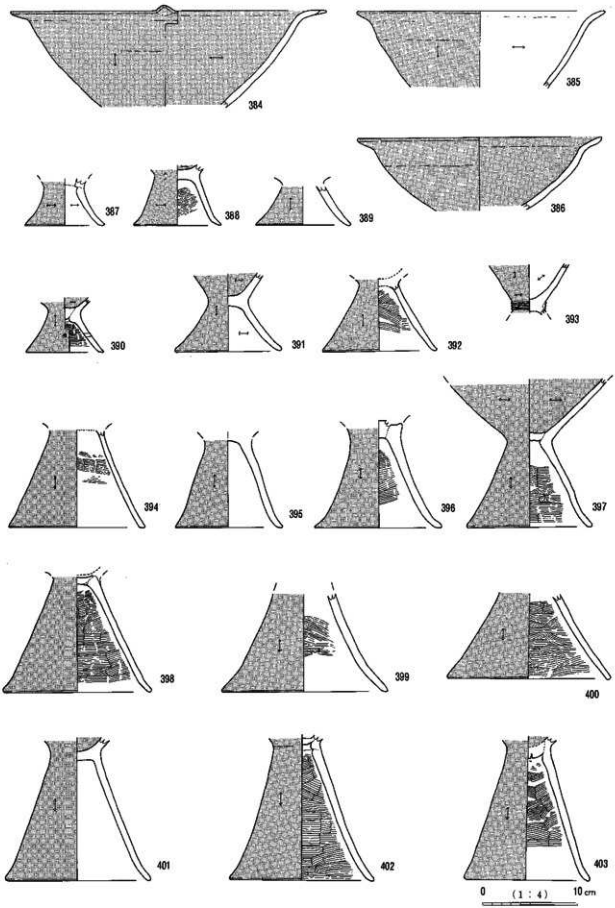
第88図　ＳＤ100出土土器.後期（９）赤彩深鉢



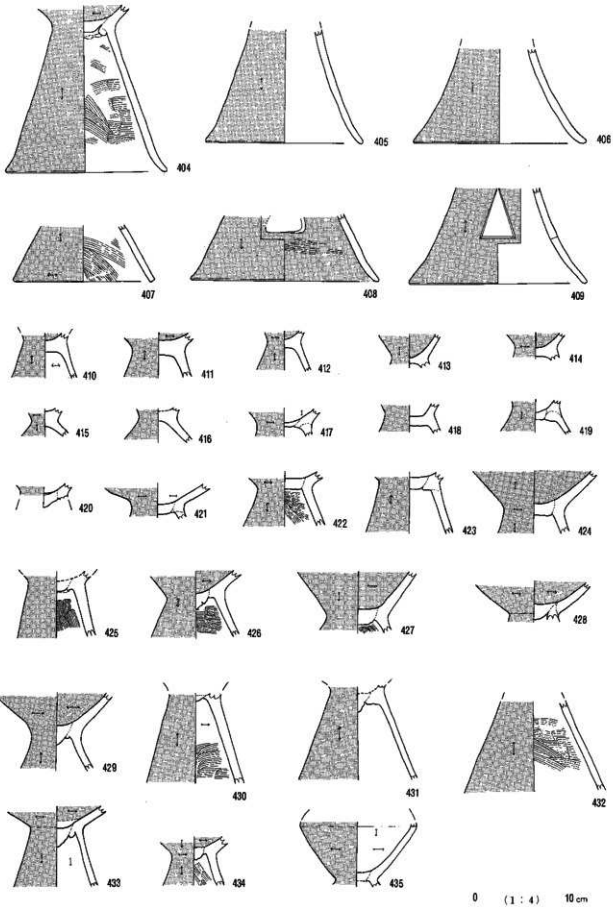
第89図　ＳＤ100出土土器.後期（10）無頸壺・高杯



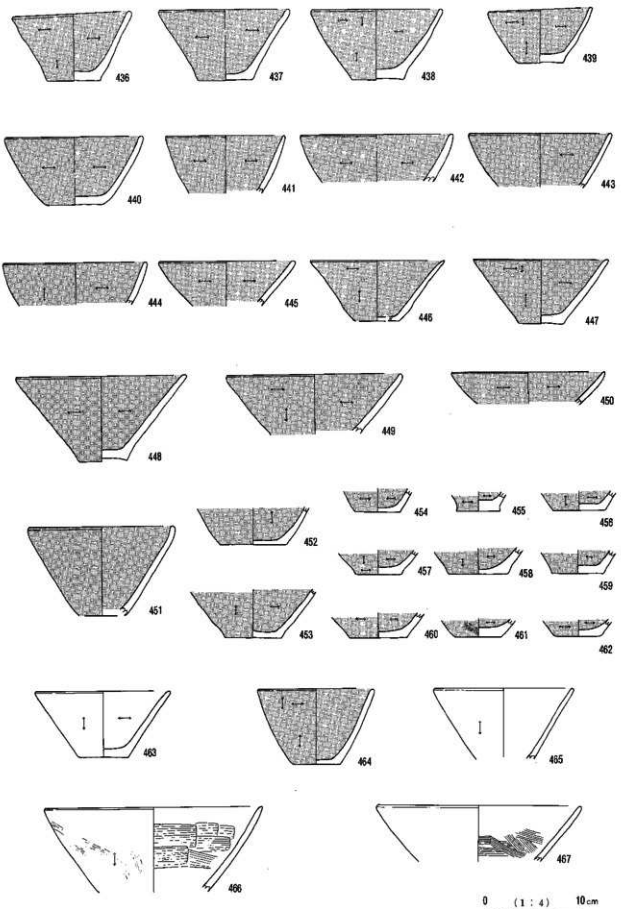
第90図　ＳＤ100出土土器.後期（11）高杯



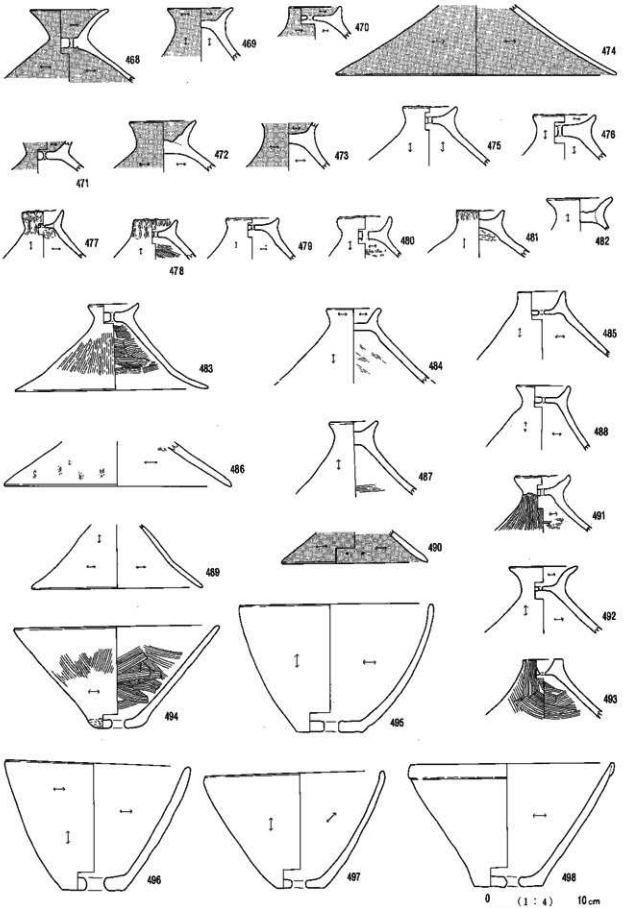
第91図　ＳＤ100出土土器．後期（12）高杯



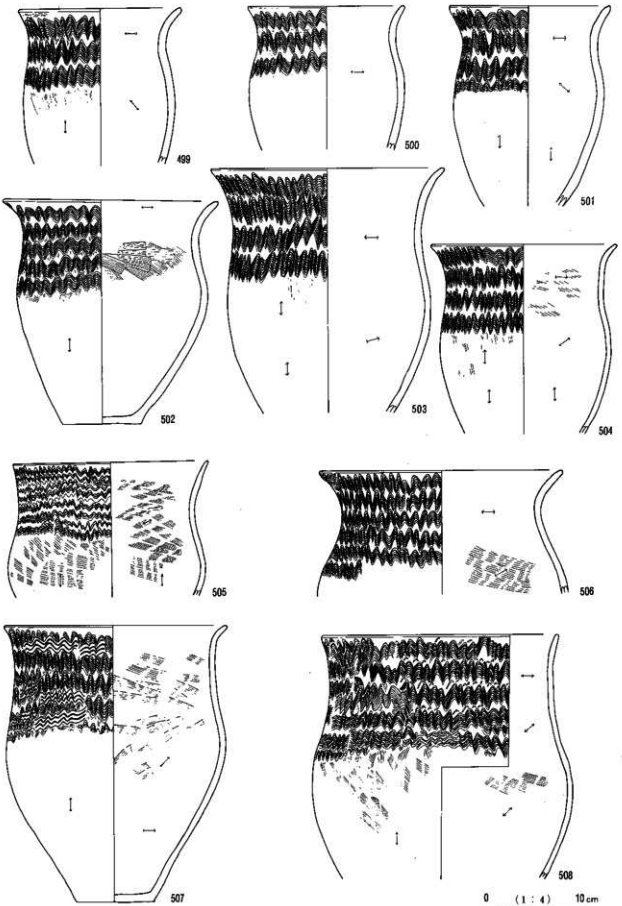
第92図　ＳＤ100出土土器．後期（13）高杯



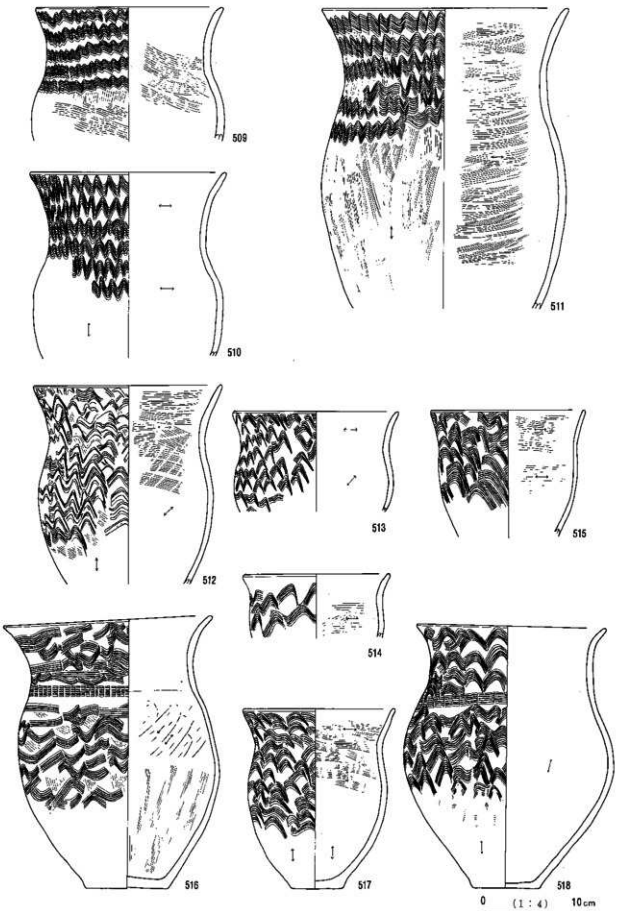
第93図　ＳＤ100出土土器．後期（14）鉢



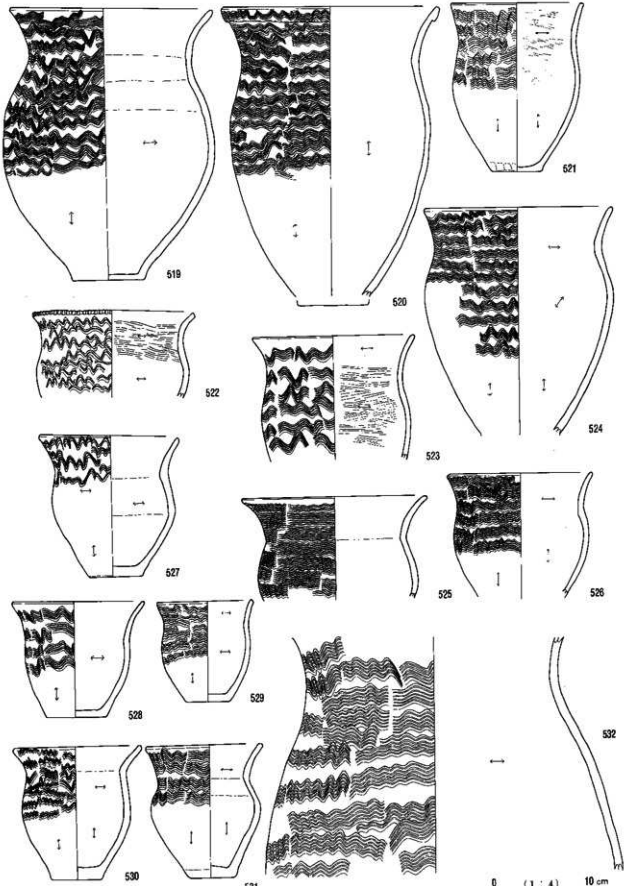
第94図　ＳＤ100出土土器.後期（15）蓋・有孔鉢



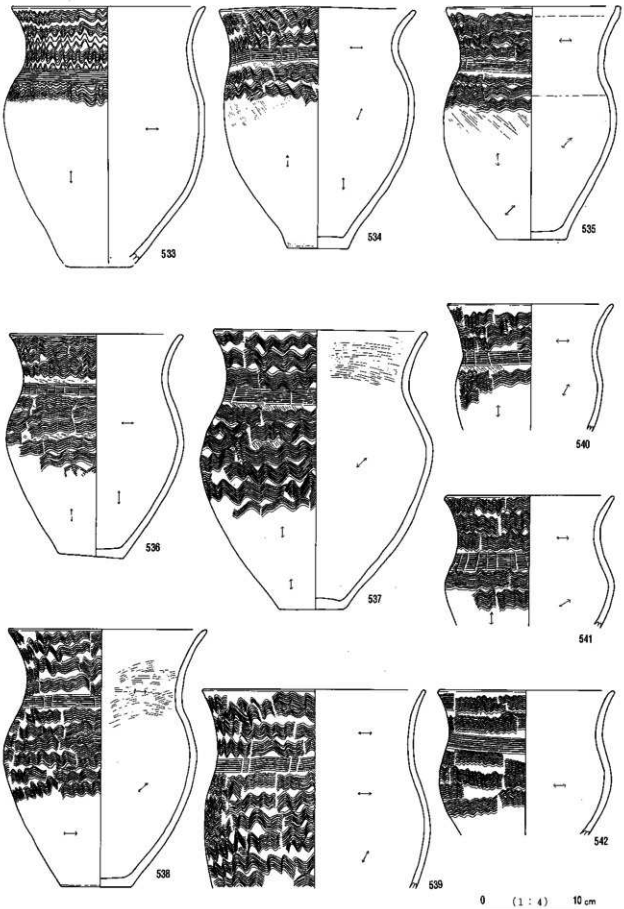
第95図　ＳＤ100出土土器．後期（16）甕



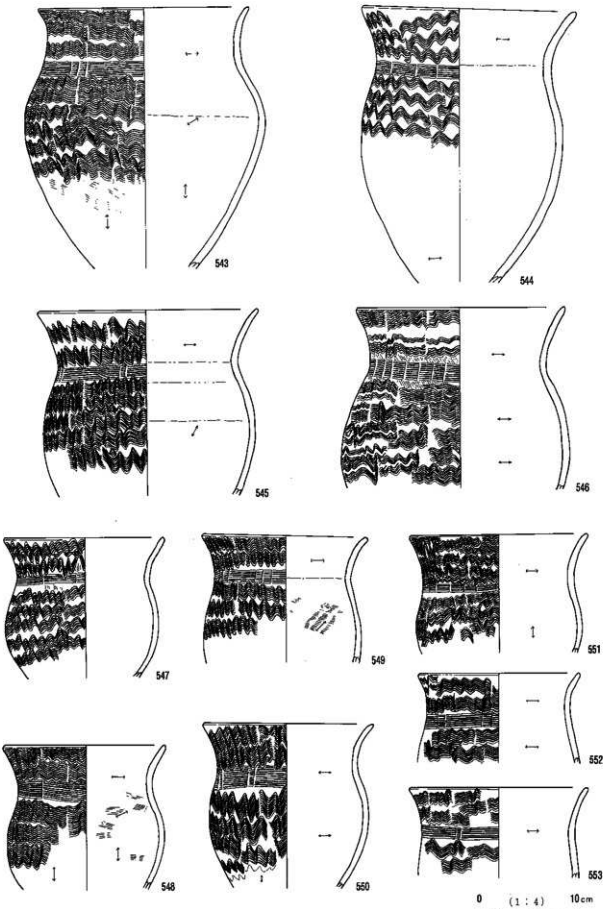
第96図　ＳＤ100出土土器.後期（17）甕



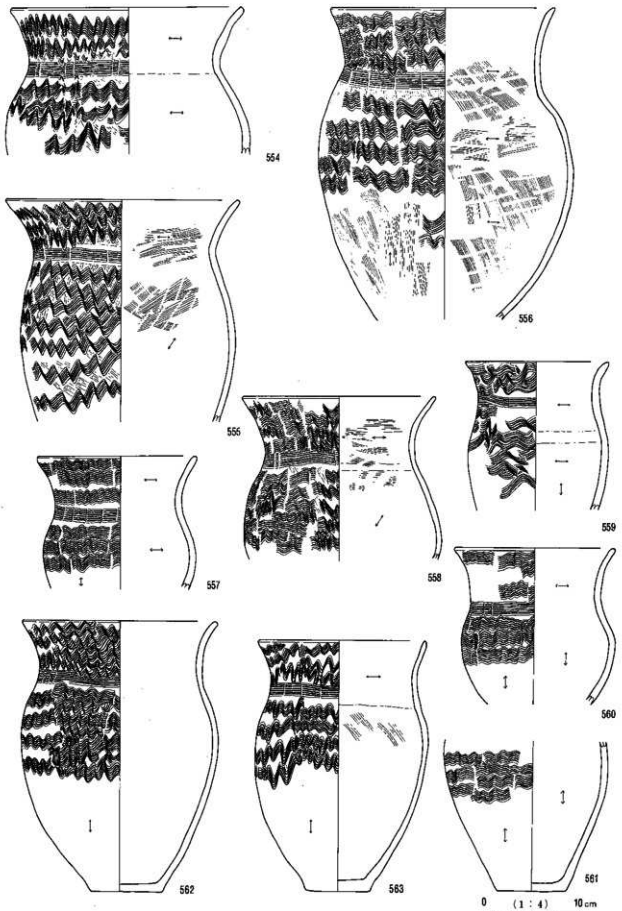
第97図　ＳＤ100出土土器．後期（18）甕



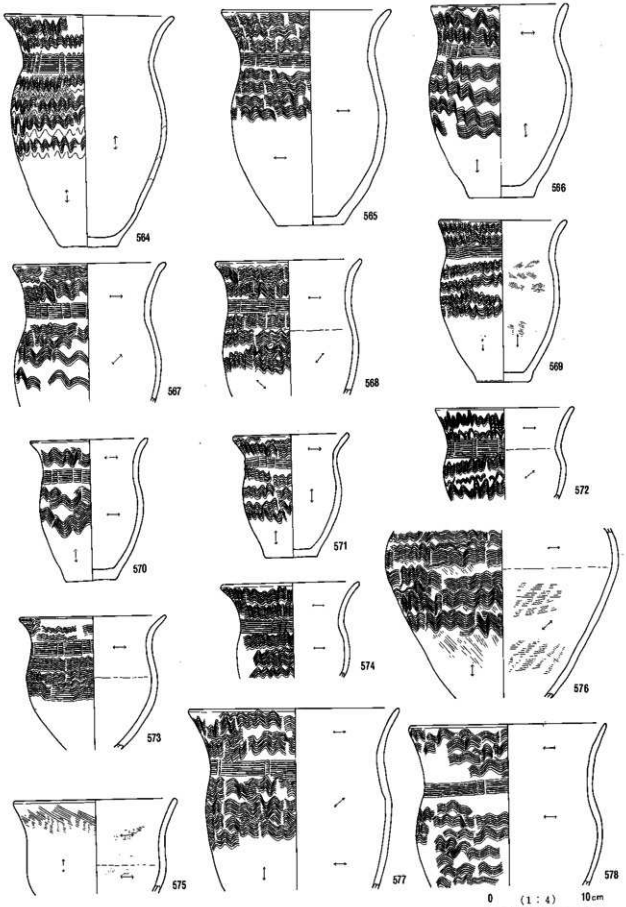
第98図　ＳＤ100出土土器.後期（19）甕



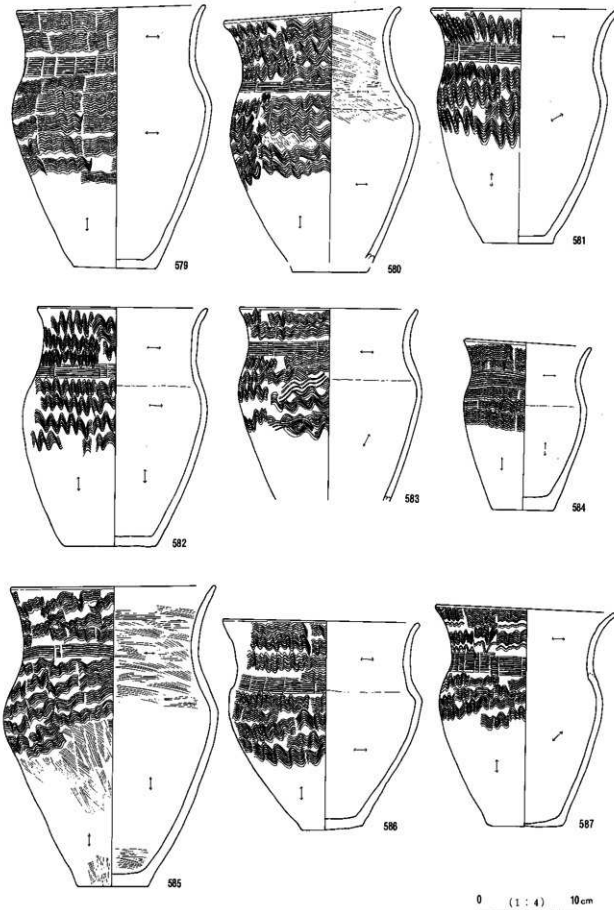
第99図　ＳＤ100出土土器．後期（20）甕



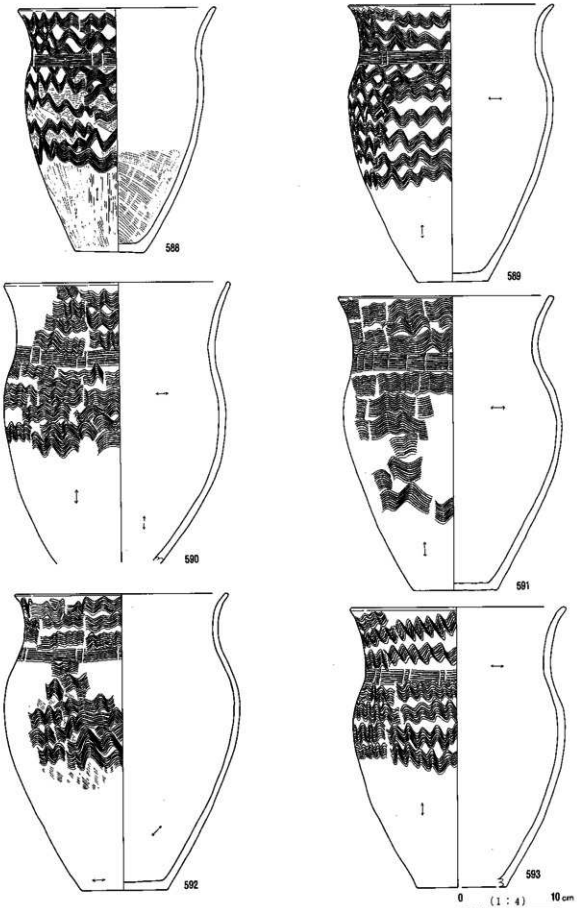
第100図　ＳＤ100出土土器.後期（21）甕



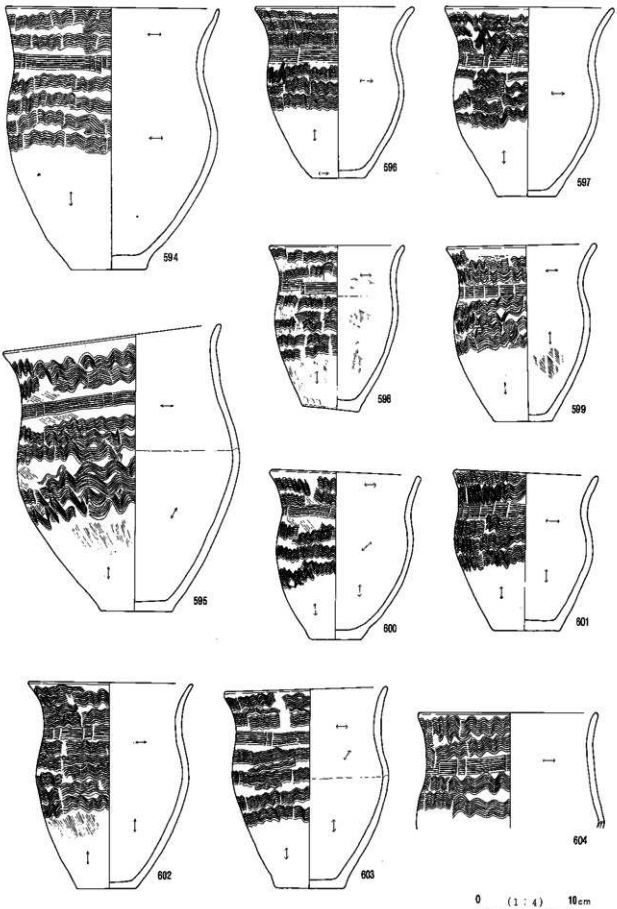
第101図　ＳＤ100出土土器.後期（22）甕



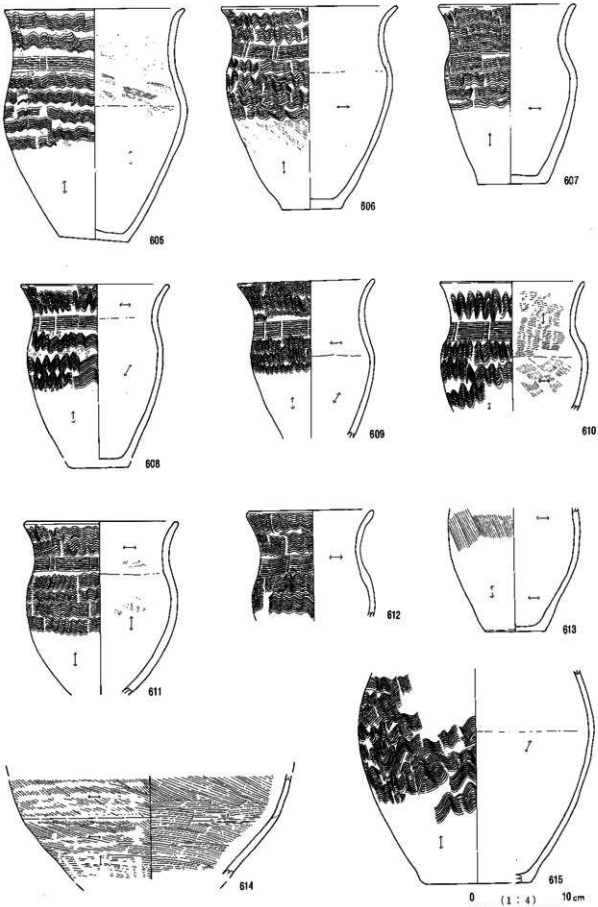
第102図　ＳＤ100出土土器.後期（23）甕



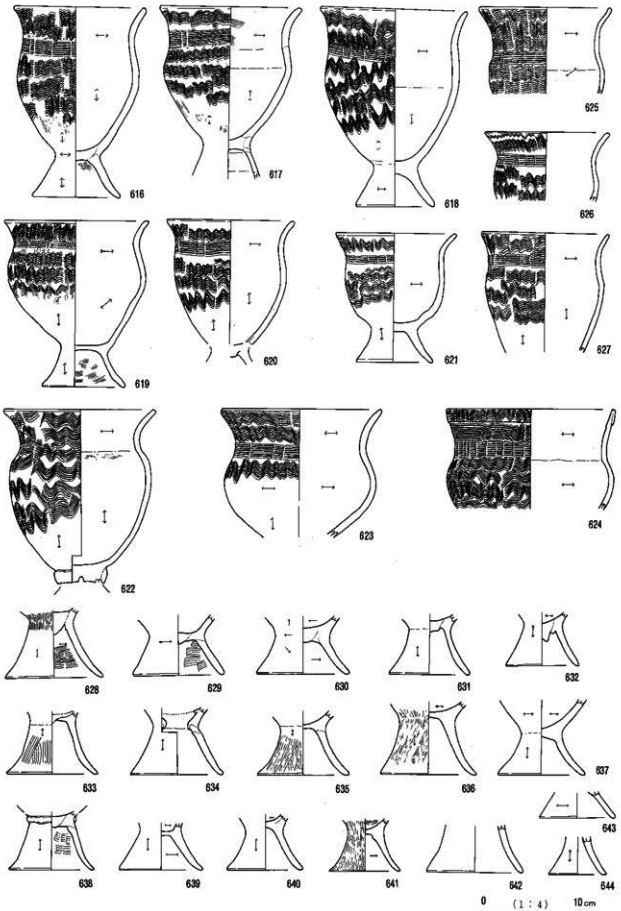
第103図　ＳＤ100出土土器.後期（24）裏



第104図　ＳＤ100出土土器．後期（25）甕



第105図　ＳＤ100出土土器.後期（26）甕



第106図　ＳＤ100出土土器．後期（27）甕